【聘奩（ヘイレン）】「ヨメイリ」の道具、齊家寶要に「ーー從儉」粧奩・貲奩・嫁奩・奩具皆同じ、奩は香料を盛る器「カウバコ」をいふ、それより一切の嫁入道具に用ふ、匳に作る同じ、

【表（ヘウ）】文の一體なり、文體明辨に「字書ヲ按ズルニ、表ハ標ナリ、明ナリト、事緒ヲ標著シテ、之ヲシテ明白ナラシメ、以テ上ニ告グルナリ、古ハ言ヲ君ニ獻ズ、皆上書ト稱セシガ、漢禮儀ヲ定メテ、乃チ四品アリ、其ノ三ヲ表トイフ、諸葛亮ノ出師表、韓愈ノ賀皇帝即位表ノ如キ是レナリ」後世、表の用、翕廣く、論諫なり、請勸なり、陳乞なり、進獻なり、推薦なり、慰安なり、辭解なり、證理なり、彈劾なり、施して可ならざるところなきに至れり、漢晉は多く散文を用ひ、唐宋以下は多く四六を用ふ、

また日晷を測る木「ヒカゲバシラ」北史蘇綽傳に「表不正、不可求直影、的不明、不可責射中」とあり、この語の前に「凡ソ人君ノ身ハ乃チ百姓ノ表、一國ノ的ナリ」とあり、

【豹（ヘウ）】說文に「虎ニ似テ圜文アリ」陸璣の詩疏に「毛赤クシテ文黑キ、之ヲ赤豹ト謂フ、毛白クシテ文黑キ、之ヲ白豹ト謂フ」

また玄豹・靑豹・金錢豹・金線豹等あり、金錢豹はその文錢の如し、裘と爲すに宜し、易の革卦に「君子豹變」疏に「豹文ノ蔚縟ノ如キナリ」晉書に「王獻之數歲、嘗觀門生樗蒲、曰、南風不競、門生曰、此郎亦管中窺豹、時見一斑」

【苗裔（ベウエイ）】苗は胤(タネ)なり、裔は末なり、末胤をいふ、楚辭に「帝高陽之苗裔兮」の朱註に「苗ハ草ノ莖葉根ノ生ズル所ロナリ、裔ハ衣裾ノ末ニテ衣ノ餘ナリ、故ニ以テ遠末子孫ノ稱トナス」史記司馬穰苴傳に「司馬穰苴者、田完之ーー也」

【票姚（ヘウエウ）】勁疾の貌、また漢の兵官の名、漢書霍去病傳に「去病爲ーー校尉」史記には剽姚に作り、荀悅漢紀には票鷂に作る、唐人票を嫖に作る、

【嫖姚（ヘウエウ）】前條を見よ、

【飄颻（ヘウエウ）】風の高く吹く貌、曹植の詩に「ーー隨長風」また孟郊の詩に「鏡海見纖悉、水天步ーー」

【剽悍（ヘウカン）】剽は急なり、悍は輕なりと、史記酷吏傳の注に見ゆ、次條を見よ、

【僄悍猾賊（ヘウカン）】僄は輕なり、疾なり、悍は勇なり、躁急悍猛にして、持重せざるをいふ、猾賊は狡猾にして人を賊害するをいふ、史記高祖紀に「項羽爲人ーーーー」僄は剽と通ず、漢書地理志に「患其剽悍」

【豹脚ノ蚊子（ヘウキャク）】爾雅翼に「蚊ハ草中ニ生ズル者、吻尤モ利ニシテ、足ニ花文アリ、吳興ニーーーート號ス」東坡志林にも「湖州蚊多シ、其ノ中豹脚トイフ者アリ、尤モ毒アリ」

【藐乎（ベウコ）】人を疎んじ輕んずる貌、韓愈の與陳給事書に「ーー其容、若不察其愁也」

【眇忽（ベウコツ）】眇は少なり、ーーは極めて少數をいふ、文選司馬相如の子虛賦に「眇眇忽忽、若神仙之髣髴」秒忽に同じ、

【秒忽（ベウコツ）】秒は禾芒なり、忽は蜘蛛の網の細かなる者、よりて極めて少き數量の名、漢書敍傳に「造計ーー」

【廟算（ベウサン）】廟謨に同じ、算は計謀なり、古は謀を定むること祖廟に於てす、故にいふ、孫子始計篇に「兵未戰而ーー勝者得算多也、未戰而ーー不勝者得算少也、多算勝、少算不勝、而況於無算乎、吾於是觀之勝負見矣」潘岳の西征賦に「制勝於ーー」

【豹死シテ皮ヲ留メ、人死シテ名ヲ留ム（ヘウシ）】（豹死留皮、人死留名）金壁故事に五代史記死節傳を引きて「梁の王彥章、字ハ子明、人トナリ驍勇ニシテ力アリ、能ク跣足ニシテ棘(ばら)ヲ履ミ、百步ヲ行ク、一鐵槍ヲ持チ、馬ニ騎シテ馳突シ、奮疾スルコト飛ブガ如シ、而シテ他人能ク與ニスルナシ、嘗テ人ニ謂ヒテ曰ク、豹死留皮、人死留名ト、其ノ忠義蓋シ天性ナリ」歐陽修の王彥章畫像記にも見ゆ、

【眇視跛履（ベウシヒリ）】盲眇の人にして明かに視んとし、跛躄の人にして遠く履み行かんとするは、危地に陷るを免れず、以て才の足らざる者、强ひて分外の事を行はんとするは、禍敗を招くに至るに喩ふ、易經履卦の六三に「眇能視、跛能履、履虎尾、咥人凶」

【廟寢（ベウシン）】「オタマヤ」淮南子時則訓の注に「前ニ在ルヲ廟トイヒ、後ニ在ルヲ寢トイフ」晉書賀循傳に「別立ーー」

【標準（ヘウジュン）】標は木表、準は平を爲る者なり「ミヅモリ」標的として準據する義、韓愈伯夷頌に「聖人乃萬世之ーー也」

【漂杵（ヘウシヨ）】戰血流れて杵(キネ)を「タダヨハス」激戰の狀を形容す、書經武成に「罔有敵于我師、前徒倒戈、攻于後以北、血流ーー」一解に杵は盾(タテ)なりと(鹵ヲ漂ス)を參看せよ、

【廟勝（ベウシヨウ）】廟算に勝つをいふ、漢書趙充國傳に「非素定ーー之册」册は策に通ず 曹植の封二子爲公謝恩章

に「文無升堂之功、武無摧鋒接刃之効」（廟算）を見よ、

【廟食】 廟祠に祭らるる義、漢書淮南王傳に「高皇帝之神不――於大王之手、明白」また後漢書梁竦傳に「大丈夫居世、生當封侯、死當――」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「能信於南海之民、――百世」

【貌諸孤】 貌は一音バク小なり、諸は助字、小弱なる孤兒の義、左傳僖九年に「初獻公使荀息傅奚齊、公疾、召之曰、以是――辱在大夫、其若之何」

【縹青】 「ハナダイロ」縹は青黄色なり、曹植の棄婦篇に「石榴植前庭、綠葉搖――」

【剽竊】 人の詩文を盜みて己の作とする義、事文類聚卷六に國史補を引き「能詩亦――」と題して「王維有詩名、然好竊人詩句、如行到水窮處、坐看雲起時、英華集中詩、漠漠水田飛白鷺、陰陰夏木囀黃鸝、乃李嘉祐詩也」とあり、されども水田夏木の對句は、李の句なれども、それに漠漠、陰陰の二疊字を加へて己の句とせしなればこれをも――といふはやや酷なるべし、

【漂然】 高遊の蹤、漢書楊敞傳に「―― 皆有節概、知去就之分」

【剽賊】 前人の詩文などを竊みて己の作とするなり、韓愈の樊宗師墓銘に「惟古於詞必己出、降而不能乃――、後皆指前以相襲、從漢迄今同一律」盜竊に同じ、

【廟堂】 宗廟をいふ、禮記禮器に「――之上、罍樽在阼、犧尊在西、――之下、縣鼓在西、應鼓在東」また朝廷の義、劉向の九歎篇に「始結言於廟堂兮、信中塗而叛之」の註に「廟トハ、先祖ノ居ル所ロナリ、人君政ヲナシ、事ヲ擧グルニハ、必ズ宗廟ニ告ゲ、之ヲ明堂ニ議ス」呂覽類似篇に「夫修之於――之上、而折衝乎千里外」漢書徐樂傳に「賢主獨觀萬化之原、明於安危之機、修之――之上、而銷未形之患也」儲光義の送丘健詩に「元戎啓神皇、――發嘉謀」

【標致】 旨趣を表示する義、魏書文苑傳に「自昔聖達之作、賢喆之書、莫不統理成章、蘊氣――」

【縹帙】 帙は、書冊を被ひ「ツツム」もの、書衣なり、――は「ハナダ」色の帙をいふ、唐の太宗の帝京篇に「韋編斷復續、――舒還卷」

【表著ノ位】 公會の位次をいふ、表は野會に旂を設けて表とするをいひ、著は著定にして、朝會に佇立する一定の處をいふ、左傳に「朝有著定、會有表、會朝之言必聞――之――所以昭事序也」また漢書五行志に「朝内列位有定處、所謂表著也」

【廟廷】 廷は庭に同じ「オタマヤ」魏志齊王芳紀に「詔祀故尚書令荀攸於太祖――」

【杪冬】 杪は「コズヱ」――は陰曆十二月をいふ、季冬に同じ、

【摽梅】 嫁期の過ぎたるをいふ、詩經召南摽有梅篇に「摽有梅、其實七兮、求我庶士、迨其吉兮」の註に「摽ハ落ナリ、庶ハ衆、迨ハ及ナリ、吉ハ吉日ナリ、梅落チテ樹ニ在ル者少シ、以テ時過ギテ太ダ晩キヲ見ル、我ヲ求ムルノ衆士、其レ必ズコノ吉日ニ及ンデ來ル者アランカトナリ」

【淼茫】 淼は水の洪大なる貌、――は水の限りなく廣きなり、文選郭璞の江賦に「狀滔天以――」淼漫に同じ、

【標榜】 榜は「タテフダ」表識とすること、史記留侯世家に「武王表商容之閭」注に「表トハ其ノ里門ニ――スルナリ」又名目を附けて稱揚する義、後漢書李膺傳に「海内共和――」

【廟貌】 「オタマヤ」詩經小序の「清廟祀文王也」の箋に「廟之言貌也」廟貌として死者の容貌を見る心地する義、宋史の禮志に「――猶在、久廢牲牢」

【剽剝】 剽もまた剝なり、――は、擊ち「ソコナフ」義、史記莊周傳に「指事類情、――儒墨」

【漂泊】 水上に「タダヨフ」如く、住所の定まらざる義、流寓なり、庾信の哀江南賦に「下亭――、高橋羇旅」また杜甫の詩に「即今――干戈際」また漂は一に飄に作る、北史に「雖羈旅飄泊、而清貧守度」

【豹皮】 儀禮疏に「畿外諸侯亦以――爲鵠」五代史に「王彥章曰、豹死留皮、人死留名」

【渺瀰】 水の「ムナシク」遠き貌、天に連る如く廣き水、木華海賦に「――湠漫」白居易の詩に「江平綠――」

【兵部】 宋史職官志に「兵部掌兵衛、儀仗、鹵簿、武擧、民兵、廟軍、蕃軍、四夷、官封承襲之事、輿馬器械之政、天下地土之圖」

【熛風】 「ハゲシキカゼ」飄風に同じ、史記禮書に「卒如――」

【猋風】 下より上に回旋する烈しき風「ツムジ」禮記の月令に「孟春行秋令、則――暴雨總至」註に「回風ヲ猋トイフ」漢書韓安國傳に「匈奴輕疾之兵、至如――、去如收電」扶搖に同じ、

【飇風】 下から上へ吹きあぐる暴風、飇は猋に同じ、前條を見よ、

【飄風ハ朝ヲ終ヘズ】 （飄風不終朝）飄風は暴風なり、詩經小雅何人斯に「彼何人斯、其爲――」勢威のはげしきものは、長くつづかざるにたとふ、老子の語、（驟

雨)を見よ、

【麃麃】武き貌、詩經鄭風淸人に「淸人在消、駟介｜｜」

【儦儦】「ニギヤカ」に行く貌、詩經齊風載驅に「行人｜｜」傳に「｜｜ハ衆キ貌」また禽獸の多き貌、同小雅吉日に「｜｜俟俟」

【瀌瀌】雨雪の盛んなる貌、詩經小雅角弓に「雨雪｜｜」

【縹眇】遠く「カスカ」に見ゆる貌、木華海賦に「群仙｜｜、餐玉淸涯」

【縹緲】前條に同じ、宣和畫譜に「李思訓工山石林泉、筆格遒勁、得湍瀨潺湲煙霞｜｜難寫之狀」李白の天門山詩に「參差遠天際、｜｜晴霞外」

【眇眇】小なる貌、書經顧命に「｜｜予末小子」史記秦紀に「寡人以｜｜之身、興兵誅暴亂」

【淼淼】水の大いに廣き貌、隋煬帝の句に「平淮既｜｜」

【渺渺】水の長く廣き貌、管子內業篇に「｜｜乎如窮無極」

【豹變】善に移るの義なり、豹の皮毛の變更して、文を成すこと彬蔚なるが如し、易の革卦に「君子｜｜、小人革面」君子善に遷りて、舊惡を改め去るは、その著見なること豹の斑采のうつくしきが如し、故に譬ふ、また晉書應貞傳に「位以龍飛、文以｜｜」

【漂母】水にて絮を擊ちて「サラス」ことを業とする者をいふ、史記に「韓信至國、召所從食｜｜、賜千金」

【廟謨】朝廷の「ハカリゴト」後漢書光武紀贊に「靈慶既啓、人謀咸贊、明明｜｜、赳赳雄斷」元稹の詩に「努力｜｜休用兵」

【廟謀】朝廷の「ハカリゴト」廟略に同じ、杜甫の詩に「猛將紛塡委、｜｜蓄長策」

【淼漫】淼は大水なり、｜｜は水廣くして「カギリナキ」をいふ、文選左思の吳都賦に「滇瀰｜｜」

【廟廊】朝廷をいふ、廼賢の贈趙祭酒詩に「｜｜贊畫髮成絲」

【表裏ヲ爲ス】(爲表裏)內外に在りて互に相援くる義、漢書蕭望之傳に「中書令弘恭、石顯、久典樞機、明習文法、亦與車騎將軍高｜｜」高は史高、

【剽掠】人の物を「カスメ」奪ふこと、唐書に「山賊｜｜」

【廟略】朝廷の「ハカリゴト」晉書羊祜傳に「外揚王化、內經｜｜、著德推誠江漢歸心」

【漂鹵】(鹵ヲ漂ハス)を見よ、

【碧漪】「ミドリ」の「サザナミ」李賀の詩に「金塘閑水搖｜｜」綠漪に同じ、

【碧宇】「アヲゾラ」陳樵の夜闌曲に「｜｜星回夜漫漫」

【碧雲】「ミドリ」の雲、江淹の擬休上人詩に「日暮｜｜合、佳人殊未來」戴叔倫の夏日登鶴巖詩に「願借老僧雙白鶴、｜｜深處共翺翔」劉禹錫の廣宣上人詩卷詩に「｜｜佳句久傳芳、曾向成都住草堂」

【辟易】漢書の項羽傳に「人馬俱ニ｜｜スルコト數里」の註に「｜｜ハ開キテ、其ノ本ノ處ヲ易フルヲイフ」一に懼き却くの貌とも解す、史記項羽本紀にも見ゆ、

【壁ヲ銜ミ櫬ヲ輿フ】降伏の禮なり(銜璧)を見よ、

【碧海】十洲記に「扶桑在東海之東岸、岸直陸行登岸一萬里、東復有｜｜、海廣狹浩汗與東海等、水既不鹹苦、正作碧色、甘香味美」杜甫の戲作絶句に「或看翡翠蘭苕上、未掣鯨魚｜｜中」また「アヲウミ」李商隱の嫦娥の詩に「嫦娥應悔偸靈藥、｜｜青天夜夜心」

【碧海中央六里松】益軒の勝景圖記天橋立の條に見ゆ、これは材庵の詩とて「｜｜｜｜｜｜｜、天橋絶境是仙蹤、夜深人待龍燈出、月落文珠堂裏鐘」と、橋立案內志に出づ、

【碧漢】「アヲゾラ」漢は「アマノガハ」江總の和衡陽王高樓看妓詩に「起樓侵｜｜、初日照紅妝」

【碧眼】「ミドリ」の「マナコ」高僧傳に「達摩、眼紺青色、稱｜｜胡僧」

【碧巖】「ミドリ」の「イハ」陶弘景の水仙賦に「｜｜無霧、綠水不風」李白の宿淸溪主人詩に「夜到淸溪宿、主人｜｜裏」また宋の釋圜悟の撰せし｜｜集あり、

【辟寒丸】(｜｜｜)を見よ、

【碧虛】「アヲゾラ」吳均の詠雲詩に「飄飄上｜｜、藹藹隱靑林」

【碧玉】「ミドリ」色の美しき玉、拾遺記に「周穆王即位三十三年、巡行天下、馭黃金｜｜之車」また水又は天の淸く「ミドリ」なるに喩へていふ、柳宗元の酬曹侍御詩に「破額山前｜｜流、騷人遙駐木蘭舟」元稹の淸都夜境詩に「寥天如｜｜、歷歷綴華星」

【碧空】「アヲゾラ」李白の黃鶴樓送孟浩然詩に「孤帆遠影｜｜盡、唯見長江天際流」

【壁畫】「カベ」に畫ける繪畫なり、楓窗小牘に「李成以山水供奉禁中(中略)識者謂｜｜最入神妙、惜在白壁上耳」崔國輔の宿法華寺詩に「｜｜感靈跡、龕經傳異香」

【碧溪】「アヲミドリ」の水の流るる「タニ」張籍の夜宿黑龍溪詩に「夜到｜｜裏、無人秋月明」

【碧梧】「アヲギリ」翠梧に同じ、韓愈の馬少監誌銘に「翠竹｜｜、鸞鵠停峙」范成大の詩に「雲橫朱閣｜｜寒」

【壁虎】（ヘキコ） 蟲の名「ヤモリ」守宮に同じ、廢宅の壁閒等に棲む形「トカゲ」に似て尾短く、指端に小珠の如きものありて物に著く、色灰黑にして黑斑あり、夜出てて小蟲を捕り食ふ、

【辟公】（ヘキコウ） 辟は君なり、諸侯をいふ、詩經周頌雝篇に「相維――、天子穆穆」

【碧山】（ヘキザン） 「ミドリ」の山、李白の山中問答詩に「問余何意栖――、笑而不答心自閑」

【辟書】（ヘキシヨ） 「メシブミ」州府の召を辟といふ、裴子野碑に「――交乎塗路」

【碧水】（ヘキスイ） 「アヲミドリ」の水、梁昭明太子の詩に「桂檝蘭橈浮――、江花玉面兩相似」李白の早春寄王漢陽詩に「――浩浩雲茫茫、美人不來空斷腸」

【癖性】（ヘキセイ） 書言故事に「性偏好アルヲ――トイフ、晉ノ王濟ハ馬癖アリ、和嶠ハ錢癖アリ、杜預ハ左傳ノ癖アリ、蓋シ偏好スル所ロアリ、人ノ病癖痊エザルガ如シ」

【碧霄】（ヘキセウ） 「アヲゾラ」碧漢に同じ、崔鉉の咏架上鷹詩に「萬里――終一去、不知誰是解絛人」

【襞積】（ヘキセキ） 衣裳の「ヒダ」なり、漢書司馬相如傳に「――褰縐」注に「――ハ即今ノ裙褶」

【碧蘚】（ヘキセン） 「ミドリ」の「コケ」權德輿の建昌丞崔君墓誌に「疏清流蔭――、樹藝偃仰有終焉之志」碧苔に同じ、

【碧桃】（ヘキタウ） 「アヲイロ」の桃の實、尹喜內傳に「老子西遊省太眞王母共食――紫棃」郎士元の聽隣家吹笙詩に「重門深鎖無尋處、疑有――千樹花」

【碧潭】（ヘキタン） 「ミドリ」の「フチ」劉勰の新論に「懸瀨――、瀾波洶湧、魚龍之所安也、人入而畏」寒山の詩に「我心似秋月、――清皎潔」

【碧天】（ヘキテン） 「アヲゾラ」王羲之の蘭亭集詩に「仰視――際、俯瞰綠水濱」唐彥謙の中秋夜翫月に「一夜高樓萬景奇、――無際水無涯」

【碧筩杯】（ヘキトウハイ） 酉陽雜俎に「歷城ノ北ニ、使君林アリ、魏ノ正始中、鄭公慤三伏ノ際毎ニ賓僚ヲ率キ、暑ヲ此ニ避ケ、大蓮葉ヲ取リ、酒ヲ盛ル二升、簪ヲ以テ葉ヲ刺シ、酒ヲシテ柄ト通ゼシメ、莖上ヲ屈シ、輪囷象鼻ノ如クシ、之ヲ傳噏ス、名ヅケテ――ト爲ス、歷下之ヲ學ブ、言フ酒味蓮氣ヲ雜エ、香冷水ニ勝ル」蘇軾の詩に「碧筩時作象鼻彎、白酒微帶荷心苦」

【擗摽】（ヘキヘウ） 「ムネ」を拊つ、悲む義、張協七命に「拏髮爲之――」擗は辟に通ず、詩經邶風に「寤辟有摽」

【碧蔓】（ヘキマン） 「ミドリ」の「ツル」范成大の西瓜園詩に「年來處處食西瓜、――淩霜臥軟沙」

【辟雍】（ヘキヨウ） 天子の學宮にして、大射に禮を行ふの處、辟は明、雍は和にして明達諧和ならしむる義、雍或は廱に作る、廱は澤なり、辟は璧なり、水澤丘をめぐると璧の如し、以て觀る者を節す、故に辟廱といふ、禮記に「大學在郊、天子曰――、諸侯曰頖宮」詩經大雅靈臺篇に「於論鼓鐘、於樂辟廱」雍はまた雝に作る、白虎通には「辟ノ言タル積ナリ、天下ノ道德ヲ積ムナリ、雍ノ言タル、壅ナリ、天下ノ殘賊ヲ壅グナリ、故ニ之ヲ――トイフ」（頖宮）を參看せよ

【擗踊】（ヘキヨウ） 擗は心を拊つなり、通じて辟に作る、踊は跳躍（オドル）なり、孝經に「――哭泣」

【碧蘿】（ヘキラ） 「ミドリ」の「ツタ」劉勰の新論に「――附於青松、以茂凌雲之業」

【碧落】（ヘキラク） 天をいふ「オホゾラ」黃庭堅詩に「心似蛛絲遊――」度人經の注に「東方第一天、碧霞ノ遍滿スルアリ、是ヲ――トイフ」

【汨羅之鬼】（ベキラノキ） 汨羅は江名、說文に「長沙汨羅淵屈原所沈之水」一統志に「汨羅江名、在湘陰縣北十里、源出豫章、流經湘陰、分二水、一南流曰汨水、一經古羅城、曰羅水、至屈潭復合、故曰汨羅、西流入湘」（屈原）を見よ、

【擘柳風】（ヘキリウノカゼ） 柳を「ツンザク」春の暴風をいふ、風土記に「河朔春時、疾風數日、一作三日乃止、曰吹花――」

【壁立】（ヘキリツ） 家貧しくして只「カベ」のみ立てるをいふ、史記司馬相如傳に「相如使人重賜文君侍者通殷勤、文君夜亡奔相如、相如乃與馳歸家、居徒四壁立耳云云」宋書吳逵傳に「家徒――、冬無被絝、晝則傭賃、夜則伐木燒塼云云」南史江革傳に「革三爲二千石、傍無姬侍、家徒――、時以此高之」また岸などの、壁の如く聳え立つ義、水經注に「釋法顯曰、度蔥嶺已入天竺境、於此順嶺西南行、十五日、其道艱阻、崖岸險絕、其山唯石、――千仞、臨之目眩、欲進則投足無所」庾信終南山義谷銘に「參廊上浮、峥嶸下鎮、――千丈、峰横萬仞」

【壁壘】（ヘキルヰ） 「トリデ」文選の張衡の思玄賦に「觀――於北落兮」

【碧琉璃】（ヘキルリ） （琉璃）を見よ、

【辟歷】（ヘキレキ） 漢書天文志に「――夜明」霹靂に同じ、次條を見よ、

【霹靂】（ヘキレキ） 激雷なり、爾雅の註に「雷之急擊者爲霹靂」とあり、枚乘の七啓に「夏則雷霆――所感也」

【霹靂手】（ヘキレキシユ） 書言故事に「人敏才アルヲ霹靂手トイフ、唐ノ裴琰、司戶參軍トナル、凡ソ舊事未ダ決セズ、書吏數人ニ命ジテ、紙數幅ヲ連ネ、須臾ニシテ剖斷シテ竝ニ

畢ル、時ノ人霹靂手トイフ」

【辟纑】 麻を績むを辟といひ、其の麻を練るを纑といふ、孟子滕文公下篇に「彼身織屨、妻辟纑、以易之也」

【碧鱸】 「スズキ」張耒の詩に「蓴菜――秋正美」

【辟王】 「キミ」詩經大雅棫樸篇に「濟濟――、左右趣之」注に「辟ハ君ナリ、君王ハ文王ヲ謂フ」

【別駕】 官名なり、刺史が州を巡る時に隨ひ行く官なり、事物紀原に「唐六典ニ曰ク、後漢ハ、州ニ――ヲ置ク、歴代皆之レ有リ(中略)通典ニ曰ク、刺史ニ從ヒ部ヲ行ル、別ニ一乘ノ傳車ニ乘ル、故ニ之ヲ――ト謂フ、漢ノ制ナリ」

【別號】 人すでに名ありて、別に一の名即ち號を命ずるを――また別字といふ、書經の疏に「保衡、伊尹一人ナリ、時ヲ異ニシテ號ヲ別ニス」後村題跋に「豈摩詰――耶」

【別業】 別莊をいふ、南史の謝靈運傳に「移籍會稽、修營――、傍山帶江、盡幽居之美」また通鑑の漢紀の註に「別ニ田園ヲ他所ニ置ク、之ヲ――トイヒ、亦之ヲ莊トイフ」別墅に同じ

終南別業　唐　王維

中歳頗好道、晩家南山陲、
興來毎獨往、勝事空自知、
行到水窮處、坐看雲起時、
偶然値林叟、談笑忘還期

【瞥見】 説文に「瞥ハ過目ナリ」――は瞥觀に同じ、僅に「チラ」と目を過ごし見るなり、梁書王筠傳に「余少好書、雖偶見瞥觀、皆卽疏記」

【別歳】 年の暮に酒食を設けて親戚朋友等を招くをいふ「トシワスレ」蘇軾の饋歳詩序に「蜀中値歳晩、相遺問、謂之饋歳、酒食相邀爲――」

【蹩躠】 蹩一音セツ跛なり、また旋行の貌、莊子馬蹄篇に「聖人――爲仁、踶跂爲義」音義に「心ヲ用ヒテ仁義ヲ爲スノ貌」とも見ゆ、踶跂も心力を用ふる貌、又柳宗元の詩に「―― 皆騰蹙」

【別墅】 墅は田中に收穫のために結びたる廬なり、轉じて「シモヤシキ」の義に用ふ、別業に同じ、晉書謝安傳に「圍棊賭――」唐書裴度傳に「東都立第於集賢里、又於午橋創――、花木萬株、起涼臺暑館、名曰綠野堂」

【襪綫短才】 特に長じたる才藝なきをいふ、襪は足衣(タビ)なり、之を解くも長き糸なし、故に短才の義とす、瑣言に「僞蜀韓昭(書言故事に韓昭祖に作る)琴棊書畫射皆涉獵ス、李台瑕曰ク韓ノ藝ハ襪線ヲ析ツ如ク一條ノ長キ者ナシト」

【別天地】 人間の外なる世界、別乾坤ともいふ(別ニ天地)を見よ、

【別ニ天地ノ人間ニ非ルアリ】 李白の山中問答に「問余何意栖碧山、笑而不答心自閑、桃花流水窅然去、別有天地非人間」余は李白自ら謂ふ、他の人が、余に何の意ぞ碧山に栖むかと問ふ、余は笑つて答へず、心自ら閑かなり、余は唯桃花流水の裏に、窅然(深遠ノ貌)として去る、去るは行くなり、この閒、別天地ありて人間の天地とは異るをいふ、笑而不答とあれども末の二句は答なり、

【丿乀】 説文に「丿ハ右戾ナリ、乀ハ左戾ナリ」とあり、右戾とは右より左に戾る義、左戾はその反なり、舟などの「エレツゴク」貌、翠雨軒詩話に「紀藩松本元賚所著蠢蒙百絶有坤位風來櫓聲近、漁舟――卸帆歸之句」とあり、支那人の――の熟語を用ひたる例は未だ見ず、

【蠛蠓】 「ヌカガ」古名「カツヲムシ」蚊の類、極めて小さく大一分許、色白く首に角あり、蠓子ともいふ、揚雄甘泉賦に「浮――而撇天」

【別離】 人の相別るるをいふ、廣韻に「近ヲ離トイヒ、遠ヲ別トイフ」と、楚辭九歌に「悲莫悲兮新――、樂莫樂兮新相知」と、杜甫の詩に「不敢要佳句、愁來賦――」

【辨】 文の一體なり、文體明辨に「字書ヲ按ズルニ、云ク、辨ハ判別ナリ、其ノ字、言ニ從ヒ、或ハ刀ニ從フ、蓋シ其ノ言行ノ是非眞僞ヲ執リテ、大義ヲ以テ之ヲ裁斷スルナリ」漢以前に在りては作る者なし、故に文選に所見なく、劉勰も亦其の説を著さず、唐の韓愈柳宗元に迨び、始めて諱辨、論語辨などの篇出でて其の集に見えたり、然れども其の原を推究するに、實は孟子、莊子の諸家に胚胎し、未だ篇目の設なかりしものを、韓柳二氏に至りて其の篇目を立てて以て一體と爲したるに過ぎざるなり、蓋し至當不易の理に本づき、反復曲折の詞を以て發揮するに非ざれば、未だ能く工なる者あらざるなり、

【邊邑】 「カタヰナカ」禮記玉藻に「在其――」

【俛焉】 俛は勉に同じ、禮記の表記に「俛焉日有孶孶」の註に「俛焉ハ勤勞ノ貌」とあり、

【鞭ヲ投ジ流ヲ斷ツ】 (投鞭斷流)渡江の兵多きをいふ、晉書の苻堅載記に「石越曰、晉國有長江之險、朝無昏弐之釁、未宜動師、堅曰、以吾之衆旅、投鞭於江、足斷其流」

【鞭ヲ執ル】 人の爲めに馭するをいふ(執鞭)を見よ、

【辯ヲ以テ知ヲ飾ル】 (以辯飾知)辯舌を以て知をかざり、其の實なきなり、莊子の繕性篇に「古之存身者、不以辯飾知」とあり、註に「其ノ眞知(ありのままのちゑ)

ニ任ズルノミ」とあり、

【駢雅】 七卷、明の朱謀㙔撰す（謀㙔字ハ鬱儀、寧獻王七世ノ孫ナリ）爾雅の體例に仍り釋詁・釋訓・釋名稱・釋宮・釋服食・釋器・釋天・釋地・釋草・釋木・釋蟲魚・釋鳥・釋獸の十三篇に分ちて訓釋す、徵引精確なり、

【扁額】 說文に「扁ハ署ナリ、戶冊ニ从フ、戶冊ハ門戶ニ署スルノ文ナリ」――は門戶の額に字を扁するをいふ、桯史に「吳山有伍員祠、瞰闤闠、都人敬事之、有富民捐貲爲――、金碧誆侈」

【便宜施行】 その場の便を見計らひて都合よきやう事を行ふ義、史記蕭相國世家に「即不及奏上、輒以――施行、上來以聞」上は漢の高祖を斥す、

【褊急】 心のせまくして事にせくをいふ、南史に「豁達大度、漢祖之德、猜忌――、魏武之略」

【卞急】 卞は躁疾なり、輕躁急促なるをいふ「キバヤシ」左傳定三年に「邾莊公――而好潔」

【勉强】 强ひて勉むるをいふ、中庸の字面、漢書儒林傳に「願少自――」

【砭愚】 砭は「イシバリ」――は、愚をいましむる義、伊洛淵源錄に「其室之左、曰――」

【變化】 「アラタマリ、カハル」易の繫辭上傳に「――見矣」また佛經にては――と讀む、法華經に「神通――不可思議」國語にて變化といふは、妖怪の義、源氏物語に「もし狐などのへんげにやと覺ゆれど」略しては「ヘゲ」ともいふ、

【卞和玉ニ泣ク】 （和氏ノ）を見よ、

【卞和之璧】 韓非子の卞和篇に出づ（和氏ノ）を見よ、

【駢脅】 駢は比なり、脅は腋下の名「アバラ」その骨を肋骨といふ、――は肋骨合して一の如くなるをいふ「イチマイアバラ」左傳僖二十三年に「聞其――、欲觀其裸浴、薄而觀之」國語の晉語にも見ゆ、史記商君傳に「多力而――者爲驂乘」

【便娟】 輕き貌、雪の如くみだれて飛ぶ貌にも用ふ、文選謝惠連の雪賦に「初――于廊廡、末縈盈于帷席」

【辨嚴】 出立の支度する、正字通に「治裝就道曰――」後漢陳紀傳、紀見禍亂不復――、即時之郡」註に「嚴讀ミテ裝ノ若クス」

【片言獄ヲ折ム】 （片言折獄）片言は半言の義、折は斷なり、半言獄を斷めて、人之に信服し、其の辭の畢るを待たざるをいふ、論語顏淵篇に「片言可以――者、其由也歟」由は子路の名、

【片言隻辭】 一言半句といふに同じ、陸機の謝表に「――、不關其閉」

【偏枯】 半身不隨の人をいふ、管子に「聾盲瘖瘂跛躄――者上收而養之」

【編戶】 戶籍に編列せる人民の義、庶人をいふ、漢書梅福傳に「孔子子孫不免――」同高祖紀の註に「編戶民者、言列次名籍也」

【卞壺】 字は望之、晉の冤句の人、父粹字は玄仁、中書令たり、兄弟六人並に台輔に登る、世に卞氏の六龍、玄仁無雙なりと稱す、壺弱冠にして名譽あり、官尚書令に至る、庾亮と心を同うして政を輔く、蘇峻反するに及び、壺疾を扶けて與に戰ひ、克たずして死す、子眕・盱相隨ひて賊に赴き同時に害せらる、母裴氏尸を撫して哭して曰く、父は忠臣たり、子は孝子たり、君の爲に命を捨つる、又何ぞ怨まんと、峻平ぎ、侍中を追贈せらる

【辯護】 「イヒワケ」して庇護する義、漢書貢禹傳に「以王命――生家、雖百子何以加」

【邊功】 邊土の功、即ち夷狄を征する「テガラ」唐書姚崇宋璟傳贊に「崇勸天子不求――、璟不肯賞邊臣、而天寶之亂、卒蹈其害、可謂先見矣」

【辯口】 口才あるをいふ、史記の范雎傳に「齊襄王聞雎――」また朱建傳に「爲人辯有口」

【偏國】 「カタキナカ」列子楊朱篇に「雖殊方――」

【返魂樹】 十洲記に「聚窟洲海中申未地上有大樹、與楓相似、而花葉香聞數百里、名爲――、伐其根心、於玉釜中煮取汁、令可丸、名曰驚精香、或名震靈丸、或名返生香、氣聞數百里、死屍在地、聞氣即活」（反魂香）を參看せよ、

【便座】 正寢に非ずして傍側に在る休息の室なり、漢書張禹傳に「禹見之於――」

【邊塞】 夷狄を防ぐために邊境に「トリデ」を作るを塞といふ、因りて廣く邊境の地の義とす、史記三王世家に「大司馬去病上疏曰、陛下過聽、使臣去病待罪行閒、宜專――之思慮、暴骸中野、無以報」杜甫の詩に「悠悠照――、悄悄憶京華」

【辨才天】 辨一に辯に作り、才一に財に作る、大辨天・大辨功德天・吉祥天ともいひ、略しては辨天ともいふ、辯舌に長じ、智慧または財寶の福を與ふといふ、天竺の女神の名、この天の寶冠中には、一の白蛇あり、その顏面は老人の如く、眉毛甚白し、過去諸佛の出世に遭ひ、衆生を利益すること久しきを表するの相なり、また琵琶を彈ずる相をも畫く、妙音天女の名もあり、

【扁舟】 廣韻に「扁ハ小舟ナリ」史記貨殖傳に「乃乘――

ー浮于江湖」、蘇軾の前赤壁賦に「駕一葉之ーー」

【扁舟五湖ニ浮ブ】 先賢傳に「勾踐呉ヲ滅ス、范蠡ニ謂ヒテ曰ク、吾將ニ子ト國ヲ分チテ之ヲ有セントスト、蠡曰ク、君ハ令ヲ行ヘ、臣ハ意ヲ行ハント、乃チ扁舟ニ乘ジテ五湖ニ泛ビ、終ニ返ラズ」

【篇什】 詩歌または書冊の義に用ふ、詩經集傳に「朱子曰、詩雅頌無諸國之別、故十篇爲一卷、猶軍法十人爲什也」詩經の釋文に「歌詩之作、非止一人、篇數既多、故以十篇編爲一卷、名之爲什」

【褊心】 褊は衣服の「セマク」「チヒサキ」をいふ、轉じて心のせまきこと、氣「バヤキコト」をいふ、詩經魏風葛屨篇に「維是ーー、是以爲刺」褊迫急促の心をいふ、

【免身】 「コヲウム」漢書外戚傳に「今皇后當ーー」

【便人】 事に習へる人なり、禮記の表記に「唯欲行之浮于名、故自曰ーー」註に「亦ソノ謙ヲ言フナリ、仁聖ノ名ヲ避ケテ、自ラ此事ニ便習スルノ人トイフ耳」

【片晌】 成語考に「ーーハ卽チ片時ヲ謂フ」晌は午（マヒル）の義より轉じて時刻の義に用ふ、

【扁鵲】 戰國の世の名醫、渤海鄚郡の人、姓は秦、名は越人、少き時、長桑君、扁鵲の常人に非るを知り、語りて曰く、我に禁方あり、年老いたれば公に傳與せんと欲す、公泄す勿れと、扁鵲曰く、敬んで諾すと、乃ち其懷中の藥を出して扁鵲に與ふ、扁鵲遂に名醫となり垣の一方の病人を視て、盡く五藏癥結を見るに至る、扁鵲齊の桓侯に見えて曰く、君疾あり、腠理にあり、治せざれば將に深からんとすと、桓公曰く、寡人疾なしと、後五日復た見えて曰く、君疾あり、血脈にあり、治せざれば將に深からんとすと、後五日、復た見えて曰く、君疾あり腸胃にあり、治せざれば將に深からんとすと、後五日桓公を望見し、退走して曰く、疾、腠理に居れば、湯藥能く及ぶ、血脈にあれば、鍼灸よく及ぶ、腸胃にあれば酒醪よく及ぶ、今骨髓に在り、よく爲むるなきなりと、後五日桓公疾んで果して卒せり、鹽鐵論に「扁鵲不能治不受鍼藥之疾」詳しくは史記の扁鵲倉公列傳を見よ、倉公は前漢の名醫なり、

【駢字類編】 二百四十卷、淸の康熙五十八年の勅撰、天地・時令・山水・居處・珍寶・數目・方隅・采色・器物・草木・鳥獸・蟲魚・附補遺の十三門に分ち、經史子集中の詞藻を採るに皆二字を駢べて分類編輯せり、體例徵引極めて精確なり、佩文韻府と共に詞章訓詁を研究する者の益たる大なり、

【駢四儷六】 （駢儷）を見よ、

【邊垂】 垂は陲なり、遠邊なり、邊境の義、左傳また爾雅釋詁に見ゆ、韋昭の詩に「ーー飛羽檄」

【卞隨】 史記伯夷傳に「及夏之時、有ーー務光者、此何以稱焉」莊子に「湯讓天下于ーー」

【辯舌流ルルガ如シ】 （懸河ノ）を見よ、

【蹁躚】 「メグリ」行く貌、文選の張衡の南都賦に「翹遙遷延、蹩躠ーー」また「メグリ」舞ふ貌、蘇軾の後赤壁賦に「夢一道士、羽衣ーー、過臨皋之下」

【便旋】 「サマヨヒ」「メグル」、博雅に「徘徊ーー也」また「カレコレスルウチニ」の義もあり、本起經に「目冥耳聵、ーー卽忘」

【扁桃】 桃の一種、もと波斯國より出でしといふ、蘭語「アメンドウ」形少しく「ヒラタク」して肉多く、味甘美なり、祕傳花鏡に見ゆ、巴旦杏に同じ、

【泛宅】 （浮家ーー）を見よ、

【鞭撻】 「ムチウツ」晉書に「ーー殊俗」

【胼胝】 皮厚きなり、また手足裂けやぶるるなり、手に胼といひ、足に胝といふ、呂氏春秋に「舜之未遇時也、以其徒屬掘地財取水利、編蒲葦結罘網、手足ーー、其遇時也、登爲天子、賢士歸之、萬民譽之」と、韓詩外傳に「顏色黎黑手足ーー」荀子にも「夙興夜寐、耕耘樹藝、手足ーー、以養其親」胼また骿に作る、

【邊地】 邊境に同じ「カタヨリ」たる夷狄などの地、李白の蘇武の詩に「牧羊ーー苦」

【便地】 便利の地なり、漢書匈奴傳に「使韓安國將三十萬衆徼於ーー」

【鞭笞】 「ムチウツ」なり、攻伐の義にも用ふ、史記秦始皇紀に「ーー天下」後漢書費長房傳に「長房能醫療衆病、ーー百鬼」

【變徵之聲】 徵は五音の一、心より出でて齒を合はせ吻を開きて發する音なり、ーーは常にかはりたる徵の聲にて悲壯の音をいふ、史記刺客傳に「高漸離擊筑、荊軻和而歌、爲ーーーー」

【偏聽】 「カタカタ」の言のみをきくこと「カタクチヲキク」漢書鄒陽傳に「ーー生姦、獨任成亂」

【便殿】 便安に就く所をいふ、天子の休息せらるる「ゴテン」便宮・便座皆同じ、漢書武帝紀に「ーー火」

【籩豆】 籩は竹豆、豆は木豆にて、祭肉を盛る器なり、論語泰伯篇に「ーー之事則有司存」

【篇ニ百尺ノ錦アリ】 （章法句法）を見よ

【便佞】 辯口にのみ巧にして見聞の實なきものをいふ、論語季氏篇に「友便辟、友善柔、友ーー、損矣」（益友）

を見よ、

【編年】史の一體、年代の順序によりて、いろいろの事實をあはせて記述するをいふ、春秋の如きは是れなり、唐書に「蕭穎士、猶罪子長不爲――而爲列傳」と、子長は司馬遷の字なり、

【鞭ノ長キモ馬腹ニ及バズ】、（鞭長シ）を見よ、

【偏陂】偏は不中なり、陂は頗に同じ、不平なり、――は、中正公平ならざるをいふ、書經洪範に「無偏無陂、遵王之義」

【編貝】齒の奇麗にならびたるに喩ふ、漢書の東方朔傳に「臣長九尺三寸、目若懸珠、齒若――」

【偏旁】偏は漢字の左の方、旁は右の方の稱（ツクリ）例へば偏の字のイは偏にて、扁は旁なり、程俱の句に「文皆暗――」

【弁髦】弁は緇布冠をいふ、髦は童子の垂髦をいふ、加冠の禮には、三加とて、必ず三たび冠を加ふ、始冠は緇布冠、次に皮弁を加へ、次に爵弁を加ふ、先づ緇布冠を用ひて垂髦を斂め括り、三加の後に始冠の弁卽ち緇布冠と、始作の髦とを棄て去りて復用ひず、故に無用の者の稱とす、左傳昭九年に「文武成康之建母弟以蕃屛周、亦其廢隊是爲也、豈如――而因以敝之」隊は墜なり、後世廢墜に至らば、兄弟の國、當に之を救濟すべきが爲めなりとの義、

【扁柏】「ヒノキ」幹直く高く聳えて、大木となる、葉は平に布きて茂り、面綠にして背に白脈あり、春末に花開き毬實をなす、杉の實に似て刺なし、秋末に熟す、材は堅美にして最も建築造船等に適す、

【偏罰】父母の中、いづれか一方を失ひしをいふ、駱賓王の靈泉頌序に「幼丁――、早喪慈親」陳繼儒の注に「――ハ、母ヲ喪ヘルヲ指ス、雙親ノ全カラザルヲ謂フ」

【編髮】辮髮に同じ、史記西南夷傳に「皆――隨畜遷徙」漢書終軍傳の註に「編ハ讀ミテ辮トナス」

【辮髮】前條を見よ、

【翩翻】「ヒルガヘリ」飛ぶなり、文選の張衡の西京賦に「衆鳥――」

【辯ハ以テ非ヲ飾ルニ足ル】（辯足以飾非）辯舌の巧にして己の非を飾るに足るをいふ、莊子に「强足以拒敵、――――」史記の殷本紀に「帝紂資辯捷疾、聞見甚敏、材力過人、手格猛獸、智足以距諫、言足以飾非」とあるも義は同じ、

【抃舞】抃は拊手なり、陳暘の樂書に「帝嚳命倕人作、唐歌、有抃以爲節」の註に「兩手相擊ツ也」と文選に「莫不抃舞乎康衢」

【便腹】肥滿したる腹なり（便便）を見よ、

【冕服】禮冠と禮服となり、書經太甲中に「伊尹以――奉嗣王歸于亳」蔡傳に「奉ハ迎ナリ、喪既ニ除ク、袞冕吉服ヲ以テ奉迎シ以テ歸ルナリ」

【邊幅】（邊幅ヲ修飾ス）、（修飾邊幅）外貌を修飾すること、布帛の邊幅を修整して、善く寶らんことを求むるが如きをいふ、後漢書馬援傳に「天下雄雄未定、公孫不吐哺走迎國士、與圖成敗、反――――、如偶人形」公孫は、公孫述なり、

【便嬖】君側に近侍して、嬖寵せらるる者をいふ、孟子梁惠王上篇に「――不足使令於前與」

【返璧】人より贈られたるものを受けずしてかへすをいふ、蘐園齋筆麈に「今于人所餽遺、有不受者、恒曰――、蓋用左傳晉公子重耳事、僖公二十三年僖負羈乃饋盤飧、寘璧焉、公子受飧――是也、而昧者誤以爲藺相如事、乃新其詞曰完璧、甚至曰歸趙、不亦悖哉」

【便辟】威儀に習ひて正直ならざる義、一解に、便は人の欲する所ろに順ふをいひ、辟は人の惡む所ろを避くるをいふと、この說に從へば辟の音ヒとなり、書經冏命に「無以巧言令色――側媚」また論語季氏篇に「友――」（益友）を見よ

【翩翩】「ヒラヒラ」と輕く擧る貌、陸機の天暮賦に「松柏兮鬱鬱、飛鳥兮――」また衆に超ゆる義、史記平原君傳に「平原君――濁世之佳公子也」

【便便】肥滿の貌、後漢書邊韶傳に「邊孝先腹――、懶讀書唯能眠」また「韶曰、腹之――五經之笥」また口辯あるなり、論語鄕黨篇に「――云」

【勉勉】「ツトメ」て已まざる貌、詩經大雅棫樸篇に「――我王、綱紀四方」孜孜また亹亹と同義、

【鞭扑ノ刑】笞刑をいふ、木のさきに垂革を用ふるを鞭とし、榎楚の二物を用ふるを扑とす、書經に「鞭作官刑、扑作敎刑」官刑とは、官府の刑、敎刑とは、學校の刑をいふ、國語に「薄刑用鞭扑、以威民也」元結の詩に「追呼尙不忍、況復鞭扑之」

【駢拇枝指】駢拇は足の大指と、第二指との連るをいふ、枝指は、一指多く生ずるをいふ、莊子駢拇篇に「――――、出於性哉」

【便面】面を掩ふ所以のもの、扇の類なり、扇の異名としても用ふ、人を見るを欲せざるとき、此を以て自ら面を障ふれば、則ち其の便を得、故に名づく、漢書の張敞傳に「使御史驅、自以――拊馬」五車韻瑞に「――

謂之篇」、

【卞門忠孝】 父子共に國難に殉ずるをいふ（卞壺）を見よ、

【編輿】 「アジロノコシ」（籃輿）を見よ、

【箯輿】 竹木を編みて造りたる「コシ」史記張耳陳餘傳に「上使泄公持節問之一一前」

【邊鸞】 唐の京兆の人、右衛長史たり、貞元中新羅國孔雀を進む、善く舞ふ、鸞を召して之を寫さしむ、婆娑の態を得、節奏に應ずるが若し、花鳥折枝草木蜂蝶雀蟬に長じ、倶に妙品に入り、動植の意を得、設色に精し、

【便利】 便宜利益の義、己に都合よきをいふ、史記范睢傳に「人生百體堅彊、手足一一、耳目聰明、而心聖智、豈非士之願與」

【辨理】 判別して處理する義、柳宗元の文に「逋租匿役、期月一一」一說に辨は辦に作る、可なり、力の爲し能ふをいふと、從ふべし、

【冕旒】 「カンムリ」の玉の「タレ」旒は絲に貫きて冕の前後に埀れさげる珠玉なり、世本に「黃帝作一一」

【駢儷】 二字共に「ナラブ」といふ義、四六文とて、漢魏六朝の世に行はれたる文章の一體をいふ、柳宗元の乞巧文に「駢四儷六、錦心綉口」十駕齋養新錄に「一一之文、宋人或謂之四六、謝伋四六談麈、王銍四六話是也、攷文心雕龍章句篇有云、筆句無常、而字有條數、四字密而不促、六字格而非緩、或變之以三五、蓋應機之權節也、則梁之時、文筆已多用四字六字矣、東觀餘論に「景裔文雖六朝一一體、故自淸麗可喜、不失爲佳文」

平安　李衛公言、北都惟童子寺、有竹一窠、纔長數尺、相傳、其寺綱維毎日報竹平安（酉陽雜俎）

平治　如欲平治天下、當今之世、舍我其誰也（孟子）

平定　平定海內、功臣皆受地食邑（漢書高帝紀）

平凡　余讀陳子昂感寓詩、愛其詞旨淸邃音節豪宕、非當世詞人所及、欲效其體作十數篇上、顧以思致平凡、筆力萎弱、竟不能就（朱子齋居感興詩序）

平和　仁人之所以多壽者、外無貪而內淸淨、心平和而不失中正（春秋繁露）

ホ

【帆】 音ふン、船の上に立てたる柱に揭げ張りて風を受け、船の進行を助くるもの、布帆は「モメンノホ」錦帆は「ニシキ」にてつくりたる帆、雲帆は雲閒より「カスカ」に見ゆる帆、帆檣は「ホバシラ」帆影は「ホノカゲ」白居易の夜泊旅望詩に「沙明連浦月、帆白滿船霜」馬戴の送從叔赴南海幕詩に「身往海邊郡、帆懸天際雲」韋應物の賦得暮雨送李冑詩に「漠漠帆來重、冥冥鳥去遲」、

【步】 水濱にて舟の泊する處をいふ、俗に埠（埠頭トモイフ）といふに同じ「ハ」「バ」任昉の述異記に「水際謂之一、上虞縣有石馳一、吳中有瓜一、吳江中有魚一、龜一、湘中有靈妃一云云」また再たび足を舉ぐるを步といふ、跬は一たび足を舉ぐるをいふ、また司馬法に「六尺爲步、步百爲畝」

【甫】 人の字に添へて用ふ、儀禮の注に「甫是丈夫之美稱」とあり、方孝孺の懸窗記に「潘君伯理甫」また通じて父に作る、

【酺】 （酺ヲ賜フ）を見よ、

【簠】 祭器（簠簋）を見よ、

【暮鴉】 「クレガタ」の「カラス」高適の重陽詩に「眞成獨坐空搔首、門柳蕭蕭噪一一」

【暮靄】 「クレガタ」の「モヤ」顏延之の陶徵士誄に「晨煙一一、春煦秋陰」杜牧の題揚州詩に「一一生深樹、斜陽下小樓」

【蒲葦】 「カマ」と「アシ」と、共に水邊に生ずる草の名、晉書食貨志に「良田變生一一、人居沮澤之際」遼史地理志に「高原多榆柳、下濕饒一一」

【黼衣】 斧の形の「ヌヒ」を施せる衣、漢書韋賢傳に「一一朱紱、四牡龍旂」

【黼依】 次條に同じ、漢書嚴助傳に「玩心神明、秉執聖道、負一一、馮玉几、南面而聽斷、號令天下、四海之內、莫不嚮應」

【黼扆】 黼は斧なり、戶牖の閒にたつる、斧文を畫きたる屛風なり、書經顧命に「狄設一一綴衣」狄は狄人、一一は一に斧扆ともいふ、古、天子の諸侯に對する時一一を背にして立つ、禮記曲禮に「天子當依而立」依は扆なり、

【蓬】 說文に「蒿也」「ヨモギ」の一種、轉じて亂るる義とす、詩經衞風伯兮篇に「自伯之東、首如飛一」陸游の詩

に「睡起髮猶ー」

【篷】増韻に「編竹覆舟車也」「トマ」黃庭堅の詩に「風雨打船ー」陸游の詩に「露箬霜筠織短ー」

【謀】「ハカル」事の難易を慮る、說文に「慮難曰ー」廣韻に「ーハ議ナリ」玉篇に「計ナリ」字彙に「咨難慮患曰ー」易の訟卦に「君子以作事謀始」疏に「計謀也」說苑に「謀先事則昌、事先謀則亡」戰國策の蘇秦が薛公に謂ひし語に「謀泄者事無功、計不決者名不成」鬼谷子に「謀莫難于固密、說莫難于悉聽、事莫難于必成」

【綳】束なり、通俗編に「疏布ヲ以テ物ニ褁ラシムルヲーートイフ」墨子尙同篇に「禹葬會稽、桐棺三寸、葛以ーー之」醫家にて綳帶といふ語もこの義に合へり、

【賵】死者に物を贈るをいふ、儀禮既夕の註に「賵ハ主人ヲ助ケテ葬ヲ送ル所以ナリ」春秋隱元年に「歸惠公仲子之賵」公羊傳に「車馬ヲ賵トイヒ、貨物ヲ賻トイフ」

【暮雨】「クレガタ」の雨、法書要錄に「王右軍飛白、如飛泉漱玉、灑散而成ーー」劉禹錫の武陵書懷詩に「春江千里草、ーー一聲猿」

【逢衣】儒者の服なり、逢掖衣に同じ、荀子儒效篇に「ーー淺帶」

【寶位】天子の御位をいふ、易の繫辭に「天地之大德曰生、聖人之大寶曰位」

【豐頤】「コエタル」「オトガヒ」王褒の責髯奴文に「爾乃附以ーー、表以蛾眉」

【謀猷】言の事に切なるを謀といひ、言の道に合ふを猷といふ、書經の君陳に「斯謀斯猷、惟我后之德」

【朋友講習】同門を朋といひ、同志を友といふ、朋友は相須ちて學德を進むるをいふ、易經象傳に「麗澤兌君子以ーーーー」論語學而篇に「有朋自遠方來、不亦樂乎」

【封域】領土をいふ、史記に「諸侯各守其ーー」また國の界をもいふ、周禮保章氏に「所封ーー」

【抔飲】掌にてすくひ飲む、禮記の禮運に「汙尊而ーー」掬飲に同じ、

【奉引】「ミチビキ」文選東京賦に「ーー既畢」

【蓬瀛】蓬萊と瀛洲と、共に神仙の住するところ、拾遺記に「崑臺之山、有垂白之叟、宛若少童、貌若冰雪、腐腸輕、歷ーー而超碧海」

【蜂腰】惡詩をいふ、詩苑類格に「詩有八病、謂平頭、上尾、ーー、鶴膝、大韻、小韻、旁紐、正紐」ーーは一句中第二字第七字と上去入を同うするをいふ、

【貿易】貿も亦易なり、物を交易する義、史記貨殖傳に「以物相ーー」

【逢掖之衣】逢は大なり、掖は衣の腋なり、大掖の衣は、大なる袂の衣にて、儒生の服なり、禮記儒行篇に「丘少居魯、衣逢掖之衣、長居宋、冠章甫之冠」丘は孔丘なり、逢或は縫に作る、後漢書王符傳に「徒見二千石、不如一縫掖」

【烽煙】「ノロシ」の煙、席預の奉和聖製送張說巡邊詩に「春冬見嚴雪、朝夕候ーー」

【豐豔】容色の豐滿好美なるをいふ「コエテ、アテヤカ」豔は艶に同じ、舊唐書楊貴妃傳に「資質ーー、善歌舞、通音律、智算過人」

【葑ヲ采リ菲ヲ采ル、下體ヲ以テスル無レ】（采葑采菲、無以下體）葑菲は、根莖皆食ふべしと雖も、其の根は、時に美惡あり、故に葑菲を采る者は、其の根の惡しきを以て、其の莖の美を棄つべからざるを言ふ、下體は根なり、詩經の邶風の谷風に見ゆ、下に「德音莫違、及爾同死」とあり、葑菲の根の惡しきを以て、其の莖の美を棄つべからざるが如く、夫婦たる者、其の顏色の衰へたるを以て、德音の美を棄つべからず、故に德音違はずんば、爾と共に死を同うすべしとの意、箋に「葑菲ノ二菜ハ蔓菁ト薹（だいこん）トノ類ナリ」又左傳に「詩ニイフ、ーー、ーー、ーーー、君取節可焉也」とあるは、其の惡を以て、其の美を棄てず、唯其の善節を取りて用ふべしとの意、

【蜂衙】衙は參集するなり、吏員が朝夕役所に參集するに喩へて、蜜蜂の早晩窠を出てて「サワグ」にいふ、埤雅に「蜂有兩衙應潮」陸游の詩に「勾回蟻戰、放ーー」また「微雨晴時看鶴舞、小窗幽處聽ーー」

【鳳駕】天子の「オノリモノ」、資希玠の奉和九日幸臨渭亭登高應制詩に「鑾輿巡上苑、ーー瞰層城」

【奉行】先例または上意を承けて施し行ふ義、漢書魏相傳に「方今務在ーー故事而已」わが奉行といふ官名もこの意に本づく、

【蓬蒿】ーーは「ヨモギ」の屬、猶ほ草莽といふが如し、莊子逍遙遊に「翱翔ーー之閒」高士傳に「張仲蔚扶風平陵人、明天官博物、善文、好詩賦、常居窮素、所處ーー沒人、閉門養性、不治名利」云云

【蓬蒿室ニ滿ツ】（蓬蒿滿室）圓機活法に「張仲蔚、蓬蒿室ニ滿チ惟ダ一行徑ヲ開クノミ」前條を見よ、

【豐亨豫大之運】天下太平にして豐樂の運に屬するをいふ、豐も亨も易の卦名、豐は盛なり、豫は樂なり、豐の

卦に亨（トホル）の義あり、豫の卦に大の義あり豐卦に「豐亨、王假勿憂宜日中」また豫卦の彖傳に「聖人以順動、則刑罰淸而民服、豫之時義大矣哉」宋史に「蔡京倡邪說以爲當――――、專以奢侈勸上、窮極土木之功」

【鳳閣】 中書省の別名、唐書百官志の「中書省」の注に「光宅元年改中書曰――」

【泛駕之馬】 泛は覆なり「クツガヘス」覆駕は、馬の逸氣ありて軌轍に循はざるをいふ、よりて卓犖不羈の士に喩ふ、漢書武帝紀に「――――、跅弛之士、亦在御之而已」註に「泛モト覂ニ作ル、後チ通用ス」

【豐下姿】 豐下は「オトガヒ」の「ユタカ」に肥えたるをいふ、富貴の相なり、左傳に「穀也――必有後於魯國」穀は公父文伯、後漢書明帝紀に「帝生而――」宋史文天祥傳に「天祥爲人――、兩目炯然」

【豐干】 傳燈錄に「閭丘徹出牧丹陽、禪師謂曰、若到任、謁文珠・普賢、在天台國淸寺」「ブカン」と讀む、

【蜂起】（蠭起）を見よ、

【豐肌】 肥えたる「ハダ」司馬相如の美人賦に「皓體呈露、弱骨――」

【蠭起】 多くの蜂の飛び起つが如く群り起るをいふ、史記項羽紀に「楚――之將皆爭附君者、以君世世楚將、爲能復立楚之後也」蠭は蜂の古字なり、趙抃の聞嶺外寇梗詩に「驚說焱颷烟瘴時、洞蠻蜂起寇南陲」

【鋒起】 鋒刃の齊しく起るが如く、鋭くして拒ぎ難きをいふ、荀子王制篇に「嘗試之說――」鋒出に同じ、

【蓬丘】 十洲記に「――蓬萊山是也」范成大の詩に「鰲背飛來紺碧浮、人閒還有小――」（蓬萊）を參看せよ、

【封豨脩蛇】 豨は豕なり、封は大なり、慾深き惡人に喩ふ、淮南子に「――――、皆爲民害」（封豕長蛇）に同じ、その條を見よ、

【封疆ノ臣】 封疆（クニザカヒ）を守る臣をいふ、禮記に「思死封疆之臣」

【烽火】 「ノロシ」杜甫の春望詩に「――連三月、家書抵萬金」（烽燧）を見よ、

【蜂窠】 蜂の巢、本草に「蜂房有四、一名革――、二名石――、三名獨――、四名草――、入藥以革――爲勝」蜂巢に同じ

また小屋に喩へていふ、蘇軾の贈葛葦詩に「竹椽茅屋半摧傾、肯向――寄此生」

【蓬顆】 顆は堁に同じ、土塊の義、土塊の上に蓬を生ずるをいふ、漢書賈山傳に「使其後世、曾不得――蔽冢而托葬焉」

【蜂黃】 蜂の體にある黃色の粉の如きもの、已瘧編に「儀部郎尤良縱侍兒悉效宮妝、有蜂粉――花羞玉讓之號」李商隱の早梅の詩に「何處拂胸資蝶粉、幾時塗額藉――」（蝶粉――）を見よ、

【烽火萬里ノ詐】 太平記卷十に見ゆ（周ノ幽王）を見よ、

【鳳兮】 （――）を見よ、

【矛戟】 「ホコ」矛は長柄の兵器、戟は枝ある兵器、增韻に「雙枝爲戟、單枝爲戈」詩經秦風に「修我――、與子偕作」李華の含元殿賦に「――森森、材官羽林」

【鳳闕】 禁門をいふ、兩觀の闕、圓くして上に銅の鳳凰を棲ましむ、故にいふ、漢書郊祀志に「――高二十餘丈」また東方朔傳の「起建章、左――、右神明、號稱千門萬戶」この注に「――ハ闕ノ名」

【豐頰】 「ホホ」の肉の「タップリ」とつきたるをいふ、韓愈の送李愿歸盤谷序に「曲眉――、淸聲而便體、秀外而惠中」

【封建】 土を分ち建てて君とするをいふ、事物紀原に「黃帝州ヲ分チ、野ヲ畫シテ、百里ノ國ヲ得ル コト萬區、唐虞列シテ五等ト爲ス、此レ封建ノ始ナリ」と、左傳の僖二十四年に「周ノ懿德アリシモ、猶ホ兄弟ニ如クハナシトイフ、故ニ之ヲ封建ニス」とあり、

【豐儉】 「ユタカナル」と「ツヅマヤカナル」と、豐約に同じ、晁仲之の謝富察見過詩に「自可隨――、誰能問有無」

【豐歉】 豐は「ホウネン」歉は作物の出來ざる歲なり、說文に「歉ハ食滿タザル ナリ」文中子立命篇に「仁生於歉、義生於豐」宋史食貨志に「坐視六路――」

【寶劒】 「タカラ」の「ツルギ」梁の吳均の詩に、「我有一――、出自昆吾谿、照人如照水、切玉如切泥、鍔邊霜凛凛、匣上風淒淒、寄語張公子、何當來見擕」

【蓬壺】 蓬萊に同じ、拾遺記に「三壺海中三山也、一曰方壺則方丈也、二曰――則蓬萊也、三曰瀛壺、則瀛洲也、形如壺器」白居易の題楊穎士西亭詩に「卽此可遺世、何必――峰」

【封狐】 大いなる「キツネ」楚辭招魂に「――千里」

【豐狐】 大いなる狐、莊子山木に「――文豹」

【豐功】 大いに盛んなる「テガラ」漢書敍傳班彪王命論に「帝王之祚、必有明聖顯懿之德、――厚利積累之業」

【奉公】 國家の爲めに力を盡すをいふ、後漢書祭遵傳に「愛國――」

【蓬戶甕牖】 貧者の室なり、蓬戶は、蓬を編みて戶とな

す、甕牖は、甕牖圓くして甕口の如きなり、或はいふ、敗甕の口を以て牖となすと、禮記儒行篇に「儒有一畝之宮環堵之室、篳門圭竇————」莊子讓王篇に「環堵之室、茨以生草、蓬戸不完、桑以爲樞、而甕牖二室、褐以爲塞」また淮南子に「————、揉桑爲樞」

【掊克】 聚斂を好みて能く人を害するをいふ、稅を苛酷に取る義、詩經大雅蕩篇に「曾是彊禦、曾是——、曾是在位、曾是在服」服は事なり、孟子告子下篇に「——在位、則有讓」讓は責なり、一解に自ら伐りて人に勝つことを好むなりと、

【豐殺】 「ユタカ」に十分なると「コトソギテ」省略すると、晉書の禮志に「禮典軌度——隨時」

【蜂巢】 蜂の巢、白居易の詩に「——與蟻穴、隨分有君臣」

【蓬窗】 竹を編りてつくる、舟の苫の「マド」をいふ、朱子の詩に「步破——雨」また陸游の詩に「熟醉臥——」

【蓬桑】 （桑蓬ノ）を見よ、

【豐草】 茂れる草なり詩經小雅湛露篇に「湛湛露斯、在彼——」

【封事】 上書なり、事の漏泄せんことを恐れ、封じて上る、漢書魏相傳に「故事諸上書者皆爲二封、署其一曰副、領尚書者、先發副封」

【蓬矢】 「ヨモギ」の矢、邪をはらふといふ、禮記內則に「射人以桑弧——六射天地四方」（桑弧）を見よ、

【鳳史】 十訓抄第十に「身異——吹簫猶拙」とあり、——は簫史を斥す、駱賓王の代女道士王靈妃贈道士李榮詩に「臺前鏡影伴仙娥、樓上簫聲隨——」（簫史）を見よ、

【眸子】 眼中の「ヒトミ」瞳子に同じ、李賀の句に「關東酸風射——」

【蜂聚】 蜂の聚る如く、賊どもの聚る義、沈約梁鼓吹曲に「逆徒——旌旗紛蔽」蜂屯に同じ、

【鳳字ヲ題ス】 （題鳳字）圓機活法に世說を引きて「晉嵆康、呂安ト友トシ善シ、安來ル、康ガ在ラザルニ值フ、子喜戸ヲ出デテ之ヲ延ク、入ラズ、門上ニ一ノ鳳ノ字ヲ題シテ去ル、喜覺ラズ、猶ホ以テ忻ヲ爲シ、父ニ告グ、康曰ク、鳳ノ字ハ、乃チ凡鳥ナリト」

【封豕長蛇】 封は大なり、慾深き「ワルモノ」に喩ふ、左傳の定四年に「申包胥秦ニ如キテ師ヲ乞ヒテ曰ク、吳ハ封豕長蛇ヲ爲シ、以テ上國ヲ荐食ス」とあり、淮南子には「吳爲封豨脩蛇、蠶食上國」に作る、

【封氏聞見記】 十卷、唐の封演撰す、この書殘畧特に甚し、六卷までは多く掌故を述べ、七八、二卷は多く古迹雜論を記す、頗る考證に資す、末二卷は皆唐代の軼事を載す、嘉言善行多きに居る、

【封人】 封疆を掌り守る官、論語に「儀——請見」左傳隱元年に「爲潁谷——」

【豐稔】 穀物の「ユタカニミノル」義、杜光庭の麻姑洞記に「其後果——」登稔・豐登・豐熟・豐穰皆同じ、

【謀臣】 「ハカリゴト」に長ずる臣なり、史記淮陰侯傳に「敵國破——亡」

【封事旨ニ稱フ】 舊唐書杜正倫傳に「正倫與韋挺・虞世南・姚思廉等成上封事、稱旨、太宗爲之設宴」

【鳳車】 天子の「ミクルマ」鳳輦に同じ、漢官鹵簿圖に「乘輿大駕則御鳳凰車、以金銀爲列」また蝶の一種、古今注に「蛺蝶一名——」

【奉將】 奉行に同じ、書經に「——天罰」

【鳳翔】 唐の關內道——府、宋の陝西、秦鳳路——府、金以後は府縣共に名つく、今の陝西——府——縣治これなり、

また鳳凰の「カケリトブ」をいふ、易林に「景星明堂、麟遊——」

【鳳城】 天子の宮城、王維の早朝の詩に「柳暗百花明、春深五——」

【豐城】 晉の揚州豫章郡——縣、今の江西南昌府——縣の西南（張華）を參看せよ、

【豐穰】 穀物の豐に「ミノル」をいふ、漢書食貨志に「歲——、穀石五錢ニ至ル」豐稔・豐熟に同じ、

【封守】 封域の守なり、書經に「愼固——、以康四海」

【蓬首】 頭髮の亂るること、蓬（ヨモギ）の如きをいふ、詩經衞風伯兮篇に「自伯之東、首如飛蓬」また漢書燕王傳に「頭如蓬葆」とあり、草の叢生するを葆といふ、晉書の王徽之傳に「徽之爲大司馬桓溫參軍、——散帶、不綜府事」蓬髮、蓬頭皆同じ、

【豐熟】 穀物の「ユタカニ、ミノル」杜牧の上李太尉書に「年穀——」

【蜂出】 多く出づる義、史記六國表に「矯稱——、誓盟不信」漢書藝文志に「九家之術、——竝作」

【鋒出】 鋒刃の出づる如く、鋭く盛んに出づる義、論衡答佞篇に「權謀——」鋒起に同じ、

【貿首之讐】 貿は易なり、首を易へ取らんと欲する程の深き「カタキ」をいふ、戰國策楚策に「甘茂與樗里子——也」

【矛盾】 （——）を見よ、

【鳳翥】鳳凰の高く「トビアガル」如く、人品の極めて高大なるにいふ、鳳擧に同じ、禽經に「ーー鸞擧、百羽從之」田昰の祭王和甫文に「龍孫ーー始見偉人」

【封植】土地の境界に土を盛りあげて標識とするを封といふ、ーーは諸侯となす義、曹冏の句に「漢鑒秦之失、ーー子弟」

【奉職】職務を「ツツシミツトムル」史記循吏傳に「ー循理、亦可以爲治、何必威嚴哉」

【烽燧】烽は烟火にて、寇あるときは之を擧ぐ、燧は薪を積み、寇あるときは之を燔く、晝は燧を燔き、夜は烽を擧ぐ、司馬相如諭巴蜀檄に「邊郡之士、聞烽擧燧燔、皆攝弓而馳、荷戈而走」また漢書賈誼傳に「斥候望ーー不得臥」後漢書光武帝紀に「築亭候、修ーー」

【豐悴】「ユタカ」に肥えると「ヤセオトロフ」と、轉じて盛衰の義とす、韓愈の圬者王承福傳に「抑ーー有時、一去一來而不可常耶」

【鳳雛】通鑑の漢獻帝紀に「孔明ハ臥龍ナリ、士元ハ鳳雛ナリ」とあり、士元は龐統の字なり（龍駒ーー）を參看せよ、

【崩ズルニ臨ミ臣ニ寄スルニ大事ヲ以テス】（臨崩寄臣以大事）出師表の句なり、大事とは、討賊興復の事を謂ふ、蜀志に曰く「章武三年先主於永安病篤、召亮成都、屬以後事、謂亮曰、君才十倍曹丕、必能安國終定大業、若嗣子可輔輔之、如其不可、君可自取、亮涕泣曰、臣敢竭股肱之力、效忠貞之節、繼之以死也」と、是れなり

【蜂生】（蠭生）を見よ、

【蠭生】蜂の起るが如く亂れ起つ義、蠭起に同じ、漢書中山王傳に「讒言之徒ーー」注に「ーーハ衆多ヲ言フ」

【鳳詔】天子の詔書をいふ、韋莊の詩に「長聞ーー徵兵急、何事龍韜獻捷稀」後趙の石季龍、戲馬觀を置く、上に詔書を安く、五色の紙を用ひ、木鳳の口に啣ましめ、而して之を頒行したりし故事に本づく由、事物紀原に見ゆれども必ずしもこれに拘せず、

【豐饒】物の「ユタカニ」多き義、舊唐書第五琦傳論に「民不加賦而國ーー」

【鳳占】書言故事に「婚成言ーー協吉」と、左傳莊二十二年に「懿氏卜妻敬仲、其妻占之、曰吉、是謂鳳凰于飛、和鳴鏘鏘、有嬀之後、將育于姜、五世其昌」云云、懿氏は齊の大夫、敬仲は、陳の公子完の字なり、嬀は陳の姓、姜は齊の姓なり、鳳凰は瑞禽なり、雄を鳳といひ、雌を凰といふ、以て敬仲夫妻に比す、

【封禪】土を築き壇をつくりて祭るを封といひ、地を除きて祭るを禪といふ、管子に「封泰山、禪梁父者、七十二家」禪は墠なり、古は天子巡狩して四岳に至れば太山に封じて天を祭り、小山に禪して山川を祭る、史記に「ーー書」あり、

【懋遷】物を貿易する義、懋は勉なり、書經益稷に「懋遷有無化居」註に「ソノ民ヲ懋メ勉メテ、有ヲ無ニ徙シテ、ソノ居積スル所ロノ貨ヲ交易變化スルナリ」一說に化は貨なり、

【鳳仙花】草の名、小桃紅ともいふ、春苗を生ず、葉は桃の葉に似て密に互生し、莖葉共に淡綠色なり、夏花を開く、紅または白等種種あり、その子を鳳仙子また急性子といふ、群芳譜に「ーー一名ハ海納、一名ハ桃紅、一名ハ染指甲草、マタ夾竹桃金鳳ノ名有リ」

鳳仙花　唐　吳仁壁

香紅嫩綠正開時、冷蝶飢蜂兩不知、此際最宜何處看、朝陽初上碧梧枝、

【奉送】臣民が君主を送り奉る義、白虎通に「諸侯奔王者喪、分爲三部、有始死先奔者、有中來盡其哀者、有會葬ーー君者」

【鬅鬙】頭髮の亂るる貌、字典に「被髮ナリ」とあり、陸游の詩に「傍架討尋書散亂、倚屏吟嘯髮ーー」轉じては廣く物の亂るるにもいふ、白居易の詩に「ーー雲滿衣」

【蟊賊】蟊は苗の根を害ふ蟲なり、一解に、賊は節を食ふ蟲なりと、ーーは、以て良民を害ふ惡人に比す、詩經大雅召旻に「ーー內訌、昏椓靡共」また左傳成十三年に「帥我ーー以來、蕩搖我邊疆」

【奉戴】上に「イタダキ」事ふること、左傳襄三十五年に「ーー厲公」註に「ーーハ猶ホ奉事ノ如シ」

【蠭蠆ニモ毒アリ】（蠭蠆有毒）至微の物と雖も、能く人を螫す、輕視すべからざるをいふ、左傳僖二十二年に「君其無謂邾小、ーーーー、而況國乎」と、また國語晉語に「蚋蟻蠭蠆、皆能害人、況君相乎」玉篇に「蠆ハ螫蟲」

【蓬島】蓬萊に同じ、劉長卿の登東海龍興寺高頂望海詩に「ーー如在眼、羽人那可逢」

【豐島】朝鮮忠淸道の北方に在る島、我が國より同國仁川港に至る通路に當り、日淸戰役開戰の地、

【朋黨ヲ禁ズルコトヲ論ズ】事文類聚新集卷の八に涑水紀聞を引きて曰く「慶曆四年、上、執政ト朋黨ノ事ニ論及ス、參政范仲淹對ヘテ曰ク、古ヨリ以來、邪正朝ニ在リ、未ダ嘗テ各ゝ黨タラズンバアラズ、禁ズベカラザルナリ、聖鑒之ヲ辨ズルニ在ルノミ、誠ニ君子ヲシテ

相朋シ、善ヲ爲サシメバ、ソノ國家ニ於テ何ゾ害セント

【朋黨論】 宋の歐陽修作る、一本に論を議に作りたるものあり、八家文の題下には「在諫院進」と註す、尋常の論文に非ずして、天子へ建議せしものたるを知る、文中臣聞、臣聞等の語にても明かなり、歐公が知諫院たりしは、仁宗の慶曆三四年頃なるが、時の大臣は、杜衍、富弼、韓琦、范仲淹等の君子にて、猶ほも賢才を登用せんとするに當り、陳執中・章得象・王拱辰等の小人之を憂へ、讒構百端せしかば、諸大臣朝に安んずる能はず、自ら請ひて地方官となれり、是に於て、歐陽公叢に杜衍・富弼・韓琦・范仲淹等を朝に召し回さんことを乞ふ剳子を上つりしに、群小猶ほまた君子人を目して黨人と爲し、悉く逐はんとし、藍元震といふ者、朋黨論を帝に進め、君子人を誹りければ、歐公この論を帝に上る、帝の欺かるるなからむことを欲せしなり、

【鳳團】 茶の上品なるものの稱、石林燕語に「建州歲貢大龍――茶、仁宗時蔡君謨擇茶之精者爲小龍團十斤以獻」周邦彥の浣溪沙詞に「閒碾――銷短夢、靜看燕子壘新巢」

【鳳峙】 鳳凰の「ソビエタテル」如く、人品の高尚にして、凡俗の表に獨立せるを形容す、晉書の赫連勃勃載記に「龍飛漢南、――朔北」

【鳳池】 中書省の異稱、李白の詩に「君登――去、忽棄賈生才」（鳳凰池）を見よ、

【鵬程萬里】 海面の極めて廣大なるにいふ、呂定の登東嶽詩に「鵬程九萬扶搖近、世界三千指顧低」（圖南ノ――）を見よ、

【賵弔】 死者に物を贈るをいふ、――は死者ある家に品物をおくりて「トブラフ」をいふ、唐書に「帝走中人――」

【鳳鳥至ラズ】 （鳳鳥不至）聖主世に出づれば鳳鳥至る、故に世に聖主なきを歎じて「――――」といふ、論語子罕篇に「子曰――――、河不出圖、吾已矣夫」とあり、孔子が聖主に遇ひて道を行ふことを得ざるを嘆じたまへるなり、

【鳳、朝陽ニ鳴ク】 （鳳鳴朝陽）古今事類全書後集卷の六に、唐書韓瑗傳を引きて「韓瑗與褚遂良相繼死、内外以言爲諱、將二十年、帝造奉天宮、御史李善感始上疏極言、時人喜之、謂爲――――」とあり、唐書の李善感傳にも出づ、以て希世の美事に喩ふるなり、帝は唐の高宗なり、詩經の大雅卷阿に「鳳凰鳴矣、于彼高岡、梧桐生矣、于彼朝陽」とあるに本づく、朝陽は山の東をいふ、世說に「二陸龍躍于江漢、彥先鳳鳴于朝陽」二陸は陸機と陸雲となり、彥先は、晉の賀循の字、

【蜂蝶香ニ隨フ】 錦字箋に、開元天寶遺事を引きて「天寶間、都中ノ名妓、楚蓮香ハ、國色無雙ナリ、出ヅル毎ニ、則チ蜂蝶相隨フ、蓋シソノ香ヲ慕フナリ」

【蓬頭】 亂髮をいふ、莊子說劍篇に「皆――突鬢」蓬髮、蓬首皆同じ、

【龐統】 蜀志に「――字ハ士元、襄陽ノ人、少時樸鈍、未ダ識ル者アラズ、司馬徽人ヲ知ルノ鑒アリ、統ヲ稱ス、當ニ南州ノ士ノ冠冕タルベシト、是ニ由リテ漸ク顯ル、先主荊州ヲ領セシトキ、統從事ヲ以テ耒陽ノ令ニ守タリ、縣ニ在リテ治マラズ、官ヲ免ス、呉ノ將魯肅、先主ニ書ヲ遺リテ曰ク、龐士元非百里才也（百里才は縣令をいふ）使處治中別駕之任、始當展驥足耳ト、諸葛亮モ亦之ヲ先主ニ言フ、先主以テ治中從事ト爲ス、親待スルコト亮ニ亞グ、並ニ軍師中郎將ト爲ル」

【蓬頭垢面】 頭髮をみだして蓬の如く、面には垢「イツパイ」つく、魏書封軌傳に「善自修潔、儀容甚偉、或曰、學士不事修飾、此賢何獨如此、軌聞笑曰、君子整其衣冠、尊其瞻視、何必――――然後爲賢、言者慚退」

【鳳德】 聖人の德をいふ、論語微子篇に「鳳兮鳳兮何德之衰」晉書周顗傳に「庾亮曰、周侯末年、所謂――之衰也」

【龐德公】 漢の南郡襄陽の人、峴山の南に居り、未だ嘗て城府に入らず、荊州刺史劉表數延請すれども屈せず、乃ち就て之を候ふ、龐公壠上に耕し、妻その前に饁す、相敬すること賓の如し、表問ひて曰く、先生官祿を肯んぜず、將た何を以て子孫に遺さんとするか、公曰く、人皆之に遺すに危を以てす、我獨り之に遺すに安を以てすと、後ち妻子を携へ鹿門山に隱る、因りて藥を採りて返らず、子の煥、晉の泰康中に牂柯太守に拜す、從子統、劉備に仕ふ、

【蜂屯】 蜂があつまる如くに多く賊どもの聚まるをいふ、屯は「アツマリ、タムロス」韓愈送鄭尚書序に「――蟻雜、不可爬梳」陳高の丁酉歲述懷の詩に「處處――盛、時時豕突狂」蜂聚に同じ、

【豐肉】 肉の「タツプリ」と肥えたるなり、周禮大司徒に「五曰、原隰、其動物宜贏物、其植物宜叢物、其民――而庳」楚辭に「――微骨、體便娟只」

【豐寧】 「ユタカ」にして「ヤスシ」豐安に同じ、道德指歸論に「禍亂既夷、萬物――、天心大得、宇內欣欣」

【豐年】 穀物のよく「デキタ」年、有年に同じ、詩經周頌豐年に「――多黍多稌」稌は音ト稻なり、

【寳馬】 「スグレタル」良き馬、史記大宛傳に「貳師馬宛――也」沈佺期の上巳日祓禊渭濱應制詩に「――香車淸渭濱、紅桃碧柳禊堂春」

【鋒鋩】 刀の「キッサキ」孟郊の詩に「慷慨丈夫志、可以耀――」

【蜂房、鵠卵ヲ容レズ】 （蜂房不容鵠卵）蜂の巣の穴は「カササギ」の卵は入れ難しとの義、下に「小形不足以包大體」とあり、淮南子の語、

【蓬髮】 頭髮の亂るること、蓬（ヨモギ）の如きをいふ、山海經西山經の注に「――ハ蓬頭亂髮ナリ」晉書の阮孚傳に「――飲酒」蓬頭・蓬首皆同じ、

【剖判】 猶ほ開闢の如し、韓非子に「自天地之――、以至于今」

【葑菲】 「カブラ」の屬（葑ヲ采リ）を見よ、

【豐碑】 大いなる碑、禮記に「公室視――、三家視桓楹」注に「――ハ大木ヲ斲リテ之ヲ爲ル」

【龎眉皓髮】 龎は大なり、皓は白なり、文選の張衡の思玄賦の注に「顏駟漢文帝時爲郎、至武帝時、嘗過郎署、見駟――、上問曰、叟何時爲郎、何其老也」

【鳳尾蕉】 一に鳳尾松とも番蕉ともいふ、わが國にていふ蘇鐵、

【鳳舞】 鳳凰の舞ひ遊ぶ義、易林に「龍遊――、歲樂民喜」李嶠の鳳詩に「帶花疑――、向竹似龍吟」

【豐富】 「ユタカ」に「トム」易の大有上九の「自天祐之吉無不利」の注に「大有――之世也云云」晉書和嶠傳に「嶠家產――擬於王者、然性至吝、以是獲譏於世、杜預以爲嶠有錢癖」

【豐膚】 「ハダ」の「ユタカニコエタル」義、王粲の七釋に「――曼肌、弱骨纖形」

【剖符】 （符ヲ剖ツ）を見よ、

【捧腹】 甚しく笑ふ狀なり、史記日者傳に「司馬季主、――大笑」

【逢逢】 鼓を擊つ聲、詩經大雅靈臺篇に「鼉鼓――」

【蓬蓬】 葉の盛んに亂れる貌、詩經小雅采菽篇に「維柞之枝、其葉――」また風の吹き起る貌、莊子秋水篇に「蛇謂風曰、今日――然起於北方」

【瞀瞀】 頭を垂れ氣を喪ふ貌、禮記檀弓に「有餓者、蒙袂輯屨――然來」一解に「――ハ、目ノ明カナラザル貌」と、程頤の明道先生墓表に「無眞儒、天下――焉、」

莫知所之」

【夢夢】 昏亂の貌、詩經大雅抑篇に「視爾――、我心慘慘」註に「――ハ不明ニシテ亂ルルナリ」吳澄の題陳簡齋稿詩に「厓涘遺墨視――」

【瞢瞢】 晦き貌、不明なり、周禮春官の註に「日月――無光也」揚子太玄經に「物失明、莫不――」

【蓬勃】 風または雲氣の盛んに起る貌、晉書慕容德載記に「謠曰、大風――揚塵埃」賈誼の白雲賦に「望白雲之――」文選潘岳の笙賦に「鬱――以氣出」

【豐本】 「ニラ」の異名（韭）を見よ、

【蓬麻中ニ生ズレバ扶ケズシテ自ラ直シ】 （蓬生麻中、不扶自直）史記三王世家に「傳曰、――、――、白沙在泥中、與之皆黑者、土地教化使之然也」とあり、この語、曾子制言にも出づ（蓬麻中）を見よ、

【鳳舞ヒ魚跳ル】 （簫韶九奏）を見よ、

【暮雲】 「クレガタ」の雲、杜甫の薄遊詩に「遙空秋雁滅、半嶺――長」

【暮雲春樹】 離別の友を思慕するにいふ、杜甫の春日憶李白詩の中に「渭北春天樹、江東日暮雲、何時一樽酒、重與細論文」杜は渭北に在り、李は江東に在り、景を寫して離情自ら見はる、詩は唐詩別裁集卷の十に出づ、

【鳳鳴】 鳳凰の「ナクコエ」漢書律歷志に「黃帝制十二筩、以聽鳳之鳴」（鳳朝陽ニ）を參看せよ、

【逢蒙善ク射レドモ不調ノ弓ヲ用フル能ハズ】 劉子新論に「逢蒙善射不能用不調之弓、造夫善御不能策不服之馬、般倕善斷不能用不利之斧、孫吳善將不能戰不習之卒」とあり、事を行はんと思はば、先づその器を利すべきに喩ふ、

【蠭目豺聲】 貌兇に、聲惡なるをいふ、左傳文元年に「――而――、忍人也」蠭目は「イカレル」目なり、

【豐約】 「ユタカナル」と「ツヅマヤカナル」と、豐儉に同じ、申鑒に「――勞佚各有其制」

【鳳翼】 草の名、射干の一名「ヒアフギ」

【鳳翼ニ附ス】 （附鳳翼）（龍鱗ニ）を見よ、

【鳳兮鳳兮】 鳳鳥は國に道ある時は出で、道なければ隱る、以て孔子を鳳に比し、無道の世に隱れ去ること能はざるを譏りたるなり、論語微子篇に「楚狂接輿歌而過孔子曰、――――、何德之衰、往者不可諫、來者猶可追、已而已而、今之從政者殆而」楚狂とは楚の狂人、接輿はその名、已は止むなり、而は語助の辭、殆は危なり、司馬相如の琴歌に「――――歸故鄉、遨遊四

海ニ求ム其凰ニ（琊艾ノ）を参看せよ、

【蓬萊】史記の封禪書に「蓬萊、方丈、瀛洲、此ノ三神山ハ、渤海ノ中ニ在リテ人ヲ去ルコト遠カラズ、諸ノ僊人及ビ不死ノ藥皆在リ、其ノ物禽獸盡ク白シ、而シテ黃金銀ヲ宮闕トナス、未ダ到ラズシテ之ヲ望メバ雲ノ如シ、到ルニ及ビテ三神山反リテ水下ニ居リ、之ニ臨メバ、風輙チ引キ去ル、終ニ能ク至ルナシ」列子に「渤海之東有五山焉、一曰岱輿、二曰員嶠、三曰方壺、四曰瀛洲、五曰——」吳筠の「登北固山望海」詩に「雲生——島、日出扶桑枝」

【蓬萊弱水】隔越することの甚しきを「不啻——之隔」といふ、列仙傳に「謝自然、泛海求蓬萊」（謝自然は蔡州の仙女なり）一道士謂曰、蓬萊隔弱水三十萬里、非飛仙不可到」

【豐樂】「ユタカニタノシム」詩經の「棫樸濟濟」の箋に「周邦之民、獨——者、其君德敎」蜀志先主傳に「蜀中殷盛——、先主置酒大饗士卒」歐陽修の——亭記に「使民知所以安此豐年之樂者、幸生無事之時也」

【峰巒】「ミネ」說文に「山小而銳、曰巒」六書故に「巒ハ圜峰ナリ」畫鑒に「郭熙河陽人宗李成、善得煙雲出沒——隱顯之態」陳櫟黄山堂賦に「四千仞之蒼翠、三十六之——」

【鳳鸞】鳳凰と鸞となり、鸞は神鳥なり、鳳凰の佐、雞身赤毛、色五采を備へ、鳴くこと五音に中るといふ、山海經に「女牀山有鳥、狀如翟而五彩文、名曰鸞、見則天下安寧」一說に赤色多き者は鳳にして青色多きものは鸞なりと、全唐詩話に「十二層樓倚翠空、——相對立梧桐」

【豐隆】字或は豐霳に作る、屈原の離騷に「吾使——乘雲兮」の註に「——ハ雲師ナリ」淮南子の「季春三月、——乃出」の註に「——ハ雷也」一解に雷師をいふと、

【豐霳】前條を見よ、

【鳳林寺】支那の寺の名、葛嶺の西に在り、俗に喜鵲寺といふ、邵長蘅の「夜遊孤山記」に「惟——聞鐘聲寥寥也」

【封略】略は界なり、——は封疆に同じ、左傳に「——之內、何非君土」

【蓬累】頭に物を戴き、兩手之を扶けて行くをいふ、扶持といふが如し、一解に、累は轉行の貌、蓬の風に從ひて轉移するが如きをいふと、史記孝子傳に「君子得其時則駕、不得其時則——而行」洪頤煊の讀書叢錄に「蓬ハ蓬髮ヲイフ、累ハ傫ニ同ジ、說文ニ傫ハ垂ル貌」

【鳳曆】曆を「タフトビテ」いふ、左傳の「少皞摯之立也、鳳鳥適至、故紀于鳥、鳳鳥氏曆正也」の注に「鳳ハ天時ヲ知ル、故ニ以テ曆正ノ官ニ名ヅク」杜甫の「上韋左相」詩に「——軒轅紀、龍飛四十春」

【鳳輦】事物紀原に「通典ニ曰ク、夏后ノ末代ニ、輦ヲ制ス、隋、輦ヲ制シテ輪ヲ施サズ、人ヲ以テ之ヲ荷ハシム」とありて、註に「人牽クヲ輦トナス」と、正義に「秦ノ始皇其ノ輪ヲ去リ之ヲ荷ハシム、漢ノ代、遂ニ人君ノ乘トナス」と、また通典に「唐ノ輦七アリ、一ニ大鳳輦トイフ、前世ニハ文ナシ、疑フラクハ、唐ノ造ル所ロ、今タダ鳳輦トイフ」沈佺期の山莊侍宴の詩に「龍旗縈秀木、——拂疏筇」

【部婁】小さき阜をいふ、左傳襄二十四年に「鄭大叔曰、——無松柏」小さき所には大なる物の生ぜざるをいふ、培塿に作る、同じ、說文に附婁に作る、

【培塿】「アリヅカ」小阜をいふ前の（部婁）を見よ、

【奉祿】奉は俸、秩祿をいふ、漢書公孫弘傳に「——甚多」

【蜂王】蜂の王、爾雅翼に「蜂以千百數、中有大者、爲王、羣蜂畀之從其所往」眞山民の幽居雜興の詩に「——衙早晚、燕子社春秋」

【鳳皇】靈瑞の鳥なり、左傳雖題に「鳳ハ鳥ノ王タリ、故ニ之ニ加フルニ皇ノ字ヲ以テスルノミ、故ニ古、鳳ノ字ナシ」書經益稷に「——來儀」字典には凰通じて皇に作るとあり、次條を見よ、

【鳳凰】格物論に「鳳ハ瑞應ノ鳥ナリ、太平ノ世ニハ、則チ見ハル、雞頭、蛇頸、燕頷、龜背魚尾ニシテ、五彩ノ色アリ、高サ六尺許、梧桐ニアラザレバ棲マズ、竹實ニアラザレバ、食ハズ、醴泉ニアラザレバ、飲マズ、凡ソ棲止スルトコロ、衆禽必ズ之ニ隨ヒテ集マル、故ニ曰ク、羽蟲三百有六十ニシテ——之ガ長タリ」孔演圖に「鳳ハ火精ナリ、雄ヲ鳳トイヒ、雌ヲ凰トイフ」禮記の禮運に「——麒麟皆在郊藪」夫木集に「百敷や桐の梢にすむ鳥の千年は竹の色もかはらじ」（鳳朝陽）を参看せよ、

【鳳凰池】中書省は、樞近の地なるを以て、多く寵任を承く、人其位を固くし、鳳凰池といひ、又略して鳳池ともいふ、晉書荀勗傳に「勗久在中書、武帝以爲尙書令、或賀之、勗曰、奪我——、諸君何賀耶」

【鳳皇在笯】（鳳皇在笯）賢人の位を失するに喩ふ、九章に「——兮、雞雉翔舞」笯は「トリカゴ」

【鳳凰來儀】（虞舜ノ世）を見よ、

【捕影】（影ヲ捕フ）影は捕るべからず「トリトメナキ」義に喩ふ、谷永の論神怪に「如繫風——、終不可得」

【模楷】法式をいふ、人の「テホン」後漢書李膺傳に「天下——李元禮」元禮は膺の字、

【輔行】副使をいふ、孟子公孫丑下篇に「使蓋大夫王驩爲——」戰國策秦策に「王令向壽——」

【暮角】「クレガタ」に吹く角なり、角は軍中に用ふる樂器、演繁露に「蚩尤率魑魅與黄帝戰、帝命吹角爲龍鳴禦之」劉禹錫の洞庭秋月行に「岳陽樓頭——絕、漭漭已過君山東」

【外強中乾】類書纂要に「————ト八、人ノ外、強形アリト雖モ、內實乾涸ス、才無キヲイフ」と、左傳の僖十五年の字面、

【蒲圻】縣名、晉は荊州長沙郡、南宋・南齊は郢州江夏郡に屬す、今の湖北武昌府嘉魚縣の西南に在り、隋・唐・宋・元・明のは卽ち今の武昌府——縣治これなり、隋書地理志に「江夏郡——」

【蒲葵】和名「ビラウ」熱帶に生ずる樹の名、檳榔に同じ、一解に椶の一名、栟櫚の轉訛ならんと、この葉にて團扇を作る、蒲扇または——扇といふ、李商隱の詩に「何人書破——扇、記著南塘移樹時」

【蒲戲】「チヨボイチ」博奕の名、樗蒲に同じ、南史宋王弘傳に「北人皆以——得罪」

【簠簋】祭祀に黍稷稻粱を盛りて供ふる器、外方にして內圓なるを簠といひ、內方にして外圓なるを簋といふ、共に支那の「マス」にて一斗二升を受く、簠は黍稷を盛り、簋は稻粱を盛る、周禮の地官に「祭祀共——」漢書賈誼傳に「古者大臣有坐不廉而廢者、不謂不廉、曰——不飾」

【母儀】人の母たる者の「テホン」盧詢祖の詩に「——擅鄰國」

【北牖】北の「マド」論語に「疾君視之東首」疏に「病者常ニ——ノ下ニ居ル、君ノ來リ視ルガ爲メニ、暫時遷リテ南牖ノ下ニ鄉ヒ、東首シ、君ヲシテ南面シテ之ヲ視ルヲ得シム」王粲ノ涼風至賦に「——閑眠、西園夜宴」

【繆肜】字は豫公、漢の召陵の人、少くして孤なり、兄弟同居す、妻を娶るに及び、各〻分異を求む、肜戶を掩ひ自ら責む、弟及び婦之を聞きて悉く罪を謝し、更に雍睦をなす、仕へて中牟の令となり、異政あり、

【北轅適楚】志と行と相反するに喩ふ（轅ヲ北ニシテ）を見よ、

【僕ヲ更フルモ未ダ終ス能ハズ】（更僕未能終）僕は擯相なり、終は盡なり、應對の事多くして擯相を代ふると雖も、尙ほ未だ言ひ盡す能はざるをいふ、禮記の

儒行に「遽數之不能終其數、悉數之乃留、————也」とあり、留は久なり、

【步搖】首の「カザリ」「カブリモノ」釋名に「——上有垂珠、步則搖」と略しては搖一字にて首飾の義とす、曹植の句に「戴金搖之熠燿」

【蒲葉】蒲は水中に生ずる草、和名「カマ」一根より叢生す、葉の長四五尺、巾七八分、夏日莖を出すこと四五尺、上に穗を生ず、東京夢華錄に「自五月一日及端午前一日、賣桃柳葵花——佛道艾、次日家家鋪陳於門首」貢師泰の沒興の詩に「——野塘方綠漲、杏花春雨正紅酣」

【暮煙】「クレガタ」の煙、無名氏の朝元閣賦に「寒鴈正來、下泰山之八水、——初起、繞漢家之五陵」杜牧の懷吳中馮秀才詩に「惟有別時今不忘、——秋雨過楓橋」

【圃翁】「ハタケツクリ」の「オヤヂ」類苑に「——倚鋤睥睨」老圃に同じ、また圃師・圃丁・圃人ともいふ

【帆ヲ落ス】（落帆）帆を「オロス」宋張邦幾侍兒小名錄に「至舜妃廟前——入廟」

【步ヲ邯鄲ニ學ブ】（學步於邯鄲）己が本分をすてて、他の行爲に倣ふは兩ながら失ふに喩ふ、莊子の秋水篇に「子獨不聞夫壽陵餘子之學行於邯鄲與、未得國能、又失其故行矣、直匍匐而歸耳」と、壽陵は燕の邑、邯鄲は趙の都、餘子は弱齡の人なり、また漢書の班氏敍傳に「昔有學步於邯鄲者、曾未得其髣髴、又復失其故步、遂匍匐而歸耳」

【酺ヲ賜フ】（賜酺）漢書文帝紀に「——五日」の注に「師古曰ク、酺ノ言タル布ナリ、王德天下ニ布キテ衆ヲ合シ飲食スルヲ酺トイフ」と、また「漢ノ律ニ、三人以上故ナク羣リテ飲酒スレバ、罰金四兩、今詔シテ橫マヽニ會酒スルヲ得ルコトヲ賜フコト五日」唐書太宗紀に「王者酺ヲ賜ヒ恩ヲ推シ、衆ト共ニ樂ムハ、升平ノ盛事ヲ表シ、億兆ノ歡心ヲ契ズル所以ナリ」

【墓ヲ封ズ】（封墓）「アレスタレ」たる墓を「ツクロヒ」修む、書經に「釋箕子囚、封比干墓」

【暮霞】「クレガタ」の「カスミ」劉禹錫の詩に「雨過遠山出、江澄——生」またその秋江晚泊詩に「——千萬狀、賓鴻次第飛」

【暮笳】「クレガタ」に吹く胡笳の聲をいふ、劉長卿の代邊將有懷詩に「——吹寒月、曉甲帶朝霜」（胡笳）を見よ、

【脯醢】脯は乾肉「ホジシ」醢は肉漿なり「シシビシホ」殷の紂王が九侯を殺して醢と爲し、鄂侯を殺して脯

と爲したること、史記殷紀に見ゆ、これによりて、殺戮の義とす、史記魯仲連傳に「易爲與人倶稱王、卒就ーー之地」

【墨家】墨翟の說を主とする者墨者ともいふ、字典に「太史公論六家之要旨、ーー儉而難遵、然其彊本節用不可廢也、六家陰陽・儒・墨・名・法・道也」（墨子）を參看せよ、

【北海】西漢の郡名、今の山東青州府昌樂縣の南五十淸里、東漢のーー郡は、今の青州府壽光縣の東南三十一淸里、その他歷朝沿革あり、詳しくは歷代地理志韻編を見よ、

【北岳】岳一に嶽に作る、恒山の一名、書經舜典に「巡守至于ーー」註に「ーーハ恒山ナリ」李洞の終南山の詩に「盤根連北嶽、轉影落南溟」

【木客】「キコリ」胡元瑞の玉壺遐覽に「神仙傳有ーー、薪於山中」また山に棲む怪獸、人を「バカス」といふ、また「ヒヒ」の一名、

【墨客】能書の人をいふ、海棠賦序に「梅花占於春前、牡丹殿於春後、騷人ーー、特注意焉」杜詩に「ーー藹雲屯」註に「ーーハ善書ノ人ヲイフ」字客・良書皆同じ、

【北宮黝】北宮は氏、姬姓、衞の公族なり、黝はその名、孟子公孫丑上に「ーーー之養勇也、不膚撓、不目逃、思以一毫挫於人、若撻之於市朝」云云」注に「人ソノ肌膚ヲ刺セドモ撓却セズ、ソノ目ヲ刺セドモ、目睛ヲ轉ジテ逃避セザルナリ」

【牧牛兒】「ウシカヒ」の童子、夢溪筆談に「有ーーー」牛童また放牛兒ともいふ、

【北嚮】北の方に向ふ、史記の項羽本紀に「項王項伯東嚮坐、亞父南嚮坐、亞父者范增也、沛公ーー坐、張良西嚮侍」

【卜居】「スマヒ」をトひ定むる義、史記の周本紀に「成王使周公ーー」

【牧圉】牧は牛を養ひ、圉は馬を養ふ義、ーーは「ウマカヒ」左傳に「庶人工商皁隷ーー、皆親暱、有以輔佐也」また轉じて邊陲の地をいふ、同書僖二十八年に「不有行者、誰扞ーー」

【木强】樸鈍にして、文飾（カザリ）なきをいふ、木は質朴なり、强は勁直なり、史記の周勃世家に「勃、人トナリ、木强ニシテ敦厚ナリ、高帝以爲ラク大事ヲ屬スベシト」とあり、また張蒼傳に「周昌ハ木彊人也」とあり、註に「ソノ質直掘强木石ノ如シ」彊は强に同じ、

【木彊】前條を見よ、

【北極】天の北極に在る星にて、天の樞なり、常にその處に定在して動くことなし、故に天子の位に喩ふ、爾雅の「ーー謂之北辰」の注に「北極ハ天ノ中ナリ、以テ四時ヲ正ス、其ノ中ニ居ルヲ以テ、故ニーート名ヅク」論語爲政篇に「子曰、爲政以德、譬如北辰居其所而衆星共之」とあり、張說の扈從溫泉宮詩に「騎仗聯聯環ーー、鳴笳步步引南薰」

【璞玉渾金】（ーーーー）を見よ、

【木瓜】和名「ボケ」枝葉は海棠に似て幹に刺あり、春の半に花開く、群芳譜に「一名鐵脚梨樹」詩經衞風ーーに「投我以ーー、報之以瓊琚、匪報也、永以爲好也」注に「ーーハ實、小瓜ノ如シ、酸ニシテ食フベシ、瓊ハ美玉ナリ、琚ハ佩玉ノ名ナリ、言フハ人我ニ贈ルニ微物ヲ以テセバ、我當ニ之ニ報ズルニ重寶ヲ以テスベシ、而シテ猶ホ未ダ以テ報ト爲スニ足ラザルナリ、但ソノ長ク好ヲ爲シテ忘レザランヿヲ欲スルノミ」

【木華】晉人、字は玄虛、海賦を作る、文選に載す、楊駿の主簿となる、

【木槵樹】「ムクロジ」の樹の名、その實を無患子といふ、

【牧溪】（法常）を見よ、

【墨刑】「イレズミ」の刑、黥ともいふ、五刑の一、その額を鑿ち、涅するに墨を以てするなり（墨辟）を見よ、

【北溪字義】二卷、宋の陳淳撰す、淳字は安卿、北溪と號す、この書は四書の字義を以て、命・性・心・情・才・志・意・仁・義・禮・智・信・忠信・忠恕・一貫・誠・敬・恭敬・道・理・德・太極・皇極・中和・中庸・禮樂・經權・義利・鬼神・佛の二十六門に分ち、一一原委を詳論し、旁通博證、頗る發明するところあり、この書後世誤りて性理字義と稱す、寛延九年の和版あり、また林信勝の性理字義諺解八卷あり、

【北闕】天子の宮殿の北の正門なり、上奏謁見の徒の出入するところ、漢書高帝紀に「蕭何治未央宮、立東闕、ーー前殿」注に「關中記ニ曰ク、東ニ蒼龍闕アリ、北ニ玄武闕アリ、說文ニ云フ秦家ノ舊宮皆渭北ニ在リ、而シテ東闕ーーヲ立ツ、蓋シ其ノ便ニ取ル」漢書枚皐傳に「上書ーー」

【繆公】（晉ノーー）を見よ、

【暴骨】（骨ヲ暴ス）を見よ、

【墨莊】藏書に富めるをいふ、書言故事に「劉幾死ス、妻、書千餘卷ヲ聚メテ諸子ニ指示シテ曰ク、汝ノ父、此ヲ謂ヒテ墨莊ト爲シキ、今汝ガ輩ニ貽リテ、學殖ノ具ト爲スト」張神基のーー漫錄序に「僕性喜藏書、隨所寓

榜曰——故題其首曰——漫錄

【撲朔】 蹉跌（ツマヅク）の貌、木蘭辭に「雄兎脚——、雌兎眼迷離」迷離は散り亂るる貌、

【北山移文】 南北朝の時、齊の周顒字は彥倫、鍾山に隱る、後ち詔に應じて出でて海鹽縣令と爲り、却りて此の山を過ぎんとす、會稽山陰の人、孔稚珪（字ハ德璋）鍾山の草堂（顒ノ嘗テ隱居セシ處）を過ぎ、鄙みて———を作り、山靈の威を假り、顒をして再び此の草堂に過ぎるを得ざらしむ、北山とは卽ち鍾山なり、江蘇省江寧府上元縣の東北に在り、移とは文書の名、後世の移牒に同じ、文中に「蕙帳空兮夜鶴怨、山人去兮曉猿驚」の句あり、猿鶴に託して鄙怨を寄せしなり、文は古文眞寶・續文章軌範に出づ（林慚澗愧）を見よ、

【木珊瑚】 「ケンポナシ」枳椇とも書く、山野に生ずる樹の名、實は五つの小叉に分れ、肉その上にまとひて手指の如し、冬初に熟す、皮の色は梨の如く、味甚だ甘し、

【北山之感】 王事に勞して、父母を養ふことを得ざるを感慨するなり、曾鞏の福州上執政書に「或任使不均、或苦於征服、而不得養其父母、則有———、鴇羽之嗟、或行役不已而父母兄弟離散、則有陟岵之思云云」もと詩經小雅北山篇の序に「北山大夫刺幽王也、役使不均、已勞於從事、而不得養其父母焉」とあるに本づく（鴇羽之嗟）を參看せよ、

【北史】 一百卷、二十四史の一、唐の李延壽撰す、北朝の魏・北齊・周・隋四世二百四十二年間の事を紀す、分ちて十二本紀、八十八列傳とす、この書南史に較ぶれば力を用ふること獨り深し、周は則ち文苑傳を補ひ、齊は則ち列女傳を補ひし如き、皆南史の闕略なるに似ず、

【北枝】 北の方に出たる枝、貫休の閑居詩に「南枝復——、玉露沾毛衣」

【北至】 夏至の一名、後漢書明帝紀の注に見ゆ、

【墨子】 十五卷、周の墨翟撰す と題す、然れども書中多く子墨子と稱するを見れば、則ち其の門人の記する所ろならん、原本七十一篇、今八篇を佚す、その說は孟子の闢く所ろとなり、世に行はれず、然れども其の書は歷代著錄して九流の一に列す、その兼愛を說くの弊は、流れて無父無君に至らんことを恐れ、孟子は極力之を排斥したり、されども其の儉を崇び慈を尙ぶの說に至りては濟世利用の功、徒に空言を弄する者の比にあらず、これ古昔孔墨と幷稱せし所以なり、孫星衍曰く「親士・修身・經上下・及ビ經說ノ諸篇ハ、翟ノ自著ナルモ、ソノ中、經上下ハ略ホ爾雅釋詁ノ文ニ似テ、ソノ意旨ヲ解セズ、又怪ム、漢唐以來通人碩儒博ク諸子ヲ貫ケドモ、獨リコノ書句ヲ解スル者少シ、故ニ傳寫譌錯シ、鉤乙シ難キ處往往少カラズ」と、今世に行はるるは畢沅の經訓堂墨子 を善本とす、天保六年の和版あり、この外、淸の孫詒讓の墨子閒詁、參考の資とすべし、

【墨子絲ニ泣ク】 說林に「墨翟見練絲而悲、爲其可以黃可以黑也」（楊朱岐ニ）を見よ、

【北宗】 （南宗——）を見よ、

【墨子ノ薄葬】 孟子の公孫丑下篇に「墨之治喪也、以薄爲其道也」と、莊子天下篇に「墨子生不歌、死無服、桐棺三寸而無槨」と、詳しくは墨子を見よ、

【墨汁】 墨をすりたる汁なり、圖繪寶鑑に「夏珪善畫人物（中略）筆法蒼老——淋漓奇作也」林下偶談に「唐王勃屬文、初不精思、先磨——數升、酣飲引被覆面而臥、及寤、援筆成篇、不改一字、人謂勃爲腹藁」元好問の下黃榆嶺詩に「畫工胸次——滿、那得冰壺貯秋月」墨瀋に同じ、

【北辰】 丁鶴年の自詠詩に「悲歌撫罷龍泉劍、猶立蒼茫望——」（北極）を見よ、

【卜商】 字は子夏、衞の人、孔子の弟子、孔子より少きこと四十四歲、文學の科に居る、人となり篤實、退いて西河に老し、門人に敎授す、魏の文侯之に師事す、その子死す、之を哭して明を失ふ、後世河東侯に封す、

【濮上ノ音】 淫亂の音をいふ、魏志高堂隆傳に「作靡靡之樂、安——之音」（桑閒）を參看せよ、

【木主】 神主なり、位牌をいふ、史記周紀に「爲文王——、載以車中軍」

【北垂】 北方の邊疆なり、後漢書魯恭傳に「和帝議擊匈奴、恭上疏諫曰、陛下親勞聖思、日昃不食、憂在軍旅、誠欲以安定——、定萬世之計」

【墨守】 墨翟の善く城を守りし故事により、轉じて固く自說を執りて變ぜざるにいふ、後漢書鄭康成傳に「時任城何休好公羊學、遂著公羊——」（墨翟ノ）を見よ、

【濮水】 說文に「水出東郡濮陽、南入鉅野」初學記に「莊子——ノ上ニ釣ル、楚王大夫ヲシテ往キ見セシメ、曰ク、願クハ境內ヲ以テ累サント、莊子竿ヲ持シテ顧ミズ」

【卜筮】 禮記の曲禮に「龜ヲトト爲シ、筴（一に蓍に作る）ヲ筮ト爲ス、卜筮ハ先聖王ノ民ヲシテ時日ヲ信ジ、鬼神ヲ敬シ、法令ヲ畏レシムル所以ナリ、民ヲシテ嫌疑ヲ決シ、猶與ヲ定メシムル所以ナリ」トは龜甲を灼き

て「ウラナヒ」竝は「メドギ」を用ふ、

【牧正】 鳥獸を飼ふことを掌る長官、列子の黃帝篇に「周宣王之――」

【穆生機ヲ見ル】（穆生見機）史記に「漢ノ楚ノ元王 申公等ヲ敬禮ス、穆生酒ヲ嗜マズ、常ニ爲ニ醴ヲ設ク、成王位ヲ嗣グニ及ビテモ、常ニ設ケシガ、後ニ設クルコトヲ忘レタリ、穆生退キテ曰ク、醴酒設ケズ、王ノ意怠ル、去ラズンバ楚人將ニ我ヲ鉗セントスト、遂ニ病ト謝シテ去ル」

【北齊書】 五十卷、唐の李百藥が父德林の稿本によりて修撰す、本紀八卷、列傳四十二卷に分つ、志表なし、志は隋書に具す、此の書殘缺頗る多しとす、

【穆然】 深遠の貌、史記孔子世家に「有所――深思焉」

【北窗】 北方の「マド」牕に同じ、窓は俗字、說文に「在牆曰牖、在屋曰窗」朱熹の四時讀書樂の詩に「――高臥義皇侶」次條に同じ、

【北牕】 「北ノマド」晉書陶潛傳に「嘗言夏月虛閑高臥――之下、淸風颯至、自謂義皇上人」李白の戲贈鄭溧陽詩に「淸風――下、自謂義皇人」蘇軾の睡起の詩に「一枕淸風直萬錢、無人肯買――眠」

【僕遬】 凡庸短才の貌、漢書息夫躬傳に「上言歷詆大臣曰、諸曹以下――不足數」

【樸樕】 小木なり、詩經野有死麕に「林有――」以て小才凡器に喩ふ、僕遬に同じ、

【木乃伊】（―――）を見よ、

【北堂】 母の居る所、よりて母の別稱とす、詩の伯兮篇に「焉得諼草、言樹之背」傳に「諼草ハ人ヲシテ憂ヲ忘レシム、背ハ――ナリ」韓愈の示兒詩に「主婦治北堂、膳服適親疎」諼は萱に同じ、故に萱堂ともいふ、

【北道主人】（東道ノ―）を見よ、

【木鐸】 鐸は鈴なり、――は金口木舌の鈴なり、政教を施す時に、振りて以て衆を警むる所ろの者なり、禮記明堂位に「振――於朝、天子之政也」また以て學者位を得て教を施すに喩ふ、論語八佾篇に「天下之無道也久矣、天將以夫子爲――」轉じて學者先生の敬語として、某大教鐸などと用ふ、古の制、武事には、金鐸をふるひ、文事には――を振ひ、以て道路に徇ふ、金鐸とは金體即ち舌までもすべて金屬にて製せしをいふ、

【墨池】 宣和畫譜に「釋智永用筆退即投大甕中、歲久輙貯數甕、自爲銘以瘞之、當此時、詩人有以筆塚對――者」淵鑑類函一百九十五卷に「齊安志云、東坡寫黃州、著論語解、池水皆黑、今之洗墨池其遺迹也」

【墨池飛出北溟魚】 李白の懷素草書歌の句、草書の俗を離れて絕妙なるを稱したるなり、

【墨竹】 墨繪の竹なり、圖繪寶鑑に「徽宗作――、緊細不分、濃淡一色、焦墨叢密處、微露白道、自成一家、不蹈襲古人軌轍」書鑒に「東坡先生文章翰墨、照耀千古、復能留心筆墨、戲作――、師文與可、枯木奇石、時出新意」

【僕賃】 人の僕となりて賃錢を得る義、左傳襄二十七年に「――于野」

【墨丈】 小爾雅に「五尺ヲ墨ト爲シ、墨ニ倍スルヲ丈ト爲ス」國語の周語に「其察色也、不過――尋常之閒」

【墨場】 翰墨場に同じ、文墨の「ナカマ」宋之問の傷王祕書監詩に「書乃――絕、文稱詞伯雄」

【木長官】 杭州志に「潛牧嶺上ニ於テ古松一本アリ、盤錯シテ奇怪ナリ、嘗テ兄弟アリ牆ニ鬩グ、有司ニ訟ヘント欲シ、夜行キテソノ下ニ憩フ、遲明色ヲ辨ズ、相視レバ乃チ伯仲ナリ、遂ニ各悔イ咎メ、爭ヲ息メテ還ル、因リテ松ヲ名ツケテ―――ト爲ス」

【木通】 和名「アケビ」蔓草の名、山野に多し、實の形瓜の如く、長二寸位、熟すれば食ふべし、

【北狄】 北方の「エビス」杜審言の送高郞中北使」詩に「――願和親、東京發使臣」（四夷）を見よ、

【牧笛】 牛羊を牧する人の吹く笛、陸游の詩に「牛隨――入柴門」

【墨翟】 孟子に「楊朱・――之言盈天下」新論に「仲尼栖栖、突不暇黔、――遑遑、席不及煖」次條、竝に（墨子）を參看せよ、

【墨翟之守】 墨翟は周の世、宋の人、墨子を著し、禹の道を宗とす、かつて宋の城を守りて、楚の軍をしりぞけたる故事により、善く守る義とす、戰國策に「朞年不解、是――――也」また史記魯仲連傳に「今公又以敝聊之民、距全齊之兵、是――――也」（魯般ガ）を見よ、

【北斗】 史記天官書の注に「春秋運斗樞ニ、斗ノ第一ハ天樞、第二ハ璇、第三ハ璣、第四ハ權、第五ハ玉衡、第六ハ開陽、第七ハ搖光ナリ、第一ヨリ第四ニ至ルヲ魁ト爲シ、第五ヨリ第七ニ至ルヲ杓ト爲シ、合シテ斗ト爲ス」また前漢五行志に「――ハ人君ノ象ナリ」西鄙人の哥舒歌に「――七星高、哥舒夜帶刀」李白の擬古詩に「黃金高――、不惜買陽春」

【牧童】 「ウシカヒ」唐伯虎集の牛眠石詩に「怪殺――不起」杜牧の淸明の詩に「借問酒家何處有、――遙指杏花村」

【幞頭】頭を布にてつつむ、我が國にて手拭を「カブル」の類、封氏聞見記に見ゆ、また頭巾の類、詩話總龜に「露シ髖數ーー笑語終席」

【木訥】木は質樸なり、訥は遲鈍なり、人の「ウハベ」を飾らず「スナホ」なるをいふ、論語子路篇に「剛毅ーー近シ仁ニ」

【墨突】墨子の煙突なり（孔席煖カ）を見よ、

【冒頓單于】漢の時の匈奴の主、頭曼の子、頭曼冒頓を廢して少子を立てんと欲す、乃ち冒頓をして月氏に質たらしむ、冒頓すでに質として頭曼急に月氏を擊つ、月氏冒頓を殺さんと欲す、冒頓その善馬を盜み騎して亡げ歸る、頭曼以て壯なりと爲し、萬騎に將たらしむ、冒頓乃ち鳴鏑を作り、その騎射を習勒す、令して曰く鳴鏑の射る所ろにして悉く射ざる者は斬らんと、已にして冒頓鳴鏑を以て自ら善馬を射る、左右或は敢て射るなし、冒頓立ろに之を斬る、居るしばらくして冒頓出てて獵す、鳴鏑を以て單于の善馬を射る、左右皆射る、是に於て冒頓その左右の用ふべきを知り、その父單于頭曼に從ひて獵す、鳴鏑を以て頭曼を射る、左右皆射る、遂に頭曼を弑す、時に東胡强し、冒頓が父を弑して自立すと聞き、使をして千里の馬を求めしむ、冒頓羣臣に問ふ、皆曰く與ふる勿れと、冒頓曰く奈何ぞ人と國を隣して一馬を愛せんやと、遂に之を與ふ、東胡又單于の一閼氏を得んと欲す、左右皆怒る、冒頓曰く、奈何ぞ人と國を隣して、一女子を愛せんやと、遂に之を與ふ、東胡王愈驕り、匈奴と中間の棄地を得んと欲す、羣臣或は曰く、此れ棄地なり、之を與へんと、冒頓大に怒りて曰く、地は國の本なり、奈何ぞ人に與へんと、諸の與へんと言ふもの皆之を斬り、馬に上りて令す、後るる者は斬らんと、遂に東胡を襲ひて之を滅す、西月氏を擊走し、南、樓煩・白羊の河南王を幷せ、遂に燕代を侵す、この時漢楚相距ぎ、中國兵革に罷る、故を以て冒頓自ら强くするを得、控弦の士三十餘萬、盡く北夷を服從せしめて漢と敵國たり、漢の初め韓王信匈奴に降る、冒頓を嚮導して太原を攻め、晉陽に至る、高帝自ら將として之を擊つ、會冬大に寒雨す、士卒指を墮す者、十に二三、是に於て冒頓陽り敗走し、漢の兵を誘ひて大に之を敗り、高帝を白登に圍むこと七日、高帝纔に身を以て免る、後高帝宗室の女翁主を奉じて單于の閼氏とし、歲に物を遺り、約して兄弟となり、以て和親す、然れども時に漢の邊境を亂せり、文帝の前六年冒頓死す、

【穆トシテ淸風ノ如シ】（穆如淸風）穆は和なり和げる人の氣象を稱へていふ、詩經大雅烝民篇に「吉甫作誦、ーーーーニ」一解に穆は深長なり、淸風は淸微の風、萬物を化發する者なりと、

【木柹】木を削りたる片屑なり「コッパ」柹は柿に同じ、後漢書楊由傳に「風吹削柹」また晉書王濬傳に「詔修戰艦ーー蔽江而下」俗に柹（カキ）の字に代用するは誤りなり、また柹は說文に「削木札也」とあり「キフダ」

【墨梅】「スミヱ」の梅、甚鑒に「楊補之ーー甚淸絕、水仙亦奇、自號逃禪老人」

【北邙ノ塵】邙山は洛陽の北に在り、故に北邙といふ、（邙一ニ芒ニ作ル）漢以來墳墓の地として名高し、塵とは人死して塵土に化するをいふ、北邙一片煙といふは火化するをいふ、劉廷芝の公子行に「百年同謝西山日、千秋萬古ーーー」また沈佺期の邙山の詩に「北邙山上列墳塋、萬古千秋對洛城」明一統志に「北邙山ハ河南府城ノ北十里ニ在リ、山、偃師・鞏・孟津三縣ニ亘リ、綿亙四百餘里、東漢ノ諸陵、及ビ唐宋名臣ノ墳多ク此ニ在リ」

【墨離レテ三トナル】韓非子に「墨子之後、墨離爲三」とあり、相里氏、相夫氏、鄧陵氏これなり、

【卜ハ以テ疑ヲ決ス、疑ハザレバ何ゾトセン】（卜以決疑、不疑何卜）左傳桓十一年楚鬪廉の語、また舊唐書張公謹傳に「太宗將討建成元吉、遣卜者占之、公謹曰、凡卜筮將以決嫌疑、今旣事在不疑、何卜之有」とあるも同義なり、

【木皮三寸】尸子に「朔方ハ寒冰厚六尺ニシテーーーアリ」地寒きによりて然るなり、漢書晁錯上書にもこの語あり、

【木筆】花の名、本草に「ーー卽辛夷ナリ」和名「コブシ」（辛夷）を見よ、

【北風】寒き風、爾雅に「ーー謂之凉風」また「キタカゼ」朔風に同じ、詩經邶風の北風篇に「ーー其凉、雨雪其雱」雱は雪の盛んなる貌、魏文帝苦寒行に「樹木何蕭瑟、北風聲正悲」

【北風雁ヲ驅ル】寒き北風が雁を驅り送る義、楊衒之洛陽伽藍記に「北風驅雁、飛雪千里」

【北平】漢晉にては中山國の縣名、北魏は定州北平郡の縣名、今の直隸保定府滿城縣の西、二淸里に在り、また東漢の幽州代郡の北平邑は今の山西大同府陽高縣の西南に在り、その他歷代同名にして異地あり、詳し

くは地理志詣編卷九を見よ、また史に明の永樂元年二月――を改めて順天府と爲し、北京を置くとあり、今日にても北京の異名として用ふ、

【墨辟】 墨刑に同じ「イレズミ」書經呂刑の傳に「――ハ其ノ額ニ刻ミテ而シテ涅ス、之ヲ墨刑トイフ」

【墨癖】 文字禪に「司馬君實無所嗜好獨畜墨數百爾、遂道之畜皆其亦司馬之――也」

【木母】 夷堅續志に「木公ハ松ナリ、――ハ梅ナリ」

【僕僕】 煩しく猥らなる貌、孟子萬章下篇に「鼎肉使己――爾亟拜也」

【穆穆】 和らぎ敬ふ貌、書經呂刑に「――在上、明明在下」また深遠の意、詩經周頌雝篇に「相維辟公、天子――」また容止の美盛なる貌とも、威儀多き貌とも解す、

【北夢瑣言】 二十卷、宋の孫光憲撰す、唐末及び五代の士大夫の逸事を記す、すべて三百三十餘條あり、考據の資となすべし、この書、說郛にも節錄せり、

【撲滅】 「ウチケス」義、書經の盤庚篇に「若火之燎于原、不可嚮邇、其猶可撲滅」

【北面】 君臣相見るに、君は南面し、臣は北面す、故に臣として君に事ふるの義とす、史記田單傳に「王蠋布衣也、義不――於燕」（南面之）を參看せよ、

【北門ノ鎖鑰】 世說に「寇萊公、大名ヲ鎭スルトキ、北使至ル、寇ニ語リテ曰ク、相公望重シ、何ガ故ニ中書ニ在ラザルト、寇曰ク、主上、朝廷ハ無事ナリ、北門ノ鎖鑰ハ、準ニアラザレバ不可ナリトオモヒテナリト」準は寇萊公の諱、大名は府の名なり、これより北方の守禦の義に用ふ、

【僕射】 漢書百官表の注に「僕主也」野客叢書に「――ハ本秦ノ射ヲ主ルノ官、唐ニ至リテ亦宰相ノ號トナル」韓愈に上張――書あり、文章軌範に載す、

【濮陽】 兩漢以後、唐に至るまでの縣名、今の直隸大名府開州の南に在り、宋以後の縣は、卽ち今の大名府開州治これなり、

【墨蘭】 「スミヱ」の蘭、輟耕錄に「鄭所南先生工畫――、不妄與人、邑宰求之不得、聞先生有田三十畝、因脅以賦役取、先生怒曰、頭可斫、蘭不可畫」

【北里】 淫靡なる歌舞の行はるる里をいふ、史記の殷本紀に「使師涓作新淫聲――之舞、靡靡之樂」曹植の七啓に「才人妙妓、遺世越俗、揚――之流聲、紹陽阿之妙曲」

また單に北方の里閭の義にも用ふ、王維の田園樂に「厭見千門萬戶、經過――南隣」

【卜隣】 （隣ヲトス）を見よ、

【補過拾遺】 （過ヲ補ヒ）を見よ、

【補鍋匠】 「ナベノイカケシ」皇明文則に「鄭曉ノ五忠傳ニ、川中――、亦不知何許人、往來夔慶閒爲補鍋、皆呼爲老鍋匠」

【暮景】 「クレガタ」の「ケシキ」杜甫の送李卿詩に「――巴蜀僻、春風江漢淸」杜牧の題敬愛寺樓詩に「――千山雪、春寒百尺樓」

【補闕】 天子の「オチド」を補ひたすくる義（胡廣累世）を見よ、

【墓碣】 「ハカジルシ」字彙に「――ハ墓上ノ刻石、七品以上ノ者、銘アルヲ――銘トイフ」と、方なるを碑といひ、圓なるを碣といふ（墓碑）を見よ、

【戈】 音クワ人を撞き刺す兵器、禮記檀弓に「能執干戈、以衞社稷」淮南子に「魯陽公與韓戰、日暮、援戈撝之、日反三舍」注に「魯陽ハ楚ノ司馬期ノ子」

【矛】 音ボウ長き柄の頭に兵刃をつけたる兵器「ホコ」李商隱の詩に「長戈利矛日可麾」

【模糊】 （模糊）を見よ、

【蒲公英】 「タンポポ」古名「タナ」原野に生ずる草、葉は冬より盛んに地に布きて叢生す「ナヅナ」の葉に似て大なり、春煮て食ふべし、春末黃花を開く、菊花に似たり、

【槊ヲ横ヘ詩ヲ賦ス】 （横槊賦詩）舊唐書杜甫の傳に「曹氏父子鞍馬閒爲文、往往――――」とあり、赤壁の賦にも、これを引きて「――――固一世之雄也」とあり、

【補袞】 宰相たるの材なり、袞衲の詩に「緬想垂裳治深求――」（袞闕）を見よ、

【伐ラズ】 （不伐）功に誇るを伐といふ、左傳莊二十八年の註に「自ラ其ノ功ヲ稱スルヲ伐トイフ」――は功に誇らざるなり、論語雍也篇に「孟之反不伐」（敢テ後レタル）を參看せよ、

【輔佐】 君主を助けて政を執る義、左傳に「皆有親暱、以和――」

【菩薩】 佛に近き人をいふ、飜譯名義集に「正音ハ菩提薩埵トイフ、菩提ハ、佛道ノ名ナリ、薩埵ハ、秦ニハ大心衆生トイフ、大心有リテ佛道ニ入ルヲ、菩提薩埵ト名ヅク」とあり、菩提は、是れ自ら行ふ、薩埵は是れ他を化す、自ら佛道を修して、又他を化するが故なり、世說の

箋註に「菩薩トハ、猶ホ儒者ノ仁人君子ノ稱ノゴトシ」とあり開士とも始士ともいふ、心初めて開き、また始めて發心する故なり、釋門事物紀原に「僧史略ニ、後魏晉朝ノ沙門名號用捨不同ナリ、故ニ竺法護ヲ號シテ燉煌菩薩トナストイヘルモノ、蓋シ漢土菩薩號ノ始ナルニヤ、然レドモ是レ勅賜ノ號ニハ非ザルナルベシ、我國ニテハ聖武天皇ノ天平二十一年正月天皇落飾シテ戒法ヲ行基大僧正ニ受ケ、勅シテ行基大菩薩ト稱ス、之レ菩薩號ノ始ナリ」

【暮山】「クレガタ」の山、王勃の滕王閣記に「潦水盡而寒潭清、煙光凝而——紫」

【星】春秋說題に「星ノ言タル精ナリ、陽ノ榮ナリ、陽精ヲ日ト爲シ、日分レテ星ト爲ル、故ニ其ノ字日生ヲ星ト爲ス」と、說文に「萬物ノ精、上リテ列星ト爲ル」史記天官書に「星ハ金ノ散氣ナリ」淮南子に「日月ノ淫氣、精ナル者ヲ星辰トナス」漢書音義に「瑞星ヲ景星トイヒ、亦德星トイフ、妖星ヲ孛星・彗星・長星トイヒ、亦欃槍トイフ、跡ヲ絕チテ去ルヲ飛星トイヒ、光ノ跡ノ和連ルヲ流星トイヒ、亦奔星トイフ」また曰く「星光ヲ芒トイフ」瑞應圖に「景星ハ、星ノ精ナリ、王者人ニ私シテ以テ官セズ、賢者ヲシテ位ニ在ラシメバ則見ハル」李白の夜宿山寺詩に「層樓高百尺、手可摘星辰、不敢高聲語、恐驚天上人」

【晡時】晡は餔に同じ、申の刻なり、今の午後四時、呂覽に「旦至食、食至昳、昳至餔、餔至下餔、下餔至日夕」

【母子】母と子と、廣雅に「母ハ牧ナリ、子ヲ育養スルヲイフ」增韻に「母ハ慕ナリ、嬰兒ノ慕フ所ロナリ」左傳隱元年に「遂爲——如初」晉書に「范逵謂陶侃母曰、非此母不生此子」

【星ヲ戴キテ往ク】（戴星而往）書言故事に「早行ヲ星ヲ戴キテ往クトイフ、呂氏春秋ニ曰ク、宓子賤單父ノ宰トナリ、琴ヲ彈ジテ堂ヲ下ラズ、而シテ單父治マル、巫馬期單父ノ宰トナル、星ヲ戴キテ出デ、星ヲ戴キテ入ル、而シテ單父亦治マル」とあり、

【輔仁】朋友相互に勵ましあひて道を得んとする義、論語顏淵篇に「曾子曰、君子以文會友、以友輔仁」とあるに本づく、

【墓誌銘】文體明辨に「按ズルニ、誌ハ記ナリ、銘ハ名ナリ、古ノ人德善功烈ノ世ニ名ヅク可キアリテ、歿スレバ則チ後人之ガ爲メニ器ヲ鑄テ以テ銘シ、而シテ無窮ニ傳ヘシム、蔡中郞ノ集ニ載スル所ロノ、朱公叔ノ鼎ノ銘ノ若キ是レノミ、漢ノ杜子夏ニ至リテ、始メテ文ヲ勒シテ墓側ニ埋ム、遂ニ墓誌アリ、後人之ニ因ル、其ノ題ヲ論ズルニ至リテハ、則チ墓誌銘トイフアリ、誌アリ銘アル者、是レナリ、墓誌銘幷序トイフハ、誌アリ、銘アリテ、又先ヅ序アル者是レナリ（中略）墓誌トイヘバ、則チ誌アリテ、銘ナシ、墓銘トイヘバ、則チ銘アリテ誌ナシ、然レドモ、亦單ニ誌トイヒテ、カヘリテ銘アリ、單ニ銘トイヒテ、カヘリテ誌アル者アリ、題ニ誌トイヒテ、カヘリテ、是レ銘、題ニ銘トイヒテ、カヘリテ是レ誌ナル者アリ、皆別體ナリ」（碑銘）を參看せよ、

【摹寫】「マネテウツス」摹は摸に同じ一音モ（摸寫）を見よ、

【輔車相依ル】車は物を載する者、輔は車に載せたる物を夾持する所ろの者、相待つて用を爲すをいふ、左傳僖五年に見ゆ、杜注には「輔ハ頰輔、車ハ牙車ナリ」とあり、頰と牙との食を嚙む關係は、輔と車との物を載する關係に似たり、故に借りて名づけたるなり、呂覽に「車依輔、輔依車」（脣齒ノ）を見よ、

【步障】竹を立てて幕を張り、屏障とするもの、晉書石崇傳に「崇作錦——五十里」通鑑綱目集覽に「——ハ小竹ヲ以テ交結シテ之ヲ爲ル、衣スルニ布或ハ帛ヲ以テス、舒ブベク、卷クベシ」

【莫春】莫は暮なり、將に暮れなんとする春をいふ、陽休之の句に「遲遲——日」

【暮春】晚春をいふ、前條に同じ、論語先進篇に「——者春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸」張喬の楊花落詩に「東園桃李芳已歇、猶有楊花嬌——」

【浦溆】溆も亦浦なり、「ウラベ」杜甫の句に「舟人漁子入——」

【補葺】補は綴緝なり、葺は包裹なり「オチド」を補ひ修むるなり、韓愈の進學解に「——罅漏」呂覽に「衣弊不補、履決不葺」葺は履に藉く所以なり、

【暮鐘】「イリアヒ」の「カネ」晚鐘に同じ、韋應物の詩に「秋山起——、楚雨連滄海」朱熹の詩に「讀書清磬外、看雨——時」

【簿書期會】日常の細務をいふ、賈誼の治安策に「大臣特以簿書不報期會之閒、以爲大故、至於俗流失、世壞敗、因恬而不知怪」簿書とは官署の錢穀出納を記する帳簿なり、

【暮色】「クレガタ」の「ウスグラキ」色、柳宗元の始得西山宴游記に「蒼然——自遠而至」方干の冬日詩に「凍

雲愁——、寒日淡斜暉」

【歩趨】 促行（コアシニユク）を趨といひ、闊行（オホマタニユク）を歩といふ、莊子田子方篇に「夫子歩亦歩、夫子趨亦趨」連文釋義には「堂上謂之歩、門外謂之趨」

【蒲席】 「カマムシロ」南史梁簡文紀に「以布帊纒屍斂以——、束以白茅」云云」越席に同じ、

【簿責】 帳簿に書き竝せて責むるなり、史記絳侯世家に「吏——條侯」

【餔啜】 餔は食なり、啜は飲なり、飲食に同じ、孟子離婁上篇に「我不意子學古之道而以——也」

【暮雪】 「クレガタ」の雪、沈約の桐賦に「枝封——、葉映蛩虹」令狐楚の從軍行に「——迷青海、陰雲覆白山」

【蒲扇】 「カマ」にて作る「ウチハ」釋名に「箑ハ時珍曰ク、上古羽ヲ以テ扇ヲ作ル、故ニ字羽ニ從フ、後人竹及ビ紙ヲ以テ箑ト爲ス、故ニ字竹ニ從フ、揚雄方言ニ曰ク、關ヨリシテ東ハ、之ヲ箑ト謂ヒ、關ヨリシテ西ハ、之ヲ扇ト謂フ、東人ハ多ク蒲ヲ以テ之ヲ爲ル、嶺南ハ蒲葵ヲ以テ之ヲ爲ル」薩都剌の送約上人、歸宜興詩に「雲水上人歸興忙、棕鞋——葛衣涼」（蒲葵）を見よ、

【募選】 財を以て人を募り選ぶをいふ、荀子議兵篇に「招延——」

【臍ヲ噬ムモ及バズ】 （噬臍不及）左傳莊六年に「若不早圖、後君噬齊、其及圖之乎」の註に「腹齊ヲ齧ムガ如ク、及ブベカラザルニ喩フ」とあり、齊は臍に同じ、一說に獵者麝を捕へて、其の臍を取らんとす、麝急に自ら其の臍を噬み破るときは、之を取らず、若し既に縶に就きて臍を噬まんと欲するも及ばず、以て機に後れて悔ゆとも、及ばさるに喩ふと、

【菩提】 梵語、名義集に「佛道ノ至極ナル者ノ稱」とあり、大道また正道とも飜す、佛道に悟り入ること、

【菩提子】 無患子（ムクロジ）の一名、祕傳花鏡に出づ、

【菩提樹】 即ち畢鉢羅樹なり、昔、佛在世の時は高數百尺あり、屢殘伐を經て猶ほ高きこと四五丈なり、佛その下に坐して正覺を成等す、因つて——といふ、莖幹黄白にして枝葉青翠冬夏にも凋せず、涅槃の日に至る毎に葉皆凋殘し、頃之して故に復すと西域記に見ゆ、

【逋逃】 逃亡の人をいふ、書經に「——是崇是長、是信是使」また左傳昭七年に「紂爲天下——主萃淵藪」

【蒲陶】 葡萄に同じ、陶一に桃にも作る、漢書西域傳に「大宛左右以——爲酒」

【摹搨】 文字を「スリウツス」北史に「舒人多——之」

【蒲團】 「エンザ」をいふ、顧況の宿山中僧詩に「不爇香爐煙、——坐如鐵」明馬一龍の詩に「剪取溪蒲密密編、周遭功巧樣團圓」本艸に破——（ヤブレエンザ）の語見ゆ、

【牡丹】 本草に「——一名ハ鹿韭、一名ハ鼠姑、唐本注ニ曰ク、一名ハ百兩金」歐陽永叔の花釋名に「錢思公常ニ曰ク、人牡丹ヲ謂ヒ花王ト爲ス、今ノ姚黄ハ眞ニ其ノ王ニシテ、魏紫ハ乃チ其ノ后ナリト」また花譜に「唐人ハ牡丹ヲ謂ヒテ木芍藥ト爲ス」と、舒元輿牡丹賦の序に「天后之郷西河也、精舍下有牡丹、其華特異、天后歎上苑之有闕、因命移植焉、由此京國牡丹、日日寖盛、今自禁闥、洎官署、外延士庶之家、瀰漫如四瀆之流、毎暮春之月、遨遊之士、亦上國繁花之一事也」とあり、戴昺の詩に「海棠紅未了、又近——時」漢事始に「隋ノ煬帝ノ世、始メテ——ヲ傳フ」（白樂天）を見よ、

【牡丹ノ詩】 異人錄に曰く「唐玄宗牡丹ヲ賞シ、侍臣陳正己ニ問ヒテ曰ク、牡丹ノ詩、誰カ稱首ト爲スト、對ヘテ曰ク、李正封ノ詩ニ云フ、國色朝酣酒、天香夜染衣ト、因リテ貴妃ニ謂ヒテ曰ク、妝鏡臺前、一紫金盞ヲ飲マバ、則チ正封ノ詩見ハレン矣ト」皮日休の詩に、

落盡殘紅始吐芳、佳名喚作百花王、競誇天下無雙豔、獨占人間第一香

杜荀鶴の詩に

閑來吟繞牡丹叢、花豔人生事略同、半雨半風三月內、多愁多病百年中、

【螢】 禮記に「季夏ノ月、腐草化シテ螢トナル」格物論に「螢ハコレ腐艸及ビ爛竹根ノ化スルトコロ、初メ猶ホ未ダ蟲ノ如クナラズ、腹下スデニ光アリ、數日ニシテ便チ變ジテ能ク飛ブ」詩經に「熠燿宵行」の疏に「熠燿ハ螢火ノ蟲、飛ビテ光アルノ貌」古今注に「螢火一名ハ暉夜、一名ハ景天、一名ハ燐、一名ハ丹良、一名ハ丹鳥、一名ハ夜光、一名ハ宵燭云云」晉書車胤傳に「車胤字ハ武子、家貧クシテ、常ニハ油ヲ得ズ、夏月ハ則チ練囊ヲ以テ數十ノ螢火ヲ盛リ、以テ書ヲ照シ夜ヲ以テ日ニ繼グ」北史隋煬帝紀に「煬帝ノ太業ノ末、天下已ニ盜起ル、帝景陽宮ニ於テ螢火數斛ヲ徵求シテ夜出デテ山ニ遊ビテ之ヲ放ツ、光岩谷ニ徧シ」王筠の秋夜詩に、「流螢漸收光、絡緯欲催機」梁元帝の詠螢詩に「著人疑不熱、集草訝無烟、到來燈下暗、翻往雨中然」祕傳花鏡に

螢、一名熠燿、又曰夜光、初生如蛹、似蚊而脚短翼厚、

腹下有光、日暗夜明、群飛天半、猶若小星、生池塘邊者曰水螢、好事者、毎提一二十置之小紗囊內、夜可代火照耀讀書、名曰宵燭、小兒多以此爲戲、園中若有腐草、自能生之不絕、不煩主人之力也、昔車武子家貧、夜讀書無燈、以練囊盛螢照讀、一種水螢多居水中、隋煬帝夜遊、放螢火數斛、光明似月、亦好嬉之過也」

詠螢　唐　羅鄴

水殿西風玉戸開、飛光千點去還來、無風無月長門夜、偏向階前照綠苔」

【補治】補ひ治むる、王安石の詩に「墻尾稍――」

【暮砧】「クレガタ」の「キヌタ」の聲、杜甫の秋興詩に「寒衣處處催刀尺、白帝城高急――」

【鋪張】敷衍して張皇する義「ノベハル」文心雕龍に「須――揚厲、而以典雅豐縟爲貴」

【勃焉】「ニハカニ」盛なる貌、左傳莊十一年に「禹湯罪己、其興也――」

【渤海】西漢の郡名、今の直隸天津府滄州の東南四十淸里、東漢の冀州――郡は今の天津府南皮縣の東北八淸里その他歷朝沿革あり、史記封禪書に「使人入海求蓬萊・方丈瀛洲、此三神山者、其傳在――中云云」地理通釋に「漢置――郡、今滄棣霸濱諸州之地、宋文帝置樂陵郡、孝武分置――郡、後魏改――爲滄水置」滄州に駱賓王の浮槎詩に「――三千里、泥沙幾萬重」

【勃谿】人相爭ひてそむき戻る貌、莊子外物篇に「婦姑――」谿一に谿に作る、

【法華經】妙法蓮華經といふ、初め七卷なりしが、後に八卷二十八品とせり、法華宗にてこれをたふとび奉ず、

【沒齒】齒は年齡なり、身を終るといふ義、論語憲問篇に「沒齒無怨言」

【沒字碑】文字を知らざる者をいふ、沒は無なり、事類全書に「五代ノ安千秋、唐晉ニ事ヘテ、累リニ藩鎭ヲ更タリ、千秋人トナリ、狀貌堂堂トシテ而シテ文字ニ通ゼズ、爲ス所ロ鄙陋、人之ヲ―――トイフ」五代史任圜傳にも「任圜曰ク、崔協文字ヲ識ラズシテ、虚シク儀表アリ、世目シテ―――トナス」

【沒人】水に入りて、物を捕ふる者「アマ」莊子に「――則未嘗見舟、而便操之也」便は便利の義、――は泅いて水に沒するをいふ、書敍指南に「水ヲ會スル人ヲ――トイフ」と、蘇軾の日喩に「南方多――、日與水居也」泅兒・浮沒・水人・水工皆同じ、

【勃如】色を變ずる貌、勃然に同じ、論語に「色――也」

【拂子】拂塵ともいふ、佛在世の時、諸の比丘蚊蟲のためにかまれて痒を患ふ、佛之を拂ふの具、即ち――を作ることを許さる、祖庭事苑、釋氏要覽等に見ゆ、

【沒世】沒は終なり、終世に同じ、論語衛靈公篇に「君子――、而疾名不稱焉」また永久の義とす、大學に「此以――不忘也」

【浡然】興起する貌、孟子梁惠王上に「苗――興之」

【勃然】色を變ずる貌、孟子に「王――變於色」また勃は排なり――は興起して排濟する所ろあるなり、浡に通ず、

【勃窣】行くことの緩なる貌、言論の急切ならざる義、文選司馬相如の子虛賦に「媻珊――」また晉書張憑傳に「――爲理窟」

【冒頓單于】通鑑の注に「單于ハ匈奴ノ天子ノ號ナリ」漢書音義に「單于ハ廣大ノ貌、天ノ單于然タルニ象ドル」冒頓は單于の名、前の（冒頓單于）を見よ、

【沒入】官府に取りあげ、その所有とする義、漢書に「――其器物」

【沒沒】沈溺（オボレシヅム）なり、左傳襄二十四年に「何――也」

【布袋】景德傳燈錄二十七に「明州奉化縣――和尚者、未詳氏族、蹙額皤腹、常以杖荷一布袋、供身之具盡貯囊中、入鄽肆聚落、見物輒乞、或醯醢魚葅、才接入口、分少許投囊中、時號長汀子布袋師、蓋彌勒化身也、示人吉凶、必應期無忒、梁貞明三年丙子三月示滅」また曰く「師將示滅、於嶽林寺東廊下端坐盤石、說偈曰、彌勒眞彌勒、分身千百億、時時示時人、時人自不識、偈畢安然化、其後他州有人見師亦負布袋行、於是四衆競圖其像」俗に僧體にて甚だ肥滿し、杖にて一大布袋を荷ひ、市を遊化し、十六の群兒之に追隨する狀を寫す、七福神の一、

【補綴】補ひつづる義、禮記內則に「衣裳綻裂、紉箴請――」紉は音シン縷（イト）なり、轉じて古人の詩文の語句を彼此と綴り補ひて詩文を作る義とす、

【暮天】「クレガタ」の「ソラ」杜荀鶴の題新雁詩に「――新雁起汀洲、紅蓼花疎水國秋」

【佛造リテ眼ヲ入レズ】俚諺なり、折角事を成しながら今一ッといふ肝腎の要件を遺したるに喩ふ、續傳燈錄に「江州東林卍菴道顏禪師（中略）泊悟還蜀、囑依妙喜、仍以書致喜曰、顏用彩繪已畢、但缺點眼耳」

【佛ノ面ニ糞ヲ塗ル】名著に拙き序を書く如く、結構

なるものを汚すに喩ふ、五車韻瑞に「陽師錫序五代史、半山（王安石の號）曰、釋迦佛頭上不堪著糞」

【佛モ元ハ凡夫】 俚諺なり、佛は覺者にして凡夫は不覺者なり、佛も生れながらにして佛となりたるにあらず、もとは凡夫なりしも、修養を積みてこの域に達せしをいふ、六祖壇經に「凡夫卽佛、煩惱卽菩提」とあるに本づく、

【施ヲ受ケテハ愼ンデ忘ルル勿レ】（受施愼勿忘）（人ニ施シテ）を見よ、

【杜鵑】 山林に棲み、夏の初より晝夜を分かず啼き、秋に至りて止む、その聲叫ぶが如し、形「ヒヨドリ」より瘦せて長く、頭は黑褐に淡褐の斑あり、背は淡靑にして背後肩翅皆黑褐なり、喉は淡靑にして黃褐の橫斑あり、胸腹色淡くして黑き橫斑あり、尾黑くして白斑あり、是れ雄なり、雌は頭額深黑褐にして靑を帶び、黑き橫斑あり、卵を鶯の巢の中に生み、鶯をして養はしむといふ、李白の詩に「又聞子規啼古木愁空山」羅鄴の詩に「聲聲啼血向花枝」（ーー）（杜宇）を參看せよ、

子規　　唐　李中

暮春滴血一聲聲、花落年年不忍聽、帶月莫啼江畔樹、酒醒遊子在離亭

【哺乳多ケレバ則チ癇病ヲ生ズ】（哺乳多則生癇病）潛夫論の語、下に「富貴盛而致驕疾」富盛榮貴にして驕傲の疾を致すことは、恰も嬰兒の哺乳多くして癇疾を生ずるが如し、癇とは小兒の筋肉の搐きつくる病「キヤウフウ」

【骨ヲ炊ギ骸ヲ爨グ】（炊骨爨骸）軍中糧食の盡きたる慘狀をいふ、列子に「楚、宋ヲ攻メテ其ノ城ヲ圍ム、民、子ヲ易ヘテ而シテ之ヲ食ヒ、骸ヲ析キテ而シテ之ヲ炊グ」とあり、また左傳に「易子而食、析骸以爨」

【骨ヲ暴ス】 原野に倒れ死して骨をさらす義、左傳襄九年に「暴骨以逞、不可以爭」王守仁の瘞旅文にも「暴骨無主」とあり、

【骨騰肉飛】 勇者の疾馳するさまをいふ、吳越春秋に「慶忌之勇、萬人莫當、ーーーー、拊膝而行百里」

【暮年】 晚年に同じ、宋書范泰傳に「ーー事佛甚精」魏武帝の詩に「烈士ーー、壯心不已」

【膜拜】 長跪して拜する義、穆天子傳に「ーー而受」注に「兩手ヲ擧ゲ地ニ伏シテ拜ス、今ノ佛拜ナリ」

【檣】 船の帆柱なり、帆竿・桅竿・桅杆・桅・牙檣（檣尾銳キコト牙ノ如シ、故ニイフ）皆同じ、宋史豐稷傳に「大風檣折、舟幾覆」

【蒲阪】 阪一に坂に作る、漢書地理志には反に作る、書經堯典に「釐降二女于嬀汭」の疏に「嬀水ハ河東虞鄕縣歷山ノ西ニ在リ、西流シテーー縣ニ至リ、南、河ニ入ル」とあり、

【蒲帆】 「カマ」にて編みたる帆、汪莘の月賦に「因ーー而舒卷、隨桂楫而淺深」李端の詩に「海雨細如絲、ーー輕似葉」周權の晚櫂詩に「東風十幅ーー飽、快試淮南第一程」

【模範】 器をつくる型なり、木を以てするを模といひ、竹を以てするを範（モト范ニ作ル）といふ、轉じて人の儀法と爲るの義「テホン」揚子法言に「務學不如務求師、師者人之ーー也、模不模、範不範、爲不少矣」と、模一に摸に作る、同じ、

【步挽車】 「テグルマ」通鑑晉紀に「涼王纂醉、乘ーーー」注に「ーーーハ牛馬ヲ用ヒズ、人ヲシテ步シテ之ヲ挽カシム」

【墓碑】 上古は葬るに豐碑あり、木を以て之を作る、檀弓に「公室視豐碑」とあるは是なり、漢より以後、始めて死者の功業を其の上に刻し、稍改めて石を用ふるに至れり、之をーーといふ、又墓碣ともいふ、葬時に於て其の人の世系名字爵里行爲壽年卒葬日月と、其の子孫の大略とを石に勒して以て墓側に埋め異時陵谷變遷の防と爲す者、これを誌銘と謂ふ、誌は記なり、銘は名なり、其の人の道德功業を千萬世に銘すべき者をば銘といふなり、其の誌あり銘あるものを墓誌銘といひ、其の誌ありて銘なく、或は銘ありて誌無き者を別體とす、墓誌といへば誌有りて銘なく、墓銘といへば銘ありて誌なきが通例なるも、或は單に誌といひて却りて銘あり、單に銘といひて却りて誌あり、又は誌といひて却りてこれ銘、銘といひて却りてこれ誌なるものあり、これ皆變體とす、その文たる、正變二體あり、正體は唯事實を敍し、變體はやや議論を加ふ、或は敍議夾寫せるものあり（碑）を參看せよ、

【步武】 六尺、または六尺四寸を步とし、半步を武とす、猶ほ咫尺といふが如し、國語周語に「目之察度也、不過ーー尺寸之閒」また步行の義とす、蘇東坡の詩に「穿竹鳥聲驚ーー」

【匍匐】 「ハラバヒ」するをいふ、また孟子滕文公上に「赤子ーー將入井」說文に「匍ハ手行ナリ、匐ハ地ニ伏スルナリ」また盡力奔趨して往くなり、詩經邶風終風篇に「凡民有喪、ーー救之」蘇軾の祭歐陽文忠公文に「ーー往弔」

【蒲伏】 匍匐に同じ、左傳昭十三年に「懷錦奉壺飲冰以｜｜焉、守者御之、乃與之錦而入」史記淮陰侯傳に「信孰視之俛出袴下」｜｜、一市皆笑信以爲怯」

【蒲服】 前條に通じ用ふ、史記蘇秦傳に「蘇秦笑謂其嫂曰、何前倨而後恭也、嫂委蛇｜｜以面掩地而謝曰、見季子位高金多也」

【黼黻】 左傳桓二年に「火龍黼黻、昭其文也」の註に「火ハ火ヲ畫クナリ、龍ハ龍ヲ畫クナリ、白ト黑ト之ヲ黼トイフ、形斧ノ若シ、黑ト青ト、之ヲ黻トイフ、兩己相戾クナリ」と、黻の文は、亞、亞は古の弗の字、己の篆は亞に作る、故に兩己相戾くといふなり、文心雕龍に「五色雜而成｜｜、五音比而成韶夏」

【墓表】 墓表は文體の名、東漢の時より始まる、東漢の安帝の元初元年に、謁者景君墓表を立てしより以來、後世卒に一體を成すに至れり、其の文體碑碣に同じきも、但銘辭なきを以て異りとす、且つ碑碣の文は、五品以上の官には碑といひ、五品以下の官には碣といふが古例なるも、墓表に至りては、官の有無等級等に拘はらず、皆之を用ふるを得べし、其の神道に樹つる者あるを以て、故に又神道表と稱す、神道碑といふも同じ、或はまた阡表・殯表・靈表と稱する者あり、阡は墓道なり、殯は未だ葬らざるの稱なり、靈は始めて死するの稱なり、されば靈よりして殯、殯よりして墓、墓よりして阡とす、並に墓表の別體なり、歐陽修の瀧岡阡表の若きは、有名の文なれば、參考すべし、

【蒲鞭】 「カマ」の鞭にて、うつも痛からず、後漢書劉寬傳に「劉寬南陽ノ太守ニ拜セラル、溫仁ニシテ恕多シ、吏人過アレバ但｜｜ヲ用ヒテ之ヲ罰シ以テ辱ヲ示スノミ」これより寬恕の罰を稱していふ、白居易の詩に「推誠廢鉤距、示恥用｜｜」

【黼冕】 黼衣（斧ノ形ノ「ヌイ」ヲ施セル衣）と冕（大夫以上禮冠）となり、後漢書鮑昱傳に「備俎豆｜｜、行禮奏樂」

【市市】 大なる貌、詩大雅韓奕に「魴鱮｜｜」

【嫫母】 纂文に「｜｜ハ、醜人ナリ、黃帝愛幸ス」

【墓木已拱】 兩手を合せ圍むを拱といふ、墓木長じて、一拱の大に至るは、死して久しきを經るの謂なり、左傳僖三十二年に「爾何知、中壽爾墓之木拱矣」これ秦の穆公が人をして孟明に謂はしめたる語にて、その過老にして死せざるを嘲る、中壽は七十なり、汝をして若し七十にして死せしめば、今や汝の墓木は、已に一拱の大に至りしならんとなり、

【歩歩蓮花ヲ生ズ】 （金蓮ノ歩）を見よ、

【譽アランヨリ毀無カレ】 俚諺なり、人に譽められんことを望むよりは、人にそしられざるやう心がくべしとの義、韓愈の送李愿歸盤谷序に「與其譽於前、孰若無毀於其後」とあるに本づく、

【本】 書籍の義、書誌を學ぶ本とし法とする義より、轉じて廣く書物の義とす、後漢書に草本の字あり、韓文の注に「倍文謂背本諳記也」とあり、寫本、刻本、讀本、院本の本皆同じ、

【畚】 「ワラ」にて編み、四隅に繩をつけて物を入れ荷ふもの「フゴ」晉書に「少以織｜爲業」

【賁育】 孟賁・夏育の二人並に古の勇力ありし者、蘇軾の潮州韓文公廟碑に「｜｜失其勇」

【盆ヲ戴キテ天ヲ望ム】 （戴盆望天）頭に盆を戴けば、天を望む能はず、天を望むには、盆を戴くを得ず、事は兼ね施す可からざるに喩ふ、卓氏藻林に「漢傳ニ、大盆何以望天」とあり、もと司馬遷の報任安書に出づ、

【本紀】 司馬遷の史記に、十二｜｜十表、八書、三十世家七十列傳と分ちたるに始まる、帝王の事蹟を敍述するを｜｜といふ、

【梵宮】 寺をいふ、朱慶餘の詩に「流水離經閣、閒雲入｜｜」（梵王）を參看せよ、

【本敎】 根本たるべき敎をいふ、呂覽孝行に「民之｜｜曰孝」

【本業】 人の專ら勤むべき根本の職業をいふ、鹽鐵論に「方今之務、在趨｜｜、養桑麻、盡地力也」とあるは農業をいふ（農業以外ノ業ヲ末業トイフニ對ス）後漢書にも「修神農之｜｜」とあり、

【香港】 支那の南海中、最も有名の島港なり、廣東省珠江の口に在る一小島、今英國に屬し、東洋第一の碇泊所なり、本島は昔時一土豪の所領たりしが、淸の康熙年間、討ちて之を退け、始めて版圖に入る、その英領に歸せしは、道光年間、兩廣總督林則徐英商の阿片二萬函を燒棄せし事に因る、

【本根】 「オホモト」舊唐書狄仁傑傳に「｜｜一搖、憂患不淺」

【梵嫂】 番禺雜記に「廣州ノ僧、室家アル者、之ヲ火宅僧トイヒ、其ノ妻ヲ呼ビ、｜｜トイフ」また草木子に「中原河北ノ僧、皆妻アリ、公然佛殿西廡ニ居ル、齋ニ赴クニ師娘ト稱ス」

【本草綱目】 三十九卷、明人李時珍が、三十年の歲月を費して、著したる書にて、子書の醫家類に屬す、寬文十

二年の和版あり、時珍字は東壁、明の蘄州の人、萬暦年中歿す、本草の原書は張仲景華陀等の著すところ、その後歷代增益するところあり、時珍に至りて、繁を刪り漏を補ひ、謬を訂し、以てこの書を成す

【梵刹】 寺なり、釋氏要覽に「梵者淸淨之義」とあり、諸の邪欲を離れて「ケガレ」なきをいふ、刹は佛塔の義、一解に幡柱なりと、顧況の詩に「斷幡猶挂刹」張朶の詩に「鳴鐘梵刹淸」

【畚鍤】 畚は土を盛る器「モッコ」「フゴ」鍤は地に揷して土を起こす農具「スキ」晉書に「――相尋」中說に「具――以往」

【犇散】 犇は奔なり、はしりて四方に離散する義、漢書に「抱其器而――」

【本支百世】 本は宗子なり、支は庶子なり、一門長久に榮ゆる義、詩經の大雅文王篇に「文王孫子、本支百世」連文釋義に「本本宗也、支支族也」

【奔車ノ上仲尼ナシ】 君子は危きに近よらざる義、韓非子の語に「奔車之上無仲尼、覆舟之下無伯夷」とあり、

【梵鐘】 寺の「カネ」樊阜の詩に「半樹殘陽又――」

【本色】 持前の義、本領に同じ、後山詩話に「韓退之以文爲詩、蘇子瞻以詩爲詞、如敎坊雷大使之舞、雖極天下之工、要非――

【本誠】 元の僧、六研齋筆記に「釋――字ハ道元、覺隱ト號ス、元僧四隱ノ一、品局高潔書畫ヲ能クス、山水ハ巨然ヲ學ビ、翎毛竹石倶ニ灑脫ノ韻アリ、是レ道ニ得ルアリ、而シテ精光ヲ筆墨ノ閒ニ簸弄スル者ナリ」

【奔湊】 「ハシリアツマル」晉書に「朝野――」

【本地】 本門の證果を得たる地位、垂迹卽ち化身に對する報身を稱す、法華經科註に「生――深信」佛氏の說に我が國の神も、天竺なる本地の佛の跡をこの土に垂れて出でたまへるものとし、――垂迹の言を爲す、例へば天照大神を本地阿彌陀佛の垂迹とし、八幡太神を觀世音などとする如し、兩部神道の說、これより起る、

【奔馳】 「ハセカケル」後漢書隗囂傳に「赤車――」韓愈の詩に「浮屠西來何施爲、擾擾四海爭――」

【盆池】 小さき池なり、明一統志に「有――龍口水注其中」（兩部）を見よ、

【奔踶】 踶は蹋(フム)なり、人之に乘れば奔り、立てば人を蹋む、荒馬をいふ、漢書武帝紀に「馬或――而致千里、士或有負俗之累而立功名、夫泛駕之馬、跅弛之士亦在御之而已」と、泛は覆なり、

【梵天】 佛の住める淨界をいふ、欲界・色界・無色界を合せて三界といふ、――は色界天の中の初禪天の名なり、華嚴經に「梵ヲ梵摩ト謂フ、具ニハ跋濫摩ト謂フ、此ニ淸淨ト云フ」とあり、欲界を越えて色界に至れば、初禪天より婬欲心を離るれば、その天を梵天卽ち淸淨天と名づくるなり、故に大智度論十に「梵名離欲淸淨」とあり、天竺の四姓中の婆羅門種又は梵王等の名はこれより出づ、修驗道にて祈禱に用ゐる幣を、――といふは、――に奉る意より轉じて出て來りたるなるべし、

【煩惱】 佛經の語、人の慾情願望苦慮等の煩はしく惱ましきことを泛稱す、卽ち涅槃の道に逆ふことにて、菩提の正覺に對していふ、智度論に「女人多短智慧、――垢重」惱煩の法、心神を惱亂す、故に――と名づく、貪欲瞋恚愚癡等の惑、正道を障蔽するを――障と名づく、河上公の老　注に「天地惡――、人心惡多欲」祕藏記に「淸――垢、顯心本性」

【奔波】 波のうち寄する如く、爭ひて趨くをいふ、晉書子の斐會上慕容垂疏に「杜豪競之門、塞――之路」韓愈の論佛骨表に「老少――」

【梵貝】 法螺貝をいふ、文獻通考に「貝之爲物、其大可容數升、蠡之大者也、南蠻之國、取而吹之、所以節樂也、今之梵樂用之以和銅鈸、釋氏所謂法螺、云云」（法螺）を參看せよ、

【梵唄】 讀經の聲をいふ、書言故事に「梵音ヲ――トイフ、梵語ニイフ唄ハ、華ニ外事ヲ止斷スルヲイフ、外事止斷ノ時、佛事タルヲ任ズ、唄ハ讚詠ノ聲ナリ、魏ノ曹子建、魚山ニ遊ビ忽チ空中梵天ノ音ヲ聞クガ若シ、淸響哀惋、獨聽良ヤ久シ、乃チ其ノ節ヲ擧ゲ寫シテ――ト爲ス、此レヨリ始ル」と、唄は偈なり、集韻に「西域謂頌曰唄」とあり、法苑珠林に「西方之有唄、猶東國之有讚」とあり、楞嚴經に「――詠歌、自然敷奏」

【奔馬ヲ擒ニス】 （擒奔馬）力の强きをいふ、舊唐書史敬奉傳に「敬奉形甚短小若不能勝衣、至於野外馳逐能擒奔馬」

【笨伯】 晉書羊曼傳に「大鴻臚江泉、能ク食スルヲ以テ穀伯ト爲シ、豫章ノ太守史疇肥大ナルヲ以テ笨伯ト爲ス」笨は麤率なり、

【凡夫】 凡庸の人をいふ、法華經に「――淺識、深著五欲」大威德陀羅尼經に「於生死迷惑流轉、住不正道、故名――」

【本分】 己の守るべき分限なり、荀子非相篇に「見端不知見一一」註に「分トハ貴賤上下ノ分ヲ謂フ」

【凡民】 凡庸の民なり、孟子に「待文王而後興者、一一也」

【奔命】 君命に奔走する義、左傳に「余必使爾罷於一一以死」また單に走りつかゝる義、轉じてすべて忙しく立ち廻る義とす、莊子に「天下莫不一一於仁義」

【翻譯】 翻譯名義集に「一一トハ梵天ノ語ヲ翻シテ轉ジテ漢地ノ言トナスヲ謂フ、音ハ別ナルニ似タレドモ、義ハ則チ大同ナリ（中略）周禮ニ四方ノ語ヲ掌ルニ各ソノ官アリ、東方ヲ寄ト曰ヒ、南方ヲ象トイヒ、西方ヲ狄鞮トイヒ、北方ヲ譯トイフ、今西言ヲ通ジテ譯トイフハ、蓋シ漢世北方ニ多事ニシテ譯官兼ネテ西語ヲ善クス、故ニ摩騰始メテ至リテ四十二章ヲ譯ス、因リテ譯ト稱スルナリ」翻は飜に同じ、漢音ハン轉じて廣く一國の語の義を取りて、他國の語に易へしるす義とす、

【凡庸】 庸は常なり、集韻に「愚ナリ」と、常なみの人をいふ、史記周勃世家贊に「才能不過一一」王行の詩に「落魄便自超一一」

【奔雷】 はげしき雷鳴なり、杜甫の詩に「昨夜有一一」

【本來面目】 天然のまゝにして一毫の人意を雜へざる所をいふ、六祖法壇經に「不思善、不思惡、正與麼時、那箇是明上座一一一一」傳習錄中卷に「不思善不思惡、時認一一一一、此佛氏爲未識一一一一者、設此方便、一一一一即吾聖門所謂良知、今既認得良知明白、既已不消如此說矣」

【本來無一物】 心の虛無にして、一物も存せざる義なり、禪林類聚の祖偈門に「五祖、衆ニ示シテ偈ヲ索メテ、衣法ヲ付セント欲ス、堂中ノ上座、神秀大師、偈ヲ呈シテイフ、身是菩提樹、心如明鏡臺、時時勤拂拭、莫遣惹塵埃、六祖聞キテ乃チ之ニ和シテイフ、菩提本非樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃、五祖默シテ之ヲ識ル、夜六祖ヲ呼ビテ入室セシメ、密ニ心宗ノ法眼ヲ示シ、衣鉢ヲ傳付ス」この事、傳燈錄にも見ゆ、字句やや異り、

【梵王】 梵天王の略、法華經に「爾時諸一一諸天帝釋」一一宮は寺をいふ、

【暮夜】 「クレガタ」に近き夜なり、後漢書楊震傳に「一一無知者」

【蒲楊】 「カハヤナギ」古今注に「蒲柳生水邊、葉似青楊、曰一一」

【法螺】 （一一）を見よ、

【蒲牢】 班固の東都賦の注に「海中大魚アリ、鯨ト曰フ、又獸アリ、一一ト名ヅク、一一素ヨリ鯨ヲ畏ル、鯨魚擊テバ一一輒チ大ニ鳴ク、凡ソ鐘、聲ヲシテ大ナラシメント欲スル者、一一ヲ上ニ作リ、之ヲ撞ク所以ノ者ヲ鯨魚ト爲ス」轉じて鐘の義とす、唐彥謙の遊南明山詩に「忽聞吼一一、落日下雲巓」

【蒲柳之姿】 體質の衰弱せる者に比していふ、世說に「南朱顧悅之、與簡文帝同年、悅之先老、帝怪問之、悅之曰、松柏之姿、經霜猶茂、一一一一、望秋先零」悅之字は君叔、晉書の本傳には「蒲柳常質」とあり、蒲柳は「カハヤナギ」また「エノコロヤナギ」爾雅に「楊一一」注に「以テ箭ト爲スベシ」白居易の自題寫眞詩に「蒲柳質易朽、麋鹿心難馴」

【蒲輪】 漢書枚乘傳に「武帝即位、乘年老、迺以安車一一徵乘道死」（安車）を見よ、

【步輦】 「テグルマ」通鑑後唐紀に「乘一一以歸」註に「一一ハ人ヲ以テ之ヲ挽クナリ」步挽車に同じ、

【蒲盧】 次條また（政ハ一一）を見よ、

【蒲盧】 前條に通ず「カマ」と「アシ」と、一說に蜾蠃なりと、夢溪筆談に「一一ハ說ク者以テ蜾蠃ト爲ス、疑フラクハ、然ラズ、一一ハ即チ蒲葦ノミ、故ニ曰ク、人道敏政、地道敏藝、夫政猶一一也、人ノ政ヲ爲ス、猶ホ地ノ蒲葦ヲ藝エテ之ヲ遂ゲシムルガ如キ而已、亦ソノ事ナキ所ロニ行ハルルナリ」

【輔翼】 「タスケ」とする義、書經益稷篇に「予欲左右有民、汝翼」とありて、註に「左右輔翼也、猶孟子所謂輔之翼之使自得之也」とあり、輔佐・輔弼皆同じ、

北冥有魚、其名爲鯤、鯤之大、不知其幾千里也、化而爲鳥、其名爲鵬、鵬之背、不知其幾千里也、怒而飛、其翼若垂天之雲、是鳥也、海運則將徙於南冥、南冥者天池也、齊諧者、志怪者也、諧之言曰、鵬之徙於南冥也、水擊三千里、摶扶搖而上者九萬里、去以六月息者也

（莊子逍遙遊篇）

【魔】 人に障害をなす鬼の類、妖魔・惡魔等と熟す、轉じて人の心を亂す邪神をもいふ、天魔は能く人を迷はす天上の狂鬼、蘇軾の詩に「外道天魔猶奏樂」梵語の魔は具には魔羅といふ、殺者と譯す、死魔は人の生命を奪ふ、智度論に「魔羅、秦言能奪命、死魔實能奪命、餘者能作奪命因緣、亦能奪智慧命、是故名殺者」

【麻衣】 白き衣服、詩經曹風蜉蝣篇に「蜉蝣掘閲、――如雪」注に「――ハ白布ノ衣、如雪トハ甚ダ鮮潔ナルヲイフ」また白き麻の衣にて多く喪服に用ふ、禮記雜記に「有司――」

【枚界】 (――)を見よ、

【埋玉】 「スグレタル」人または美人などの死を惜みていふ、晉書庾亮傳に「庾亮將葬、何充會之、歎曰、埋玉樹於土中、何人情能已」

【玫瑰】 美玉の名、急就篇に「璧碧珠璣――」注に「――美玉名也、以美玉爲璣、璣汲瓶也」玫正音バイ

【昧谷】 日の入る處をいふ、書經堯典に「分命和仲宅西、曰――」とあり、昧は冥なり「クラシ」日谷に入りて天下くらし、故にいふ、

【昧爽】 書經の太甲の上に「先王――、丕顯、坐以待旦」の註に「昧ハ晦、爽ハ明ナリ、昧爽トイフハ、明ケント欲シテ未ダ明ケザルノ時ナリ」

【昧死】 昧くして死罪を犯すの義、戰國策に「臣――望見大王、言所以畢」また漢書高祖紀に「――再拜、言大王陛下」と、秦の時より上書の語に用ひ來れり、一解に昧は冒に通ず、人臣上書するに、言ふところ、理に當らざれば、死を以て謝せざるべからず、故に――といふと、

【昧旦】 昧爽に同じ、旦は朝なり、猶ほ暗き旦なり、詩經鄭風女曰雞鳴に「女曰雞鳴、士曰――」

【埋沒】 地中にうづもるる義、轉じて世にあらはれ出でざる義とす、南史郭祖深傳に「飾口利辭、競相推薦、訥直守信、坐見――」

【每每】 「イツモ、イツモ」莊子胠篋篇に「天下――大亂」註に「常常ナリ」また柳宗元の與韓愈論史書に「徒信人口語、――異辭」

【昧昧】 暗き貌、楚辭懷沙に「日――其將暮」

【毛穎】 筆の異名なり、韓愈、史記列傳に擬して――傳を作る、唐宋八家文に出づ(楮先生)を見よ、

【毛延壽】 漢の杜陵の人、人を畫くに、醜好老少皆眞を得たり、元帝畫工をして後宮の妃嬪を圖して上らしめ以て召幸す、諸官人皆畫工に賂す、獨り王嬙(字ハ昭君)背んぜず、竟寧元年、匈奴の呼韓邪單于來朝し、美人を求め漢に壻たらんと請ふ、帝圖を按じ、昭君を以て之に賜ひ行かしむ、去るに及び召見するに、貌、後宮第一たり、乃ちその事を窮案して、毛延壽等皆誅に伏す(王昭君)を參看せよ、

【孟夏】 夏の「ハジメ」陰曆の四月をいふ、禮記の月令に見ゆ、玉篇に「孟ハ始メナリ、四時ノ首月ヲ孟月トイフ」

【孟軻】 字は子輿、戰國の時、鄒の人、業を子思の門人に受く、道既に通ず、齊梁に遊び、仁義を以てその君に說く、用ふる能はず、退いて萬章の徒と詩書を序で、仲尼の意を述べ、孟子七篇を作る、赧王十三年卒す、年八十四、後世鄒國亞聖公に累封し、孔子の廟廷に配享す(孟子)を參看せよ、

【孟郊】 (孟東野)を見よ、

【孟郊賈島ガ寒瘦】 駿臺雜話の「詩文の評品」に見ゆ(元輕白俗)を見よ、

【孟浩然】 唐の襄陽の人、少くして氣節を好み、鹿門山に隱る、年四十二、京師に遊ぶ、張九齡・王維と忘形の交をなす、一日王維、私に浩然をむかへて內署に入れ、風雅を商較す、適玄宗臨幸す、浩然錯愕して床下に匿る、維乃ち對ふるに實を以てす、帝喜んで曰く、朕その人を聞く、未だその人を見ずと、詔して近作の詩を誦せしむ「不才明主棄、多病故人疎」の句に至り、帝曰く、朕未だ嘗て卿を棄てず、奈何ぞ我を誣ゆると、因りて放還す、張九齡、荊州を鎭するに及びて、署して從事とす、開元二十八年、疽を病みて卒す、年五十二、集三卷(四庫ニ著錄スルハ四卷本)あり、その詩風は、陶潛に近く、自然を以て宗と爲す、盛唐に在りて王維と名を齊うす、

【孟簡】 字は幾道、唐の平昌の人、詩に工に、節義を尙ぶ、進士に及第し累官して諫議大夫に至る、議論抗切なり、出でて常州の刺史となり、戶部侍郞に陞り、御史中丞を加へらる、簡佛書に明通す、元和六年詔して、給事中劉伯芻、工部侍郞歸登等と、大乘本生心地觀經を翻譯せしむ、簡最もその理を擅にす、韓愈元和十四年、佛骨の表を上り、潮州に貶せられ、潮の僧大顚と遊ぶ、人遂に佛氏を奉ずといふ、その冬袁州に移さる、明年簡、書を移してこの事に言及す、愈書を作りて之に答ふ、

【孟嘉落帽】 事文類聚前集卷十一に「晉ノ孟嘉、桓溫ノ參軍タリ、色和ニシテ正ナリ、溫甚ダ之ヲ重ンズ、九月九日、溫龍山ニ遊ブ、參佐畢ク集ル、時ニ佐吏並ニ戎服ヲ著ク、風至ルアリ、嘉ノ帽ヲ吹イテ墮落ス、嘉之ヲ覺ラズ、溫、左右及ビ賓客ヲ勅メテ言フ勿カラシメ、以テ其ノ擧止ヲ觀ル、嘉良久ウシテ廁ニ如ク、溫取リテ之ヲ還サシメ、孫盛ニ命ジテ文ヲ作リ、嘉ヲ嘲ラシメ、嘉ノ坐處ニ著ク、嘉還リ見テ即チ之ニ答フ、其ノ文甚ダ美ナリキ」

【毛義】 字は少節、後漢の廬江の人なり、家貧にして孝行を以て稱せらる、南陽の張奉その名を慕ひ、往きて之を候ふ、坐定りて府檄（メシブミ）適至り、義を以て安陽令と爲さんとす、義、檄を捧げて入り、喜顏色に動く、奉は志尙の士なり、心に之を薄んず、後ち義の母亡するに及びて、遂に仕へず、奉曰く、往日の喜は、乃ち親の爲めに節を屈せしなり、所謂家貧しく親老ゆれば官を擇ばずして仕ふる者なりと、孝章帝詔を下して之を褒寵し、穀千斛を賜ひ、常に八月を以て起居を問はしめ、羊酒を加賜す、壽を以て家に終る、

【盲杖】 定石の法によらずして「ムヤミ」に打つ碁をいふ、洪咨夔の詩に「掠遐赴手是ーー」

【盲龜ノ浮木】 遇ふことの極めて難きをいふ、法華經に「佛難得値、如優曇波羅華、又如一眼之龜値浮木孔」莊嚴論に「有一小兒、聞佛說人身難得如盲龜値浮木孔、小兒穿板作孔、擲池水中、以頭出入、終不能入、曰、盲龜在海、百年一出、何日値耶、我今爲人有面目、一日百出、値木孔猶難」と、また阿含經、涅槃經にも見ゆ、參看すべし、

【毛擧】 毛の如き細事をも擧ぐるをいふ、漢書刑法志に「徒鉤摭微細、ーー數事」

【毛奇齡】 字は大可、西河と號す、清の浙江蕭山の人、少くして奇才を負ひ羣籍を淹貫し、辨駁に長ず、凡そ他人の已に言ふ所ろの者は、必ず力めてその辭を反す、古文尙書は吳棫朱子より以來、皆その僞を疑ふ、閻若璩の古文尙書疏證を作るに及び、奇齡また力辯して以て眞と爲す、蓋し人に隨ひて步趨するを屑しとせざるなり、著述の富、近代に冠たり、歿後その門人子姪編して西河合集となす、凡そ四百餘卷、緒餘書畫を善くす、康熙四十六年卒す、年八十五（一ニ曰ク九十四）

【孟光】 後漢書列傳に「梁鴻字ハ伯鸞、扶風平陵ノ人、家貧ニシテ節介ヲ尙ブ、勢家之ヲ慕ヒ、多ク之ニ女サントス、鴻並ニ娶ラズ、同縣ノ孟氏ニ女アリ、名ハ光、字ハ德耀、狀肥醜ニシテ黑シ、力石臼ヲ擧グ、對ヲ擇ンデ嫁セズ、父母ソノ故ヲ問フ、曰ク賢、梁伯鸞ノ如キ者ヲ得ント欲スト、鴻聞キテ之ヲ聘ス」（梁鴻）また（案ヲ擧グ）ヲ見よ、

【妄言】 「ミダリ」なる言、莊子齊物篇に「爲女ーー之、女以妄聽之」

【妄語】 他人を誑す語、十惡の一、无量壽經に「兩舌惡口妄言綺語」智度論に「ーー之人、先自誑身、然後誑他、以實爲虛、以虛爲實」

【罔罟】 魚や鳥獸を捕ふる「アミ」易の繫辭に「作結繩而爲ーー、以佃以漁」朱子本義に「罔ハ網ト同ジ」釋文に「獸ヲ取ルヲ罔ト曰ヒ、魚ヲ取ルヲ罟トイフ」

【網罟】 關尹子に「聖人師蜂立君臣、師蜘蛛立ーー、師拱鼠制禮、師戰蟻置兵」前條を見よ

【猛虎】 「タケキトラ」唐書の兵志に「ーー所以百獸畏者、爪牙也、爪牙廢則孤豚特犬悉能爲敵」

【毛公】 史記信陵君傳に「公子聞趙有處士ーー藏於博徒、薛公藏賣漿家、乃閒步從兩人游甚歡」また六藝論に「河閒獻王好學、博士ーー善說詩」また「毛萇號小ーー」（毛詩）を見よ、

また孟浩然の詩に「奉檄懷ーー」とあるは、後漢の毛義をいふなり、

【猛虎深山ニ在レバ百獸震恐ス】 （猛虎在深山、百獸震恐）豪傑の士、拘束せられざるときは、衆人畏服するに喩ふ、司馬遷の報任安書に「ーーーー、ーーーー、及在檻穽之中、搖尾而求食、積威約之漸也」とあり（虎）を參看せよ、

【猛虎ノ猶豫スルハ蜂蠆ノ螫ヲ致スニ若カズ】 （猛虎之猶豫不若蜂蠆之致螫）大才あるも、之を用ひざるは、小才を實行するに若かざるに喩ふ、史記の淮陰侯傳に「知ハ決ノ斷ナリ、疑ハ事ノ害ナリ、毫釐ノ小計ヲ審カニシ、天下ノ大數ヲ遺ル、智誠ニ之ヲ知リテ、決シテ敢テ行ハザル者ハ、百事ノ禍ナリ、故ニ曰ク、猛虎之猶豫、不若蜂蠆之致螫、騏驥蹢躅スルハ、駑馬ノ安步スルニ如カズ、孟賁ノ狐疑スルハ、庸夫ノ必ズ至ルニ加カザルナリ、舜禹ノ智有リト雖モ、吟ジテ言ハザルハ、瘖聾ノ指麾スルニ如カザルナリ、此レ能ク之ヲ行フヲ貴ブヲ言フナリ」

【猛虎モ鼠トナル】 李白の詩に「君失臣兮龍爲魚、權歸臣兮虎變鼠」とあり、君主も權を失ふときは、君主たるの威光を失ひ、下のために制を受くるに至るに喩ふ、

【毛際可】 字は會侯、鶴舫と號す、清の遂安の人、順治十五年の進士、その學西河(毛奇齡)の博に及ばず、亦西河の僻に至らず、書畫米家の風あり、著すところ松皐全集あり、

【莽蒼】 莊子逍遙遊篇に「適――者、三飡而反、腹猶果然」蒼は草の色、草の莽莽と茂れる郊野をいふ、莽漢音バウ

【毛詩】 詩經の別名、古は單に詩といふ、初學記に「趙人荀卿、詩ヲ以テ漢人魯國ノ毛亨ニ授ク、毛亨詁訓傳ヲ作リ、以テ趙國ノ毛萇ニ授ク、時人亨ヲ謂ヒテ大毛公トナシ、萇ヲ小毛公ト爲ス、二公傳フル所ロタルヲ以テ、故ニソノ詩ヲ名ヅケテ――トイフ」と、漢書儒林傳に「毛公治詩爲河閒獻王博士」後漢書儒林傳に「九江謝曼卿善――、爲其訓、衞宏從曼卿受學、因作――序、善得風雅之旨、馬融作――傳、鄭康成作――箋」王維の詩に「深明戴家禮、頗學毛公詩」毛詩を讀むに參考すべきは

○毛詩正義　七十卷、漢の毛亨の傳、鄭玄の箋、唐の孔穎達の疏、

○詩緝　三十六卷、宋の嚴粲撰す、

○毛詩補傳　三十卷、仁井田好古撰す、

○毛詩草木鳥獸蟲魚疏　二卷、呉の陸璣撰す、

○詩經集註　八卷、朱熹撰す、この書、古註と併觀して博識の資とすべし、

なほ(詩經)を參看すべし、

【孟子】 七篇、孟軻撰す、軻は鄒(山東省兗州府鄒縣)人なり、業を子思の門人に受く、道既に通じて魏に適く、魏の惠王用ふる能はす、齊の宣王に游事し、遇はずして去り、宋魯滕薛の閒に往來して、道を行ふの地を求むるも、終に得ざりき、蓋し當時列國方に合從連衡を務め、攻伐を以て賢と爲す、而るに軻は乃ち唐虞三代の德を述ぶ、是を以て如く所ろの者合はず、退て萬章の徒と、詩書を序で、孔子の意を述べてこの書を作る、孟子を讀むに參考すべきは、

○孟子正義　十四卷、後漢の趙岐註、宋の孫奭の疏、單行本あり、また十三經注疏中にも收む、

○孟子解　一卷、宋蘇轍撰す、凡二十四章、その說瑕瑜互見すれども、亦磨すべからざるの見あり、

○孟子趙註補正　六卷、清の宋翔鳳撰す、

○孟子生卒年月日考　一卷、清の閻若璩著す、皇清經解に收む、

○孟子集註　七卷、宋の朱熹撰す、四書に列す、

○孟子欄外書　二卷、佐藤坦撰す、

【猛士】 强勇なる士なり(大風ノ歌)を見よ、

【孟秋】 孟は始なり、――は陰曆七月なり、禮記月令に出づ、

【猛獸】 「タケキケダモノ」呉越春秋に「――將擊、必弭耳帖伏」

【猛獸ノ狐疑スルハ蜂蠆ノ螫ヲ致スニ若カズ】 (猛獸狐疑、不若蜂蠆之致螫也)說苑の說叢篇に見ゆ、下に「高議而不可及、不若卑論之有功也」とあり(猛虎ノ)を參看せよ、

【孟施舍】 孟子公孫丑上に「――之所養勇也、曰、視不勝猶勝也、量敵而後進、慮勝而後會、是畏三軍者也」朱註に「孟ハ姓、施ハ發語ノ聲、舍ハ名ナリ」

【孟子ノ之ヲ莊嶽ニ置クノ說】 (孟子置之莊嶽之說)張之洞の勸學篇に見ゆ、孟子の滕文公下に「孟子謂戴不勝曰、子欲子之王之善與、我明告子、有楚大夫於此、欲其子之齊語也、則使齊人傅諸、使楚人傅諸、曰、使齊人傅之、曰、一齊人傅之、衆楚人咻之、雖日撻而求其齊也、不可得矣、引而置之莊嶽之閒數年、雖日撻而求其楚、亦不可得矣」とあり　註に「戴不勝ハ、宋ノ臣ナリ、莊嶽ハ齊ノ街里ノ名ナリ」

【盲人瞎馬ニ騎ル】 至りて危きに喩ふ、成語考に「盲人騎瞎馬、夜半臨深池、謂險語之逼人」と、註に「顧愷之、殷仲堪ト、危語ヲ作ス、一參軍アリ、座ニ在リテ云フ、――――、夜半臨深池ト、仲堪一目ヲ眇ス、驚イテ曰ク此レ太ダ人ニ逼レリト、因リテ罷メヌト」世說には顧愷之を桓南郡に作る、瞎は一目盲するもの「メッカチ」

【盲者】 「メクラ」淮南子說林に「毋貽――鏡、毋予躄者履」鹽鐵論に「――口能言白黑、無目以別之、儒者口能言治亂、無能以行之」

【罔象】 水の怪物、莊子に「水有――」音義に「――ハ狀小兒ノ如ク、赤黑色、赤爪大耳長臂、一ニ云フ水神ノ名ナリト」(罔兩)を見よ、

【孟嘗君】 名は文、姓は田氏、齊人、嬰の子、湣王の時、父に繼ぎて薛公となる(函谷ノ雞鳴)また(田文)を見よ、

【孟嘗君ガ三千ノ客、悉ク珠履ヲハク】 太平記卷三十四に見ゆれども事實誤れり、史記に「楚ノ考烈王、黃歇ヲ以テ相ト爲シ、春申君ニ封ズ、コノ時、齊ニ孟嘗君アリ、趙ニ平原君アリ、魏ニ信陵君アリ、方ニ爭ウテ士ニ下リ、賓客ヲ招致シ、以テ相傾奪ス、趙ノ平原君人ヲ春申君ニ使ハス、春申君之ヲ上舍ニ舍ス、趙ノ使、楚ニ誇ラント欲シ、瑇瑁ノ簪ヲツクリ、刀劍ノ室 珠玉ヲ以テ

之ヲ飾ル、命ヲ春申君ノ客ニ請フ、春申君ノ客三千餘人、ソノ上客ハ皆珠履ヲ躡ミ、以テ趙ノ使ヲ見ル、趙ノ使大ニ慙ヅ」

【猛將雲ノ如シ】（猛將如雲）勇猛の將士、衆多なるを稱す、李陵の答蘇武書に「――――、謀臣如雨」

【毛嬙西施】共に支那古代の美人の名、文選十九卷、神女賦に見ゆ、莊子に「毛嬙麗姬、人之所美也、魚見之深入、鳥見之高飛」鹽鐵論に「毛嬙天下之姣人也、待脂粉香澤而後容」淮南子に「――――若使之銜腐鼠、蒙蝟皮、衣豹裘、帶死蛇、則布衣韋帶之人、過者、莫不左右睥睨而掩鼻」

【孟嘗珠ヲ還ス】蒙求卷の下に後漢書を引きて「後漢ノ孟嘗字ハ伯周、會稽上虞ノ人、合浦ノ太守ニ遷ル、郡穀實ヲ產セズ、而シテ海珠寶ヲ出ス、交阯ト境ヲ比ス、常ニ商販ヲ通ジ、糧食ヲ貿糴ス、先時ノ宰守並ニ多ク貪穢ナリ、人ヲ詭メ、採求シテ紀極ヲ知ラズ、珠漸ク交阯ノ郡界ニ徙リ、行旅至ラズ、人物資ナク、貧者道ニ餓死ス、嘗テ官ニ至リ、前弊ヲ革易シ、民ノ病利ヲ求ム、未ダ歲ヲ踰エズ、去珠復タ還リ、百姓皆業ニ反リ、商貨流通ス、稱シテ神明ト爲ス、徵シ還サルルニ、吏民車ヲ攀ヂ之ヲ請フ、乃チ夜遁レ去リ、隱處シテ自ラ耕ス、鄉縣ノ士民、德ヲ慕ヒ就キテ居止スル者百餘家」

【盲者杖ヲ失フ】信賴する所ろを失ふをいふ、陳同甫集に「惘然若盲者失杖」と、暗夜に燈を滅せしに同じ、

【毛銖】極めて小量をいふ、分銖また錙銖に同じ、晉書祁嘉傳に「所得未――、所喪如山崖」

【孟春】春の「ハジメ」の月、陰曆の正月の異稱、禮記月令に出づ（孟夏）を見よ、

【毛遂】自ら平原君に薦む、平原君曰く、賢士の世に處る、錐の囊中に處るが如く、その末立ろに見はると、遂曰く、早く囊中に處るを得しめば、乃ち穎脫して出でんと、與に俱に楚に至り、從を定めて歸る、平原君曰く、毛先生一たび楚に至りて趙をして九鼎大呂よりも重からしむと、乃ち以て上客となす、

【毛錐子】筆の異名、五代史の弘肇傳に「弘肇有大志、嘗謂人曰、安朝廷、定禍亂、直須大劒長鎗、安用毛錐子爲哉」通鑑五代紀の胡三省の註に「毛錐ハ筆ヲイフ、束毛ヲ以テ筆トナス、ソノ形錐ノ如キナリ」

【孟陬】陰曆の正月をいふ、卓氏藻林に「孟ハ始ナリ、陬ハ隅ナリ」爾雅に「正月ヲ陬ト爲ス」楚辭に「攝提貞于――兮」

【罔然】自失する貌、文選東京賦に「罔罔然若酲」罔兮、罔罔、罔乎、罔焉皆同じ、罔一に惘に作る、

【輞川圖】唐朝名畫錄に「王維――ヲ畫ク、山谷鬱盤、雲水飛動、意塵外ニ出デ、怪、筆端ニ生ズ、秦太虛イフ、余病ニ臥ス、高符仲――ヲ携ヘテ予ニ示シテ曰ク、此ヲ閱スレバ以テ病ヲ癒スベシト、予甚ダ喜ビ、恍然トシテ摩詰ト輞川ニ入ルガ若シ、數日ニシテ疾癒ユ」輞川は西湖の涯に在り、名勝の地、

【網疏】「アミ」の目の「アラマカ」なるをいふ、以て法律の疎濶なるに喩ふ、鹽鐵論に「――則獸失、法疏則罪漏」

【毛鄭ノ詩】詩經の毛公の傳、鄭玄の箋をいふ、韓文の施先生墓銘に「明毛鄭詩」

【孟冬】孟は始なり、冬の「ハジメ」の月、陰曆の十月をいふ、禮記月令に見ゆ、

【孟東野】名は郊、字は東野、湖州武康の人、少くして嵩山に隱る、性耿介合ふこと少し、貞元中、年五十にして、進士に及第し、溧陽尉となる、日に詩を賦し、曹務多く廢す、鄭餘慶奏して參謀と爲す、卒して貞曜先生と私諡す、その詩理致あり、最も韓愈の稱する所ろとなる、元和九年卒す、年六十四、集十卷あり、世に行はる、次條並に（窮交ノ詩）を參看せよ、

【孟東野集】十卷、唐の孟郊撰す、宋の宋敏求編す、簡明目錄に「其詩、託興深微ニシテ結體古奧、韓愈以下皆之ヲ推ス、蘇軾始メテ空螯小魚ノ誚アリ、元好問遂ニ目スルニ詩囚ヲ以テス（好問の論詩絕句に、東野窮愁死不休、高天厚地一詩囚の句あるを斥す）蓋シ蘇ハ豪肆ヲ尙ビ、元ハ高華ヲ尙ビ、門徑同ジカラズ、故ニ丹ヲ是トシ、素ヲ非トス、未ダ據リテ定論ト爲スベラザルナリ」

【網、吞舟ノ魚ヲ漏ス】（網漏於吞舟之魚）吞舟は、大魚なり、大奸に比す、法令寬にして大奸罪を逃がるるに喩ふ、史記酷吏傳に「――――――、而吏治烝烝不至于姦、黎民艾安」唐書魏元忠傳に「網漏吞舟、何以過此」

【盲風】秋の疾風をいふ、禮記の月令に「仲秋――至」韓文の南海神廟碑に「――怪雨」

【毛物】「ケモノ」周禮大司徒に「其動物宜――」毛蟲に同じ、

【網捕】網にて魚を捕ふる義、張椿の青溪閣記に「放生池者（中略）皆禁――、所以宣皇明而廣慈愛也」

【孟母機ヲ斷ツ】（孟母斷機）說苑に「孟軻三歲ニシテ父ヲ喪フ、母仇氏賢德アリ、軻長ジ、既ニ學ビテ歸ル、母問ヒテ曰ク、汝ガ學、何ノ所ニ至ルト、軻曰ク、舊ノ如シト、母乃チ刀ヲ以テ機ヲ斷ツ、軻懼レテ其ノ故ヲ問フ、

母曰ク、汝中道ニシテ學ヲ廢スルハ、吾ガ斯ノ織ヲ斷ツガ若キナリト、軻乃チ旦夕學ヲ勤メテ息マズ、業ヲ子思ニ受ケテ遂ニ大賢ト成リ、齊・梁諸國ニ遊ビ、說クニ王道ヲ以テスレドモ、皆用フルコト能ハズ、乃チ退キテ萬章ノ徒ト、孟子七篇ヲ作レリ」この事列女傳にも出づ、參照せよ、

【孟母三遷】 劉向の列女傳に「孟軻之母、其舍近墓、孟子之少也、嬉戲爲墓間之事、踊躍築埋、孟母曰、此非所以居子也、乃去舍市、其嬉戲爲賈衒、孟母曰、此非所以居子也、乃徙舍學宮之旁、其嬉戲乃設俎豆、揖讓進退、孟母曰、此眞可以居子矣、遂居之」

【孟賁之勇】 「スグレタル」勇士をいふ、說苑に「勇士孟賁ハ、水行ニ蛟龍ヲ避ケズ、陸行ニ狼虎ヲ避ケズ」とあり、孟賁は衞の人なり、

【罔罔】 無知の貌、また喪心の貌「ウツトリ」文選の東京賦に「ーー然若酲」

【惘惘】 前條に同じ、楚辭に「超ーー而遂行」

【莽莽】 草の深き貌、楚辭天問に「草木ーー」莽一音バウまた野の「ヒロビロ」と連れる貌、漢書西域傳の註に「ーーハ平野ノ貌」

【罔羅】 「アミ」を張りて、魚鳥を捕ふる如く「アマサズ」「ヨセアツメル」義、漢書の司馬遷傳に「網羅天下放失舊聞、考之行事、稽其成敗興壞之理」また王莽傳に「網羅天下異能之士、至者前後千數」三略に「夫所謂士者英雄也、故曰羅其英雄則敵國窮」註に「其ノ英雄ヲーーシテ之ヲ用ヒルトキハ、敵國窮困ス」李山甫の代孔明哭先主詩に「誰驅神鬼隨鞭策、全罩英雄入ーー」

【罔兩】 影の傍に生ずる「ウスキ」影なり、莊子齊物論の「ーー問景」の注に「ーーハ景外ノ微陰ナリ」また「タヨル」ところなき貌、楚辭哀命の「神ーー而無舍」の注に「ーーハ依據スル所ロナキ貌」また怪物、玉篇に「ーーハ水神、三歳ノ小兒ノ如ク、赤黑色」蝄蜽・魍魎・罔浪・罔象皆同じ(魍魎)を見よ、

【魍魎】 卓氏藻林に「木石ノ怪ヲイフ」と、連文釋義に「神不明、謂之魍、精不明謂之魎」(魍魅ーー)また前條を見よ、

【摩訶】 梵語、智度論に「ーー、秦ニハ大、或ハ多、或ハ勝ト言フ」名義集に「ーー摩耶、西域記云、唐言大術、或云大幻ト」

【磨崖碑】 墨池編に「唐元結作中興頌、顏眞卿書勒于浯溪崖石、名ーーー」

【摩訶迦旃延】 南天竺の婆羅門種中の一姓、文飾と譯す、論議言辭文采修飾、最も勝れたればなり、その辯論縱橫善巧不定なれば一に不定と譯す、十大弟子の一、論議第一と稱す、

【籬】 「カキネ」籬なり、槿籬は「ムクゲ」の「マガキ」陸疏廣要に「槿今人多植之庭院、閑亦可作ー」魏志に「太守鄭渾課百姓、植槿爲ー」潘岳の閑居賦に「長楊映沼、芳枳樹ー」杜甫の詩に「茅舍竹ー短」方岳の詩に「吠犬守笆ー」李商隱の詩に「桂巷杉ー不可尋」楊巨源の詩に「綠楊仍對菊花ー」林逋の詩に「柴ー春色中」韓愈の詩に「舊籍在東都茅屋枳棘ー」

【摩訶陀】 中天竺の國名、城を王舍と名づく、ーーーは不害と譯す、刑殺の法なきを以てなり、また摩竭提と名づく、天羅と譯す、天羅は王の名、卽ち斑足王の父なり、また善勝また无惱と譯す、楞嚴經に「佛生迦維衞、成道摩竭提、說法波羅柰、入滅倶尸那」

【摩戛】 物と物とすれ合ひて聲を發する義、晁補之の新城遊北山記に「窓閉竹數十竿、相ーー、聲切切不已」

【磨勘】 宋の中世ーー院を置く、磨は「ミガク」勘は校勘(シラベル)の義、文武官吏の在職年限によりて進級せしむることを掌る、范文正公文集政府奏議に「我祖宗朝、文武百官皆無ーー之例、惟政能可旌者、擢以不次、無所稱者、至老不遷、故人人自厲、以求績效、今文資三年一遷、武職五年一遷、謂之ーー、不限內外、不問勞逸、賢不肖幷進、此豈堯舜黜陟幽明之意耶」また歐陽修の范文正公神道碑銘に「革ーー例遷、以別能否」

【枕】 說文に「臥所薦首者」とあり、詩經唐風葛生篇に「角枕粲兮、錦衾爛兮、予美亡此、誰與獨旦」禮記の內則に「斂枕簟」蕭穎士の山莊月夜の詩に「澗聲連枕簟、峰勢入階軒」岑參の春夢の詩に「枕上片時春夢中、行盡江南數千里」白居易の府西池北新葺水齋詩に「枕前看鶴浴、牀下見魚遊」

【枕ヲ扇ギ被ヲ溫ム】 (扇枕溫被)晉の西河の人王延、親に事へて色養す、夏は則ち枕席を扇ぎ、冬は則ち被を溫む、隆冬盛寒、體常に全衣なし、而して親は滋味を極むと、小學外篇にも出せり、蒙求に「後漢ノ黃香字ハ文强、江夏安陸人(中略)事父竭力致養、暑則扇牀枕、寒則以身溫席」

【枕ヲ高クシテ臥ス】 (高枕而臥)心を安んじて眠るをいふ、史記の張儀傳に「張儀魏王ニ說イテ曰ク、大王ノ爲メニ計ルニ、秦ニ事フルニ如クハ莫シ、則チ楚韓必ズ敢テ動カズ、楚韓ノ患無ケレバ、則チ大王枕ヲ高クシテ而シテ臥シ、國必ズ憂無カラント」

【麻姑搔痒】 麻姑は仙女なり、其の爪長くして鳥の爪に似たり、之をやとひて、かゆき處を搔かしむるは、即ち愉快を感ずること多きなり、葛洪の神仙王遠傳に「麻姑手爪、不如人爪、形皆似鳥爪、蔡經心中私言、若背大痒時、得此爪以爬背當佳也」李白の詩に「麻姑搔背指爪輕」杜枚の詩に「杜詩韓筆愁來讀、似倩麻姑痒處爬」杜詩は杜甫の詩、

【誠者天之道也】 中庸に出づ、下に「誠之者人之道也」とあり、

【麻沙】 坊名、方輿勝覽に「崇安——二坊之書行于天下」

【當ニ刑セラレテ而シテ王タルベシ】 （當刑而王）史記に「英布少キ時、客之ヲ相シテ曰ク、當ニ刑セラレテ而シテ王タルベシト、壯ニ及ビ法ニ坐シ黥セラル、布欣然トシテ曰ク、我ニイフ當ニ刑セラレテ而シテ王タルベシト幾ンド是レ乎ト」

【當ニ斷ズベクシテ斷ゼザレバ反リテ其ノ亂ヲ受ク】 （當斷不斷反受其亂）「グッグヅ」して、時機を失ふときは、利を得べきことも、反りて害を受くるに至るをいふ、史記春申君傳に見ゆ、

【麻絲】 「アサ」と「キヌイト」と、禮記に「昔者先王未有——、衣其羽皮」また「治其——以爲布帛」

【麻枲】 「アサ」枲も麻なり「ヲアサ」爾雅翼に「實アルヲ苴ト爲シ、實ナキヲ枲ト爲ス」後漢書崔寔傳に「出爲五原太守、五原土宜——、而俗不知織績、民冬月無衣、積細草而臥其中、見吏則衣草而出、寔至官、斥賣儲峙、爲作紡績織紝練縕之具、以敎之、民得以免寒苦」

【麻紙】 麻にて製せし紙、唐書藝文志に「月給蜀郡——五千番」

【磨子】 「ヒキウス」品字箋に「磑ハ今ノ——ナリ」河東記に「安置小——、磑成麪訖、即取麪作燒餅數枚」

【磨揉遷革】 磨厲矯揉（ミガキタメル）して、善く遷り惡を革めしむるをいふ、歐陽修の吉州學記の字面、

【交淺ク言深シ】 交の淺きに「コトバ」の深入りするは愚かなるをいふ、後漢書崔駰傳に「駰聞交淺而言深者愚也」

【交ヲ賣ル】 （賣交）友を賣るをいふ、史記酈商傳に「商子寄字ハ況、呂祿ト善シ、大臣諸呂ヲ誅セント欲ス、呂祿北軍ニ軍ス、太尉勃入ルヿヲ得ズ、乃チ人ヲシテ酈商ヲ劫カサシメ、其ノ子況ヲシテ呂祿ヲ給カシム、呂祿之ヲ信ズ、故ニ出游ス、勃乃チ入リテ北軍ニ據ルヲ得、遂ニ諸呂ヲ誅ス（中略）天下酈況ヲ交ヲ賣ルト稱ス」賣交とは利を見て義を忘るるをいふ、

【交ヲ杵臼ノ閒ニ定ム】 （杵臼）を見よ、

【交ヲ息ム】 世人と交際をやめる義（息交）を見よ、

【磨スレドモ磷セズ、涅スレドモ緇セズ】 （磨而不磷、涅而不緇）論語陽貨篇に「不曰堅乎、磨而不磷、不曰白乎、涅而不緇」とあり、磷ハ薄ろぐなり、涅は皂を染むるもの、至堅の物は磨けども薄ろぐことなく、至白の物は涅にて染むれども黑く染むことなしとの義にて、君子は濁亂の中に在りと雖も、汚がれざるに喩ふ、

【又一秦ヲ生ズ】 （又生一秦）秦は吾の仇なり、又更に一の讐を增すをいふ、史記張耳傳に「陳王大怒、欲盡族武臣等家、而發兵擊趙、陳王相國房君諫曰、秦未亡而誅武臣等家、此又生一秦也」

【復經濟ノ意アラズ】 （不復有經濟意）圓機活法に「裴度晚節頗ル浮沈シ、自安ノ計ヲ爲シ、マタ經濟ノ意アラズ、乃チ第ヲ東郭ニ治メ、野服蕭散、白居易・劉禹錫ト文章ヲ爲リ、酒ヲ把リ、並夜ヲ窮メテ相歡シ、人閒ノ事ヲ問ハズ」經濟とは經世濟民の義、

【復吳下ノ阿蒙ニ非ズ】 （非復吳下阿蒙）人の學識大に進みて、また昔日の比にあらざるを稱する辭なり、吳志に「孫權、呂蒙及ビ蔣欽ニ謂ヒテ曰ク、卿今、塗ニ當リ事ヲ掌ル、宜シク學問シテ以テ自ラ開益スベシト、蒙始メテ學ニ就ク、魯肅蒙ニ過ヒテ言議シ、蒙ガ背ヲ拊テ曰ク、吾謂ヘラク、大弟但武略アルノミト、今者學識英博、復タ吳下ノ阿蒙ニアラズト、蒙曰ク、士別レテ三日ナレバ、即チ當ニ目ヲ刮シテ相待ツベシ」とあり、阿は發語の辭なり、舊日の吳下の呂蒙に非ずとの義なり、

【復奚ゾ疑ハン】 陶潛の歸去來辭に「樂夫天命復奚疑」

【復碑ヲ立ツ】 （復立碑）唐書魏徵傳に「徵亡、帝思不已、閒者媢之、言徵錄前後諫諍語示史官、帝乃仆所爲碑、後思徵復立之」

【麼蟲】 小さき蟲、列子湯問に「江浦之閒、生——」麼は一音バ微なり、また細小なり、么麼と熟す、

【麻中ノ蓬】 （蓬麻中ニ）を見よ、

【麻苧】 「アサ」と「カラムシ」と、明一統志に「朝鮮國風俗、多衣——巾幘如唐」

【麻紵】 紵は麻の一種「イチビ」——は「アサノヌノ」宋史高麗傳に「少絲蠶、匹縑直銀十兩、多衣——」

【松】 字說に「松柏ハ木ノ長、猶ホ公ノ如シ、故ニ字公ニ从フ」論語に「歲寒、然後知松柏之後凋」禮記の禮器に「松柏之有心也、貫四時而不改柯易葉」史記龜筴

傳に「千歲之松、上有兎絲、下有伏苓」莊子に「天寒既至、霜雪既降、吾是以知松柏之茂也」漢官儀に「秦始皇上封泰山、逢疾風暴雨、賴得抱松樹、因封其樹爲五大夫」陶潛歸去來辭に「撫孤松而盤桓」またその詩に「冬嶺秀孤松」林寬の詩に「庭髙五粒松」五粒松は俗にいふ五葉の松なり、抱朴子に「大陵偃蓋之松、大谷倒生之柏、皆與天齊其長、地等其久」（響ヲ聞キ）を參看せよ、

【松ヲ夢ム】（夢松）吳錄に「丁固夢松樹生其腹上、人謂曰、松字十八公也、後十八年其爲公乎、遂如夢」

【末學】後學といふに同じ、自ら學問の淺薄なるを謙していふ、陳書儒林傳に「沈不害上書曰、臣ーー小生、詞無足算、輕黷瞽言、伏增悚惕」「ハシタガクモン」文選東京賦に「ーー膚受」

【先ヅ隗ヨリ始メヨ】（先從隗始）優れる者を得んとならば、先づ劣れる者より用ひよとの義、（隗ヨリ）を見よ、

【末減】末は薄、減は輕なり、刑罰を寬宥して、輕くするをいふ、左傳昭十四年に「三數叔父之惡、不爲ーー」

【末造】末世に造作せし事、よりて末世の義とす、禮記郊特牲に「諸侯之有冠禮、夏之ーー也」

【末作】商工の業などをいふ、古は農業を以て本とせしによりていふ、晉書に「農夫苦其業、而ーー不可禁也」

【抹殺】殺一に摋に作る、字林に「抹摋ハ滅ナリ」「スリケス」漢書谷永傳に「ーー災異」韓愈の孟郊墓誌の「惟其大翫於辭而與世抹摋」の註に「抹摋ハ掃滅ナリ」古、末殺ニ通用ス

【末疾】手足の「ヤマヒ」左傳昭元年の「風淫ーー」の註に「ーーハ四支ノ疾ナリ」

【末節】末の事をいふ、禮記の樂記に「鋪筵席、陳尊俎、列籩豆、以升降爲禮者、禮之末節也」

【末孫】遠き子孫をいふ、大戴禮少閒篇に「禹崩、十七世乃有ーー桀、武丁後九世、乃有ーー紂、皆不率先王明德而亡」末代孫に同じ、

【全ヲ求ムルノ毀】（求全毀）「ソシリ」を免れんことを求めて、反りて招くところの毀をいふ、孟子に「有不虞之譽、有ーー之ー」

【末利】古は農を本業とし、商工業を末業とす、ーーは「スヱ」の利にて商工の「マウケ」をいふ、後漢書に「理國之道、擧本業而抑ーー」

【茉莉】草木狀に「ーー花ハ南人其ノ芳秀ヲ憐ミ、競ヒ

テ之ヲ植ウ、女子ハ綵絲ヲ以テ花心ヲ穿チ、以テ首飾トナス」群芳譜に「ーー一名ハ抹麗、一名ハ沒利、一名ハ末麗、一名ハ抹厲、原ト波斯ニ出デ南海ニ移植ス、北人奈花ト名ヅク」三柳軒雜識に「ーー花ヲ狎客ト爲ス」三餘贅筆に「曾端伯、花ヲ以テ友ト爲シ、ーーヲ雅友トス、張敏叔、花ヲ以テ客ト爲シ、ーーヲ遠客トス」方回の詩に「香透紗廚ーー風」

茉莉　　宋　朱熹

噴然原處蘊、爲對夕花明　密葉低層幄　冰蕤亂玉英　不因秋露濕　詎識此香淸　預恐芳菲盡　微吟繞砌行

【政ハ蒲盧ノ如シ】（政如蒲盧）蒲盧は蒲葦なり、生じ易くして成長も速かなるものなり、以て政の擧ることの易く且つ速かなるに喩ふ、中庸に「夫政也者、蒲盧也」一解に「蒲盧ハ蜾蠃、土蜂ヲ謂フナリ、詩ニ曰ク、螟蛉有子、蜾蠃負之ト、螟蛉ハ桑蟲ナリ、蒲盧桑蟲ノ子ヲ取リ、去リテ之ヲ變化シ以テ成シ、己ノ子ト爲ス、政ノ百姓ニ於ケル、蒲盧ノ桑蟲ニ於ケルガ若ク然リ、爾雅ニ云フ蜾蠃ハ蒲盧、即チ今ノ細腰蜂ナリ」

【政魯衞ノ如シ】（政如魯衞）魯の祖周公、衞の祖康叔は、兄弟にして特に親む、故に其の政、相似たるをいふ、論語に「魯衞之政兄弟也」また漢書馮奉世傳に「大馮君小馮君兄弟繼踵相因循、聰明賢智惠吏民、ーーーー德化均、周公康叔猶二君」

【祭ハ豐年ニモ奢サズ】太平記卷九に見ゆ、禮記の王制に「祭豐年不奢、凶年不儉」とあるに本づく、

【末路】「イリマヘ」晩年に同じ、宋史趙蕃傳に「既耄猶患ーー之難、命所居曰難齋」英雄ーーなどと用ふ、

【先ヅ我ガ心ヲ獲タリ】（先獲我心）我より先に、我の思ふ通りの事をなしたるを喜ぶ義、詩經邶風綠衣篇に「絺兮綌兮、淒其以風、我思古人、實獲我心」とあり、淒は寒風なり、絺綌にして寒風に遇ふ、猶ほ己の時を過ぎて、棄てらるるがごときなり、故に古人の善く此の境遇に處る者を思ひ、眞に能く先づ我が心の求むる所ろを得たりとなり、

【先ヅ和風ヲシテ消息ヲ報ゼシム】白氏文集十七の春生に「先遣和風報消息、續教啼鳥說來由」春の來るを客の來るに喩へていへるなり、朗詠集の早春の條にも引けり、

【窗ニハ含ム西嶺千秋ノ雪】唐の杜甫の絶句の轉句なり、曰く「兩箇黄鸝鳴翠柳、一行白鷺上青天、窗含西嶺千秋雪、門泊東吳萬里船」この詩は、兩句一聯、四句一

絶といふものにて五言絶句にもこの如き例多し、二羽の黃鳥が、翠の柳に相呼びて鳴き、一と「ツラ」の白鷺が靑天に飛びあがる、黃翠相映じ、白靑相帶して奇麗愛すべし、又窗には西の嶺の千年も消えぬ雪を含みて明らかに見え、門には東の吳の萬里も遠き船が泊りてゐると、水邊の佳景を詠じたる詩なり、

【學ブニ暇アラズト謂フ者ハ暇アリト雖モ學ブ能ハズ】 (謂學不暇者、雖暇亦不能學矣)荀子の語、怠る者の暇なきを以て口實として學ばざるを誡めたるなり、本居宣長の「折折に遊ぶ暇はある人の暇なしとて文よまぬかな」の歌はこれに本づく、

【學ンデ厭ハズ】 學習して義理の窮りなきを知り、益勉めまなび久うして厭倦の意なきをいふ、孔子の語（人ヲ誨ヘテ）を見よ、

【學ンデ思ハザレバ則チ罔シ】 孔子の語「學而不思則罔、思而不學則殆」と、論語爲政篇に出づ、朱子曰く「コレヲ心ニ求メズ、故ニ昏クシテ得ルナシ、ソノ事ニ習ハズ、故ニ危クシテ安カラズ」

【摩尼】 梵語、珠の通名、離垢と譯す、又踰摩といふ、光淨にして染められず、龍王の腦中より出づ、この珠を得れば毒も害せず、火も燒かずといへり、飜譯名義集に「圓覺鈔又云如意謂意中所須財寶衣服飲食種種之物、此珠悉能出生、令人皆得如意、故名爲寶」

【速カザルノ客】 (不速之客)速は招なり、待ち設けざる客をいふ、易の需卦上六に「ーーーー三人來、敬之終吉」

【前ヲ跋ミ後ニ疐ク】 (跋前疐後)進退の難澁なる義、韓愈の進學解に「公不見信於人、私不見助於友、ーーーー、動輙得咎」疐一に躓に作る、義同じ（跋胡）を見よ、

【卍】 佛の胸前にての形相ありといふ、吉祥海雲と譯す、華嚴音義に「音之爲萬、謂吉祥萬德之所集也」

【幔帷】 「マク」司馬相如の長門賦に「張羅綺之ーー兮」

【滿籯】 籯は「カゴ」三四斗を受く、即ちーーは「カゴイッパイ」（子ニ黃金）を參看せよ、

【蔓衍】 廣がり延ぶるなり、楚辭に「菽藟兮ーー」漢書鼂錯傳に「土山丘陵、ーー相屬」舊唐書武宗紀に「三代以前未嘗有佛、漢魏之後、像敎寖興、因緣染習、ーー滋多」一解にーーは極りなきなりと、蔓延に同じ、

【滿ヲ持ス】 (持滿)孔子家語三恕に「孔子曰、吾聞宥坐之器、虛則欹、中則正、滿則覆、明君以爲至誡、故常置之於坐側（中略）子路進曰、敢問持滿有道乎、子曰、聰明容智、守之以愚、功被天下、守之以讓、勇力振世、守之以怯、富有四海、守之以謙、此所謂損之又損之之道也」と、滿ちて溢れざる義なり、淮南子に「周公可謂能持滿矣」

【滿ヲ引ク】 (引滿)弓を十分に「ヒキシボル」また「ナミナミトツギタル」杯をひきて飲む、漢書敍傳に「皆ーー擧白談笑大噱」

【滿假】 意滿ちて自ら大なりとする義、假は大なり、書經に「克勤于邦、克儉于家、不自ーー」

【滿漢名臣傳】 八十卷、撰者詳かならず、淸初より乾隆の末に至る、滿洲及び漢（支那本部）の名臣の傳を國史館の原本より抄錄したるものなり、

【萬鈞】 鈞は書經五子之歌の「關石和鈞」の疏に「三十斤ヲ鈞ト爲シ、四鈞ヲ石ト爲ス云云」

【曼漶】 字典に「不分別貌」と注す、分明ならざるなり、次條に同じ、

【漫漶】 分明ならざる貌、漢書揚雄傳に「爲其泰ーー而不可知」

【曼頰】 「キメ」細かに美くしき顏、淮南子修務訓に「ーー皓齒」

【滿腔子是惻隱之心】 腔は、說文に「內空ナリ」集韻に「骨體曰腔」とあり、子は助字、體軀の中に充滿するはこれ仁愛の心なりといふ義、惻は傷むの切なるなり、隱は痛むの深きなり、この語、近思錄道體篇に引けり、程明道の語、

【滿腔子都是春意】 體軀の中には、春の如き和氣が充滿せるをいふ、二程全書に出づ、程明道の語、

【萬刧】 萬世に同じ、儒に世といひ、道に塵といひ、佛に刧といふ、李白の詩に「蒼穹浩茫茫、ーー太極長」

【蔓草】 「ハビコレル」草、詩經鄭風に「野有ーー、零露漙兮」傳に「蔓ハ延ナリ」孟浩然の示孟郊詩に「ーー蔽極野、芝蘭結孤根」薛逢の漢武帝祠詩に「茂陵煙雨埋弓劍、石馬無聲ーー寒」

【蔓草寒烟】 「ハビコレル」草「サムキ」烟、城址などの荒れたる狀を形容す、吳融の秋色の詩に「染不成乾畫未消、霏霏拂拂又迢迢、曾從建業城邊過、ーーーー鎖六朝」方輿勝覽十四に「建康府ハ古ノ昇州、秦ニハ秣陵ト改メ、漢ニハ改メテ丹陽郡ト爲ス、吳ノ太帝京口ヨリ此ニ徙リ、因リテ改メテ建業ト爲ス云云」（六朝）を參看せよ、

【蔓草猶ホ除クベカラズ】 (蔓草猶不可除)事は微細の中に防がざれば、增長しては防ぐべからざるに喩ふ、

左傳隱元年に「姜氏何厭之有、不如早爲之所、無使滋蔓、蔓難圖也、蔓草猶不可除、況君之寵弟乎」と、一說に「蔓スレバ草猶ホ除クベカラズ」と讀むと、されども蔓草と熟して、寵弟の對語とする方、穩かなるに似たり、晉書王鑒傳に「蔓草猶不可長、況虎兕之寇乎」

【蹣跚】 跛行の貌「ヒヨロツク」鮑泉の述書賦に「婆娑――、綽約文質」蘇軾の詩に「侵尋作風痺、兩足幾――」

【曼辭】 美しく飾りたる辭なり、漢書司馬遷傳に「――自解」の注に「曼ハ美ナリ」戰國策に「夫從人飾辯曼辭、高生平之節行」

【滿洲源流考】 二十卷、淸の乾隆四十三年阿桂等勅を奉じて撰す、故に、具には欽定―――――といふ、滿洲の地誌を、部族・疆域・山川・國俗の四門に分ちて詳敍す、桂字は廣廷、雲巖と號す、仕へて武英殿大學士に至る、嘉慶二年卒す、年八十一、

【滿洲八旗】 （八旗兵）を見よ、

【滿室春ノ如シ】 室內が春の如く暖き義（暖香）を見よ、

【萬斯同】 字は季野、浙江鄞の人、黃宗羲の門に入り、劉蕺山の學を傳ふ、博く諸史に通じ、尤も明代の掌故に精し、王鴻緖の明史稿を撰する、徐乾學の讀禮通考を撰する、皆與りて大に力あり、康熙四十一年卒す、年六十、學者稱して石園先生といひ、文貞と私謚す、著すところ、歷代史表、儒林宗派、石園詩文集等十數種あり、

【滿城ノ風雨重陽ニ近シ】 （滿城風雨近重陽）詩話總龜に「謝無逸嘗テ潘大臨ニ問フ、新詩アリヤ否ヤト、答ヘテ曰ク、秋來景物件件是レ佳致アリ、昨日臥シテ風雨ノ林ヲ撹スル聲ヲ聞キテ―――――――ノ句ヲ得タルニ、忽チ催租吏至リ、遂ニ人意ヲ敗ル、只コノ一句ヲ奉寄スト」この事、冷齋夜話にも見ゆ、事文類聚に「謝無逸ガ溪堂集ニイフ、潘邠老、―――――――ノ句アリ、今重陽ヲ去ル四日ニシテ、風雨大ニ作ル、遂ニ邠老ノ句ヲ用ヒ、廣メテ三絕ヲ爲ル」

【滿酌】 酒を「イッパイ」つぐ、酉陽雜俎に「命吏――」

【幔幕】 「マク」說文に「幔ハ幕ナリ」廣雅に「幔ハ張ナリ」釋名に「幔ハ漫ナリ、漫漫トシテ相連綴スルノ言ナリ」幕は說文に「帷在上曰幕」廣雅に「幕ハ帳ナリ」釋名に「幕ハ絡ナリ、表ニ在ルノ稱ナリ」名畫錄に「以――遮蔽、不令相見」

【曼聲】 長き聲、淮南子汎論訓に「――之歌」注に「曼ハ長ナリ」また善く歌ふなり、同書覽冥訓に見ゆ、

【蔓菁】 「カブラ」詩經邶風の谷風篇に「采葑采菲、無以下體」の箋に「江南ニ菘アリ、江北ニ――アリ、相似テ異リ」禮記坊記の「采葑采菲」の注に「葑ハ――ナリ」晉書吐谷渾傳に「地宜大麥而多――、頗有菽粟」

【萬全】 （――）を見よ、

【瞞然】 （――）を見よ、

【曼陀羅】 梵語、雜色と飜す、また淨土の實相を具圖せるものの稱、即ち觀經一部を具さに寫しあらはしたるもの、陀一に茶に作る、

【曼陀羅華】 草の名、春莖を生ず、形狀、茄子に似て高サ二三尺、夏秋の間白花を開く、形「アサガホ」に似て長大なり、實圓く大サ一寸許、疣あり、故に「針ナスビ」の名もあり、この花葉を食へば狂亂す、故に「キチガヒナスビ」の名もあり、また梵語――――は適意華と譯す、光潔にして異香あり、見聞するもの身心適悅す、また色美意に適するなり、また白華とも譯す、摩訶――――は大白蓮の義なりといふ、法華經に「三十三天、雨天――――、供養寶塔」

【饅頭】 群談採餘十の卷に「漢ノ諸葛亮、孟獲ヲ征シ、凱ヲ奏シテ回ル日、瀘水ニ至ル、風濤シテ度ル能ハズ、人曰ク蠻ニ邪術多シ、須ラク神ニ禱ルベシ、常ノ例ニ、必ズ四十九人ノ頭ヲ殺シテ以テ之ヲ祭ルトキハ、怨鬼自ラ散ジテ方ニ渡ルベシト、亮曰ク、吾、師ヲ班シ都ニ回ル、安ゾ妄ニ一人ヲ殺ス可ケンヤ、吾自ラ主見アリト、乃チ雜ユルニ羊豕ノ肉ヲ用ヒ麵ニ和シテ、劑トナシ、假人ノ頭ヲ塑成シ、爲メニ饅頭トイヒ、祭文ヲ作リ以テマツル、遂ニ風息ミ、浪靜ニシテ渡ル可シ、コノ名遂ニ傳ハル」と、晉書束晳傳餅賦に「三春之初、陰陽交至、于時宴享、則――宜設」初學記には餅賦を引きて饅を曼に作れり、

【瞞著】 人の目を「クラマス」紛らかし欺く義、著は助字なり、字典に「匿情相欺、亦曰瞞」

【滿ハ損ヲ招キ、謙ハ益ヲ受ク】 （滿招損、謙受益）書經大禹謨に「滿招損、謙受益、時乃天道」の註に「滿損謙益ハ、卽チ易ニ所謂、天道ハ盈ルヲ虧キテ、而シテ謙ニ益ストイフ者ナリ」

【曼曼】 長き貌、離騷に「路――其修遠兮」曼或は漫に作る、次條を見よ、

【漫漫】 長遠なる貌、左思の吳都賦に「廓廣庭之――」また雲の長く「タナビケル」貌、江俺の文に「雲――而奇色」

また路の遠きにもいふ、離騒に「路——其修遠兮」
また夜の長きにもいふ、甯戚飯牛の歌に「從昏薄夜半、長夜——何時旦」
また水の長き貌、劉長卿の詩に「春山無限水——」

【瞞瞞然】 目明かならざるなり、一解に目を閉づる貌、荀子非十二子篇に「酒食聲色之中則——」

【漫滅】 文字などの「スリキエル」義、後漢書禰衡傳に「初游洛下、始達潁川、陰懷一刺、既而無所之、至刺字——」

【滿面春風】 顏「イッパイ」の喜氣をいふ、王實甫の麗春堂曲の語、

【孟浪】 猶ほ漫爛といふ如し、趣舍する所ろ無きの謂なり、莊子の齊物論に「夫子以爲孟浪之言、而我以爲妙道之行也」とあり、孟浪は著實ならざるなり、また精要ならざる貌、文選の左思の呉都賦に「若吾子之所傳、——之遊言」

【漫浪】 (孟浪)に同じ、

【漫漶】 逸にして「トリトメ」なき義、韓愈の送鄭尚書序に「颶風一日踔數千里、——不見蹤跡」

【滿讕】 欺き誣ひるなり、漢書谷永傳に「——誣天」註に「——ハ欺罔ヲ謂フナリ」

【豆ヲ煮ルニ萁ヲ然ク】 (煮豆然萁)兄弟相害ふをいふ(七歩ノ才)を見よ、

【摩滅】 文字などの「スリキエタル」義、孔安國の尙書序に「錯亂——、弗可復知」漫滅に同じ、

【摩耶夫人】 淨飯王の后、釋尊の母なり、白象胎内に宿りしと夢みて釋尊を生めり、西域記に「摩訶摩耶、唐言大術、或言大幻」

【眉】 說文に「目上毛也」蛾眉は蠶蛾の如き美くしき眉、詩經に「螓首蛾眉」とあり、雙眉は兩方の眉、南史梁簡文帝紀に「帝方頤豐下、須髮如畫、直髮委地、雙眉翠色云云」兩眉に同じ、劉克莊の詩に「贏得閑愁上兩眉」秀眉は秀でたる眉、南史に「何點明目秀眉容貌方雅」

【眉ヲ蹙ク】 (婦ノ爲メニ)また(顰眉)を見よ、

【眉ヲ伸ブ】 (伸眉)安んじて憂なきをいふ、漢書薛宣傳に「可復——於後」釋曇遷の詩に「愁眉始得伸」

【眉ヲ舒ブ】 (舒眉)憂を忘れて樂める貌、伸眉に同じ、黃滔の詩に「軒然談笑一——」

【眉ヨリモ翠ナリ】 (翠於眉)白居易の詩に「巫女廟花紅似粉、昭君村柳——」

【迷フ者ハ路ヲ問ハズ】 (迷者ハ)を見よ、

【魔羅】 梵語、障礙また奪命の義、利、樂、欲、怒、惱、詐等

すべて修道の障害となるもの(魔)を見よ、また轉じて陰盜の隱語とす、蓋し障礙の最なればなり、

【摩利支天】 佛教にて火星の女神の名、大神通力を有するを以て武士の守本尊とす、また梵語、陽炎(カゲロフ)の義、

【摩壘】 「トリデ」に迫り近づく義、左傳宣十二年に「——而還」

【磨礱】 玉篇に「磨、磑爲礱」と「イシウス」漢書枚乘傳に「——砥礪、不見其損、有時而盡」轉じて學業を「トギミガク」に用ふ、荀子性惡に「鈍金必將礱厲然後利」

半依巖岫半雲端
獨立亭亭耐歲寒
一事頗爲淸節累
秦時曾作大夫官

詠松　宋　陳元信

旋斫松枝架作棚
若彎如戟甚崢嶸
消除北愛蓮北恨
遮却斜陽露月明

松棚　宋　李師中

月好好獨坐
雙松在前軒
西南微風來
潛入枝葉間
蕭寥發爲聲
半夜明月前
寒山颯颯雨
秋琴泠泠絃
一聞滌炎暑
再聽破昏煩
竟夕遂不寐
心體俱翛然
南陌車馬動
西鄰歌吹繁
誰知茲簷下
滿耳不爲喧

松聲　唐　白居易

ミ

【木乃伊】 洋語の訛ならんといふ、陶宗儀輟耕錄に「回回地有年七十八歲老人、自願捨身濟衆者、絕不飲食、惟澡身啖蜜、經月便溺皆蜜、既死、國人殮以石棺、仍滿用蜜浸、鐫志歲月於棺蓋、瘞之俟百年後啓封、則蜜劑也、凡人損折肢體食少許立愈、雖彼中亦不多得、俗曰蜜人番言――」本草綱目人部に――の條あり、その集解にこの輟耕錄を引きて、末に「陶氏所載如此、不知果有否、姑附卷末以俟博識」といへり、

【身ヲ漆シ、炭ヲ吞ム】（漆身吞炭）下の故事に因りて、復讐の爲めに、身を苦むる義に用ふ、史記刺客傳に「豫讓又漆身爲厲、吞炭爲啞」と、漆は毒あり、之に近づけば多く疥癘を患へ、癩病の如し、故に之を身に塗りて癩病の如くせしなり、厲は癩に同じ、惡瘡なり、

【身ヲ乞フ】（乞身）身は君に奉りし所ろ、之を乞ふは即ち仕を致す義、後漢書李通傳に「以病上書――」また歐陽修の詩に「晚節恩深許乞身」

【身ヲ殺シテ以テ仁ヲ成ス】（殺身以成仁）生命を捐てて心の德を全うするの義、論語衞靈公篇に「子曰志士仁人無求生以害仁、有――――」

【軀ヲ捐テ難ヲ濟フ】（捐軀濟難）一身をすてて國難を救ふこと、曹植の表に「愛國忘家――――」晉書郄鑒傳に「捐軀九原、不足以報」

【身ヲ捨テ佛ニ施ス】（捨身施佛）韓愈の論佛骨表に見ゆ、通鑑梁紀、中大通元年九月癸巳に「上同泰寺ニ幸シ、御服ヲ釋ギ、法衣ヲ持ツ清淨ノ大捨ヲ行ヒ、素牀瓦器、小車ニ乘リ、私人役ヲ執リ、甲午ニハ親シク涅槃經ヲ講ズ、群臣錢億萬ヲ以テ皇帝ヲ贖ヒ、表シテ宮ニ還ランコトヲ請フ、之ヲ許ス云云」

【身ヲ立ツルハ孝悌ヲ以テ基トナス】（立身以孝悌爲基）唐書柳玭傳に「――――――、以恭默爲本、以畏怯爲務、以勤儉爲法」

【躬ヲ直クシテ父ヲ證ス】（直躬證父）正直に過ぎたるは、反りて眞の直道に合はざるの義 莊子に「――」尾生溺死、信之患也」とあり、論語子路篇に「葉公語孔子曰、吾黨有直躬者、其父攘羊而子證之、孔子曰、吾黨之直者異於是、父爲子隱、子爲父隱、直在其中矣」とあるに本づく、

【身ヲ以テ物ニ役セラル】（以身役物）操持する所ろ堅固ならずして、物欲の爲めに動かさるるをいふ、淮南子に「聖人不――――」

【身ヲ以テ利ニ殉ズ】（以身殉利）殉は從なり、逐なり、生命を棄て、物に從ふをいふ、莊子に「小人則――――、士則以身殉名、大夫則以身殉家、聖人則以身殉天下」また史記賈誼傳に「貪者殉財兮、烈士殉名兮、夸者死權兮、品庶馮生」夸者死權とは、權勢を貪りて、自ら誇る者はこれが爲めに死するをいふ、品庶は、衆人をいふ、

【身ヲ忘レ家ヲ忘ル】（忘身忘家）人臣たる者は、身家を忘れて君に忠し、國を愛するをいふ、漢書賈誼傳に「化成俗定、則爲人臣者、主耳忘身、國耳忘家、公耳忘私」

【未見ノ書ヲ讀ム】（讀未見書）事文類聚別集卷四に「章帝詔黃香詣東觀、讀所未見書」東觀は閣の名、（未ダ嘗テ見ザル）を參看せよ、

【詔】 說文に「告也」とあり、古は上下通用せしが、秦以後天子の御言宣に限り用ふ、わが國にては、臨時の大事に詔と書し尋常の小事に敕と書する例なり、

【身衣ニ勝ヘザル如シ】（如不勝衣）衰弱の甚しきなり（衣ニ勝ヘ）を見よ、

【鷦鷯】（――深林ニ）を見よ、

【三タビ肱ヲ折リテ良醫トナル】（三折肱爲良醫）書言故事に「人事變ヲ更歷スルヲ三折肱トイフ」と、左傳定十三年に見ゆる語、楚辭に「九折臂而成醫兮」とあるも同じ、

【妄自尊大】 妄りに己のみ貴しとして他を輕んずるをいふ、後漢書馬援傳に「子陽井底蛙耳、而――――」

【道】 人の通行する道路、說文に「所行道也」詩經小雅に「周道如砥」また人の履行すべき理義、廣韻に「道理也、衆妙皆道也、合三才萬物共由者也」易の繫辭に「一陰一陽之謂道」また曰く「立天之道曰陰與陽、立地之道曰柔與剛、立人之道曰仁與義」書經大禹謨に「道心惟微」史記日者列傳に「道高益安、勢高益危」文子に「道狹任智、德薄任刑」また「樂道而忘賤、安德而忘貧」禮記の樂記に「以道制欲則樂而不亂、以欲忘道則惑而不樂」韓非子に「道譬之若劍戟、愚人以行忿則禍生、聖人以誅暴則福成」莊子に「知道者必達於理、達於理者必明於權」淮南子に「釋道任智者必危、棄數

而用」才者必困」また「得道者窮而不懾、達而不榮、處高而不機、持盈而不傾」程子曰く「道者文之根本、文者道之枝葉」

【途遺ヲ拾ハズ】（途不拾遺）史記に「齊威王曰、吾有臣種首者、使備盜賊、則道不拾遺」次條を見よ、

【道遺ヲ拾ハズ】（道不拾遺）道におちたる物をも拾はざるは、廉直の風行はるるに由る、戰國策に「朞年之後、ーーーー」また成語考に「ーーーー、由在上有善政」この註に「孔子魯ノ司寇トナリ、相ノ事ヲ攝行ス、三月ニシテ路遺ヲ拾ハズ、男女路ヲ異ニシ、貨、價ヲ二ニセズ、魯遂ニ大ニ治マル」道、途、同じ

【道ヲ得】（得道）道德を身に行ひ得る義、素問金匱眞言論に「非其人勿敎、非其眞勿授、是謂ーー」

【道ヲ憂ヒテ貧ヲ憂ヘズ】（憂道不憂貧）わが道德の修らざるを憂ひて、家の貧しきを憂へずとの義、陶潛の懷古田舍に「先師有遺訓、憂道不憂貧」

【路ヲ異ニシテ歸ヲ同ウス】（異路而同歸）行ふ所ろは異なるも、歸著する所ろは同じきをいふ、淮南子に「五帝三王、殊事而同指、ーーーー」（同歸ニシテ）を見よ、

【道同ジカラザレバ、相爲メニ謀ラズ】（道不同不相爲謀）論語の衞靈公篇に出づ、孔子の語、操る所ろの道同じからざれば、相共にうちよりて謀らざる義、史記老子傳に「世之學老子者、則絀儒學、儒學亦絀老子、ーーーーーー豈謂是邪」史記伯夷傳にもこの語を引き、下に「各從其志也」とあり、

【道ヲ守ルハ官ヲ守ルニ如カズ】（守道不如守官）能く官を守り、その職に盡すは、則ち道を守るの要旨たるをいふ、齊侯獵する時、虞人を招くに其の道を以てせず、故に虞人が招に應せざりしを嘉みしていへるなり、左傳に「仲尼曰、ーーーーーー、君子韙之」

【道邇シト雖モ行カザレバ至ラズ】 荀子修身篇に「道雖邇不行不至、事雖小不爲不成」とあり、

【道塗炭ニ墜ヌ】 太平記卷の一に見ゆ、書經に「有夏昏德、民墜塗炭」とあり、塗は泥なり、水火の苦といふに同じ、

【道ニ聽キ塗ニ說ク】（道聽塗說）を見よ、

【道ノ傍ノ碑ノ文ヲバ、コヒ願ハザル心ナリ】 十訓抄の序に見ゆ、支那にて道傍に德政を頌する碑を建つるに、徒に虛語諛辭のみ多くして實を失するが常なり、かかる虛辭を書きつらねたる文をば願はず、只管事實のみを記述せんとの義、白居易の青石の詩に

「靑石出自藍田山、兼車運載來長安、工人磨琢欲何用、石不能言我代言、不願作人家墓前神道碣、墳土未乾名已滅、不願作官家道傍德政碑、不鐫實錄鐫虛辭」云云」詳しくは白氏文集につきて見よ、

【道ノ大原天ニ出ヅ】（道之大原出於天）駿臺雜話の「異說まちまち」の條に「道は天に出でて」とあるは、この語に本づく、董仲舒の對策に「ーーーーーー、天不變道亦不變」云云

【道ハ一原ニ出ヅ】（道出一原）道理はもと一に出でて、二途なきの義、淮南子に「ーーーー、通九門、散六衢」九門は天門、六衢は六合の衢、

【道ハ邇ニ在リテ、遠ニ求ム】（道在邇而求遠）道理は卑近にして、我身に切なる處に存ずるものなるに、之を考求する人、その方法を誤り、徒に高遠に馳す、故に一も得ること能はざるの義、孟子の離婁上篇に「ーーーーー諸ー、事在易而求諸難」もと邇を爾に作る、同じ、また淮南子に「道在易而求之難、驗在近而求之遠」とあるも、意は同じ、鶴林玉露に「子曰ク道不遠人、孟子曰ク、道在邇而求諸遠ト、尼悟道トイフモノノ詩アリ云フ、盡日尋春不見春、芒鞋踏遍隴頭雲、歸來笑撚梅花嗅、春在枝頭已十分、亦脫灑ニシテ喜ブベシ」

【水】 說文に「準也」管子水地篇に「水者地之血氣、如筋脉之通流者也」淮南子天文訓に「積陰之寒氣爲水」禮記曲禮に「凡祭宗廟之禮水曰淸滌」皇極經世書に「在水者不暝」芝田錄に、門鑰必ず魚を以てす、その暝せずして日夜を守るの義に取る）淮南子に「水濁則魚噞」また「水廣者魚大、山高者木脩」また「水擊則波興、氣亂則智昏」また「水流不爭先、故疾而不遲」韓詩外傳に「水濁則魚喁、令苛則民亂」周易文言に「水流濕、火就燥、雲從龍、風從虎」孫子虛實に「水因地而制流、兵因敵制勝」說苑に「水倍源則川竭、人倍信則名不達」莊子に「水之積也不厚、則其負大舟也無力」史記周本紀、召穆公の語に「爲水者決之使導、爲民者宣之使言」揚子法言君子篇に「水避礙則通于理」史記范雎蔡澤傳に「鑑於水者見面之容、鑑於人者知吉與凶」尸子に「水積而生吞舟之魚、土積而生楩枏豫章」鄧析子に「水濁則無掉尾之魚、政苛則無逸樂之士」文子に「水之性欲淸、沙石濊之、人之性欲平、嗜欲害之」（濊は濁なり）孔叢子にも「水之性淸、而土壤汨之、人之性安、而嗜欲亂之」とあり、

【水到渠成】 水が流れ來りて自然に「ミゾ」の出來るを

いふ、學問を積めば自ら道の修るに喩ふ、朱子文集に「答路德章」曰「所喩ーーーー之說、意思畢竟在渠上未放、水東流時、已先作屈曲勢備了矣」范成大の詩に「學問根深、方蒂固、功名水到自渠成」

【水至リテ清ケレバ則チ魚ナシ】（水至清則無魚）人至りて明察なれば、人に疾畏せらる、故に孤立して徒侶黨援無きに至るに喩ふ、文選の東方朔の答客難文に「水至清則無魚、人至察則無徒」とあり、この語、孔子家語にも出づ（水清ケレバ）を參看せよ、

【湖】陸にて圍まれたる大水をいふ、說文に「ーハ大陂ナリ」周禮夏官職方氏に「揚州其浸五湖」註に「五湖一名震澤、一名笠澤、今太湖之別名也」水經の註に「五湖ハ長塘湖・太湖・射貴湖・上湖・滆湖ヲ謂フ」

春題湖上　白居易

湖上春來似畫圖、亂峰圍繞水平鋪、松排山面千重翠、月點波心一顆珠、碧毯線頭抽早稻、青羅裙帶展新蒲、未能抛得杭州去、一半勾留是此湖、

また州の名、廣輿記に「湖州ハ浙江ニ屬ス、呉ニ呉興ト曰ヒ、隋唐ニ湖州トイフ、今湖州府ト爲ス」

【密雲雨フラズ】雲が凝り聚りて雨ふらざる義、易の小畜に「密雲不雨、自我西郊」雲は陰陽の氣、二氣交りて和するときは雨を成す、陽倡ひて陰和順すればなり、若し陰、陽に先つときは不順にして和せず、故に雨を成すこと能はざるなり　西郊は陰の方なり、陰より倡ふが故に和せずして雨を成すこと能はざるなりとの義、

【水ヲ掬スレバ、月手ニ在リ】自然妙得の義をいふ、于良史の春山月夜の詩に「春山多勝事、賞玩夜忘歸、掬水月在手、弄花香滿衣」掬は、說文に「撮也」とあり、正字通に「今俗謂兩手所奉、爲一掬」とあり、

【水ヲ聽クノ狐】（聽水狐）述征記に「北風勁ク、河氷始メテ合スレバ、狐ノ行クヲ須ツヲ要ス、云フ此ノ物、善ク聽ク、氷河ニ水聲ナキヲ聽キ、然ル後ニ河ヲ過グ」溫庭筠の詩に「疑惺ーーー」

【水落石出】冬月江水減じて水中の石のあらはるる義、蘇軾の後赤壁賦に「山高月小ーーーー」

【密函】函は「フバコ」轉じて書簡の義にも用ふ、ーーは祕密の「フバコ」南史に「ーー去來、日中以十數」

【自ラ欺クナシ】（毋自欺）大學に「所謂誠其意者、ーーーー也」

【自ラ顧ミテ耳ヲ見ル】圓機活法に「劉先主身ノ長七尺五寸、手ヲ垂レテ膝ニ下リ、自ラ顧ミテ其ノ耳ヲ

見ル」

【自ラ知ル】自分で自分の心を知る、中說に「李密問英雄、子曰、ーー者英、自勝者雄」太平御覽に「善知人者如鏡、善ーー者如蚌、鏡以曜明、故鑒人、蚌以含珠、故內照」

【自ラ訟ム】訟は責なり、口言はずして、心自ら咎むるなり、論語に「吾未見能見其過而內ーー者也」とあり、

【自ラ多トス】（自多）呂覽の謹聽篇の字面、註に「自多ハ自賢也」とあり、

【自ラ持ス】（自持）自ら己の行を持する義、史記儒林傳に「兒寬爲人溫良有廉智、ーー而善著書」子虛賦に「泊乎無爲、澹乎ーー」

【自ラ彊メテ息マズ】（自彊不息）彊は健なり、強に同じ、易の乾卦に「天行健、君子以ーーーー」とあり、天の運行して息まざるは、至健にあらざれば能はず、君子は之に法り、自ら彊めて善を爲し、息む時なきをいふ、

【自ラ恥ヅ】（自恥）自ら心に恥づることを知りて惡を爲さざるをいふ、申鑒に「ーー者本也、恥諸神明、其次也、恥諸人外矣、夫惟外則慝積于內矣、故君子審乎自恥」

【自ラ卑クス】（自卑）禮記に「夫禮者ーー而尊人」また「君子雖ーー而民敬尊之」

【自ラ富貴ヲ取ル】（自取富貴）事文類聚別集十六卷に「北齊高昂曰、男兒當橫行天下ーーーー、誰能端坐讀書、作老博士也」

【自ラ咎ム】（自咎）自らむちうちて責むる、五代史王殷傳に見ゆ、

【自ラ名山ヲ愛シテ剡中ニ入ル】（鱸魚ノ）を見よ、

【自ラ怡ブ】（自怡）陶弘景の詩に「祗可自怡悅」杜甫の詩に「薄劣慚眞隱、幽偏得ーー」

【自ラ嗤フ】（自嗤）拾遺記に「石季倫有愛婢、曰翔風、年三十、季倫乃退爲房老、翔風怨而作詩云、春葉誰不美、卒傷秋落時、坐見芳時歇、憔悴空ーー」

【水清ケレバ大魚ナシ】（水清無大魚）水至りて清ければ、魚の隱るる場なきため、大魚すまず、以て人明察なれば、他に畏憚せられて友なきに至るに喩ふ、後漢書班超傳に「任尙代、爲都護、請敎、超曰、君性嚴急、ーーーー、宜蕩佚簡易」（水至リテ清ケレバ）を參看せよ、

【密敎】佛の密意の敎法にして大日如來所說の金胎兩部をいふ、また眞言宗をいふ、

【密嚴淨土】極樂世界の別稱、密嚴經に「佛已超過彼、而

依密嚴住極樂莊嚴國世尊无量壽」

【密爾】密は靜なり、安なり、沈默の義、班固の答賓戲に「――娛斯文」

【密邇】邇は近なり、――は近接の義、書經太甲に「――先王」また左傳文十七年に「以陳蔡之――于楚、而不敢貳焉」

【水滴リテ石穿ツ】（水滴石穿）「スコシ」の事も、久しきを積めば、大となるに喩ふ、鶴林玉露に「張乖崖、崇陽ノ令ト爲リシトキ、一吏庫中ヨリ出ヅ、其鬢ノ傍巾ノ下ヲ視ルニ、一錢アリ、之ヲ詰レバ、乃チ庫中ノ錢ナリ、乖崖命ジテ之ヲ杖タシム、吏勃然トシテ曰ク、一錢何ゾ道フニ足ラン、乃チ我ヲ杖タンヤ、爾能ク我ヲ杖ツモ、我ヲ斬ル能ハザルナリト、乖崖筆ヲ援リ判シテイフ、一日一錢、千日千錢、繩鋸シテ木斷チ、水滴リテ石穿ツ、自ラ劒ヲ杖ツキテ堦ヲ下リ、其ノ首ヲ斬リ、臺府ニ申シテ自ラ劾ス、崇陽ノ人今ニ至ルマデ之ヲ傳フ、蓋シ五代ヨリ以來、軍卒將帥ヲ陵ギ、胥吏長官ヲ陵グ、餘風此ニ至ル、時猶ホ未ダ盡ク除カズ、乖崖ガ此ノ舉、一錢ノ爲メニシテ設クルニアラズ、其ノ意深シ、其ノ事偉ナリ」

【蜜人】木乃伊をいふ（木乃伊）を見よ、

【蜜酒】宋史三佛齊國傳に「有花酒・椰子酒・檳榔酒――、皆非麴蘗所醞、飲之亦醉」蘇軾の詩に「高燒銀燭斟――」

【水盜泉ト名ヅケテ孔子飮マズ】（邑勝母ト）を見よ、

【水積ミテ川ヲ成ス】（水積成川）說苑に「――――則蛟龍生焉、土積成山則豫章生焉、學積成聖、尊顯至焉」荀子勸學篇にも類語あり、

【水積ミテ江海ヲ成ス】（水積而成江海）鹽鐵論の語、下に「行積而成君子」の句あり（土積ンデ山）を參看せよ、

【水流レテ心不競、雲在テ意倶遲】杜詩詳註卷十に、江亭の題にて「坦腹江亭暖、長吟野望時、――――、――――、寂寂春將晚、欣欣物自私、故林歸未得、排悶强裁詩」と、註に「上ノ四ハ江亭ノ景、下ハ乃チ景ニ對シテ懷ニ感ズ、水流レテ滯ラズ、心亦此ニ從ヒテ競フナシ、閑雲自在、意之ト倶ニ遲シ、二句物外ニ淡然トシテ優游トシテ化ヲ觀ルノ意アリ云云」

【水ニ鏡セズシテ人ニ鏡ス】墨子に「君子不鏡於水、鏡於人、鏡於水見面之容、鏡於人則知吉與凶」

【水ニ四德アリ】尹子に「水有四德、沐浴羣生、通流萬物仁也、揚清激濁、蕩去滓穢義也、柔而難犯、弱而難

勝勇也、道江疏河、惡盈流謙智也」とあり、

【水ニ近キ樓臺ハ先ヅ月ヲ得】（近水樓臺先得月）勢力ある人に、緣故あるものは、早く地位を得るに喩ふ、事文類聚薦舉門に「范文正、杭州ニ知タリ、蘇麟屬縣ノ巡檢トナル、城中ノ兵官、往往ニ皆薦書ヲ獲タリ、獨リ麟外邑ニ在リテ、未ダ收錄セラレズ、公事ニ因リ府ニ入ル、詩ヲ獻ジテ曰ク、近水樓臺先得月、向陽花木易爲春ト、文正之ヲ薦ム」

【水ハ方圓ノ器ニ隨フ】民の善惡は、君の善惡に隨ふ義、韓非子に「孔子曰ク、人ノ君タル者ハ、猶ホ盂ノ如シ、民ハ猶ホ水ノ如キナリ、盂方ナレバ、水方ナリ、盂圜（まどか）ナレバ、水圜ナリ」とあり、また荀子に「君ハ槃ナリ、槃圓ニシテ水圓ナリ、君ハ盂ナリ、盂方ニシテ水方ナリ」とあり、白樂天の詩にも「無情水任方圓器、不繫舟隨去住風」とあり、俚諺にも「水は方圓の器に隨ひ、人は善惡の友による」とあり、

【水廣ケレバ魚游ブ】（水廣則魚游）人仁義を積むときは人自ら歸服するに喩ふ（林深ケレバ）を見よ、

【密勿】黽勉なり「ツトメハゲム」漢書劉向傳に「君子獨處、守正不撓、衆枉勉彊、以從王事、反見憎毒讒愬、故其詩曰、――從事、不敢告勞、無罪無辜、讒口嗷嗷」

また君上に近づく義、又臺閣の大臣樞要の、政務の義にも用ふ、魏志杜恕傳に「與出政事、――大臣寧有懇懇憂此者乎」また班固の表に「雖――在公、而身出心隱、不殉名而求譽、不馳騖以要寵」李白の詩に「布衣侍丹墀、――草絲綸」

【蜜蜂】「ミツバチ」杜甫の弊廬遺興奉寄嚴公詩に「風輕粉蝶喜、花暖――喧」

【密網】「コマカナルアミ」以て法令の苛細なるに喩ふ、史記酷吏傳に「昔天下之網、嘗密矣」

【水能ク舟ヲ載セ、又能ク舟ヲ覆ス】（水能載舟又能覆舟）民は君を養ふと雖も、亦君を害ふことあるに喩ふ、荀子王制篇に「君者舟也、庶人者水也、水則載舟、水則覆舟」魏志王基傳に「古人以水喩民、曰水所以載舟、亦所以覆舟、故在民上者不可以不戒懼」

【盈ツルヲ虧キテ謙ニ益ス】（虧盈而益謙）易の語、列子の「損盈成虧」と同じ、史記蔡澤傳に「語曰、日中則移、月盈則虧云云」（天道ハ）を見よ、

【咸一德アリ】（咸有一德）君臣皆純一の德あるなり、書經の咸有一德篇に「惟尹躬曁湯、――――、克享天心、受天明命、以有九有之師、爰革夏正」一德とは、純一の德、雜らず、息まざるの義、尹は伊尹なり、湯王の

君臣皆一德あり、故に能く上天心に當り、天の明命を受けて天下を有てり、是に於て夏の建寅の正を改めて建丑の正と爲すとの義、

◎

【身ノ後ニハ黄金ヲオシテ北斗ヲササフトモ云云】 徒然草に見ゆ、白氏文集に「身後堆金拄北斗、不如生前一樽酒」とあるに本づく、蓋し堆の字を推の字に誤り讀みたるならんか、

【身爲糞土ト爲ラン】（身爲糞土）賤み惡まれて棄て殺さるる義、戰國策に「一日倍約ーーーー」

【耳】 說文に「ー主聽也」淮南子に「附耳之言、聞于千里」說苑に「耳聞之不如目見之、目見之不如足踐之、足踐之不如手辨之」韓琦の和過錄にも、耳聞は目見に如かずとあり、鶡冠子に「耳之主聽、目之主明、一葉蔽目、不見泰山、兩豆塞耳、不聞雷霆」（自ラ煩ミ）を見よ、

【耳ヲ掩ヒテ鈴ヲ盜ム】（掩耳盜鈴）惡事を行ひて、人の聞かんことをおそれ、自ら耳を掩ふとも、其の效なきをいふ、吳虎臣の能改齋漫錄に「諺ニ掩耳偸鈴トイフヿアリ、鈴ニアラザルナリ、鐘ナリ、亦本ヅク所ロアリ、按ズルニ呂氏春秋ニ、范氏亡ブ、其ノ鐘ヲ得ル者アリ、負ヒテ走ラント欲スレドモ、則チ大鐘負フベカラズ、椎ヲ以テ之ヲ毀ル、鐘鏗然トシテ音アリ、人ノ之ヲ聞キテ己ニ奪ハンヿヲ恐レ、遽カニ其ノ耳ヲ掩フ、其ノ過ヲ聞クヿヲ惡ムモ亦猶ホ此ノ如シ」とあり、この事は淮南子にも見ゆ、隋紀にも「李淵曰、此可謂掩耳盜鈴」朱熹の江德功に答へたるに「成書不出姓名以避近名之譏、此與掩耳偸鈴之見何異」

【耳ヲ屬ス】（屬耳）屬は注なり、耳を注ぎてよく聽くをいふ、戰國策に「趙使者來ーー」詩經に「耳屬于垣」また屬耳は「コノゴロノミ」とも讀む、漢書霍光傳に「將軍之廣明都郎ーー」都は習なり、

◎

【耳ヲ植ツ】（植耳）耳を竦てて聽くをいふ、淮南子に「諸侯必ーー」

【耳ヲ貴ビテ目ヲ賤シム】（貴耳賤目）耳に聞くとこみをたふとび、目に見るところをいやしむ義、桓子新論に「世咸尊古卑今、貴所聞賤所見」と、文選張平子の東京賦に「若客所謂末學膚受、貴耳而賤目者也」顏氏家訓に「世人多蔽、ーーーー」

【耳聽ヲ加フ】（耳加聽）耳が益よく聞えるやうに賢くなりたる義、說苑に「齊桓公得管仲隰朋、曰吾得聽二子之言、吾目加明ーーー」

【耳ニ入リ心ニ著ク】（入乎耳著乎心）敎を聽きて、よく心に留めて、忘れざるをいふ、荀子勸學篇に「君子之學也、ーーー、ーーー」

【耳ニ入リテ煩シカラズ】（入耳不煩）媚びへつらふ言は、耳に入りて聞苦しきことなしとの義、韓愈の送李愿歸盤谷序に「才俊滿前、道古今而譽盛德、ーーーー」とあり、一解に言語を簡略にして敢て瀆聽せしめざるなりと、

【耳熱】 十分に酒に醉ひたる義、漢書楊惲傳に「酒後ーー、仰天拊缶而呼烏烏」缶は瓦器、秦人以て樂器とす、

【民彝】 人の秉執するところの常の道をいふ、父子あれば孳孝の道あるが如し、彝は常なり、詩經大雅烝民篇に「天生烝民、有物有則、民之秉彝、好是懿德」

【明一統志】（大明一統志）を見よ、

【民隱】 隱は痛なり、民の痛み苦むをいふ、東京賦に「勤恤ーー而除其眚」

【明史】 三百三十二卷、目錄四卷、正史にして二十四史の一、淸の保和殿大學士、張廷玉等、世宗の勅を奉じて撰す、本紀列傳志表共に備はる、この書の材料は多く明史稿より取れり、

【明史稿】 三百十卷、目錄三卷、淸の王鴻緖撰す、本紀・志表列傳より成る、明史は全く此の書に據りて編せり、和版あれども極めて稀なり、

【明ノ七才子】（李夢陽）また（李攀龍）を見よ、

【明ノ十才子】 明代の詩人十人聚りて徒を成すをいふ、學山錄に「李夢陽與同時者何景明・徐禎卿・邊貢・顧璘・鄭善夫・陳沂・朱應登・康海・王九思、號十才子、見李夢陽傳」

【明儒學案】 六十二卷、淸の黃宗羲撰す、明代諸儒の學案なり、目を崇仁學案・白沙學案・河東學案・三原學案・姚江學案・附（浙中王門學案・江右王門學案・南中王門學案・北方王門學案・粵閩王門學案）止修學案・泰州學案・甘泉學案・諸儒學案・東林學案・蕺山學案に分つ、毎學案先づ小序あり、次に各人の略傳と學說とを揭げたり、宋元學案（一百卷）と倂せて學者に益する少しとせず、

【明ノ王鏊ガ唐詩ヲ論ズトテ云云】 駿臺雜話「詩文の評品」に見ゆ、こは徐師曾の文章綱領に「明王鏊曰、余讀詩、至綠衣・燕燕・碩人・黍離等篇、有言外無窮之感、後世唯唐人詩、或有此意、如薛王沈醉壽王醒、不涉諷刺、而諷刺之意、溢於言外、君向瀟湘我向秦、不言悵別、而悵別之戀、溢於言外、凝碧池邊奏管絃、不言亡國、而亡國之痛、溢於言外、溪水悠悠春自來、不言懷友、而懷友之意、溢於言外、潮打空城寂寞回、不言興亡、而興

亡之威、溢於言外、得風人之旨矣」とあるを斥す、王鏊字は濟之、吳縣の人、成化乙未の進士、編修を授けられ、仕へて少傅武英傳大學士に至り、相位に進みしが、權奸の爲めに阨せられ、致仕して歸る、卒して大傅を贈り、文恪と謚せらる、文集あり世に行はる、因にいふ、溪水悠悠の詩は、劉禹錫の、傷愚溪に「溪水悠悠春自來、草堂無主燕飛回、隔籬唯見中庭草、一樹山榴依舊開」とある是れなり、また潮打空城の詩は、同人の石頭城の詩に「山圍故國周遭在、潮打空城寂寞回、淮水東邊舊時月、夜深還過女墻來」とある是れなり、

【民望】人民の仰ぎ望むところの者、左傳に「民之望也」

【民風ヲ觀ル】（觀民風）人民の風俗を觀察するをいふ、禮記に「命太師陳詩以――」

【民瘼】瘼は病なり、民の「クルシミ」詩經小雅桑柔に「瘼此下民」

【明名臣言行錄】九十五卷、明の徐開任の撰なり、この書、朱子の宋名臣言行錄に倣ひて作る、その主とする所ろは品行に在りて官爵を論ぜず、故に小吏布衣と雖も、品行の卓として觀るべき者はすべて之を收む、

【明律】（大――）を見よ、

【民羸ヲ恤ム】（恤民羸）人民の「ツカレ」「ヤセ」たるを「アハレム」國語に「夫闔閭口不貪嘉味、耳不樂逸聲、目不淫於色、身不懷於安、朝夕勤志、恤民之羸、是故得民以濟其志」

【冥加】梵語なり、冥は冥冥の義、眼に見えざるをいふ、加は加被なり、卽ち眼には見えずして、暗に佛神の加護助力を被むるをいふ、大藏法數に「佛以意業神力加被菩薩、增其智慧、於大衆中、爲人演說、令无所畏、隱密難見、故曰――」冥助に同じ、

【名詮自性】名はその體を顯すをいふ、諸法の自性は名に由りて顯はるる義、唯識論に「語聲ノ分位差別ニ依リテ、假リテ名句文身ヲ建立ス、名ハ自性ヲ詮シ、句ハ差別ヲ詮ス」

【名聞】佛經の語、名の世上に聞ゆること「ホマレ」涅槃經に出づ、

【名欲】佛經の語、名を求めんとする欲なり、大藏法數に「名卽世間之聲也、謂人因聲名、能顯親榮己、故至貪求樂著、而不知止、是爲――」

【霡霂】「コサメ」詩經の小雅信南山に「上天同雲、雨雪雰雰、益之以――」爾雅に小雨をいふ、霡は本霢に作る

【霢霂】前條を見よ、

【脈脈】絶えざる貌、溫庭筠の詩に「花情羞――、柳意悵微微」

【脈絡貫通】系統の一貫せる義、中庸章句の序に「支分節解、――」

【觀ル者堵ノ如シ】圍繞して、觀る者衆きを言ふ、禮記の射義篇に「孔子射於矍相之圃、蓋觀者如堵牆」堵は「カキ」なり、また晉書の衞玠傳に「京師人士、聞其姿容、觀者如堵」

【彌勒】梵語慈氏と譯す、菩薩の一、無能勝と名づく、その德、人に過ぐといふ、祖庭事苑に「阿逸多此云無能勝、彌勒姓也」

水也出之山下、由于地中、詩詠朝宗、書稱潤下、其本也、然流于成都者、以錦爲號、行于房陵者、以紛爲名、淄澠雖混、滋味可辨、涇渭既合、清濁攸分、則方有玉、而圓有珠者、善泳者、或爾識之乎、但新豐以時平而淸、臨淄以世變而竭、是水之所以應治、亦所以應亂者也、耿恭以拜井而活、尾生以抱柱而死、是水可以生人、亦可以殺人者也、固知源無竭洄、纓可濯于屈平、紋有漣漪、耳堪洗于巢父、乃坳堂杯水、不可泛舟、得非以積之非厚也乎、噫世變江河、愈趨愈下、廉泉雖在、飮之者、未必能廉、讓水猶存掬之者、豈皆能讓、灔澦之堆、卽有似人心之險、妾心井中水、波瀾誓不起者、能幾人哉、不然渭水之波、一旦而赤、胡爲者也

水　（鹽　藻）

ム

【無爲】何事も爲すこと無きをいふ、易の繫辭に「易无思也、ーー也、寂然不動」老子に「爲ーー則無不治」とあり、また論語の衞靈公篇に「子曰、ーー而治者、其舜也與」とあり、また儲光羲の詩に「孔丘守仁義、老子好ーー」

また地名、宋の縣名、淮南西路ーー軍、元の州縣名、河南省廬州路ーー州ーー縣、明の南京省廬州府、今の安徽廬州府ーー州治これなり、

【無一物】（本來無一物）を見よ

【無逸】書經周書の篇名、逸は人君の大戒なり、古より國家を有つ者、未だ勤を以て興り、逸を以て廢せずんばあらず、よりて周公、成王の逸樂に耽らんことを懼れ、この篇を作り以て之を訓ふ、天命の精微より畎畝の艱難閭里の怨詛に至るまで、具載せざるなし、

【無射】陰曆九月の律の名、禮記月令に「季秋之月、律中ーー」（十二律）を參看せよ、

【無鹽】劉向新序雜事篇に「鍾離春ハ、齊ノ婦人ナリ、極醜無雙ナリ、號シテーー女トイフ、ソノ人ト爲リヤ、臼頭深目、長壯大節、昻鼻結喉、肥項少髮、折腰出胷、皮膚漆ノ若ク、行年三十、容入スル所ロナシ（中畧）自ラ宣王ニ詣リ一見センコトヲ願ン、謁者ニ謂ヒテ曰ク、妾ハ齊ノ售レザルノ女ナリ、君王ノ聖德ヲ聞ク、願クハ後宮ノ掃除ニ備ハラント、謁者以聞ス、宣王方ニ漸臺ニ置酒ス、左右之ヲ聞キ、口ヲ揜ヒテ大笑セザルナシ、曰ク此レ天下ノ强顏ノ女子ナリト、是ニ於テ宣王乃チ召シテ之ヲ見ル（中略）宣王ソノ說ヲ聽キテ大ニ敬服シ、無鹽君ヲ拜シテ王后トナス、國大ニ安キ者ハ、醜女ノ力ナリ」

【無何有之鄕】何もなき鄕にて、寂絕無爲の地をいふ、莊子に「何不樹之無何有之鄕、廣莫之野」またその應帝王篇にも「遊ーーーーー以處壙埌之野」

【昔ノ董生ヲ學ブ】駿臺雜話「壬子試筆の詞」に見ゆ、漢書董仲舒傳に「下帷發憤讀書、三年不窺園」とあり、仲舒は廣川の人、少くして春秋を治め、毎に帷を下して講說す、武帝の時、賢良方正に擧げられ、大に用ひられ江都の相と爲る、後に公孫弘の嫉むところとなり、斥けられて膠西王の相となる、竟に病を以て免れ、桂巖山に住し、著述を以て業となす、仲舒、學淵源あり、正誼明道の言、他の諸子に度越す、漢の醇儒たり、著すところ董仲舒集、春秋繁露あり、

【無窮之規】永久窮りなき法度の義、漢書蕭望之傳に「先帝聖德賢良在位、作憲垂法爲ーーーー」

【麥ヲ漂ハス】（漂麥）後漢の高鳳、書を讀みて晝夜息まず、妻麥を庭に曝し、鳳をして雞を護せしむ、時に暴雨す、鳳書を讀みて覺えず、水その麥を漂せり、

【麥秀デテ兩岐】豐年にて、麥の一本に兩枝あるなり、漢書張湛傳に「湛爲漁陽守、民歌之曰、桑無附枝、麥秀兩岐、張公爲政、樂不可支」

【無疆】窮りなき義、新樂府雜題に「楊巨源聖壽ーー詞十首」書經に「哲人惟刑、ーー之辭」注に「明哲之人、用刑有無窮之譽也」

【罔極】罔は無なり、極は中なり、中正の道なきなり、漢書賈誼傳に「遭世ーー兮迺隕厥命」また窮極なき義、下の（罔極ノ恩）を見よ、

【無極而太極】無中に有を生ずるをいふ、唐の杜順和尙の華嚴法界觀また宋の周惇頤の太極圖說に見ゆ、

【罔極ノ恩】父母の恩をいふ、罔は無なり、極りなき高恩の義、詩經蓼莪篇に「欲報之德、昊天ーー」とあるに本づく、

【無鬼論】書言故事に「阮瞻嘗テ無鬼論ヲ作ル、忽チ一客アリ來リ坐ス、議論風生以テ鬼アリトナス、瞻以テ鬼ナシト爲ス、爭論シテ已マズ、客言フ吾ハ即チ鬼ナリト、是ニ於テ見エズ」と、瞻は西晉の阮咸が子なり、

【無垢衣】「ケサ」の異名、翻譯名義集に「袈裟一名ーーー、又名離塵衣」格致鏡原に「袈裟一名ハーーーマタ忍辱鎧ト名ヅケ、マタ覆膊ト名ヅケ、マタ掩衣ト名ヅク、左膊ヲ覆ヒ、而シテ右腋ヲ掩フヲ謂フナリ」

【務光】世を逃れて遂に水死せし古の隱士なり、事文類聚に「夏ニ務光ト云フ人アリ、耳ノ長サ七寸、好ンデ琴ヲ鼓シ、菖蒲韭根ヲ服セリ、湯將ニ桀ヲ伐タントシ、光ニ謀ル、光曰ク、吾ガ事ニアラザルナリト、湯桀ニ克チ、天下ヲ光ニ讓リテ曰ク、知者之ヲ謀リ、仁者之ニ居ルハ、古ノ道ナリト、光曰ク、吾聞ク無道ノ世ニハ、其ノ士ヲ踐マズト、況ヤ我ニ讓ルヲヤト、乃チ石ヲ負ヒテ自ラ蓼水ニ沈メリ」

【無患樹】「ムクロジ」の木なり、纂文に「無患ハ木名ナリ、實ハ以テ垢ヲ去ルベシ」崔豹古今注に「相傳フ、コノ木、衆鬼ノ惡ムトコロタルヲ以テ、取リテ器用トシテ以テ鬼ヲ厭ス故ニ無患ト號ス」

【無稽ノ言】根據なき言なり、稽は考なり、古の道に考

へ合さざるをいふ、書經大禹謨に「無稽之言、勿聽、弗詢之謀勿庸」とあり、不詢とは、衆に咨はざるなり、荀子にも「無稽之言不見之行、不聞之謀、君子愼之」とあり、

【無形者物之大祖也】 淮南子の語、下に「無音者聲之大宗也」とあり、すべての形は無形より出で、すべての聲音は無音より出づるをいふ、

【夢溪筆談】 二十六卷、補筆談二卷、續筆談一卷、宋の沈括（字ハ存中、錢塘ノ人、嘉祐八年ノ進士、累遷シテ光祿寺少卿ト爲リテ南京ヲ分司シ潤州ニト居ス、紹聖元年卒ス、年六十五、夢溪ハソノ別業ノ名ナリ）撰す、簡明目錄雜家類に「コノ書凡ソ十七門ニ分チ遺聞舊典、文章技藝ヨリ以テ小說家ノ言ニ至ルマデ、賅載セザル無シ、而シテ樂律象數ノ類ハ、尤モ其ノ專門絕學ナリ、補綴二篇ハ複本別行ス、今ハ後ニ附載シ、以テ一家ノ言ヲ備フ焉」

【無閒地獄】 八熱地獄の中の第八の地獄にて責罰苦悶を受くること閒斷なき地獄といふ義、梵に阿鼻といふ、

【夢幻泡影】 事の捉ふべき所ろなき義、諸行無常の義にいふ、金剛般若經に「一切有爲法、如――――、如露亦如電、應作如是觀」また王禹偁詩に「身世喩泡幻」白居易の詩に「幻世如泡影」

【無辜】 辜は罪なり、不辜に同じ、罪なき者をいふ、周禮夏官に「以救――、伐有罪」

【無功ノ師ハ君子行ラズ】（無功之師、君子不行）功績なき「イクサ」は君子は之を爲さずとの義、鹽鐵論の語、下に「無用之地、聖王不貪」とあり、

【無告】 誰にも告げ訴ふべき所ろなき窮民をいふ、禮記の王制に「老而無妻曰鰥、老而無夫曰寡、老而無子曰獨、幼而無父曰孤、此四者、天民之窮而――者也」書經に「不虐――、不廢困窮」

【貪ラザルヲ以テ寶ト爲ス】（以不貪爲寶）蒙求に左傳を引きて「宋人得玉、獻諸司城子罕、子罕弗受、獻玉者曰、以示玉人、玉人以爲寶、故獻之、子罕曰我以不貪爲寶、爾以玉爲寶、若以與我、皆喪寶也、不若人有其寶」

【蟲】 大戴禮に「有羽之蟲、三百六十、而鳳凰爲之長、有毛之蟲、三百六十、而麒麟爲之長、有甲之蟲、三百六十、而神龜爲之長、有鱗之蟲、三百六十、而蛟龍爲之長、有倮之蟲、三百六十、而聖人爲之長」爾雅の釋蟲に「足アル之ヲ蟲トイヒ、足ナキ之ヲ豸トイフ」荀子勸學篇に「肉腐出蟲」歐陽修の秋聲賦に「但聞四壁蟲聲喞喞、如

助余之歎息」

【無疵】 「キズ」なし、荀子に「明達純粹而――也、夫是之謂君子之知」韓愈の讀荀子に「孔子刪詩書、筆削春秋、合於道者、著之、離於道者、黜去之、故詩書春秋――」

【無貲】 「モトデナシ」貲は貨なり、財なり、唐書馬周傳に「逆人以圖勝宅、衆以其與書生素――、皆竊笑」

【夢思】 夢み思ふ、杜甫の詩に「最恨巴山裏、淸猿惱――」黃庭堅の詩に「千里常――」

【無字碑】 「ミカケ」ばかり立派にて、無學なる人を稱す、沒字碑に同じ、北夢瑣言に「趙崇、標質堂堂、而不學、人號―――」（沒字碑）を參看せよ、

【無盡藏】 物を取るも盡くることなきをいふ、東坡の赤壁賦に「天地之閒、物各有主、苟非吾之所有、雖一毫而無取、惟江上之淸風、與山閒之明月、取之無禁、用之不竭、是造物者之―――也」大藏法數に「藏トハ含攝ナリ、乃チ功德林菩薩、華嚴會上ニ於テ、諸ノ菩薩ノ爲メニ演說シテ、其ノ普ク一切佛法ノ門ニ入ラシメ、無上菩提ヲ成就シ、一切ノ衆生ヲ饒益セント欲ス、其ノ各能ク無盡ノ法海ヲ含攝スルヲ以テ、故ニ皆名ツケテ―――トナス」

【無心ニシテ岫ヲ出ヅ】 無意偶然なるをいふ（雲無心ニシテ）を見よ、

【無私無偏】 至誠にして私なく、公平にして偏頗なきなり、文中子に「房玄齡問事君之道、子曰、無私、問使人之道、曰無偏」

【無狀】 功狀なきをいふ、史記の夏本紀に「視鯀之治水――」また善行なきをいふ、漢書賈誼傳に「自傷爲傅――、常哭泣」また亡狀に通じ用ふ、

【無常】 人の死生、世の轉變の常なきをいふ、釋氏要覽に「生滅輪廻是謂――」

【矛盾】 自ら言ふことの彼是撞着する義なり、尸子仁意篇に「楚人矛ト盾トヲ鬻グ者アリ、之ヲ譽メテ曰ク、吾ガ盾ノ堅キ、能ク陷ルル莫シト、マタ其ノ矛ヲ譽メテ曰ク、予ノ矛ノ利、物ニ於テ陷レザル無シト、或人曰ク、子ノ矛ヲ以テ、子ノ盾ヲ陷レンニハ何如ト、其ノ人應フルコト能ハズ」とあるに本づく、また韓非子難一篇にも出づ、盾を楯に作る、同じ、

【無乃】 次の無寧に同じ、もと「乃チ何何ナル無カランヤ」の義、經傳釋詞に「――猶得無也（宣十二年公羊傳注）周語曰、其無乃廢先王之訓而王幾頓乎、隱三年左傳曰、無乃不可乎」毋乃に作るも同じ、

【無寧】 彼よりは此をと擇び定むる義、經傳釋詞に「無

寧猶無乃也」論語に「一一死於二三子之手乎」一にただ寧にも作る、論語に「禮與其奢寧儉」

【寧ロ雞口トナルモ牛後トナルナカレ】（寧爲雞口無爲牛後）雞の口小なりと雖も、猶ほ食を進む、牛の後、大なりと雖も、乃ち糞を出す、以て小なるも潔く上に立つべし、大なるも卑汚の地に居るべからざるに喩ふ、史記の蘇秦傳に「蘇秦、韓ノ宣惠王ニ説イテ曰ク、臣聞ク鄙諺ニ曰ク、寧爲雞口、無爲牛後ト、今西面シテ臂ヲ交ヘテ秦ニ臣事セハ、何ゾ牛後ニ異ナランヤ、夫レ大王ノ賢ヲ以テ、强韓ノ兵ヲ挾ンデ牛後ノ名アランコト、臣竊ニ大王ノ爲メニ之ヲ羞ヅト」

【寧ロ馬上ヲ以テ之ヲ治ムベケンヤ】（寧可以馬上治之乎）史記陸賈傳に「陸生時時前説稱詩書、高帝罵之曰、迺公居馬上而得之、安事詩書、陸生曰、居馬上得之、一一一一一一一」

【無數】多くして數へきれぬ義、杜甫の詩に「一一蜻蜓齊上下」
また定數なき義、周禮序官に「男巫一一、女巫一一」

【無聲ニ聽キ、無形ニ視ル】（聽於無聲視於無形）（聲無キニ）を見よ、

【無雙】世にならぶものなきをいふ、史記淮陰侯傳に「蕭何曰ク、諸將ハ得易キノミ、信ノ如キニ至リテハ國士一一ナリト」漢書李廣傳ニ「李廣材氣、天下一一」

【無當巵】底の無き「サカヅキ」説文に「巵ハ飲酒ノ圓器ナリ」韓非子に「堂谿公謂韓昭侯曰、今有白玉之巵、無當、瓦巵有當、君寧。何取曰取瓦巵也」皇甫謐三都賦序に「玉巵無當、雖寶非用」注に「當ハ去聲、底ナリ」元稹の詩に「共惜連城寶、翻成一一一」

【夢中相尋ヌ】書言故事に「六國ノ張敏、高惠ト友タリ、毎ニ相思ヒテ得ルコト能ハズ、便チ夢中ニ於テ往イテ尋ヌ、但行イテ半路ニ至リ、即チ迷ヒテ路ヲ知ラズ」

【無中ニ有ヲ生ズ】萬有の物は、もと無中より生ずる義、老子に「天下萬物生于有、有生于無」列子天瑞篇に「黃帝書曰、形動不生形而生影、聲動不生聲而生響、無動不生無而生有」

【夢中ニ夢ヲ占フ】（夢中占夢）次條の莊子の語に本づく、占とは夢の吉凶を判斷するなり、王績の題酒店壁詩に「夢中占夢罷、還向酒家來」

【夢中ニ夢ヲ夢ミル】（夢中夢夢）人の世に在るは、まことに「ハカナキ」ものなるに喩ふ、莊子に「方其夢也、不知其夢也、夢之中又夢其夢焉、覺而後知其夢也」

【鞭ヲ投ジ流ヲ斷ツ】（投鞭斷流）軍勢の衆くして盛んなるをいふ晉書苻堅載記に「秦ノ苻堅晉ヲ伐タント欲ス、羣臣皆諫ム、堅曰ク、吾ガ百萬ノ衆、鞭ヲ江ニ投ズレバソノ流ヲ斷ズルニ足ル、彼レ何ノ險カ恃ムニ足ラント」

【鞭長シト雖モ、馬腹ニ及ボサズ】（雖鞭之長不及馬腹）成語考に「勢アリテ能ク爲ルコトナキヲイフ」と、左傳宣十五年に「楚、宋ヲ伐ツ、宋人、樂嬰齊ヲシテ急ヲ晉ニ告グシム、晉侯之ヲ救ハント欲ス、伯宗曰ク、不可ナリ、古人言アリ、曰ク、雖鞭之長、不及馬腹、天方授楚、不可與爭」とある註に「擊ツ所ロニアラザルヲイフ」一解に勢力餘りあるも濫りに用ひざるをいふ、また曰く、力强大なるも猶ほ及ばざる所ろあるに喩ふと、

【無町畦】（町畦ナシ）を見よ、

【無腸公子】蟹の異名、抱朴子に「山中稱無腸公子者、蟹也」朱簡齋の詩に「但見横行疑是躁、不知公子實無腸」

【夢徵】「ユメノシルシ」老學菴筆記に「一一止此」

【胸】膺なり、爾雅の注に「拊心謂椎一也」戰國策に「左手把其袖、右手揕其胸」江淹の詩に「覩言出遊衍、冀以滌心胸」蘇軾の詩に「一洗芥蔕胸」陸游の詩に「豪氣蕩肺胸」

【指ヲ希フ】（希指）人の意旨を希望すること、即ち人意を迎ふるの義、漢書外戚傳に「董宏一一」

【毋望之福】望まずして忽ち至れる幸福、史記春申君傳に「朱英謂春申君曰、世有一一一一、又有毋望之禍、今君處毋望之世、事毋望之主、安可以無毋望之人乎」毋望之世とは、人世の事は、禍福常とすべからざるをいふ、毋望之主とは、寵幸の恃むべからざる主をいふ、毋望之人とは急難ある時、我より求め乞はざるも、來りて救ひ昇る人をいふ、

【無妄之福】必ず得べき幸福をいふ、戰國策に「有一一一一、又有無妄之禍、今君處無妄之世、以事無妄之主、安不有無妄之人乎」無妄之世とは必ず福利を得べき世なり、無妄之主とは寵幸せらるる人主なり、無妄之人とは我を助け昇る信實なる人なり、

【無妄之禍】必ず得べきの禍なり（無妄之福）を見よ、

【無邊】物の廣漠にして「カギリ」なきなり、起世經に「一切諸天、行時來去、一一無礙、無有遲疾」無礙は「サハリ」なきをいふ、

【無偏無黨】偏は不中、黨は不公なり、無偏無黨は、よく中正にして公平なる義なり、書經洪範に「一一一一、

王道蕩蕩、無黨無偏、王道平平」

【無名指】 手の第四指(クスリユビ)をいふ、孟子告子篇に「無名之指、屈而不信」

【無恙】 (恙ナシ)を見よ、

【無用ノ辨】 (不急ノ察)を見よ、

【紫ノ朱ヲ奪フヲ惡ム】 (惡紫之奪朱)論語陽貨篇に「子曰、惡紫之奪朱也、惡鄭聲之亂雅樂也、惡利口之覆邦家者」の註に「朱ハ正色、紫ハ間色、雅ハ正シキナリ、利口ハ捷給、覆ハ傾敗ナリ、天下ノ理正ニシテ勝ツ者ハ常ニ少ク、不正ニシテ勝ツ者ハ常ニ多シ、聖人之ヲ惡ム所以ナリ、利口ノ人、是ヲ以テ非ト爲シ、非ヲ以テ是ト爲シ、賢ヲ以テ不肖トナシ、不肖ヲ以テ賢ト爲ス、人君苟モ悅ビテ之ヲ信ズルトキハ、則チ國家ヲ覆スニ至ル」と、小人の賢者を凌ぐに喩ふ、

【無慮】 漢書の食貨志に「天下大抵無慮皆鑄金錢矣」の註に「大抵ハ猶ホ大凡ト言フガゴトシ、無慮モ亦大率ニシテ、小計慮無キヲイフノミ」漢書趙充國傳に「亡慮萬二千人」亡無相通ず、

【無聊】 心に憂ふるところありて安んじ樂まざるなり、文選の李陵の答蘇武書に「與子別後、益復ーー」

【無漏】 次條を見よ、

【無漏】 「ムロ」とも讀む、漏は煩惱の義、佛法三昧に入り、有爲の妄想を除き、寸毫の汚欲なきをーーといふ、(實相)を見よ

【無祿】 不幸に同じ、詩經に「憂憂悍悍、念我ーー」また左傳に「ーー早世隕命」

豈曰無衣、　與子同袍、　王于興師、
修我戈矛、　與子同仇、
豈曰無衣、　與子同澤、　王于興師、
修我矛戟、　與子偕作、
豈曰無衣、　與子同裳、　王于興師、
修我甲兵、　與子偕行、
無衣三章、章五句、(詩經秦風)

メ

【目】 人の眼の象形文字なり、韓信外傳に「心之符也」また視るなり、書經舜典の「明四目」の註に「廣西方之視以決天下壅蔽」韓非子に「目見百步之外、而不能見其眥」眥は「マナジリ」また「目失鏡無以正鬚眉、身失道無以知迷惑」また「目短於自見、故以鏡觀面、智短於自知、故以道正己」莊子に「目見其白、不見其堅、觸而知其堅、而不知其白」淮南子に「目妄視則淫、耳妄聽則惑、口妄言則亂」

また注視する義、史記の陳丞相世家に「陳平去楚渡河船人疑其有金目之」

また怒を含みて側視するをいふ、周語に「國人莫敢言、道路以目」

【茗】 一音ベイ茶なり、爾雅の註に「茶晚取者爲ー」また玉篇に「茶芽ヲートイフ」陸羽の茶經に「早取曰茶、晚取曰茗」茗は茶を「ススリ」飲む、芳茗は「カホリ」よき茶、好茗、佳茗は「ヨキ」茶、新茗は新茶、

【銘】 文の一體なり、文體明辨に「按ズルニ鄭康成曰フ、銘ハ名ナリ、劉勰云フ、器ヲ觀テ而シテ名ヲ正スナリ、故ニ曰ク、器ヲ作リテ能ク銘ズレバ、以テ大夫ト爲スベシト、今コレヲ夏商周ノ三代ニ考フルニ、鼎、彝、尊、卣、盤、匜ノ屬ニ至ルマデ銘アラザルハナシ、而シテ文多ク殘缺ス、獨リ湯ノ盤、大學ニ見エタリ、而シテ大戴禮ニ備ニ武王ノ諸銘ヲ載セ、後人ヲシテ法ヲ取ル所ロアラシム、是ヲ以テ其ノ後作者寖繁シ、凡ソ山川宮室門井ノ類、皆銘詞アリ、蓋シ但ダ之ヲ器物ニ施スノミナラス、然レドモ其ノ體ヲ要スルニ、二アルニ過ギズ、一ニ曰ク、警戒、二ニ曰ク、祝頌、晉ノ陸機曰ク、銘ハ博文ニシテ溫潤ナルヲ貴ブト、コノ言之ヲ得タリ、此ノ外ニ、又碑銘、墓碑銘、墓誌銘等アリテ、各類ヲナスニ至レリ」釋名に「銘ハ名ナリ、其ノ功ヲ記スルナリ」

【謎】 「ナゾ」說文に「隱語ナリ」文心雕龍に「謎也者、廻互其辭使昏迷也」古、謎字なし、呂覽重言篇に「荊莊王立三年不聽、而好讔」とある讔は卽ち後世の謎をいふ、

【鳴蛙】 「ナクカヘル」齊春秋に「孔稚圭、字ハ德璋、嘗テ云フ止足ヲ知ルト、隱居シテ仕ヘズ、宅前ニ池有リ、春月ーー多シ、王晏、鼓吹ヲ鳴シテ之ニ候ス、群蛙適鳴ク、晏曰ク、此ノ蛙殊ニ人ニ聒シト、德璋曰ク、我君ガ鼓吹ヲ聽クニ、此ノ蛙ニ及バズト」

【名醫】「ヨキイシャ」漢書杜延年傳に「昭帝末、徵天下ーー」良醫・善醫同じ

【明衣】 齋（モノイミ）する時に著る服、布にて作る、祭の時は齋戒して心の汚れたる慾を去りて潔白ならしむ、故に身も潔白となり、衣服までも潔白なるーーを服して以て神明に交ることなり、論語郷黨篇に「齋必有ーー布」

【茗飮】 茶を飮むをいふ、茶經後魏錄に「瑯琊王肅仕南朝好ーー蓴羹」張子羽の詩に「禪房伴ーー、豈待酒中趣」

【名園】「スグレタル」園庭、宋の趙抃の和沈太博小圃偶作に「名園雨後百花繁、人倚危樓十二闌、園裏芳菲樓上客、一般情緒怕春寒」

【茗讌】 茶の會、讌は宴なり、

【命ヲ受ケテ家ニ辭セズ】（受命而不辭家）大將たる者は、出征の命を受けては、卽日軍に赴き、家に歸りて別を告ぐることをせずとの義、吳子に「受命而不辭家、敵破而後言返、將之禮也」

【命ヲ將フ】（將命）主客の言を傳へ、出入を通ずるをいふ「トリツギ」禮記に「某固願聞名於ーー者」また「燕見不ーー」

【盟ヲ渝フ】（渝盟）渝は變なり、盟に背くをいふ、左傳に「有渝此盟、明神殛之」

【命ヲ知ラザレバ以テ君子ト爲スナキナリ】（不知命無以爲君子也）論語堯曰篇、孔子の語、さて學問は君子たらんことを求むるに在り、君子たらんには、天命を知りて之を信じ死生窮通得失等によりてその心を動かすことなきを肝要とす、所謂富貴も淫すること能はず、威武も屈すること能はざるの境に到らんことを要す、然らずして一旦小利害に遇はば直ちにその守る所ろを失ふが如き輩は君子とは爲すべからずとの意なり、

【命ヲ知ル者ハ巖牆ノ下ニ立タズ】（知命者不立乎巖牆之下）孟子盡心上篇の語、下に「盡其道而死者、正命也」とあり、すべて命を知る者は正に趨かんことを欲す、故に巖牆の下に立たず、壓覆せんことを恐るればなり、修身の道を盡し壽を以て終る者は正命を得るなり、

【茗ヲ啜ル】（啜茗）茶を飮む、杜甫の詩に「落日平臺上、春風ーー時」

【命ヲ投ズ】（投命）生命を損つる義、顏延之の文に「ーー狥節」

【茗ヲ煮ル】（煮茗）茶を煮る、開元遺事に「王休、冬時每ニ、溪冰ヲ取リ、其ノ精瑩ナル者ヲ敲キ、建茗ヲ煮テ、賓客ト共ニ飮ム」

【盟ヲ寒ス】 誓約を忘るる義（寒盟）また（尋盟）を見よ、

【明河】「アマノガハ」銀河に同じ、宋之問の明河篇に「ーー可望不可親、願得乘槎一問津」歐陽修の秋聲賦に「ーー在天、四無人聲」

【冥加】（ーー）を見よ、

【鳴鶴陰ニ在リ、其ノ子之ニ和ス】（鳴鶴在陰、其子和之）易の中孚の卦、九二の語、下に「我有好爵、吾與爾靡之」とあり、親鶴が、幽隱の處に鳴きて聞え難きも、その子相應和して鳴く如く、中に至れる孚（マコト）あれば則ち能く感通するに喩ふ、又德ある者は自ら世に知らるるにも喩ふべし、靡は縻と通ず、

【名下ニ虛士無シ】（名下無虛士）名は空しく立たず、名高き人は、實力も之に應じて有るをいふ、書言故事に「國史纂異ニ、閻立本ガ家、代々畫ヲ善クス、荊州ニ到リテ張僧繇ノ舊迹ヲ見ル、初メ往キテ曰ク、定メテ虛シク名ヲ得タルノミト、明日又往キテ曰ク、猶ホ是レ近代ノ佳手ト、明日又往キテ曰ク、名下定メテ虛士無シト、坐臥ニ之ヲ觀テ、其下ニ留宿シ、十日去ル能ハザリキ」とあり、舊迹とは、舊日畫きし所ろの墨迹なり、詳觀するにしたがひて、畫の妙なるを知りたるなり、また韻府に北史薛道衡傳を引きて「薛道衡、陳ニ聘セラレテ人日ノ詩ヲ作ル、曰ク入春纔七日、離家已二年ト、南人之ヲ嗤フ、人歸落雁後、思發在花前トイフニ及ビ、乃チ曰ク名下固ニ虛士ナシト」陳書姚察傳にもこの語あり（閻立本）を見よ、

【名銜】 名と官位と、文獻經籍考に「書其ーー」銜は官吏の「クラヰ」新銜は「アタラシキ」官位、轉銜は、官職をうつす義.

【鳴珂里】 圓機活法に「唐ノ張嘉貞、相ト爲リ、弟嘉祐、金吾將軍ト爲ル、朝スル每ニ、軒蓋騶從閭ニ盈ツ、所居ノ坊ヲ號シテ、ーーート曰フ」珂は玉の名、以て馬具を飾るべし、また珮珂は身の飾に帶ぶる玉をいふ、

【名器】 名は爵號をいひ、器は車服をいふ、左傳成二年に「唯器與名不可以假人」また「愼器與名不可以假人」一解に、名は尊卑の名、器は禮樂の器なりと、

【名諱】 連文釋義に「生曰名、死曰諱」

【明器】 死を送る時に死者と共に埋むるすべての器なり、明とは之を神明にするなり、儀禮既夕に「既陳ー

｜于乘車之西」の註に「｜｜ハ藏器也」とあり、釋名の釋喪制に「送死曰｜｜」禮記の檀弓の註に「｜｜ハ鬼器也」

【名義考】 十二卷、明の周祈（蘄州ノ人）撰す、この書は天・地・人・物の四部に分ち各、その名義を訓釋せり、

【明鏡止水】 明かなる鏡と、靜に澄める水と、以て心の虛明なるに喩ふ、莊子德充符篇に「鑑明則塵垢不止、止則不明也」また同篇に「仲尼曰、人莫鑑於流水、而鑑於止水」また同書應帝王篇に「至人之用心若鏡」

【明鏡ハ醜嫫ノ寃ト爲ル】 （明鏡爲醜嫫之寃）三稱全書に出づ、寃は讎なり、明鏡はその醜面を照す故に醜嫫の讎となるなり、以て邪惡の小人は正人を忌み嫉ふに喩ふ、

【銘肌鏤骨】 （肌ニ銘シ骨ニ鏤ム）深く心に記して忘れざるをいふ、顏氏家訓に「追思平昔之指、｜｜｜｜、非徒古書之誡經目過耳」書言故事に「敍感德之深云銘心鏤骨」とあるも、義同じ、

【螟蝗】 苗を害する蟲、螟は正音ベイ「クキクヒムシ」蝗は「イナゴ」蘇軾超然臺賦序に「驅除｜｜、逐捕盜賊」

【明皇雜錄】 二卷、補遺一卷、唐の鄭處誨（字ハ延美、滎陽ノ人、太和八年ノ進士、官檢校刑部尚書宣武軍節度使ニ至ル）撰す、唐の明皇卽ち玄宗に關する逸事を雜錄す、この書、卷數晁公武の讀書志に載するところと合す、されども葉夢得の避暑錄話に引くところの盧懷愼好儉の一條、今の本に之れ無きによれば、尙ほ佚脫せる所ろあるならんか、

【名花傾國】 （沈香亭北）を見よ、

【名花十友】 三餘贅筆に「宋ノ曾端伯、十花ヲ以テ十友ト爲シ、各、之ガ詞ヲ爲ル、荼蘼ヲ韻友ト爲シ、茉莉ヲ雅友ト爲シ、瑞香ヲ殊友ト爲シ、荷花ヲ淨友ト爲シ、巖桂ヲ仙友ト爲シ、海棠ヲ名友ト爲シ、菊花ヲ佳友ト爲シ、芍藥ヲ艷友ト爲シ、梅花ヲ淸友ト爲シ、梔子ヲ禪友ト爲ス」

【名花十二客】 三餘贅筆に「宋ノ張敏叔、十二花ヲ以テ十二客ト爲ス、各、詩一章ヲ賦ス、牡丹ヲ賞客ト爲シ、梅ヲ淸客ト爲シ、菊ヲ壽客ト爲シ、瑞香ヲ佳客ト爲シ、丁香ヲ素客ト爲シ、蘭ヲ幽客ト爲シ、蓮ヲ靜客ト爲シ、荼蘼ヲ雅客ト爲シ、桂ヲ仙客ト爲シ、薔薇ヲ野客ト爲シ、茉莉ヲ遠客ト爲シ、芍藥ヲ近客ト爲ス」敏叔名は景修、宋の吳中の人、禮部郎中たり、

【名宦】 顯仕（タフトキ、ツカサ）なり、柳氏家訓に「急於｜｜、匿近權要、一資半級、雖或得之、衆怒羣猜鮮有倖者」

【名撰】 姓名と鄕貫と、棠陰比事に「規絕｜｜」

【明經】 士を取る科目の名、經義を題として試みらるるをいふ、事物紀原に「漢始以｜｜射策取人、以通經多藝補文學長、故唐乃設｜｜之科云云」（明法）を參看せよ、

【名敎】 儒道の敎なり、父子の親、君臣の義の如き皆名目ありて、紊るべからず、故にいふ、晉書樂廣傳に「｜｜之內、自有樂地」宋文鑑范質の戒從子杲詩に「周孔垂｜｜」

【名敎中自ラ樂地アリ】 （名敎中自有樂地）名敎は人倫の敎なり、世說德行に「王平子、胡毋彥國諸人、皆以任放爲達、或有裸體者、樂廣笑曰、名敎中自有樂地、何爲乃爾也」この語、もと晉書樂廣傳に出づ、中を內に作る、

【明月ヲ燭ト爲ス】 （明月爲燭）唐書張志和傳に「陸羽嘗問孰爲往來者、對曰、太虛爲室、｜｜｜｜、與四海諸公共處、未嘗少別、何有往來」

【明月之珠】 暗夜にも光るといふ寶珠、李斯の諫逐客書に「垂｜｜｜｜、服太阿之劒」鄒陽の獄中上梁王書に「｜｜｜｜、夜光之璧」次條を見よ、

【明月ノ珠闇ヲ以テ人ニ道路ニ投ズ】 （明月之珠以闇投人於道路）「アタラ」至寶も、人に贈るに道を以てせざるときは、かへりて怨を招くに至る、漢書鄒陽傳に「臣聞ク、明月ノ珠、夜光ノ璧、闇ヲ以テ人ニ道路ニ投ズレバ、劒ヲ按ジテ相視ザル者ナシ、何トナレバ則チ因ナクシテ前ニ至レバナリ、故ニ因無クシテ前ニ至レバ、隋侯ノ珠、夜光ノ璧ヲ出スト雖モ、猶ホ怨ヲ結ンデ德トセラレズ」（隋侯傷）を見よ、

【名言】 「スグレタル」善言なり、晉書山濤傳に「濤與盧欽論用兵之本、以爲不宜去州郡武備、帝稱之曰、天下｜｜也」

【名工】 技巧に名ある工人をいふ、周禮考工記に「輪人謂之國工」註に「國之｜｜」

【迷藏】 巾にて目を褁み、摸索して人を捉ふる戲、俗にいふ「メカクシ」なり、致虛雜俎に「明皇與玉眞、恒於皎月下、以錦帕褁目、在方丈內、相捉戲、謂之捉｜｜」

【名山勝槪記】 この書、本名は古今遊名山記（十七卷總錄一卷）といふ、明の何鏜（字ハ振卿、賓巖ト號ス、嘉靖二十六年ノ進士、官江西提學僉事ニ至ル）撰す、漢より明に至る諸家の名山に遊びし記を彙輯せしもの、その後無名氏更に增補改訂して四十六卷とし、｜｜｜｜と改名せり、

【名山ニ藏ス】（藏名山）古は著書の亡失せんことを恐れ、石函などに入れて、名山に藏せしといふ、司馬遷の傳に「太史公協六經異傳、齊百家雜語、藏之名山、副在京師」とあるに本づく、

【名士】才學道德の衆に秀でたる士、禮記月令に「季春之月（中略）勉諸侯、聘――、禮賢者」

【名刺】名札（ナフダ）なり、書言故事に「古、未ダ紙アラズ、竹木ヲ削リテ、姓名ヲ書ス、故ニ刺（ふだ）トイフ、後、紙ヲ以テシ遂ニ名紙トイフ」㊂

【名紙】「ナフダ」名刺に同じ、開天遺事に「長安平康坊、妓女所居、每年新進士、以紅箋作――、游謁其中」

【明眎】禮記の曲禮に「宗廟ヲ祭ルノ禮ニ、兎ヲ――トイフ」眎は視に同じ、韓愈の毛穎傳に「其先――」

【明粢】說文に「粢ハ稷ナリ」禮記の曲禮に「凡祭宗廟之禮稷曰――」疏に「明白也」とあり、耶律楚材の詩に「原廟獻――」

【明時】よく治まれる世、曹植の求自試表に「志欲自效于――」杜甫の詩に「飛跡無舊業、老去戀――」

【冥搜】目を閉ぢ「クラヤミ」にて考へ求むるをいふ、袁齋筆談に「隱士楊朴每欲作詩、即伏草中――」賴山陽の耶馬溪圖卷記に「――默運」とあり、

【名字ヲ盜ム】（盜名字）僭して王と稱するをいふ、蘇軾の表忠觀碑に「天下大亂、豪傑蜂起、方是時、以數州之地、盜名字者、不可勝數」

【名實】名と功實となり、一の名あれば、必ずその名を受用せる實なかるべからず、君子の名に對しては、德行の實あらんことを要するが如し、孟子告子下篇に「夫子在三卿之中、――未加於上下」とあるは名譽と事功とをいふ、後漢書仲長統傳に「――不相應」荀子に「制名以指實」莊子逍遙游篇に「名者實之賓也」

【明信】「タシカナル、タヨリ」朱熹の文に「亦不得――、令人懸心耳」的信・的便に同じ、また明かなる誠の心、左傳隱三年に「苟有――、澗谿沼沚之毛、蘋蘩薀藻之菜、筐筥錡釜之器、潢汙行潦之水、可薦於鬼神、可羞於王公」

【明神】明かなる神、神をたふとびて稱す、周禮司盟に「北面詔――」

【名臣言行錄】前集十卷、後集十四卷、續集八卷、別集二十六卷、外集十七卷、前集後集は宋の朱熹撰す、續集別集外集は李幼武の補ふところ、宋の名臣の言行錄なり、朱熹の序に「近代ノ文集及ビ紀傳ノ書ヲ讀ムニ多ク世敎ニ裨アリ、是ニ於テ其ノ要ヲ掇取シ、聚メテ此ノ書ヲツックル」またその呂祖謙に與ふる書に「――ノ一書、亦當時草草之ヲ爲ル、其ノ間自ラ尙ホ誤謬多ク、編次亦法無キヲ知ル云云」とあり、幼武の續ぐところの續集以下は更に不備となす、

【迷者ハ路ヲ問ハズ】（迷者不問路）理に迷ふ者は、自ら事を用ひて、賢者に問ふことをせざるの意、晏子春秋に「夫愚者多悔、不肖者自賢、溺者不問墜、――――、溺而後問墜、迷而後問路」また荀子に「――――、溺者不問遂、亡人好獨」遂は徑隧を謂ふ、水中渉るべきの徑なり、好獨とは、自ら其の計を用ふるをいふ、

【名酒】「ヨキ」酒なり、陶潛の詩序に「余偶有――、無夕不飮、顧影獨盡、忽焉復醉」

【明珠】水中に生ずる玉にて光あり、以て人品の高潔なるに喩ふ、晉書衞玠傳に「王濟嘗語人曰、與玠同遊、若――之在側、朗然照人」（吾家ノ――）を見よ、

【明珠暗ニ投ズ】（明珠暗投）漢書鄒陽傳に「明月ノ珠、夜光ノ璧、暗ヲ以テ人ニ道ニ投ズレバ、劍ヲ按ジテ相眄ザル者ナシ、因無クシテ前ニ至レバナリ、蟠木根柢輪囷離奇而シテ萬乘ノ器トナル者ハ左右先ヅ之ガ容ヲナスヲ以テナリ」（明月ノ珠）を見よ、

【明主ハ一嚬一笑ヲ愛ム】（明主愛一嚬一笑）明主は、臣下に對して妄に喜憂の色を示さざるをいふ、これ群臣をしてその中心を推測せしむるを欲せざればなり、韓非子に「韓ノ昭公、人ヲシテ弊袴ヲ藏セシム、侍者曰ク、君モ亦不仁ナリ、弊袴以テ左右ニ賜ハラズシテ之ヲ藏セシムト、昭侯曰ク、子ノ知ル所ロニアラザルナリ、吾聞ク明主ハ一嚬一笑ヲ愛ムト、嚬モ爲メニ嚬スルアリ、笑モ爲メニ笑フアリ、今夫レ袴ハ豈特ニ嚬笑ノミナランヤ、袴ノ嚬笑トハ遠シ、吾必ズ有功ノ者ヲ待タン、故ニ之ヲ收藏セシメ、未ダ予フルアラザルナリト」嚬は眉を「ヒソムル」をいふ、憂ふる貌、

【明珠老蚌ニ出ヅ】父を老蚌（トシオイタル、ドブガヒ）に比し、子を明珠に擬して、老父の「スグレタル」子を生みたるに喩ふ（老蚌珠ヲ）を見よ、

【名勝】「スグレタル」景色なり、北齊書韓晉明傳に「留心學問、好酒縱誕、朝廷欲處之貴要、辭曰、廢人飮美酒、對――、安能作刀筆吏、披反故紙邪」また名望のすぐれたる士をいふ（名論）を見よ、

【明水】祭祀にそなへる水をいふ、周禮秋官に「取明火於日、取明水於月」とあり、禮記にも「夏后氏尙――」

【名數】戶籍をいふ、漢書高祖紀に「民前或相聚保山澤、不書――」また孔光傳に「徙――于長安」

【名世】一世に名ある者、即ち大賢人なり、孟子公孫丑下篇に「五百年必有王者興、其閒必有――者」

【命世亞聖】命は名なり、世に名ある人なり、漢書楚元王傳に「聖人不出、其閒有命世者焉」と、亞は次なり、聖人に次ぐ位の人をいふ、太平記卷の一に見ゆ、

【名聲籍甚】名聲の世に籍くこと甚しきをいふ、漢書の陸賈傳に「陳平乃チ奴婢百人、車馬五十乘、錢五百萬ヲ以テ、賈ニ遺リ食飮ノ費トナス、賈此ヲ以テ漢廷公卿ノ閒ニ游ブ名聲籍甚ナリ」とあり、註に「狼籍甚ダ盛ナルヲイフ」籍一說に、音セキ

【命世之雄】命は名なり、世に名ある英雄なり、干寶の晉紀總論に「非――――不能取之矣」また漢書楚元王傳に「聖人不出、其閒有命世者焉」李陵の書に「賈誼亞夫之徒、皆信命世之才、抱將相之具」

【名節】名譽節操をいふ、漢書兩龔傳に「勝字君賓、舍字君清、二人相友、竝著――」李密の陳情表に「本圖官達、不矜――」

【茗戰】鬪茶に同じ、雲仙雜記に「建人謂鬪茶爲――」茶經にも見ゆ、

【明堂】猶ほ朝廷といふ如し、昔、王者の諸侯を朝參せしめし殿堂の名、孟子梁惠王下篇に「――者王者之堂也」また禮記の明堂位に「昔者周公、朝諸侯于――之位、天子負斧扆南鄕而立」また「――也者明諸侯之尊卑也」周禮考工記匠人に――の制を記す、參看すべし、

【明道先生】宋の大儒程顥を稱していふ（程顥）を見よ、

【明駝千里足】健脚なる駱駝、木蘭辭に「願馳―――――送兒還故鄕」酉陽雜俎に「明駝千里ノ脚トハ、駝ノ臥スル、腹、地ニ貼セズ、足ヲ屈シ明ヲ漏ス、故ニ明駝トイフ」一說に明駝とは眼下に毛あり、夜、明かなり、日に行くこと五百里

【明治】天下を明かに治むる義、また明かに治まるにも用ふ、易の繫辭下傳に「聖人南面而聽天下、嚮明而治」明治の年號の本づくところ、

【命中】指名する所ろを射て之に中るをいふ、また命ずるところに中るなり、漢書李陵傳に「力扼虎、射命――」

【螟蟲】螟正音ベイ苗の心を食ふ蟲、後漢書公沙穆傳に「遷弘農令、縣界有――」食稼、百姓惶懼、穆乃設壇謝曰、百姓有過罪、穆之由、請以身禱、於是暴雨、既霽而――自銷、百姓稱曰神明」

【明暢】明かに「トホル」暢は達なり、通暢とも熟す、宋史に「音吐――」また文意のよく通達せるにもいふ、暢一に鬯に作る、同じ、

【明鬯】前條を見よ、

【酩酊】「イタク」醉ひたる貌、晉書山濤傳に「日夕倒載、歸、――無所知」獨孤及の詩に「坐看明月澄淸景、來照江樓――時」

【鳴條】夏の桀王の敗死せし地、山西解州府安邑縣に――岡あり即ちその地なり、

【鳴鏑】鏃の一種、笴に近きところに小さき孔を穿つ、射るときは風をふくみて鳴る、史記匈奴傳に「作爲――」通鑑の注に「韋昭曰ク、矢鏑飛べバ則チ鳴ル、余、今ノ軍中ヲ見ルニ、亦――アリ、笴ニ近キノ處ニ於テ小竅ヲ開ク、矢飛ブコト急ナレバ則チ風ヲ凌ギテ鳴ル」和名「カブラヤ」鏃の形、蕪に似たればいふ、髐箭ともいふ、

【明哲身ヲ保ツ】（明哲保身）明は理を明かにす、哲は智なり、よく事を察するなり、書經の說命上に「嗚呼知之曰明哲、明哲實爲則」とあり「――――」とは能く明哲にして其の身を保全するをいふ、詩經大雅烝民篇に「旣明且哲、以保其身」

【明天子上ニ在リ】（明天子在上）聖明なる天子の朝廷の上に坐すをいふ、史記建元侯者年表序に「況乃以中國一統―――――兼文武、席卷四海、內輯億萬之衆」また韓愈の送董邵南序に「爲我謝曰、―――――、可以出而仕矣」

【螟螣】螟正音ベイ苗の心を害する蟲「クキムシ」螣は葉を食ふ害蟲、蝗の一種、詩經小雅に「去其――、及其蟊賊、無害我田穉」螣音トウの時は神蛇をいふ、またその冥冥の中に姦害をなすより轉じて姦惡の小人に比していふ、

【命ニ方フ】（方命）方は逆なり、王命に逆ふ者をいふ、書經堯典に「――圮族」また魏都賦に「剋翦――、吞滅咆咻」と、一解に方は放なりと、また天命に逆ふ義、孟子梁惠王篇に「――虐民」

【命ニ順フ】（順命）天命に順ふをいふ、春秋元命苞に「天道煌煌、一帝ノ功ニ非ズ、王者赫赫、一家ノ常ニ非ズ、命ニ順フ者ハ存ジ、命ニ逆ブ者ハ亡ブ」

【明眸皓齒】明らかなる「マナコ」白き齒、美人を斥していふ、杜甫の哀江頭に「――――今何在、血汚遊魂歸不得」

【命ハ義ニ緣リテ輕シ】（命ハ義ニ）を見よ、

【命ハ乃チ天ニ在リ】（命乃在天）人の壽命は、天に在りて、如何なる名醫も之を奈何ともする能はざる義、史

記高祖紀に「―――、雖扁鵲何益」

【明發】天の將に旦けんとして、光明開發する時をいふ、詩經小雅に「――不寐」

【明法】士を取る科目の名、法律を主とす、事物紀原に「漢新有國、詔――者、道詣相府、此――之始也、唐始設――科」

また國語にては――と讀む、古、大學寮（式部省ニ屬ス）を置き、紀傳明經――算道の四道の事を掌らしむ、四道に各博士あり、明法は律令格式を修む、

【明萬里ノ外ヲ見ル】（明見萬里之外）極めて聰明なるをいふ、後漢書竇融傳に「璽書既至河西、咸驚以爲天子――――――」

【明ハ以テ秋毫ノ末ヲ察スルニ足ル】（明足以察秋毫之末）目の「スグレテ」明かなるをいふ、獸の毛は秋に至れば、末銳くなりて見え難し、之を見得るは、最も目の明かなるなり、孟子梁惠王上篇に「明足以察秋毫之末、而不見輿薪、則王許之乎」

【明妃】漢の王昭君をいふ（王昭君）を見よ、

明妃曲　唐　白　居易

漢使却回憑寄語　黃金何日贖蛾眉、君王若問妾顏色、莫道不如宮裏時

同　唐　王　渙

夢裏分明入漢宮、覺來燈背錦屛空、紫臺月落關山曉、腸斷君王信畫工

【明府】縣令をいふ、類書纂要に「太守縣令ヲ稱シテ皆――トイフ」

【命婦】釋名に「大夫ノ妃ヲ――トイフ」禮記に「君親制祭、夫人薦盎、君親割牲、夫人薦酒、卿大夫從君、――從夫人」

また國語にて――といふは、五位敍爵の官女の稱、五位の妻を外――と稱す、また內侍司の下級の女官、また稻荷の神の使なりといふ、狐の異名、

【冥福】死後の功德の爲めに、佛事を修する義、追善をいふ、北史の崔挺傳に「挺爲光州刺史、後去州卒、故吏聞之、莫不悲感、共鑄八尺銅像于城東廣固寺、赴八關齋追奉――」

【名物】その處に特殊の物、周禮大司徒に「辨其山林川澤邱陵墳衍原濕之――」またすべて名詞にて呼ぶべきものをいふ、

【名捕】その名を指して捕ふる義、漢書鮑宣傳に「――隴西辛興」

【茗圃】「チヤバタケ」孟郊の越中山水詩に「菱湖有餘

翠、――無荒時」

【冥冥】事の未だ發顯せずして、晦暗の中に在るをいふ、荀子に「行乎――、施乎無報」また王吉の書に「禁邪於――、絕惡於未萌」

【明明赫赫】明かに「カガヤク」詩經の「明明在下、赫赫在上」の毛萇の註に「文王ノ德下ニ明明タリ、故ニ赫赫然トシテ天ニ著ハル」と、同じく常武に「赫赫明明、王命卿士」

【明目張膽】目を明かに開き、膽を大に張りて敢言する義、唐書韋思謙傳に「丈夫當敢言地、須要――――以報天子、焉能碌碌保妻子耶」宋史劉安世傳に「――――、以身任責」

【名門】名聲ある「イヘガラ」柳氏家訓に「余見――右族、莫不由祖先忠孝勤儉以成立之」

【鳴鑾】天子の御車につく鈴なり、詩經の傳に「軾ニ在ルヲ和トイヒ、鑣ニ在ルヲ鑾トイフ」車をひく馬の鑣（クツバミ）につきたる鈴なり、西都賦に「大輅――容與徘徊」

【名利】名譽と利益とをいふ、莊子に「無足問於無知曰、人卒未有不興名就利者」また尹文子に「――治小人」

【迷離】散り亂るる貌、木蘭辭に「雄兎脚撲朔、雌兎眼――」目の「ミダレテ」「クラム」をいふ、

【名流】名士の「ナカマ」なり、世說に「孫綽・許詢皆一時――」

【冥靈】木の名、列子に「荊之南有――者、以五百歲爲春、五百歲爲秋」注に「江南ニ生ズ、葉ノ生ズルヲ以テ春ト爲シ、葉ノ落ツルヲ秋トナス」大椿と同じく假設の木なり、

【螟蛉】桑上の小青蟲なり、詩經小雅小宛篇に「――有子、蜾蠃負之、敎誨爾子、式穀似之」とあるに由り、異姓の人の養子となる者の稱とす、蜾蠃は、土蜂なり、式は以、穀は善なり、土蜂桑蟲を取りて、之を負ひ、木空に於て、七日にして化して其の子と爲す、不類の者すら敎へて似せしむること此の如し、まして我が子を敎ふることなれば、善を以て似せしむべしとの義、

【螟蛉子アレバ蜾蠃之ヲ負フ】前條を見よ、

【迷廬】佛敎にていふ須彌山の一名、蘇迷廬の略、妙高山ともいふ、四州の地心となり、大海中に在りて高さ八萬四千由旬、日月その山腹をめぐるといふ（須彌）を見よ、

【迷樓】圖機活法に「隋ノ煬帝、汴河ヲ開キ艦ヲ泛べ、

江都ノ遊ヲナス、浙人項昇、新宮ノ圖ヲ進ム、帝之ヲ愛シ卽チ圖ノ如ク營建シ、既ニ成ル、之ニ幸シ曰ク、若シ眞仙ヲシテ此ニ遊バシムルモ亦當ニ自ラ迷フベシ之ヲ目シテ「――」トイフベシト」

【名論】名望と物論と、晉書に「睿（東晉の元帝の名）――素輕、吳人初不附、王導勸用諸名勝」名勝とは名望の勝れたる士、

【明王ノ人ヲステ給ハヌコト車ヲ造ル工ノ材ヲアマサザルニ喩フ】十訓抄第一に見ゆ、唐の太宗の帝範賓客篇に「明王之使人、如巧匠之制木、直者以爲轅、曲者以爲輪、長者以爲棟梁、短者以爲栱桷、無曲直長短、各有所施、明王之使人、亦猶如是、智者取其謀、愚者取其力、勇者取其威、怯者取其愼、無智愚勇怯、兼而用之、故良匠無棄材、明君無棄士、不以一惡忘衆善、勿以小瑕掩其功」とあるに本づく、

【迷惑】事理に暗くして「マヨヒ」「マドフ」義、俗語錄に「朱子當節要云、豈不是顚倒――之甚乎」

【茗椀】茶を飲む「ワン」韓愈孟郊會合聯句に「雲絃寂寂聽、――纖纖捧」

【妙歌】「タヘナルウタ」法苑珠林に「是琴音聲及――磬、隱蔽欲界諸天音樂」

【蘘荷】古名「メカ」俗に茗荷と書く、山野に自生し、又畑にも植ゑて菜とす、春宿根より苗を生ず、形略、生薑の苗に似たり、長ずること二三尺、根の旁に花を生ず、形筍に似て、二三寸、採りて食ふべし姑蘇志に「――俗ニ甘露子ト稱ス」

【妙簡】精しく擇ぶ義、通鑑漢殤帝紀に「――博士」

【妙技】「タヘナル、ワザ」阮瑀の箏賦の字面、

【妙妓】「タヘナル、ゲイシヤ」曹植の七啓に「才人――」

【妙曲】「タヘナル」音曲、稽康の琴賦に「理正聲、奏――、揚白雪、發清角」虞世南の琵琶賦に「鏞管咸奏、絲桐畢陳、有琵琶之――、乃越衆而超倫」

【妙句】「スグレタル」字句、宋書謝靈運傳論に「至于高言――、音韻天成」

【妙訓】「スグレタル、ヲシヘ」沈約の究竟慈悲論に「晚說大典、弘宣――」

【妙見】菩薩の名、北斗星の本地なり、國土を護り、貧窮を救ひ諸願を成就せしむといふ、

【妙悟】「スグレテ」よく悟る、宋史仁宗紀に「仁宗天性慈孝、聰明恭儉、通邃儒術、――釋典、嘗曰明心見性、佛敎爲深、修身治國、儒道爲切」

【妙相】「スグレタル」「ヤウス」相は人相の相にて、俗に

いふ相好の義、梁簡文帝の大愛敬寺剎下銘に「儼如常住、――長存」

【妙操】「スグレタル」「ミサヲ」論衡に「高志――之人、恥降意損崇以稱媚取進」

【妙算】「スグレタル」「ハカリゴト」晉書石苞傳に「齊桓忘管仲之奢僭、而錄其匡合之大謀、漢高捨陳平之汚行、而取其六奇之――」

【妙思】「タヘナル」「オモヒ」晉書范甯傳に「平叔神懷超絕、輔嗣――、通微」魏の文帝の與吳質書に「――六經、逍遙百氏」王充論衡に「孔子作春秋、――出胸中」妙想に同じ、

【妙甚】「タヘナルコト」の甚しき義、張翥の題息齋竹石古木詩に「森然一片巖石鑱、――七字瓊瑰詞」妙極に同じ、

【妙手】技藝の「スグレテ」上手なる義、樂府解題に「伯牙爲天下――」

【妙絕】「スグレテ」「タヘナル」義、後漢書張超傳に「超善於草書、――時人、世共傳之」

【妙選】精しく選ぶ義、漢書劉輔傳に「――有德之士、考卜窈窕之女」

【妙道】「タヘスグレタル」道をいふ、莊子に「夫子以爲孟浪之言、而我以爲――之行也」崔顥の贈懷一上人詩に「天子揖――、群僚趨下風」

【妙珍】「スグレテ」「メヅラシ」後漢書邊讓傳に「竭四海之――兮、盡人生之祕玩」

【妙德】「スグレタル」德、南史の袁粲傳に「粲嘗著――先生傳、以續稽康高士傳後、以自況」

【妙年】「トシワカ」品字箋に「妙ハ精微ナリ、マタ少年ナリ」杜甫の詩に、明公獨――」少年に同じ、

【妙法】「タヘナル」佛法、法華經に「如是――、如優曇鉢花、時一現耳」

【妙筆】「タヘナル」筆跡、圖畫見聞志に「王文獻家、書畫繁富、太宗朝、嘗表進十五卷、尋降御札云、卿所進墨跡古畫、俱是――、除留墨跡五卷、古畫三卷、其餘卻還卿家」

【妙品】「スグレタル」作品、書畫並に器物等にいふ、宋史文苑傳に「李公麟自夏商以來、鐘鼎尊彝皆能考定世次、辨測款識、聞一――、雖捐千金不恤」

【妙舞】「タクミ」に舞ふ、謝朓の永明樂に「淸歌留上客、――送將歸」

【妙藥】「タヘナル」「クスリ」沈約の齊禪林寺尼淨秀行狀に「或得――、或聞異香」

【妙譽】「スグレタル」「ホマレ」孔稚圭の北山移文に「張英風於海甸、馳ーー於浙右」

【妙用】「タヘナル」作用（ハタラキ）李羣玉の送房處士閒遊詩に「刀圭ーー、巖洞契冥搜」

【妙理】「スグレタル」道理、北史高允傳に「天下ーー至多、何遽問此」曹攄の思友人詩に「精義測神奧、淸機發ーー」

【妙齡】「トシワカ」妙年に同じ、李商隱の啓に「爰自ーー、逐肩名場」

【妙麗】容貌の「スグレテ」「ウルハシキ」義、漢書外戚傳に「孝武李夫人、本以倡進（中略）上乃召見之、實ーー善舞、由是得幸」

【目ヲ遊バシム】（遊目）眺望する義、史記楚世家に「北ーー於燕之遼東」

【目ヲ掩ヒ雀ヲ捕フ】（掩目捕雀）すべて事を成すには誠實を以てせざるべからざるをいふ、後漢書何進傳に「陳琳曰、諺有ーーーー、微物尚不可欺以得志、況國家大事乎」

【目ヲ瞑ス】（瞑目）を見よ、

【目毫末ヲ見ルモ、而モ其ノ睫ヲ見ズ】（目見毫末而不見其睫）他人の過失は能く見ゆれども、我が過失は、見ることを得ざるに喩ふ、睫は「マツゲ」史記越世家に「吾不貴其用智之如ーーーーーーーー也」

【盲者ノ杖ヲ失フガ如シ】（若盲者失杖）俚諺なり、頼みとする者を失ふに喩ふ、陳同甫集に「別去惘然ーーーーーー」

【滅度】「メチド」とも讀む、涅槃の譯語なり、煩惱を滅し生死海を度る義なり、もと悟の義なれども、死の義にも用ふ、

【碼碯】博雅に「ーーハ石ノ玉ニ次グルナリ」七寶の一、大藏法數に「梵語摩羅伽隸、此云ーー、其色赤白、如馬之腦、因以名焉、以其可琢成器、世所希有、故名爲寶也」法華經に「硨磲ーー、金剛諸珍」

【瑪瑙】前條に同じ、

【馬腦酒鍾】通鑑陳紀に「周主以ーーーー遺鮮于世榮、世榮得即碎之」

【面】顏面なり、書經益稷に「汝無面從退有後言」荀子に「衞ノ靈公臣アリ、公孫呂トイフ、身ノ長ケ七尺、面ノ長サ三尺ニシテ廣サ三寸、名天下ヲ動カス」李安民傳に「明帝曰ク、卿ノ面ハ方ニシテ田ノ如シ、封侯ノ相ナリト、南齊ノ時、位尚書左僕射ニ至ル」また見（マミユル）なり、禮記の曲禮に「夫爲人子者、

出必告、反必面」

【面友】「ウハベ」のみの交りをいふ、揚子法言に「朋ニシテ心ナラザルハ、面朋ナリ、友ニシテ心ナラザルハ面友ナリ」司馬光の註に「朋友ハ當ニ誠心ヲ以テ相與ニ切磋琢磨スベシ、心ニ其ノ非ヲ知リテ告ゲズ、但ダ外貌相姁悅シ、群居遊戲シ、相從ヒテ飮食スルノミナル可カラズ」とあり、道を同じくするを朋といひ、志を同じくするを友といふ、明心寶鑑に「古人結交唯結心、今人結交唯結面」

【面ヲ革ム】（小人面ヲ）を見よ、

【面ヲ皮ハグ】（皮面）面皮を剝ぎ去るを云ふ、史記刺客傳に「自皮面抉眼」

【面革】駮聚雜話「風俗は政の田地」に見ゆ、革面を倒用せしなり（小人面ヲ革ム）を見よ、

【面會】人と相對面する義、後漢書劉植傳に「遣使與純書、欲相見、純報曰、忝使見王侯牧守、不得先詣、如欲ーー、宜出傳舍」

【面結】面して約を結ぶ義、史記呉王濞傳に「身自爲使、使於膠西、ーー之」

【瞑眩】頭目昏亂なり、書經說命に「若藥弗ーー、厥疾弗瘳」揚子法言に「藥ヲ飮ンデ毒アル、海岱ノ閒之ヲーートイフ」瘳は愈なり、痼疾を治むるには藥力を强くし、頭目を昏暈憒亂せしめて、始めて能く病根を拔去して全癒せしむるを得べし、この語、孟子滕文公上篇にも引けり、仁を行ふには精熟せしむべし、かくて德恚乃ち治きに至るを得るに喩ふ、

【面語】逢うて話する、唐書房喬傳に「帝曰、陳事千里之外、猶對面語」面談に同じ、

【綿亙】連り「ワタル」義、謝靈運の山居賦の自注に「山嶺ーー田野或陞或降」とあり、綿は連りて絕えざるを言ひ、亙は字書に「延袤ナリ」とあり、說文に「亙、竟也、象舟竟兩岸」

【面從】「マノアタリダケ」從ふをいふ、唐書裴矩傳に「帝曰、矩遂能廷爭不ーー、物物若此、天下有不治哉」次條を見よ、

【面從後言】面前にては「コビヘツラヒテ」之に從ひ、背後にては之を非毀するをいふ、書經益稷に「汝無面從、退有後言」

【麵市鹽車】雪の降り積みたるを形容す、李義山の詠雪詩に「人疑迷麵市、馬似困鹽車」

【面牆】周官に「不學牆面」註に「如面向牆無所見」とあり（牆面）を見よ、

【面首】今いふ男妾なり、通鑑宋明帝紀に「帝爲姉山陽公主置――男子左右三十人」の註に「面ハ其ノ貌ノ美ヲ取ル、首ハ其ノ髮ノ美ヲ取ル」

【綿手】「ホソク」美しき手、崔珏有贈詩に「莫道妝成斷客腸、粉胸――白蓮香」

【綿絮】「ワタ」通文釋義に「精ナルヲ綿トイヒ、粗ナルヲ絮トイフ」

【面折】人の過失を「マノアタリ」責むるをいふ、漢書の酷吏傳に「郅都ハ河東大陽ノ人、景帝ノ時、中郎將トナル、敢テ直諫シ、面折大臣於朝」また汲黯傳に「黯爲人、性倨少禮、――不能容人之過」（――廷爭）を見よ、

【緜蕝】緜は緜索を張りて區畫するなり、蕝は絶に通じ用ふ、茅を束ねて位を表するなり、史記叔孫通傳に「與其弟子百餘人、爲――野外習之月餘」一解に、緜は連綿なり、茅を剪りて地に樹て、綿綿として相聯りて尊卑の位次を表するなりと、

【面折廷爭】「マノアタリ」君の過を責むるをいふ、史記の呂后紀に「――――、臣不如君」また歐陽修の上范司諫書に「立天子陛下、直辭正色面爭庭論」とあるも、義は同じ、廷は朝廷なり、庭に同じ

【窅然】「ウラミノゾム」貌、莊子の逍遙遊に「――喪其天下焉」註に「――ハ猶ホ悵然ノ如シ」とあり、喪は遺なり、窅字音エウのときは深遠の貌、

【緬然】「ハルカ」に遠きなり、水經の注に「高壁――、與霄漢接」また遥かに思ふ貌、國語の楚語に「――引領南望」李白の詩に「――含歸情」

【面談】面會して話す、晉書王猛傳に「面談當世之事、捫蝨而言」

【黽池】兩漢晉の弘農郡――縣、今の河南河南府澠池縣治、次條に同じ、

【澠池】北魏の義州――郡、今の河南衛輝府汲縣治、また隋唐の――縣は今の河南河南府――縣治、寰宇記に「――ノ西ニ澠阪アリ、秦趙相會スル處」郡國志に「弘農郡――縠水出」

【緜地】緜は綿に同じ、地の長く連なれるをいふ、穀梁傳文十一年に「――千里」註に「猶ホ彌漫ノ如シ」

【免冑】「カブト」を「ヌグ」國語の晉語に「――而聽命」冑は兜鍪なり、免は脱なり、

【綿竹】漢書地理志に「廣漢郡縣――」注に「紫巖山綿水所出、東至新都、北入雒」晉書文帝紀に「鄧艾帥萬餘人、自陰平踰絶險、至江油、破蜀將諸葛瞻於――、斬瞻傳首、進軍雒縣、劉禪降」宦遊記聞に「四川――縣有

不道觀、每歲一道士修善至期、有白雲載之而去、名曰升天云云」

【緜惙】通鑑の註に「困劣ナリ」韻會に「短氣ノ貌」世說の德行に「恢在郡――」

【面ニ墻ス】學ばずして見る所ろなきは、面、墻に向ふが如しとの義、（墻面）を見よ、

【面ニ唾ス】（唾面）人の面に唾するは、辱しむるの至なり、戰國策に「老婦必唾其面」また史記孟嘗君傳に「唾其面而大辱之」唐書に「婁師德度量アリ、弟曰ク、人面ニ唾スルアレバ、之ヲ潔ウセント、師德曰ク、之ヲ潔ツスルハ是レソノ怒ニ逆フナリ正ニ自ラ乾カシメンノミ」

【面縛】左傳の僖六年の傳に「許男面縛銜璧」杜註に「手後ニ縛リ、唯ダ其ノ面ヲ見ハス、璧ヲ以テ贄ト爲スニ、手縛セラル、故ニ之ヲ銜ムナリ」安井の輯釋にいふ「惠士奇イフ、漢書項羽傳、馬童面之ニ師古曰ク、面之トハ之ニ背イテ面向セザルヲ謂フナリ、――モ亦反背シテ之ヲ縛スルヲイフ、杜元凱以テ唯見其面トナスハ非ナリト、衡案ズルニ、面ハ背ト訓スル是ナリ、古人用字相反シテ義ヲ爲ス者アリ、亂ヲ治ト訓スル類是レナリ」

【綿帛】「ワタ」と「キヌ」と後漢書董卓傳に「奉獻――」綿絹に同じ、

【綿邈】年代の遠く隔るをいふ、晉書天文志に「唐虞則羲和繼軌、有夏則昆吾紹德、年代――、文籍靡傳」文心雕龍に「夫宇宙――、黎獻紛雜、拔萃出類、智術而已」

【緜蠻】「ウグヒス」の聲をいふ、詩經小雅緜蠻に「――黃鳥、止于丘阿」また廣く鳥の聲をいふ、歐陽修の李留後家聞箏坐上詩に「――巧囀花間舌、嗚咽交流冰下泉」

【面皮厚】「ツラ」の皮が「アツイ」恥を知らぬに喩ふ、南史卞彬傳に「腹無一寸腸、面皮厚如許」

【面皮薄】（薄面皮）柔和なる顔面、庾信の詩に「向人長疊臉、由來薄面皮」

【面皮ヲ剝グ】（剝面皮）俗にいふ「ツラノカハヲハグ」厚顔の人を惱みはづかしむる義、裴氏語林に「賈充謂孫皓曰、何以剝人面皮、皓曰、憎其顏之厚也」西京雜記にも「――」の語見ゆ、

【綿布】後漢書濊傳に「知種麻養蠶作――」抱朴子に「――可以禦寒、不必貂狐」

【面壁九年】壁に面し心を潛めて悟を求むること九年の久しきに渉るをいふ、傳燈錄に「達摩祖師至少林寺、

「｜｜｜｜、始悟而成佛」錦字箋にも「達磨、梁武延至金陵、潜往少陵寺、｜｜｜｜不立文字、以心印傳二祖慧可」（陵は蓋し林の誤か）神僧傳に「天竺菩提達摩、梁武帝普通元年、汎海至金陵、與帝語、師如機不契、遂去梁、折蘆渡江、止嵩山少林寺、終日面壁而坐、九年形入石中、拭之愈顯、人謂其精誠貫金石也」

【面朋】（面友）を見よ、

【面目】顔をいふ、俗に「｜｜無シ」といふは、心に恥ぢて人に合す顔なしといふ義、史記の項羽紀に「何｜｜見之」また晉世家に「晉侯報國人、毋｜｜見社稷」

【面目憎ム可ク、語言味ナシ】（面目可憎、語言無味）韓愈の送窮文の語、顔面は惡むべく、言語も面白味なしとて貧乏神を形容していへり、

【面謾】目前にて人を「アザムク」をいふ、漢書季布傳に「樊噲頗得十萬衆、横行何奴中、季布曰、噲妄言、是｜｜也」

【綿密】微細にして「ヌケメ」なく、よく行き届ける義、宣和書譜に「下筆｜｜」

【面命】「マノアタリ」深く誨うる義、詩經大雅抑篇に「匪面命之、言提其耳」徒に面ひて之に命ずるのみにあらず、又その耳を提ぐるは教誨の詳且つ切なるなり、

【緜緜】長くして絶えざる貌、詩經王風葛藟篇に「｜｜葛藟、在河之滸」

【緜緜ヲ絶タズンバ、蔓蔓ヲ若何セン】（緜緜不絶、蔓蔓若何）緜緜は薄弱の義、蔓蔓は、延び「ハビコル」義、すべて草は薄弱の時に絶ち除かざれば蔓延せし後はいかにともすべからず、禍患も微細の時に除かざれば増長せし後は除き難しとの義、戰國策に「｜｜｜｜、｜｜｜｜、毫末不拔、將成斧柯」と、柯は斧の柄なり、家語に「焰焰不滅、炎炎若何」とあり、意は同じ、

【面面風】四方より吹き來る風、章八元の詩に「十層突兀在虛空、四十門開｜｜｜」

【面門】口をいふ、楞嚴經に「從｜｜放種種光」の疏に「從口放光也」とあり、

【綿羊】羊の一種、宋史層檀國傳に「畜有｜｜・山羊・沙牛・水牛・橐駝・馬・犀・象」

【面諛】人の面前にて「オモネリ、ヘツラフ」義、史記に「灌夫爲人剛直、使酒不好｜｜」孟子告子下篇に「讒諂｜｜之人至矣」

【綿裏針】柔かき綿の中に針をつつむ、以て諷刺の語に喩ふ、通俗編に「元曲云、｜｜｜」

【綿力薄材】力の弱きこと、綿の如く材德厚からざるをいふ、漢書の嚴助傳に「越人｜｜｜｜、不能陸戰、又無車騎弓弩之用」李劉謝徐閣學知潭州表に「綸言已布、綿力奚堪」また陔餘叢考に「力ノ薄キヲ謙シテ綿力トイフ」

【目渡ル鳥】俚諺なり、物の過ぎ行くことの早きに喩ふ、古歌に「よしあしに、心ひかれて朝夕の目渡る鳥、ゆくへしらずも」文選の張景陽の雜詩に「人生瀛海內、忽若鳥過目」

格言九則

明月之珠、不能無纇　（淮南子氾論訓）
明珠不瑩、焉發其光、寶玉不琢、不成璉璋　（蔡邕勸學）
不明察、不能燭私　（韓非子）
明君之行賞也、曖乎如時雨、其行罰也、畏乎
如雷霆　（同上）
明君之制、賞從重、罰從輕　（說苑）
明主不敢以私授、忠臣不敢以虛受　（潛夫論）
信命者亡壽夭、信理者亡是非　（列子）
不逆命、何羨壽、不矜貴、何羨名、不要勢、何羨位、不貪富、何羨貨　（同上）
面譽者不忠、飾貌者不情　（大戴禮）

モ

【蒙ヲ發キ落ヲ振フ】（發蒙振落）發蒙は、物の上に覆へる巾を發くをいひ、振落は落葉を振ふをいふ、皆事の甚だ易きに喩ふ、史記汲鄭傳に「至如說丞相弘如｜｜｜｜耳」弘は公孫弘なり、

【矇ヲ發ク】（發矇）目明かならざる者、發かれて見る所あるなり、禮記に「昭然若｜｜矣」卓氏藻林に「其ノ矇惑ノ心ヲ開クヲイフ」

【蒙倛】倛は方相なり、鬼「ヤラヒ」をするに「カブル」もの、其の首蒙茸たり、故にいふ、一說に、倛は假面なり、假面を蒙るをいふと、荀子非相篇に「仲尼之面如｜｜」

【蒙鳩】鷦鷯（ミソサザイ）の一名、荀子勸學篇に「南方有鳥焉、名曰｜｜」巢を巧に作るによりて巧婦鳥ともいふ、古名「サザギ」形雀に似て小く、喙尖りて錐の如し、身は灰色に黑と褐との細斑あり、形、色種類多し、冬來り、春に至りて囀る、聲美なり、

【蒙求】三卷、唐の李瀚撰す、經史中より、事實の相類する者を采り、兩兩相屬對せしめ、四字句の韻語を以て標題とし、以て記誦に便す、書名は易の蒙卦の「童蒙求我」の語に取る、宋の陳振孫の書錄解題に「擧世之ヲ誦シテ以テ小學發蒙ノ首ト爲ス」とあれば、この書の當時に盛行せしを知るべし、我が邦に於ても、王朝時代すでにこの書の行はれたることは、扶桑集に、都良香が始受蒙求詩あるにても證とすべし、文祿五年小瀨甫菴始めて之を翻刻し、爾來益流行し、箋註を作る者少からず、參考書には、

○補注蒙求　三卷、宋徐子光撰、
○蒙求詳說　十六卷、日本宇都宮由的撰、
○箋注蒙求　三卷、岡白駒撰、

宋の王令の十七史蒙求、明の胡炳文の純正蒙求、等この書の體に倣ひて編纂せし書、亦甚だ多し、

【蒙古】支那本部の北に位し、地形東西に廣く、南北に狹し、北は阿爾泰山脈を以て魯領悉比里に接し、南は長城を限り、支那本部に界し、東は嫩江水域を以て滿洲に界し、西は甘肅省及び伊犁に界す、その面積大略二十四萬八千四百十七方里とす、國中に二大山脈あり、西南より東に亙れるを崑崙山脈とし、西より北に走るを阿爾泰山脈とす、山勢概ね西南より東北に向ひて奔馳す、その大なる者は、崑崙山脈に於て祁連山・阿拉善山・陰山・興安嶺とし、阿爾泰山脈に於て唐努山・杭愛山・肯特山等とす、又西北部に於て魯國との界に跨れるを薩彥山脈とす、

崑崙山は蒙古語巴顏喀喇山といふ、即ち黃河眞源の發する所ろにしてその山脈は喀喇崑崙山より起り、蜿蜒として東奔し、結んで一大山彙を爲せり、山勢高峻ならずと雖も地勢甚だ高く、查靈・鄂靈二海の西部より漸次東に向ひて高度を增し、此より支を分ち黃河水域を盤繞して四方に分馳し、その東北に向ふ者は厮爾巴嶂連綿として直ちに嘉峪關外に抵り、連山となる、和碩特・土爾扈特の各旗その間に游牧せり、それより山脈甘肅・涼等の各府州の地に盤旋し、大通河の水域を爲し、無數の川流發源し、古浪縣の南に至り分水嶺となり、古浪・莊浪の二水ここに發源し、此より賀蘭山脈の松山に連結す、その東支は大雪山に連り、西より東に向ひ黃河の北岸を奔馳す、大雪山は山勢高峻にして四時雪を戴けり、又東南の一支は黃河の南岸に沿ひ西傾山となり、甘肅省河洮、岷の諸州に綿亙して四川松潘廳界の諸山に連接せり、巴顏喀喇山の最高なる部分は盛夏も雪融せず、然れども山中水草に富み、野獸生息し、又金銀礦ありといふ、詳しくは參謀本部編纂支那地誌卷十五を見よ、

堯山堂外紀に「北狄稱銀曰蒙古、元之先號蒙古者、因女直號金、乃以銀號其國也」

【蒙古遊牧記】十六卷、清の張穆撰す、初め穆のこの書を作るや、未だ完成せずして卒す、その友何秋濤、遺言に從ひて補修す、凡て二十四大部落に分ち、更に之を數小部落に分敍す、蒙古種族遊牧地の形勢を說くこと詳細にして、蒙古志を研究する者の必讀すべき良書とす、

【蒙士】童蒙始學の士をいふ、書經伊訓に「具訓于｜｜」具は詳なり、

【蒙耳】蒙は覆なり、耳を覆ひて聞かざるをいふ、國語に「今子聞而棄之、猶｜｜」

【蒙戎】亂るる貌、詩經に「狐裘｜｜」或は蒙茸に作る、左傳に「狐裘尨茸」に作るも、亦同じ、

【蒙茸】草の亂れ生ずる貌、謝朓の詩に「霜畦紛綺錯、秋町鬱｜｜」また亂れ走る貌、揚雄の賦の注に見ゆ、

【矇瞍】眸子ありて見ることなきを矇といひ、眸子なきを瞍といふ、瞍は瞍に同じ、國語に「｜｜不可使視」

【矇瞍】前條を見よ、

【蒙塵】天子は常に道を淸めて行き、九重の內に居る、

故に外に奔るを蒙塵といふ、左傳僖二十四年に「天子蒙塵于外、敢不奔問官守」とあるに本づく、

【蒙恬】 武の子、秦の將たり、威匈奴に震ふ、始皇遣して兵三十萬を率ゐ、北の方長城を築かしむ、始皇沙丘に崩ず、趙高・胡亥詔を矯めて太子扶蘇を殺す、恬藥を呑んで自殺す、

【蒙恬筆ヲ製ス】 （蒙恬製筆）事類全書に「或ヒト問ヒテ曰ク、蒙恬筆ヲ造ルト、然ルトキハ則チ古、筆ナキカ曰ク非ナリ、古、筆ナキニアラズ、但ダ兎毛ヲ用フルコト、恬ヨリ始マルノミ、爾雅ニ、不律謂之筆、詩ニ曰ク、貽我彤管、春秋ニ曰ク、夫子絶筆獲麟、莊子ニ曰ク、舐筆和墨ト、是レ其ノ來ルコト遠キヲ知ル、但ダ古ノ筆多ク竹ヲ以テシテ、今ノ木匠ノ用フル所ロノ木斗竹筆ノ如シ、其ノ字竹ニ從フ、又或ハ毛ヲ以テ能ク墨ヲ染メテ字ヲ成ス、即チ之ヲ筆トイフ、蒙恬ニ至リテ、乃チ兎毛ヲ以テス、故ニ毛穎傳ニ、備ニ之ヲ載ス」また陳啓源の毛詩稽古編に「董仲舒謂フ、兎毫筆管ハ秦ノ筆ニアラズト、而シテ韓愈毛穎傳ニ託シテ言フ、其ノ先吐イテ生ルト、且ツ封ジテ管城子ト爲スト 文人設戲考據ヲ經ルニアラズ、辨ヲ置クニ足ラザルナリ」

【艨艟】 戰艦をいふ、狹く長き兵船、敵を衝く所以のもの、柳宗元の文に「陸聯長轂、海合——」朱熹の句に「——巨艦一毛輕」艨艟一音シヨウ義同じ、

【濛濛】 「コサメ」ふりて「ヲグラシ」王昌齡の句に「玉清壇上雨——」章八元の句に「滿城春樹雨——」空濛と同義、張衡の句に「朝雨空濛如薄霧」

【朦朧】 「オボロゲ」連文釋義に「月將入爲朦、日將出爲朧」

【模楷】 人の標準となる義（模楷）を見よ、

【茂行】 盛んにして美しき行なり、戰國策に「公獨修虛信、爲——」また楚辭に「夫維聖哲、以——兮」

【摸擬】 他の物に「ナゾラヘ」擬似するなり、袁宏三國名臣序贊に「豈曰——、實在雅性」

【沐雨櫛風】 莊子に「禹治水沐甚雨、櫛疾風」（風ニ櫛リ）を見よ、

【目耕】 書を讀むをいふ、猶ほ字を寫すを筆耕といふが如し、農夫の田を耕すに勤むるに喩ふ、世説に「王韶之少家貧、而好學、嘗三日絶糧、執卷不輟、家人誚之曰、困窮若此、何不耕、王徐答曰、我常——耳」

【木雁一篇須記取、致身材與不材閒】 十訓抄第二、並に朗詠集雜の部に引けり、白氏文集三十四偶作と題する詩中の句なり、木雁の解は（莊子山ヲ過ギ）を見よ、

【木牛流馬】 兵粮をはこぶ車にて牛馬に象り造る、蜀志諸葛亮傳に「諸葛亮、相先主後、常以——運粮、據武功五丈原、與司馬宣王對於渭南、相持百餘日、卒于軍、年五十四、謚忠武侯、亮長於巧思、損益連弩、——、皆出其意」とあり、——共に載すること多く、行くこと少く、人大に勞せず、其の制法、亮が集及び通鑑注、綱目集覽杜氏通典等に見ゆ、連弩は鐵を以て矢となす、長さ八寸、一弩に十矢、倶に發す、

【木槿】 「ムクゲ」また「モクゲ」舜華ともいふ、禮記の月令に「仲夏之月——榮」古名「木蓮」花、蓮に似たればいふ、灌木にて高丈餘に及び枝繁茂す、籬に多く植う、夏秋の閒、五瓣の花開く、朝に開き夕に萎むにより、古は「アサガホ」の名もあり、

【目禁】 「メクハセ」して「トメル」唐書關播傳に「盧杞論事于帝前、播意不可、欲有所言、杞——輙止」

【木魚】 木にて魚の形を作り、叩きて音を發せしむるもの、北史に「隋大業十年、頒——符於京官」また摭言に「一白衣アリ、天竺ノ長老ニ問ヒテ云フ、僧舍ニ悉ク——ヲ懸クルハ何ゾヤト、答ヘテ曰ク用ヒテ以テ衆ヲ警ムルナリト、白衣曰ク、必ズ魚ヲ刻ムハ、何ノ因カアルト、長老答フル能ハズ、僧ヲ遣シテ、以テ琅山ノ悟下師ニ問ハシム、師曰ク、魚、晝夜未ダ嘗テ目ヲ合セズ、亦修業者ノ晝夜寢ヲ忘レテ以テ道ニ至ランコトヲ欲スルナリト」朱熹の詩に「粥飯何時共——」制作原始に「隋設——、僧志林造」一に魚析ともいふ、

【木偶】 木の人形、史記孟嘗君傳に「見——人與土偶人相與語」偶一に禺また寓に作る、木人・木像・木梗人・木居士皆同じ、

【目光炬ノ如シ】 （目光如炬）眸子の光の爛爛として人を射ること炬火の如きをいふ、南史檀道濟傳に「道濟見收、憤怒氣盛、————、脱幘投地曰、乃壞汝萬里長城」

【目逆】 逆は迎なり「コチラヘ」來る人を目にて見まもり迎ふる義（目送）を見よ、

【目擊】 目で「チラト」見るをいふ、擊は觸なり、莊子の田子方篇に「仲尼曰、若夫人者、目擊而道存矣」品字箋に「——猶言瞥見、目才往意已會悟、故莊子有——道存之説」

【目語】 目「ジラセ」していふ、唐書則天傳に「道路——」眼語に同じ、また眉語ともいふ、劉孝威の詩に「腮疎——」

【木公】 松の異名、湖海新聞に「北朝ノ山濤、字ハ致遠、

召ニ赴ク、宋ノ神宗問ウテ曰ク、卿山路ヨリ來ルカ、山路ヨリ來ラバ、ーー木母ハ如何ト、濤曰ク、ーー正傲歲、木母正含春ト、旨ニカナヒテ中書ニ除セラル」と、木母は梅なり、

【沐猴而冠】 沐猴は、獼猴をいふ、猴の一種なり、人、衣冠を著くと雖も、心は人に類せざるをいふ、史記の項羽本紀に「或說項王曰、關中阻山河四塞、地肥饒、可都以霸、項王見秦宮室皆以燒殘破、又心懷思欲東歸、曰、富貴不歸故鄉、如衣繡夜行、誰知之者、說者曰、人言楚人沐猴而冠耳、果然、項王聞之烹說者」註に「言フココロハ、獼猴久シク冠帶ヲ著クルニ任ヘズ、以テ楚人ノ性躁暴ナルニ喩フ」

【木居士】 昔言故事に「木ニテ神像ヲ刻シタルヲイフ」韓愈に「題木居士」の詩あり、曰く、「火透波穿不計春、根如頭面幹如身、偶然題作ーーー、便有無窮求福人」

【目眦盡裂】 目を張りて「ニラミ」視る貌、眦は眥に同じ、一音シ說文に「目厓也」「メジリ」史記の項羽紀に「頭髮上指、ーーーー」

【木耳】 和名「キクラゲ」木海月の義なり、菌の類、

【目使】 人を目「ヅカヒ」して使役する義、人を見さげて役するさま、唐書に「ーー頤令、自視王侯」

【默識】 默は言はざるなり、識は記なり、論語に「默而識之」とあり、之とは義理を斥す、人の道を求むる講說をまたずして義理を心に存ぜんことを要す、蓋し力めて記臆するにあらず、わが心と理と相契合して忘ること能はざるなり（人ヲ誨ヘテ）を見よ、

【木實繁キ者ハソノ枝ヲ披ク】 （木實繁者披其枝）披は拆くなり、臣の勢强き者は、其の主を危くするに喩ふ、史記范睢傳に「ーーーーー、ーー披其枝者傷其心」また漢書蕭望之傳に「附枝大者、賊本心、私家盛者、公室危」とあるも義同じ、韓非子にも類語あり、

【苜蓿】 「ウマゴヤシ」といふ草の名、原野に多し、一根より叢生す、莖地に延きて蔓生し、長さ二三尺、葉は互生し、形、萩の葉に似て小さくして鋸齒あり、春末葉閒に三四五づつの小黄花、穗をなして開く、亦萩の花に似て小さし、一名は牧宿、漢書に目宿に作る、

【目食耳視】 食物を飾り作りて目の爲にし、味の何如を問はず、衣裳を飾り裝ひて、耳の爲めにし、體に適するや否やを問はざるをいふ、司馬光の迂書に「衣冠所以爲容貌也、稱體斯美矣、世人舍其所稱、聞人所尚而慕之、豈非以耳視者乎、飮食之物所以爲味也、適口斯善矣、世人取果餌、刻鏤之、朱綠之、以爲盤案之玩、豈非以目食耶、嗚呼衣食之奢、日甚一日、不以耳視、而目食者鮮矣」

【木犀】 桂花をいふ、多く巖嶺の閒に叢生するを以て巖桂ともいふ、秋に至りて、葉閒に小花を開く、白、黃、赤の三色あり、遠く馨ること沈丁花の如し、圓機活法に「曾端伯、友ヲ十花ニ取ル、巖桂ヲ以テ仙友ト爲セリ」と、墨莊漫錄に「ーー花ハ、湖南ニ、九里香ト呼ビ、江東ニ巖桂トイフ、浙人曰ク、ーーハ木ノ紋理犀ノ如キナリ」と、西溪叢語に「ーーヲ巖客トナス」白氏文集に「蟾宮分異種、人世散濃香」

【目成】 目にて意を通じ、望を遂するをいふ、楚辭に「滿堂兮美人、忽獨與余兮ーー」

【目笑】 口に發せず目と目とを交へて相笑ふをいふ、史記平原君傳に「十九人相與ーー之、而未發也」未發とは、輕侮の意、未だ言に發せざるをいふ、一本發を廢に作る、

【目前】 「メノマヘ」晉書列女傳に「爾等並貴、列吾ーー、吾復何憂」唐書劉晏傳に「爲轉運使、所任者、雖數千里外、奉敎令如ーー」

【目送】 目を放たずして人の行くを見送りするをいふ、左傳桓元年に「目逆而送之」服虔曰く「目トハ極視シテ睛（ひとみ）ノ轉ゼザルナリ」また漢書張良傳に「上ーー之」上は景帝、また轉じて他の物を見送るにもいふ、嵇康の詩に「ーー歸鴻、手揮五絃」

【木賊】 草の名、和名「トクサ」砥草の義なり、木骨を擦り磨く故にいふ、

【木奴】 蜜柑の異名、本草に「柑一名ーー」又曰「橘奴」襄陽耆舊傳に「李衡種橘千株、曰、吾有千頭ーー」

【木芙蓉】 芙蓉ともいふ、灌木、一根に叢生し、高さは一丈に至る、葉は互生し、大サ五七寸、五七尖あり、鋸齒あり、秋初より葉閒に花開き、冬初に至る、花は木槿に似たり、淺紅、白等種種あり（芙蓉）を見よ、

芙蓉　　唐　高蟾
天上碧桃和露種、日邊紅杏倚雲栽、
芙蓉生在秋江上、不向東風怨後開、

【木母】 梅の異名、湖海新聞に「北朝山濤、字致遠、赴召、宋神宗問曰、卿自山路來、上曰自山路來、木公、木母如何、濤曰木公正傲歲、木母正含春、木公松也、木母梅也、稱旨除中書」また夷堅志にも「木公松也、ーー梅也」また母の木像をいふ、通鑑梁紀に「始居文大后憂、依

丁闓作——。

【木綿花】 南史南海諸國傳に「林邑國ニ、金山アリ、吉貝ヲ出ダス、吉貝トハ樹名ナリ、其ノ花鵝毳ノ如シ、其ノ緒ヲ抽キ之ヲ紡シ布トナス」梧潯雜志に「木綿一名ハ瓊枝、其ノ高サ數丈、樹梧桐ニ類シ、花色深紅、子ヲ結ビ大サ酒杯ノ如シ、絮ヲ口ニ吐キ、茸茸トシテ細毳ノ如シ、舊イフ海南ノ蠻人織リ布ト爲シ名ヅケテ吉貝トイフ、今第ダ以テ裀褥ニ充ツ、其ノ軟且ツ溫ナルヲ取ル、未ダ治メテ以テ布ヲツクル者アラズ」また群芳譜に「木綿ハ春月ニ子ヲ以テ種ウ、花黃ニシテ秋葵ノ如シ實ヲ結ブ、三稜、鸎粟桃ノ如シ、北人呼ビテ花桃ト爲ス、熟スレバ則チ桃裂ケ絨現ハル、鵝毳ノ如シ、用ヒテ以テ衣ヲ製スルニ、甚ダ輕暖ナリ、其ノ柔細紡織ニ中ル」

【沐浴】 沐は髮あらひ、浴は身を洗ふ、屈原の漁父辭に「新沐者必彈冠、新浴者必振衣」李密の陳情表に「逮奉聖朝、——淸化」淸明なる德化の下に生息するをいふ、

【木蘭】 本草釋名に「林蘭・杜蘭・木蓮（其の香蘭の如く、其の狀蓮の如し、故に名づく）黃心（その木心黃なり、故に名づく）ト曰フ」白居易集に「木蓮ハ巴峽山谷閒ニ生ズ、民呼ビテ黃心樹ト爲ス、大ナル者、高サ五六丈、冬ヲ涉リ凋マズ云云」とあれば、我が國にて「モクレン」といふ木とは異り（「モクレン」ハ落葉樹ナリ）李時珍曰く「——ハ枝葉倶ニ疏ナリ、ソノ花內白ク外紫、亦四季ニ開ク者アリ、深山ニ生ズル者、尤モ大ナリ、以テ舟ニ爲ルベシ、花ハ紅黃白數色アリ、木肌細ニシテ心黃、梓人ノ貴ブトコロ」李白の江上吟に「——之枻沙棠舟、玉簫金管坐兩頭」柳宗元の詩に「騷人遙駐——舟」

【木蘭歌】 歌一に辭に作る、古の樂府の詩なり、女丈夫木蘭が男子に扮して徵兵に應じ、戰を畢へ、鄉里に歸りしことを敍せし古詩なり、作者は無名氏にて、詳かならず、滄浪詩話に「木蘭歌最古、然朔氣傳金柝、寒光照鐵衣之類、已似太白矣」と評せり、この詩、古唐詩合解梁樂府に載す、また五種遺規にも收む、字句やや異同あり、左に全文を錄す、

喞喞復喞喞、木蘭當戶織、不聞機杼聲、惟聞女歎息、問女何所思、問女何所憶、女亦無所思、女亦無所憶、昨夜見軍帖、可汗大點兵、軍書十二卷、卷卷有爺名、阿爺無大兒、木蘭無長兄、願爲市鞍馬、從此替爺征、東市買駿馬、西市買鞍韉、南市買轡頭、北市買長鞭、朝辭爺孃去、暮宿黃河邊、不聞爺孃喚女聲、但聞黃河流水鳴濺濺、旦辭黃河去、暮至黑山頭、不聞爺孃喚女聲、但聞燕山胡騎鳴啾啾、萬里赴戎機、關山度若飛、朔氣傳金柝、寒光照鐵衣、將軍百戰死、壯士十年歸、歸來見天子、天子坐明堂、策勳十二轉、賞賜百千彊、可汗問所欲、木蘭不用尙書郎、願借明駝千里足、送兒還故鄉、爺孃聞女來、出郭相扶將、阿姊聞妹來、當戶理紅妝、小弟聞姊來、磨刀霍霍向豬羊、開我東閣門、坐我西閣牀、脫我戰時袍、著我舊時裳、當窗理雲鬢、對鏡帖花黃、出門看火伴、火伴皆驚惶、同行十二年、不知木蘭是女郎、雄兎脚撲朔、雌兎眼迷離、雙兎傍地走、安能辨我是雄雌、

【目禮】 目を動して以て禮意を致すをいふ、漢書敍傳に「上以伯新起、數——之」上は成帝、伯は班伯、

【木蓮】 祕傳花鏡に「木芙蓉一名——」また拒霜ともいふ「フヨウ」を見よ、

【目論】 見る所ろによりて論じ、深く理を考へ究めざるをいふ、史記の越世家に「齊ノ使者曰ク、吾レ其ノ智ヲ用フルコトノ目ノ毫毛ヲ見テ、而シテ其睫（まつげ）ヲ見ザルガ如キヲ貴バザルナリ、今王、晉ノ失計ヲ知リテ、而シテ自ラ越ノ過ヲ知ラズ、是レ目論ナリト」註に「越王、晉ノ失ヲ知リテ、自ラ越ノ過ヲサトラズ、猶ホ人ノ眼能ク毫毛ヲ見テ、自ラ其ノ睫ヲ見ザルガゴトシ、故ニ之ヲ——トイフ」一解に他人の過失を知りて自ら知らざるに喩ふと、

【模糊】 「ハッキリ」せずして廣き貌、類書纂要に「模糊ハ分明ナラザル貌」白樂天の詩に「平明山雪白——」東坡の後石鼓歌に「模糊半已似瘢胝、詰曲猶能辨跟肘」

【糢糊】 糢は模の俗字、前條を見よ、

【茂才】 士を取る科目、もと秀才といひしを、後漢の世、光武帝（姓ハ劉名ハ秀）の諱を避けて——といふ、後漢書に「雷義、後擧——、讓於陳重、不應命」

【摸寫】 手を以て摸寫するをいふ「ナラヒウツス」後漢書蔡邕傳に「正定六經文字、邕自書冊於碑、使工鐫刻、立於太學門外、其觀視及——者、車乘日千餘兩」

【摹寫】 摹は、摸に同じ、前條を見よ、

【茂松】 茂れる松、詩經に「如松茂矣」潘岳の賦に「若——之依山巓也」謝靈運の詩に「停策倚——」

【冬青樹】 高さ二三丈に及ぶ、葉は「サザンクワ」に似てせまく小さし、表面艶やかなり、初夏のころ、五瓣の毛の如き小花を著けて實を結ぶ、材は堅く、扇の「カナメ」につかふ、故に一名を扇骨木ともいふ、その新芽は赤くして麗はしきにより生垣とす「カナメモチ」

【須フル所ロハ松樹満泉】（所須松樹満泉）舊唐書潘師正傳に「高宗幸東都、因召見與語、問師正山中有何所須、師正對曰、――――――、山中不乏、高宗與天后、甚尊敬之」に、

【物故】 漢以來死を――といふ、物は勿なり、故は事なり、復た事を能くする所ろなきをいふと、一解に死を斥して言ふことを欲せず、ただ其の服用せし所ろの物皆すでに故しといふ義なりと、漢書の司馬相如傳に「士卒多――」また史記の匈奴傳に「漢士卒――亦數萬」

【以テ取ルベク、以テ取ルナカルベシ、取レバ廉ヲ傷ル】（可以取、可以無取、取傷廉）孟子離婁の下に出づ、下に「可以與、可以無與、與傷惠、可以死、可以無死、死傷勇」とあり、朱註に「先ヅ可以トイフハ、略見テ自ラ之ヲ許スノ辭ナリ、後ニ可以無トイフハ、深ク察シテ自ラ疑フノ辭ナリ」と、

【以テ六尺ノ孤ヲ託スベク、以テ百里ノ命ヲ寄スベシ】（可以託六尺之孤）論語泰伯篇、曾子の語、古は生れて二年半を一尺といふ、六尺之孤は十五歳位の「ミナシゴ」（託孤寄命）を見よ、

【基ヲ發ム】（發基）發は始なり、基本を始め立つる義、書經の武成に「先王建邦啓土、公劉克篤前烈、至于太王肇基王迹、王季其勤王家」先王は后稷をいふ、公劉は后稷の曾孫なり、太王は古公亶父なり、

【本ヲ拔キ原ヲ塞グ】（拔本塞原）を見よ、

【本立チテ道生ズ】 論語學而篇に「君子務本、本立而道生、孝弟也者、其爲仁之本與」とあり、

【本ニ報イ始ニ反ル】（報本反始）を見よ、

【門ヲ出ヅレバ大賓ヲ見ル如シ】（出門如見大賓）論語顔淵篇に見ゆ、孔子の語、門を出でて物に接する時は、恰も公侯などの大賓に接する如く、常に敬を持すべしとの義、

【門ヲ款ク】（款門）を見よ、

【門ヲ閉ヂテ車ヲ造リ門ヲ出デテ轍ニ合ス】（閉門造車、出門合轍）法を固守せざれども、その行爲の自然に、法に合ふをいふ、中庸或問に「古語所謂――――――――、蓋言其法之同」に

【門下】 家に使役せらるる者、戰國の時、食客をもいふ、史記信陵君傳に「誡――有敢爲魏王使通者死」また單にその家を斥していふ、戰國策に「齊人馮煖使人屬孟嘗君、願寄食――」に、また後漢の頃より門弟子の義に用ふ、後漢書承宮傳に「過徐盛廬、聽經諸生――」この註に「續漢書云、宮棄其猪、猪主欲笞之、門下生共禁止、又云宮得虎所殺鹿、持歸、肉分――、取皮上師」

【門客】 門下に寄食せるもの「カカリウド」事文類聚に「滕達道嘗爲范文正公――」

【門外多ク長者ノ車轍アリ】（門外多有長者車轍）長者とは、位尊く、德高き人を云ふ、史記の陳丞相世家に「家乃負郭窮巷、以弊席爲門、然門外多有長者車轍」王縉の詩に「門外時聞長者車」

【門外漢】 その事に豫り知らざるものをいふ、漢は男子の義、五燈會元に「問智興、東坡詩溪聲便是廣長舌、山色豈非淸淨身、曰若不到此田地、如何有這箇消息、此猶曰、是―――耳」

【悖リテ入ル者ハ、悖リテ出ヅ】 道理に悖りたる事をするときは、亦道理に悖りたる報の來るをいふ、大學に「言悖而出者、亦悖而入、貨悖而入者、亦悖而出」とあり、我惡聲を人に加ふるときは、人亦惡聲を我に加ふ、所謂賣り言葉に買言葉なり、また非道を以て人の財を取るときは、人亦非道を以て之を奪ふをいふ、

【物ヲ開キ務ヲ成ス】（開物成務）卓氏藻林に「開物トハ、人ノ未ダ知ラザル所ロノ者ヲ開發スルヲイフ、成務トハ、人ノ爲サント欲スル所ロノ者ヲ成シテ、之ヲ全クスルヲイフ」とあり、易の繫辭上傳に「夫易、開物成務、冒天下之道、如斯而已者也」

【物ヲ玩ベバ志ヲ喪フ】（玩物喪志）書經の旅獒に「玩人喪德、――――」とあり、玩物とは耳目の好む所ろに役せられて珍奇の物を愛玩する義、玩人とは君子を狎侮するをいふ、

【物必ズ先ヅ腐リテ蟲之ニ生ズ】 俗諺に「身から出た錆」といふに似たり、東坡の范增論に「物必先腐也、而後蟲生之、人必先疑也、而後讒入之」とあり、この語、蓋し荀子の勸學篇に「肉腐生蟲、魚枯生蠹」とあるに本づく、

【物ハ常ニ好ム所ロニ聚マル】（物常聚於所好）人、物を好めば必ずその人の處に聚るをいふ、讀書を好む人の書籍に於ける、愛劍家の刀劍に於けるが如き、皆是れなり、歐陽修の集古錄目序に「――――――、而常得於有力之彊、有力而不好、好之而無力、雖近且易、有不能致之」

【模範】 手本となる義（模範）を見よ、

【門外雀羅ヲ設クベシ】（門外可設雀羅）人の訪ひ來る者なきによりて、群雀來りあつまる、故に羅（アミ）

を張りて捕ふべしとなり、漢書の鄭當時の傳賛に「下邽翟公爲廷尉、賓客塡門、及廢、門外可設雀羅、後復爲廷尉、客欲往、翟公大署其門曰、一死一生廼知交情、一貧一富廼知交態、一貴一賤交情廼見」と、史記には雀を爵に作る、同じ、

【門戸】「イヘガラ」三國志魏志曹爽傳の註に「桓範謂曹羲曰、于今日卿等——倒矣」晉書王敦傳に「我兄老婢耳、——衰矣」

【門巷】門戸と、門に入る「コミチ」と、宋書謝瞻傳に「賓客輻輳、——塡咽」雍陶の城西訪友別墅詩に「村園——多相似、處處春風枳殼花」羅鄴の春日宿崇賢里詩に「柳暗榆飛春日深、水邊——獨來尋」

【門戸ヲ成ス】（成門戸）一家を盛んに興す義、梁書王茂傳に「茂年數歲、爲大父深所異、常謂親識曰、此吾家之千里駒、成門戸者必此兒也」

【文字】周禮の鄭注に「古曰名、今曰字」儀禮の鄭注に「名書文也、今謂之字」とあり、春秋以前には單に之を文といひて、字といはず、その文字と倂稱するに至りしは、秦の琅邪臺石に始まる、字とは孳乳の義にして、猶ほ人倫の子を生みて漸くその種類を增加する如く、文を本として多くの字を生ずるに至りしなり、說文の序に「依類象形謂之文、形聲相益謂之字、著於竹帛謂之書」宋の鄭樵曰く「獨體爲文、合體爲字」元の戴侗曰く「獨文爲文、合文爲字」衛恒の四體書勢に「昔在黃帝創制造物、有沮誦・倉頡者、始作書契以代結繩」とあり、文字は黃帝以來唐虞三代を經て五千餘年の久しき、文明の進步、時世の必要に應じて、次第に增益せしことは、左に示す、歷代の字書に徵して略知らるべし、

說文解字	（漢）	九千三百五十三字、
廣雅	（魏）	一萬八千百五十字、
玉篇	（梁）	二萬二千七百二十六字、
廣韻	（唐）	二萬六千一百九十四字、
字彙	（明）	三萬三千一百七十九字、
康熙字典	（清）	四萬二千一百七十四字、

なほ造字の法は（六書）を見よ、

【門資】「イヘガラ」王沉釋時論に「英奇奮於縱橫之世、賢智顯於霸王之初、當斯時也、豈計——之高卑、勢位之輕重乎」

【捫蝨】捫は「ヒネル」世說に「晉ノ王猛、桓溫ガ關ニ入リシト聞キ、褐ヲ被テ之ニ謁シ、蝨ヲ捫リテ當世ノ務ヲ談ズ、旁ニ人ナキガ若シ」

【捫蝨新語】十五卷、宋の陳善（字ハ敬甫、秋塘ト號ス、羅源ノ人）撰す、この書、經・史・子・讀書・解義・文章・文才・詩・詩文・詩詞・詩四六・詞曲・書畫・讖・聖賢・異端・儒釋等すべて四十八類に分ちて攷論す、その學、王安石を宗とするを以て元祐諸家を詆ること多く、特に三蘇を貶するを甚しとす、この書、津逮祕書に收む、

【文字ノ飲】詩文などを論じ、又は作りながら酒を飲む義、陳善の捫蝨新語に「韓退之嘲京師富兒、不解——、唯能醉紅裙」

【門人】弟子なり、史記孟軻傳に「孟軻鄒人也、受業子思之——」また門番をいふ、博異志に「——曰、汝已至此、何不求游覽畢而返」

【文殊】梵語曼殊室利の略、一に普現如來といふ、菩薩の一、智慧の佛とし、常に獅に騎れる所ろを圖す、放鉢經に「釋迦佛言我今得佛、是文殊恩、文殊是我過去本師、過去无量諸佛、皆文殊弟子、當來亦爾、文殊乃佛道中父母也」大藏法數に「具不可思議微妙功德、在諸菩薩之上、故名妙首」また「具不可思議微妙功德、最勝吉祥、故名妙吉祥」

【門生】門人に同じ、後漢書袁紹傳に「袁氏樹恩四世、——故吏徧於天下」

【門扇】門の扉（トビラ）漢書霍光傳に「黃門宦者各持——、王入門閉」

【瞞然】「ハヅル」貌、瞞一音バン 莊子天地篇に「子貢——慙、俯而不對」

【文選】六十卷、梁の昭明太子蕭統の編する所ろ、周秦以來梁に至る詩文を類聚せり、その種目は、賦詩騷七詔冊より弔文祭文に至る三十七類に分つ、唐の李善の註と呂延濟・劉良・張銑・呂向・李周翰の五臣註あり、後世合して六臣註といふ、此の書は實に文章の淵藪となすのみならず、李善の註は、又考證の資糧、一字一句瓌寶に非ざるはなし、古人の總集、この書を以て第一に置くは以ありといふべし、蕭統字は德施、梁武帝の太子なり、人となり仁孝寬和、常に才學の士を引き、與に篇籍を討論し、古今を商推す、東宮の藏書幾んど三萬卷、名才竝び集まる、大通三年病みて薨ず、年三十一、諡して昭明といふ、唐宋以來、この書、科擧の士の尊重する所ろにして、現今も選學と稱し、盛に學者の研究する所ろたり、

【文選爛、秀才半】宋の初世、科擧の士、競ひて四六駢儷の習に沿ひ文選を熟誦せり、故に文選一部を

爛熟せば試驗に及第して秀才となる半分の資を得たりとの意、夜航詩話六に「吾邦中古尙昭明文選、當時學者專意此書（中略）唐人亦然、故少陵有熟精文選理之句、至宋尤甚、時諺云――――――」拙堂文話四にも「宋朝科場、初沿排偶之習、故有――――――之語」

【門地】「イヘガラ」をいふ、閥閱なり、門閥に同じ、晉書王述傳に「王導以――辟述」

【門庭市ノ若シ】（門庭若市）人の多く來り「アツマル」義、戰國策に「羣臣進諫、――――」（臣ガ門ハ）を參看せよ、

【門帖】門聯に同じ「モンノレン」澠縹亭筆記に「北京宮闕成、太宗命解縉書――、以古詩書之、曰、日月光天德、山河壯帝居、上大喜、賚賜甚厚」また名刺を――といふこともあれども此と異り、

【門徒】佛者の徒弟、冊府元龜に「唐開元二年、制、百姓家多以僧尼道士爲――、相與往還、妻子無所避忌、甚成敝俗」また門番、周禮司門の注に「監門――」

【門ニハ泊ス東呉萬里ノ船】（窗ニハ含ム）を見よ、

【門ニ倚リテ望ム】（倚門ノ）を見よ、

【門ハ寒流ニ對シ、雪、山ニ滿ツ】唐の官廳物の休暇日訪王侍御不遇に「九日驅馳一日閑、尋君不遇又空還、怪來詩思淸人骨、門對寒流雪滿山」九日は公務に奔走して一日は休暇を賜ふ、たまたまその一日の閑を得て君を尋ねたるに、不在にて遇はず、空しく家にかへれり、平生君が詩を讀めば人の骨までも淸くする心地するは何故ぞと怪みしが、今日はじめてその所以を悟り得たり、君が家の門は寒流に對して、雪は前山に滿てり、この淸き風景の中に在りて作らるる故、その詩の淸らかなること限り無きは當然のことなりとの意、

【門閥】「イヘガラ」後漢書宦者傳論の字面、唐書魏元同傳に「――有素、資望自高」また薛登傳に「漢世求士、必觀其行、故士有自修、爲閭里推擧、然後府寺交辟、魏取放達、晉先――、梁陳薦士特尙詞賦」

【門楣】女子をいふ、陳鴻の長恨歌傳に「當時謠詠有云、男不封侯、女作妃、君看女却爲門上楣」と、楣は梁（ハリ）なり、――は門上の横梁なり、その門戸に光彩あるをいふ、またひろく家門の光榮たる義にも用ふ、高啓の詩に「男兒弧矢壯――」

【門牡】牡一音ボウ――は門戸を閉づるに用ふるもの「トザシ」漢書天文志に「長安章城門――自亡」註に「牡ハ下シ閉ヅル所以ノモノ、鐵ヲ以テ之ヲ爲ル」また扊扅は貧家の木にて作りし――をいふ、

【門聯】門に聯する「レン」明閑莊駒陰冗記に「鄭唐爲州長、嘗――云、架有春風筆、門無暮夜金」（門帖）を見よ、

【桃】音タウ禮記の月令に「仲春之月、桃始華」詩經周南桃夭篇に「桃之夭夭、灼灼其華、之子于歸、宜其室家」（夭夭は少好の貌、灼灼は華の盛んなる貌）典術に「桃者五木之精、其精生鬼門、能制百鬼、故作桃符、著門上以厭邪氣」幽明錄に「劉晨阮肇共入天台山、迷不得返、糧盡、得山上數桃、啖之、遂不飢、溪邊有二女、姿質妙絕、邀還家、停半年而歸」山海經に「東海有山、名度索、有大桃樹、屈蟠三千里、曰蟠桃」この語、十洲記にも出づ、韓非子に「彌子瑕見愛於衞君、食桃而甘、不盡而奉君、君曰、愛我哉、忘其口而念我、及色衰愛弛、得罪於君、君曰、是嘗食我以餘桃」開元天寶遺事に「御苑新有千葉桃華、帝親折一枝、插於妃子寶冠上、曰、此箇花尤能助嬌態也」李白の山中問答詩に「桃花流水杳然去、別有天地非人間」また贈汪倫詩に「桃花潭水深千尺、不及汪倫送我情」自注に「白遊涇縣桃花潭、村人汪倫常醞美酒以待白」常建の尋李九莊詩に「故人家在桃花岸、直到門前溪水流」蘇軾の惠崇春江晚景詩に「竹外桃花三兩枝、春江水暖鴨先知」（桃源）を參看せよ、

【股ヲ割キテ腹ニ啖ハシム】（割股啖腹）貞觀政要に「太宗謂侍臣曰、爲君之道、必須先存百姓、若損百姓以奉其身、猶割股以啖腹、腹飽而身斃」

【股ヲ刺シ書ヲ讀ム】（刺股讀書）事文類聚別集卷の四に「蘇秦、魏人張儀ト同ジク鬼谷先生ニ師事ス、書ヲ讀ミテ睡ラント欲スルトキハ、錐ヲ引キテ、自ラソノ股ヲ刺シ、血流レテ踝ニ至ル」

【模樣】「アリサマ」また形狀をいふ、杜荀鶴の詩に「子細尋思底――」

【摸稜】事を處するに、判然と可否せざるをいふ、唐書蘇味道傳に「蘇味道相ト爲ル、常ニ人ニ謂ヒテ曰ク、事ヲ決スルニ、明白ヲ欲セズ、誤レバ則チ悔アリ、摸稜シテ兩端ヲ持シテ可ナリト、故ニ世ニ摸稜手ト號ス」とあり、即ち人に政事を問はるるときは、可否する所ろなく、手を以て坐する所ろの牀稜を摸して、依違するのみなりしをいふ、

【盬コト靡シ】（靡盬）盬は堅固ならざるなり、靡は無なり、――は堅固ならざることなき義、詩經小雅四牡篇に「豈不懷歸、王事――、我心傷悲」豈歸を思はざらん

や特に王事の以て堅固ならざる可からざるを以て、敢て私に徇ひて以て公を廢てず、是を以て內に顧みて傷み悲むとの意、

有レ物混成、先二天地一生、寂兮寥兮、獨立不レ改、周行而不レ殆、可三以爲二天下母一、吾不レ知二其名一、字レ之曰レ道、強爲二之名一曰レ大、大曰レ逝、逝曰レ遠、遠曰レ反、故道大、天大、地大、王亦大、域中有二四大一、而王居二其一一焉、人法レ地、地法レ天、天法レ道、道法二自然一 （老子二十五章）

門閭 旌二別淑慝一、表二厥宅里一、注、表二異善人之居里一、如下後旌二表門閭一之類上 （書經畢命）

門限 大夫士、出二入君門一、由二闑右一不レ踐レ閾 注、閾門限 （禮記曲禮）

門外 君言至則主人出拜二君言之辱一、使者歸則必拜二送于門外一 （同上）

門前 揚雄閉レ門、空讀レ書、門前碧草春離離 （戴叔倫行路難）

門柳 眞成獨坐空搔レ首、門柳蕭蕭噪二暮鴉一 （高適重陽詩）

門庭 門庭無二雜賓一、車轍多二長者一 （孟浩然）

門牆 夫位尊則賤者日隔、伺二候于門牆一者、日益進、則愛博而情不レ專 （韓愈與二陳給事一書）

門尹 門尹除レ門、注、門尹司門也、除レ門、掃二除門庭一也 （國語周語）

門祚 喪亂以來、門祚衰落 （唐書柳玭傳）

門法 子貢俊才、門法不レ墜 （庾肩吾書品論）

門風 篤學修行、不レ墜二門風一 （顏氏家訓）

ヤ

【矢】 音シ說文に「古者、夷牟（黃帝の臣）初作レ矢」荀子解蔽篇に「浮游作レ矢」釋名に「矢ハ指ナリ、其ノ指シ向フ所ロアレバ、迅速ナルヲ言フ、又之ヲ箭トイフハ、前進スルヲ言フナリ」揚子方言に「關ヨリシテ東ハ矢トイヒ、關ヨリシテ西ハ箭トイフ」易の繫辭に「剡レ木爲レ矢」嚆矢は響箭なり、莊子在宥篇に「焉知曾史之不レ爲二桀紂嚆矢一也」射者必ず先づ嚆矢を以て其の遠近を定む、よりて事の初の義とす、嚆一に嗃に作る、同じ、勁矢は「ツヨキ」矢、流矢は「ソレヤ」形矢は「アカヌリ」の矢、

【箭】 前條を見よ、

【爺】 俗に父をいふ、木蘭辭に「軍書十二卷、卷卷有二爺名一、阿爺無二大兒一、木蘭無二長兄一」

【冶遊】 心「トラケ」て遊ぶ、朱慶餘の詩に「閒蹤結レ客――時」

【夜遊】 夜、游ぶをいふ、魏志王粲傳の「吳質以二文才一爲二文帝所一レ善」の注に「魏略曰、太子與二吳質一書曰、少壯眞當二努力一、年一過往、何可二攀援一、古人思三秉レ燭――一、良有レ以也」（燭ヲ秉リ）を見よ、

【夜雨】 夜の雨、杜甫の贈衞八處士詩に「――剪二春韭一、新炊閒二黃粱一」陸游の――詩に「――有二殘滴一、秋砧無二絕聲一」

【瘍醫】 今いふ外科醫なり「デキモノ」「キリキズ」を治す、周禮天官に見ゆ、

【揚雄】 字は子雲、蜀郡成都の人、少くして學を好み博く群書を極む、口吃にして劇談する能はず、而して沈思を好む、成帝の時、郞と爲り、黃門に給事たり、嘗て甘泉・河東・校獵・長楊の四賦を奏す、また法言及び太玄經等を著す、王莽に仕へてその功德を頌す、綱目に「莽大夫揚雄死」と書するは、その罪を明かにするなり（揚子法言）を參看せよ、

【養由基】 楚の大夫、藝文類聚に「射ヲ善クスル者、楊葉ヲ去ルコト百步ニシテ、之ヲ射、百發百中ス」と、ての事戰國策また史記周紀に出づ、晉楚鄢陵に戰ふ時、由基の射におそれて晉の師乃ち止みぬ、また淮南子に「楚王ニ白猿アリ、由基ノ始メテ弓ヲ調スルヲ見ルヤ、木ヲ擁シテ號ブ」と見ゆ、左傳に「潘尫之黨與――蹲甲而射レ之徹二七札一焉」（李廣石ヲ）を參看せよ、宋史陳堯咨傳に「堯咨善射嘗以レ錢爲レ的、旬レ發必貫」其

中時號小由基」

【養鍼】 「ヤシナヒ、ソダツル」鍼は育の古字、班固東都賦に「豐圃草以鍼獸」梅堯臣の詩に「有志在ーー」

【楊維楨】 字は廉夫、元の諸曁の人、生平氣局高曠、常に華陽巾を戴き、羽衣を披て山水の間に周遊し、聲樂を以て自ら隨ふ、早歲吳山鐵冶嶺に居り、萬卷樓を築き、自ら鐵崖と號す、後ち鐵笛を洞江に得、鐵笛子と號す、その文辭秦漢にあらざれば學ばず、著すところ楊鐵崖詩集あり、元の亡後、明の太祖諸儒を召して禮樂を纂するに及び、維楨が前朝の老文學なるを以て使を遣し、幣を奉じてその門に詣らしむ、謝していふ、豈老婦の將に木に就かんとして再び嫁を理する者あらんやと、卒する年七十五(楊鐵崖詩集)を見よ、

【陽瘖】 瘖は喑に同じ、啞なり、佯りて「オフシ」となる、唐書薛元超傳に「政出武后、因ーー乞骸骨」

【陽烏】 日の異名、張協の七命に「ーー爲之頓羽、夸父爲之投策」

【楊惲】 敞の子、字は子幼、漢の華陰の人、宣帝の時、霍氏の反謀を發せしを以て平通侯に封ぜられ、中郎將に遷る、惲廉潔にして私なし、人上書して惲、妖惡の言を爲すと告ぐ、免して庶人と爲す、家居して、産を治め自ら娛む、その友孫會宗之を戒む、惲報じて曰く「過大行臘、當爲農夫以沒世、田家作苦、歲時伏臘、烹羊炰羔、斗酒自勞、酒後耳熱、仰天拊缶、而呼嗚嗚、其詩曰、田彼南山、蕪穢不治、種一頃豆、落而爲萁(豆莖なり)人生行樂耳、須富貴何時、淫荒無度、不知其不可也」人上書して告ぐ、惲驕奢にして悔いずと、廷尉に下し、會宗に與ふる書を案得し、帝見て之を惡む、大逆無道を以て腰斬せらる、

【楊葉】 「ヤナギ」の葉、漢書枚乘傳に「養由基、楚之善射也、去ーー百步、百發百中」

【陽焰】 「カゲラフ」焰一に炎に作る、春の「ノドカ」なる日に空中に「チラチラ」と立ち上りて見ゆる氣「カゲロヒ」「イトユウ」庶物異名疏に「龍樹大士曰、日光著微塵、風吹之野中、轉名之爲ーー、愚夫見之、謂之野馬、渴人見之、謂之流水」

【羊羔】 「ヒツジ」通文釋義に「大曰羊、小曰羔」

【楊香】 晉書に「ーー年十四歲、嘗テ父豐ニ隨ヒテ田ニ往キ粟ヲ穫ル、父虎ノ爲メニ曳キ去ラル、時ニーー手ニ寸鐵ナキモ、惟父アルヲ知リテ、身アルヲ知ラズ、踊躍シテ向ヒ前ミ、虎ノ頸ヲ搤持ス、虎モ亦靡然トシテ逝キヌ、父賴リテ害ヲ免ルルヲ得タリ」

【羊角】 莊子逍遙遊に「搏扶搖ーー而上者九萬里」の註に「上行(ふきあがる)ノ風、之ヲ扶搖イ、イヒ、風曲リテ上行スル羊角ノ若シ」これによりて羊角は、上行する旋風の義に用ふ「ツムジカゼ」

また棗(ナツメ)の異名、

また羊の「ツノ」易の大壯九三に「羝羊觸藩羸其角」

【揚搉】 揚は擧なり搉は引なり、また「ハカル」なり、之を擧引して其の趣を陳ぶる義、漢書敍傳に「ーー古今、監世盈虛」一解に、都凡なり、大畧をすべ擧るなりと、

また韓非子の篇名、

【揚且皙】 揚は眉上の廣きなり、皙は眉の白色なるなり、詩經鄘風君子偕老篇に「揚且之皙也」且は助語、

【楊基】 字は孟載、眉菴と號す、明の吳中の人、官は山西按察使たり、讒にあひ職を奪はれて死す、その詩は元末の餘習を帶び、頗る纖穠に近しと雖も、五言古、七言律の如きは、俊逸の稱あり、袁凱と、齊しく驅り、以て高啓に羽翼するに足る、高啓・張羽・徐賁と吳中の四傑と號す、基又善く山水竹石を畫き、書に工なり、著すところ眉菴集あり、

【楊祺】 字は吉生、龍溪の人、明末の諸生、丙戌の後、茅を北山の語雲峯に結び、情を書畫に肆にす、尺幅寸紙も人爭ひて之を貰す、文を能くし詩に工なり、卒する年九十六、

【養器】 自ら奉ずるところの器物なり、燕器に同じ、禮記王制に「祭器未成、不造燕器」の註に「凡家造祭器爲先、養器爲後」小學句讀に「燕器自奉之器」

【養氣】 孟子の公孫丑上に「我善養吾浩然之氣(中略)其爲氣也、至大至剛、以直養而無害、則塞于天地之間、其爲氣也、配義與道、無是餒也」と見ゆ、浩然の氣とは、盛大流行せる道德的氣力をいふ、これを養ふには道義に根すべしとなり、

【羊裘】 「ヒツジ」の「カハゴロモ」史記劉敬傳に「衣其ーー」

【陽九】 厄なり、陽厄五、陰厄四、合せて九と爲す、漢書匈奴傳に「今天下遭ーー之厄、比年饑饉」左思吳都賦に「世際ーー」文天祥の正氣歌に「嗟予遘ーー、隸也實不力」

【羊裘釣ヲ垂ル】 漢の嚴光字は子陵、少くして光武と同じく大學に遊べり、帝位に即くに及び、光身を隱して見えず、帝物色して之を訪はしむ、後ち齊國上書す、一男子あり、羊裘を被て澤中に釣すと、帝其の光かと疑ひ、乃ち安車玄纁を備へ、使を遣して之を聘せ

しむ、三反して後ちに至る、

【楊龜山】（楊時）を見よ、

【陽氣發處金石亦透】 朱子の語（精神一到）を見よ、

【養氣八法】 文筌に、文を作るに、――――あることをのせて曰く「朝廷宗廟聖賢ノ題ニハ、宜シク肅ナルベシ○山河軍旅ニハ、宜シク壯ナルベシ、○山林仙隱ニハ、宜シク淸ナルベシ、○宴樂歡娯通達ニハ、宜シク和ナルベシ、○神怪豪俠幽險ニハ、宜シク奇ナルベシ、○宮苑森樹佳麗ニハ、宜シク麗ナルベシ、○古ヲ攬リ玄ヲ搜リ雅勝ニハ、宜シク古ナルベシ、○登臨志士ノ功業ニハ、宜シク遠ナルベシ」

【楊貴妃】 名は太眞、貴妃は女官の名、父を楊玄琰といふ、唐玄宗の天寶四年宮に入る、敏慧にして艶麗、善く帝の意を迎へ、言ふ所ろ聽かれざるなし、遂に安祿山の大亂を釀し、同十五年馬嵬驛にて殺さる、白樂天の長恨歌を參看せよ、

【陽狂】 佯りて「キチガヒ」となる、後漢書丁鴻傳の字面、また晉書王衍傳に「楊駿欲以女妻焉、衍恥之、遂――自免」佯狂に同じ、

【楊巨源】 字は景山、唐の蒲州の人、貞元の進士、太和中河中の少尹となる、詩集一卷あり（楊柳）を參看せよ、

【陽煦山立】 人品の溫和にして端重なるを稱す、書言故事に「宋朝王沂公曾、姿質端厚ナリ、楊億之ヲ目シテ曰ク、王君――――宗廟ノ器ナリト」陽煦は陽氣の物を煦むる如きをいひ、山立はその端重なるをいふ、

【陽會】 俗にいふ「日待」「月待」の類なり、採蘭雜誌に「古人以二十九日爲上九、初九日爲中九、十九日爲下九、每月十九夜、置酒爲婦女之歡、爲藏鈎諸戲以待月明、名曰――、至有忘寢達曙者云云」

【養晦】 德を「ヤシナヒ」迹を「クラマシ」て時節を待つ義、詩經周頌に「遵養時晦」とあり、晦は昧なり、宋史に「――以待用」

【養花天】 春日花曇りの空をいふ、楊升庵文集に「越中牡丹開ク時、賞スル者親疎ヲ問ハズ、之ヲ看花局トイフ、此月多ク輕陰微雨アリ、之ヲ養花ノ天トイフ」釋仲林の花品にもこの事を載す、耿仙芝の詩に「野水短蕪調馬地、輕陰微雨―――」

【陽關】 晉の縣、涼州敦煌郡、今の甘肅安西州敦煌縣の西南、

【陽關ノ曲】 送別の時に、唱ふる詩をいふ、唐の王維の送元二使安西詩に「渭城朝雨浥輕塵、客舍青青柳色新、勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人」後人之を陽關の曲となし、三疊して之を唱ふ、渭城は咸陽の東北に在り、古の杜郵なり、都門を去る三十淸里に渭城館あり、唐人客を送るに、ここに於てす、陽關を出れば已に故人なし、況や安西をや、願くは更にこの故人の勸むる一杯の酒を盡すべしとの意、蘇軾の詩に「陽關三疊君須祕、除却膠西不解歌」仇池筆記に「古本陽關、每句皆再唱、而第一句不疊、乃知唐本三疊、故樂天詩相逢且莫推辭醉、聽唱陽關第四聲」

【陽驚】 佯りて驚く、漢書陳平傳に「――曰、以爲亞夫使、乃項王使也」

【楊炯】 唐の華陰の人、幼にして聰敏善く文を屬す、神童に擧げられて校書郎を授けられ、崇文館學士と爲る、後に出て盈川の令となる、政を爲すに酷を以て聞ゆ、意の如くならざる人吏あれば輙ち之を榜殺す、その作る所ろの文詞は、王勃・盧照隣・駱賓王と名を齊うし、初唐の四傑と稱せらる、盈川集十一卷あり、

【養形】 形體を保養する義、莊子に「吹呴呼吸、吐故納新、熊經鳥申、爲壽而已矣、此道引之士――之人、彭祖壽考者之所好也」

【楊繼盛】 字は仲芳、椒山と號す、明の容城の人、七歲母を失ふ、庶母妒忌、牛を牧せしむ、繼盛、刻厲力學、嘉靖二十六年進士に登第す、南京吏部主事を授けられ、兵部員外郎に遷る、嘗て十不可五謬を奏し、尋て嚴嵩の十大罪を劾す、嵩帝の怒を激し獄に囚はる、その妻張氏之を哀訴す、報ぜられず、嘉靖三十四年十月朔、棄市せらる、年四十、刑に臨み從容として詩を賦して曰く、

浩氣還太虛、　丹心照千古、　生前未了事、　留與
後人補、

また曰く、

天王自聖明、　制度高千古、　平生未報恩、　留作
忠魂補、

穆宗立ち、直諫の諸臣を䘏み、繼盛を以て首と爲し、太常少卿を贈り、忠愍と謚す（楊忠愍公集）を見よ、

【陽月】 陰曆十月は極陰の月なり、陰盡くれば陽氣すでに萌す、故に――といふ、爾雅に「十月爲陽」注に「純陰用事、嫌於無陽、故以名云」程子曰く「十月之ヲ陽月トイフハ、陽盡キテ陽ナキヲ疑ハンコトヲ恐ル、故ニ之ヲ――トイフ」

【陽言】 「ウハベ」を佯りて言ひふらす、戰國策に「――救韓」

【揚言】 次條に同じ、逸周書に「多私者不義、――者寡」

信」

【颺言】 「ワザト」聞えるやうに大聲にていふ、書經益稷に「拜手稽首——曰、念哉云云」注に「大言シテ疾キヲ颺トイフ」

【羊祜】 字は叔子、續の孫、晉に仕へ累遷して尙書左僕射都督荊州諸軍事となる、遠邇悅服す、呉の陸抗嘗てその德量を稱して樂毅・諸葛亮と雖も過ぐる能はずと爲す、卒して太傅を贈らる、

【陽侯之波】 晉の陽陵國侯、水に溺れて死し、大海の神となる、常に風波を起して舟を覆す、よりて————といふこと淮南子覽冥訓に出づ、楚辭に「凌陽侯之氾濫兮」また戰國策に「乘舟舟漏而不塞則舟沈矣、塞漏舟而輕————、則舟覆」淮南子に「武王伐紂渡于孟津、陽侯之波、逆流而擊」

【羊祜ガ憐ノ廣カリシニ、門客峴亭ノ碑ヲタツ】 十訓抄第一に見ゆ、亭は山に作るべし(墮涙ノ碑)並に下の(羊祜ノ)を見よ、

【暘谷】 東方日の出づるところをいふ書經堯典に「宅嵎夷曰——」、「寅賓出日」傳に「暘ハ明ナリ、日谷ヨリ出デテ天下明カナリ、故ニ——トイフ」と、また文選の東京賦に「左瞰——」また淮南子に「日出於——」

【羊祜ノ感慨】 羊祜字は叔子、泰山南城の人なり、晉書羊祜の傳に「羊祜、山水ヲ樂ム、風景每ニ必ズ峴山ニ造リ置酒シ言詠終日倦マズ嘗テ顧ミテ從事中郎鄒湛ニ謂ヒテ曰ク、宇宙アリテヨリ便チ此ノ山アリ、由來賢達ノ勝士此ニ登リ遠望スル我ト卿トノ如キ者多シ矣、皆湮滅シテ聞ユルナシ、人ヲシテ悲傷セシム、如シ百歲ノ後、魂魄猶ホ應ニ此ニ登ルベキナリト、湛曰ク明公、德四海ニ冠タリ、令聞令望、必ズ此ノ山ト倶ニ傳ハルベシ、湛ガ輩ノ若キニ至リテハ、乃チ當ニ公ノ言ノ如クナルベキ耳ト、祜卒ス、襄陽ノ百姓、祜ノ平生遊息セシ所ニ於テ碑ヲ建テ廟ヲ建ツ焉、後人ソノ碑ヲ望メバ輙チ泣ク、因リテ墮涙ノ碑ト名ヅク」

【楊載】 字は仲宏、元の杭州の人、趙孟頫翰林に在り載の文を得て、極めて推重せしより、文名京師を動かす、かつて學者に語りていふ「詩ハ當ニ材ヲ漢魏ニ取リ、音節ハ唐ヲ以テ宗トナスベシ」と、簡明目錄に「ソノ詩、淸思ハ范椁ニ及バズ、秀韻ハ揭傒斯ニ及バズ、權奇飛動ハ尤モ虞集ニ及バズ、而カモ風規雅贍ナルハ三人ノ閒ニ位置シテ、亦終ニ怍ヅル色ナシ」元代の詩人は虞集・范椁・揭傒斯及び載を推して四家と稱す、著す所ろ楊仲宏詩集八卷あり、

【陽山】 西漢の侯國、桂陽郡に屬す、今の廣東連州——縣の東に在り、晉より隋に至るまでの縣名、今の——縣の南二[illegible]里に在り、また唐以後の縣名は、卽ち今の——縣治これなり、唐書韓愈傳に「遷監察御史、上疏極論宮市、德宗怒、貶——令」

【陽死】 佯りて死す、漢書李廣傳の字面、

【楊枝】 「ハヤウジ」隋書眞臘傳に「每旦澡洗以——淨齒、讀誦經呪、又澡灑乃食、食能還用——淨齒、又讀經呪」また「ヤナギ」の枝、戴表元の昨日行に「——不耐秋風吹、薄交易結還易離」

【楊時】 字は中立、南劍將樂の人、心を經史に潛む、熙寧九年の進士、師禮を以て程明道に見ゆ、其の歸るに及び明道目送していふ、吾道南すと、學者千里を遠しとせずして之に從ふ、稱して龜山先生といふ、紹興五年卒す、年八十三、文靖と諡せらる、著す所ろ龜山集四十二卷あり、

【養志】 己の志を養ふをいふ、莊子に「故——者忘形、養形者忘利」呂氏春秋に「和顏色、說言語、敬進退、——之道也」また親の志を養ふにもいふ下の(——ノ孝)を見よ、

【樣子】 俗語、形式の義「カタ」朱子語錄に「小學書、做人底——」

【陽秋】 春秋に同じ、春秋褒貶の義によりて、褒貶の意に用ふ(皮裏ノ)を見よ、

【揚州】 禹貢九州の一、今の江蘇省の地、書經の禹貢に「淮海惟——」疏に「江南ノ氣、躁勁、厥性輕揚、故曰——、亦曰、州界多水、水波揚」また五代・宋・元・明の——は今の江蘇——府江都縣治、

【揚州之鶴】 (鶴ニ騎リ)を見よ、

【羊質虎文ヲ服ス】 (羊質服虎文)文選に「————、燕翼假鳳翙」言ふ心は人の非才なる羊質にして虎皮の文を服し、燕翼にして鳳凰の翙翔を假るが如きなり、次條を見よ、

【羊質ニシテ虎皮】 成語考に「其ノ文アリテ實ナキヲ譏ルナリ」と、揚子法言に「或ヒト曰ク、人アリ自ラ孔ヲ姓ニシテ、仲尼ヲ字ニシ、其ノ門ニ入リ、其ノ堂ニ升リ、其ノ几ニ伏シ、其ノ裳ヲ襲レバ、則チ仲尼ト謂フベキ乎ト、曰ク其ノ文ハ是ナリ、其ノ質ハ非ナリ、敢テ質ヲ問フ、曰ク羊質ニシテ虎皮ス、草ヲ見テ而シテ說ビ、豺ヲ見テ而シテ戰ク、其ノ皮ノ虎タルヲ忘ルルナリ」とあり、註に「戰ハ、悸(おそるる)ナリ」、羊、虎皮ヲ

假ル、豺ヲ見テ則チ戰ク、人僞名ヲ假ル、實ヲ考フレバ、則チ窮ス、マタ曰ク、君子小人必ズ、利害ニ臨ミテ然シテ後、其ノ眞ヲ見ル」後漢書劉焉傳論に「――虎皮見豺則恐」

【養志ノ孝】　父母の志を「ヨロコバス」やうにすること、孟子離婁上篇に「曾子、曾皙ヲ養フニ必ズ酒肉アリ、將ニ徹セントスルトキ、必ズ與フル所ロヲ請フ、餘リアリヤト問ヘバ、必ズ有リト曰フ、曾皙死シテ曾元、曾子ヲ養フニ、必ズ酒肉アリ、將ニ徹セントスルトキ、與フルトコロヲ請ハズ、餘リアリヤト問ヘバ、必ズ亡シトイフ、將ニ以テ復タ進メントスレバナリ、コレ所謂口體ヲ養フモノナリ、曾子ノ若キハ、則チ志ヲ養フト謂フベキナリ、親ニ事フルコト曾子ノ若キ者ハ可ナリ」

【揚子方言】　（方言）を見よ、

【揚子法言】　十卷十三篇、漢の揚雄の撰する所ろ、漢志に「揚雄所序三十八篇、大玄十九、法言十三、樂四、箴二」とあり、大玄は易に擬して作る、法言は諸子なり、樂箴は襍家なり、合せて一と爲すは甚だ謂れなきに似たり、舊本には、小序一篇あり、十三篇の末に在りしが、宋の宋咸之に註するに及びて卷首に散置す、古書の體例に違ふと雖も、觀覽に便なりとす、之を法言といふ者は揚子が總序に曰く「雄見諸子各以其知舛馳（道に背きて馳するなり）大氐詆訾聖人、卽爲怪迂、析辯詭辭、以撓世事、雖小辯、終破大道而惑衆、使溺於所聞而不自知其非也、及太史公記六國、歷楚漢、訖麟止、不與聖人同、是非頗謬於經」（大道を論ずれば、黃老を先にし、六經を後にし、游俠を序づれば、處士を退けて奸雄を進むるなどをいふ）故人時有問雄者、常以法應之、譔以爲十三卷、象論語、號曰法言」と、此れ其の義を取る所ろなり、然らば則ち是の書は揚子が慨歎發憤に由りて作れる所ろたるを知る、蘇軾曰く「艱深ノ詞ヲ以テ淺易ノ說ヲ文ル」と、この評其の病に中る所ろありと雖も、亦以て一概に論ずべからず、獨り司馬光の雄の書に於ける、崇信殊に太甚し、太玄の論に曰く「嗚呼、揚子雲ハ眞[illegible]大儒ナル者耶、孔子歿後、聖人ノ道ヲ知ル者ハ子雲ニ非ズシテ誰ゾ、孟荀ハ殆ンド擬スルニ足ラズ、況ヤ其ノ餘ヲヤ、玄ノ書ヲ觀ルニ、明ハ則チ人ヲ極メ、幽ハ則チ神ヲ盡シ、大ハ則チ宇宙ヲ包ネ、細ハ則チ毛髮ニ入リ、天地人ノ道ヲ合シテ以テ一ト爲ス、其ノ根本ヲ究メテ人ニ出ヅル所ロヲ示ス、萬物ヲ胎育シテ兼ネテ之ガ母

ト爲リ、地ノ之ヲ履ミテ窮ムベカラザルガ若ク、海ノ之ヲ挹ミテ竭スベカラザルガ若シ、蓋シ天下ノ道善者アリト雖モ、以テ此ニ易フルコト蔑シ矣」と、又法言集註の序に曰く「韓文公、荀子ヲ稱シテ軻雄ノ間ニ在リトス、又孟子ハ醇乎トシテ醇ナル者ナリ、荀ト揚トハ大醇ニシテ小疵ナリト、三子ハ皆大賢ニシテ六藝ヲ祖トシ、孔子ヲ師トス、孟子ハ詩書ヲ好ミ、荀子ハ禮ヲ好ミ、揚子ハ易ヲ好ム、古今ノ人共ニ宗仰スル所ロナリ、光ノ愚ノ如キハ固ヨリ敢テ其ノ等差ヲ議セズ、然レドモ揚子ノ生ハ最モ後ル、二子（孟荀）ヲ監ミテ聖人ニ折衷シ、心ヲ潛メテ以テ道ノ極致ヲ求メ、白首ニ至リテ然ル後チ書ヲ著ス、故ニ其ノ得ル所ロ多シト爲ス、後ノ言ヲ立ツル者ハ能ク加フルコト莫キナリ、未ダ小疵ナキコト能ハズト雖モ、然レドモ潛ム所ロ最モ深シ、恐ラクハ文公ノイフ所ロモ亦未ダ以テ定論ト爲ス可カラズ、孟子ノ文ハ直ニシテ顯ハル、荀子ノ文ハ富ミテ麗ハシク、揚子ノ文ハ簡ニシテ奧ナリ、唯其レ簡ニシテ奧ナリ、故ニ知リ難シ」と、又曰く「光少キヨリ此ノ書ヲ好ミ、精ヲ研キ慮ヲ竭シ、年ヲ歷ルコト已ニ多シ」と、東漢以來千數百年の間、揚子を尊ぶ者、桓譚・張衡以下二十家に下らず、即ち大儒韓昌黎の如きも、以て聖人の徒と爲し、司馬光既に之が集註を爲り、又之に準じて潛虛の一書を作りぬ、この書に註する者、晉に李軌、唐に柳宗元、宋に宋咸、吳祕の註あり、咸尤も力を肆ぶ、司馬光李軌以下柳、宋、吳四家の註釋を聚め、附するに自見を以てし、名づけて五臣註と爲して、之を朝に上れり、是に於て法言の註、大に備はれり、

【楊愼】　字は用修、升菴と號す、文忠の長子、明の新都の人、正德六年の進士第一たり、翰林修撰を授けらる、嘉靖三年、大禮を議するを以て忌諱に觸れ、謫せられて雲南に戍となり、同三十八年卒す、年七十二、隆慶元年太常少卿を贈られ、天啓中文憲と追諡せらる、愼、卓絕の才、弘博の學を以て、高第に登り、滇南に謫せられて、端居覃省、憤を發し書を著す、神螢理解、文を垂れ、義を表す、竟に坎壈にしてその身を終る、哀いかな、著すところ丹鉛總錄二十七卷あり、その經學詩文は共に明代に傑出せり、

【楊震】　後漢書列傳四十四に「――字ハ伯起、弘農華陰ノ人、少クシテ學ヲ好ミ、經ニ明カニ、博覽窮究セザル無シ、諸儒之ガ語ヲ爲シテ曰ク、關西孔子、楊伯起ト、常ニ湖ニ客居シ、州郡ノ禮命ニ答セザルコト數十

年、衆之ヲ晩莫（仕宦の遲暮なるをいふ）ト謂フ、而シテ志愈篤シ、後、鸛雀アリ、三鱣魚（鱣は黃質黑文、故に卿大夫の服の象となす）ヲ銜ミ、飛ビテ講堂ノ前ニ集ル、都講（學舍の長）魚ヲ取リ進ミテ曰ク、蛇鱣ハ卿大夫ノ服ノ象ナリ、數三ツハ三台ニ法ドルナリ、先生此レヨリ升ラント、年五十ニシテ乃チ始メテ州郡ニ仕ヘ、安帝ノ時太尉ト爲ル」後ち人の爲めに誣奏せられ、官を免ぜらる、慷慨して鴆を飮みて卒す、子楊秉、淸白を以て稱せらる（四知）を參看せよ、

【養心】 心を養ふをいふ、孟子盡心篇に「――莫善於寡欲」

【養眞】（眞ヲ養フ）天より稟けたる本性を養ふをいふ、陶潛の詩に「――衡茅下」

【楊震ノ四知】（四知）を見よ

【陽城】 字は亢宗、唐の北平の人、世々宦族たり、性孝友、敏にして學を好み、書に於て讀まざるところなし、進士に及第し、中條山柳谷の北に隱る、德宗召して諫議大夫となす、裴延齡の相と爲すべからざるをいふ、國子司業に遷り、出でて道州刺史となるに及び、太學生何蕃等二百餘人闕に伏して留らんことを請ふ、城州に至り民を治むること家を治むる如くす、唐書の傳に「城、國子司業ニ遷ル、諸生ヲ引キテ之ニ告ゲテ曰ク、凡ソ學者ハ忠ト孝トヲ爲スコトヲ學プ所以ナリ、諸生親ヲ省セザル者アル乎ト、明日城ニ謁シ、還リ養フ者二十輩、三年マデ歸リ侍セザル者ハ之ヲ斥ク」

【羊車ニ乘ル】 美しく飾れる車、晉書衞玠傳に「衞玠、風神秀異、少時羊車ニ洛陽ノ市ニ乘ル、見ル者、皆以テ玉人ト爲ス」羊車は釋名に「羊ハ祥ナリ、祥ハ善ナリ、善飾ノ車、今ノ犢車是レナリ」一解に、羊に「ヒカス」車なりと、

【羊酒】 羊肉と酒と、史紀盧綰傳に「盧綰者豐人也、與高祖同里、盧綰親與高祖太上皇相愛、及生男、高祖盧綰同日生、里中持――賀兩家云云」晉書霍原傳に「原山居積年、門徒百數、燕王月致――」

【養壽】（壽ヲ養フ）壽命を養ふをいふ、史記老子傳に「蓋老子百有六十餘歲、或言二百餘歲、以其修道而――也」晉書嵇康傳に「永嘯長吟、頤神――」

【養樹】 樹を種ゑて養ふ、柳宗元の種樹郭橐駝傳に「吾問――得養人術」白居易の東坡種花詩に「――既如此、養民亦何殊」

【楊朱】 字は子居、周の人、墨翟に後れ、孟子に先だち生る、その學己を愛するを主とす、墨翟の兼愛說と相反す、その著書世に傳はらず、列子に――篇あり、以てその說の一班を窺ふべし、孟子滕文公下に「――墨翟之言盈天下（中略）楊氏爲我、是無君也、墨氏兼愛、是無父也、無父無君是禽獸也」

【楊朱岐ニ泣ク】 淮南子說林訓に「楊子見逵路而哭之、爲其可以南可以北、墨子見練絲而泣之、爲其可以黃可以黑」と、高誘の注に「ソノ本ノ同ジクシテ末ノ異ナルヲ憫ム」とあり、楊子名は朱、墨子名は翟、練は白なり、李商隱の詩に「洞庭湖闊蛟龍惡、却羨――泣路岐」

【陽春】「アタタカキ」春をいふ、後漢書仲長統傳に「――時雨、不足以喩其澤」李白の春夜宴桃李園序に「――召我以烟景、大塊假我以文章」

【陽春之曲和者必寡】 その曲、彌々高ければ和する者彌々寡し、以て聖賢の超然として世俗の外に獨處するに喩ふ、次條を見よ、

【陽春白雪】 詩詞の高きを稱す、文選の宋玉の對楚王問に「楚襄王、問於宋玉曰、先生其有遺行與、何士民衆庶不譽之甚也、宋玉對曰、唯、然有之、願大王寬其罪、使得畢其辭、客有歌於郢中者、其始曰下里巴人、國中屬而和者數千人、其爲陽阿薤露、國中屬而和者數百人、其爲――――、國中屬而和者數十人、引商刻羽、雜以流徵、國中屬而和者、不過數人而已、是其曲彌高、其和彌寡」この語、新序卷一にも引けり、後漢書黃瓊傳に「陽春之曲、和者必寡、盛名之下、其實難副」岑參早朝大明宮詩に「獨有鳳凰池上客、陽春一曲和皆難」

【楊升菴】（楊愼）を見よ、

【陽燧】「ヒウチガマ」の類、日にてあたため「ハゲシク」之を摩して熱せしめ「モグサ」をつけて火を取るなり、淮南子の天文訓に「――見日則燃而爲火」注に「――ハ金ナリ、金杯ノ緣ナキ者ヲ取リ、摩シテ熱セシメ、日中ノ時、以テ日下ニ當テ、艾ヲ以テ之ヲ承クレバ、則チ燃エテ火ヲ得ルナリ」

【楊子江】「ヤンツーキャン」一名長江、又大江と稱し、西藏雪山に發源し、雲南・四川・湖北・江西・安徽・江蘇等の地を過ぎて、黃海に入る、長さ二千八百海里あり、黃河・白河・珠江と併せて支那の四大流と稱す、

【養生】「ヤウジヤウ」とも讀む、生命を養ふをいふ、莊子に「文惠君曰、善哉、吾聞庖丁之言、得――焉」司空圖の詩に「不用名山訪眞訣、退休便是――方」

【養性】（性ヲ養フ）己の性を善く養ふ義、孟子に「存其

心發其性、所以事天也」漢書梅福傳に「福居家常以讀書ーー爲事」宋史藝文志に「陶弘景ーー延命錄二卷」淮南子に「靜漠恬澹所以ーー也」

【楊誠齋】（楊萬里）を見よ、

【揚皙】 揚は眉の上の廣きなり、皙は色白きなり、詩經の鄘風君子偕老篇に「揚且之皙也」

【養素】 その素質を養ひ、眞性を全うする義、蒙求に「孟軻ーー」とあり、孟子の所謂「我善養吾浩然之氣」とあるをいふ、

【陽尊】「ウハベ」のみ尊ぶ、漢書高祖紀に「春正月ーー懷王爲義帝、實不用其命」

【煬帝】（隋ノーー）を見よ、

【楊忠愍公集】 四卷、明の楊繼盛撰す、簡明目錄に「繼盛ハ忠烈ノ士、詩文ヲ以テ著レズ、亦必ズシモ詩文ヲ藉リテ傳ハラズ、此ノ本乃チ後人ノ其ノ氣節ヲ重ンジ蒐羅シテ帙ヲ成ス、其ノ詞未ダ甚ダ工ナラズト雖モ、而モ日月ト光ヲ爭フ、今ニ迄ルマデ磨滅ス可カラザルナリ」（楊繼盛）を見よ、

【羊腸】 阪路の曲折したるところを羊の「ハラワタ」に比していふ、史記魏世家に「魏伐趙、斷ーー、拔閼與」とあり、注に「正義曰、ーー阪道、在太行山上」と、また蔡澤傳に「決ーー之險、塞太行之道」また、王知深宋記に「仇池山ハ高二十里、ーーノ盤道二十六廻アリ」と、呂氏春秋に「太行之山、盤紆如ーー」また魏武帝の苦寒行に「ーー阪詰屈、車輪爲之摧」元好問の詩に「憑誰爲報東州信、今在ーー百八盤」

【陽鳥】 雁の異名、爾雅に「雁ーー也」（陰羽）を見よ、

【楊鐵崖詩集三種】 二十六卷、元の楊維楨撰す、三種とは樂府註十卷、詠史註八卷、逸編註八卷をいふ、その詩五絶最も勝る、樂府も亦瑰奇豪麗、元末に於て殆ど之と敵するなし、當時詩格纖麗、歌行多くは溫庭筠の體に效ひ、全く小詞に類す、維楨雄桀の才を以て、力めてその弊を救はんと欲し、枉を矯め直に過ぎ、遂に詭怪不經の譏を招くに至る、然れども其の別調逸情は、亦天地閒磨滅すべからざるの文字なり、要するにその太甚を去れば則ち可なり、この書の外、東維子集三十一卷あり、主としてその文章を錄し、詩は僅に二卷を附行せり（楊維楨）を參看せよ、

【陽天】 東南の天をいふ、漢書郊祀志の「九天」の注に「九天トハ、中央鈞天、東方蒼天、東北旻天、北方玄天、西北幽天、西方昊天、西南朱天、南方炎天、東南ーーナリ」呂覽に「東南曰ーー、其星張翼軫」

【羊頭ヲ懸ケテ狗肉ヲ賣ル】（懸羊頭賣狗肉）無門關に出づ、看板に善きものを示して、惡しき物を賣るに喩ふ、

【養德】（德ヲ養フ）後漢書蘇竟傳に「棲遲ーー」諸葛亮の誡子書に「君子之行、靜以修身、儉以ーー」

【楊ニ入ラザレバ則チ墨ニ入ル】（不入於楊、則入於墨）韓愈の原道の句、孟子滕文公下に「天下之言、不歸楊、則歸墨、楊氏爲我、是無君也、墨氏兼愛、是無父也、無父無君是禽獸也」とあるに本づく、歸の字を變じて入とせしは例の陳言を去りたるなり、楊子名は朱、自愛說を唱ふ、墨子名は翟、兼愛說を唱ふ、

【羊肉】 莊子に「ーー不慕蟻、蟻慕ーー、ーー羶也」老學菴筆記に「建炎以來、尙蘇氏文章、學者翕然從之、而蜀士尤盛、亦有語曰、蘇文熟喫ーー、蘇文生喫菜羹」

【樣ニ依リ葫蘆ヲ畫ク】（依樣畫葫蘆）古人の所爲に倣ひて、少しも新意を出だす所ろなきをいふ、東軒筆錄に「陶穀、文翰爲一時冠（中略）人或薦之、太祖笑曰、頗聞翰林草制、皆檢前人舊本、改換詞語、此俗所謂ーーーーー爾、穀乃作詩曰、堪笑翰林陶學士、年年ーーーーー、太祖益薄其怨望、決意不用」蘆は瓢と通ず「ユフガホ」詳しくは同書を見よ、

【楊梅】 和名「ヤマモモ」格物總論に「ーー其子如彈丸」ーーは暖國に多し、山に自生し、又庭にも植う、葉は細長くして粗き鋸齒あり、冬も凋まず、實は「イチゴ」に似て夏の末に紫赤色に熟す、味甘し、皮を藥用とし、また桃皮といひて染料とす、越郡志に「會稽ーー爲天下之奇」と、本草綱目に「ーー樹、如荔枝、而葉如龍眼、冬亦不凋、二月開花結實、形如桑實、五月熟、有紅白紫三種、紅勝于白、紫勝于紅、顆大而核細、其青時極酸、熟則如蜜」李白の詩に「江北荷花開、江南ーー熟」

【陽報】「アラハナル」報なり、說苑に「夫有陰德者必有ーー、有隱行者必有昭名」

【養望】 晉書の陶侃傳に「何有亂頭ーー自謂弘達耶」小學外篇にもこれを引きて「ーーハ其ノ虛望ヲ養フナリ」と註せり、されども適切ならず、北史魏收傳に「不ーー於丘壑、不待價於城市」とあり、おもふにーーの二字は六朝の慣用語なり、養は安んじて生を養ふ義、望は意望の義、意に任せて安んじ居る意なるべし、宋元通鑑の仁宗紀に「張昇對曰、今陛下之臣、持祿ーー者多、而赤心謀國者少」とあるなど、あはせ考ふべし、

【楊寶黃雀】 續齊諧記に「楊寶年九歲時、至華陰山北、

見一黄雀爲鴟梟所搏、墜於樹下、爲螻蟻所困、寶取之以歸、置巾箱中、唯食黄花、百餘日毛羽成、乃飛去、其夜有黄衣童子、向寶再拜曰、我西王母使者、君仁愛救拯、實感成濟、以白環四枚與寶、令君子孫潔白位登三事、當如此環矣（三事は三公なり、四枚は四世に象どる）寶震平世、隱居敎授、王莽徵之、遂逃遁、光武高其節、公車特徵、不到、子震、安帝時、爲太尉、震子秉、桓帝時爲太尉、秉子賜、靈帝時爲太尉、賜子彪、獻帝時爲太尉、魏文帝時、復爲太尉、震至彪、四世太尉、德業相繼、

【楊伯起】 (楊震)を見よ、

【陽坡茶】 茶譜に「宣州宣城縣有了山、其東爲朝日所燭、號曰陽坡、其茶最勝、太守薦之、京洛人士、題曰了山陽坡横文茶」

【楊萬里】 字は廷秀、誠齋先生と號す、宋の吉州吉水の人、紹興二十四年の進士、三朝に際遇し、始終一節、愛君憂國の心、皎然として日月と光を爭ふ、宋の孝宗その仁者にして勇あり、書生にして兵を知ることを稱す、詩は陸游・范成大と並び稱せらる、開禧二年寶謨閣學士に升りて卒す、年八十三、光祿大夫を贈られ、文節と謚せらる、著す所ろ、誠齋集・易傳あり、

【楊復恭ガ昭宗ヲ己ガ立テタルトテ負心門生天子云云】 駿臺雜話「足利家の亂」に見ゆ、舊唐書宦官傳に、復恭が致仕の由を訴へし語なりとて「承天是隋家舊業、大姪但積粟訓兵、不要進奉、吾於荊榛中、援立壽王、有如此負心門生天子、既得尊位、乃廢定策國老」と記せり、復恭は僖宗に寵用せられ魏國公に封ぜらる、帝崩じて壽王を迎立し、己は兵權を掌握し、頗る朝政を擅にせしかば帝之を惡み、大順二年詔して復恭を致仕せしめ、後遂に誣ふるに反を以てして誅滅せしむ、

【楊秉】 後漢書楊震傳に「――字ハ叔節、震ガ中子ナリ、桓帝ノ時、太尉ト爲ル、朝廷得失アル毎ニ、趣チ忠ヲ竭シテ規諫ス、多ク納用セラル、秉性酒ヲ飮マズ、又早ク夫人ヲ喪フ、遂ニ復、娶ラズ、所在淳白ヲ以テ稱ス、嘗テ言ヒテ曰ク、我ニ三不惑アリ、酒色財ナリト」

【養兵】 (兵ヲ養フ)兵卒を養ひ置く義、水滸傳第六十回に「李固便道、小人近日、有些脚氣的症候、十分走不得多路、盧俊義聽了大怒道、――千日、用在一朝」平生多くの費を出して、兵を養ひ置くは、一朝事ある時の用に立てんためなりとの意、

【養病坊】 官費にて施療する病院なり、唐書に「開元中分置病坊於諸寺、以悲田養病」また宋史に「仁宗時、罪與多非、張士遜無所補、諫官韓琦上疏曰、政事府、豈――邪」

【陽木】 春夏に「サカユル」木、桐の類、周禮山虞に「仲冬斬――」また一解に山の南に生ずる木、

【楊墨】 楊朱と、墨翟となり、楊朱は爲我を主とし、墨翟は兼愛を主とす、孟子滕文公下に「能言距――者、聖人之徒也」韓愈の與孟簡書に「古者――塞路、孟子辭而闢之、廓如也」

【羊曼】 晉人、字は祖延、祜の兄の孫、任達にして酒を嗜み、阮放等と八人志を同くし友とし善し、並に名士たり時に州里阮放を稱して宏伯となし、郄鑒を方伯となし、胡毋輔之を達伯となし、卞壼を裁伯となし、蔡謨を朗伯となし、阮孚を誕伯となし、劉綏を委伯となし、而して曼を濌伯となす、號して兗州八伯といひ、古の八俊に擬す、曼仕へて丹陽の尹となる、

【陽明學】 明の王守仁の學說をいふ(王陽明)また(傳習錄)を見よ、

【陽明四句之訣】 王陽明が道を學ぶの門戶として、その徒に授けたるもの、一に四言敎ともいふ、曰く「無善無惡心之體、有善有惡意之動、知善知惡是良知、爲善去惡是格物」三輪執齋の四言敎講義、收めて博文館の日本文庫第四編に在り、參看すべし、

【陽明全書】 (王文成公全書)を見よ、

【洋洋】 衆多なる貌、詩經魯頌閟宮に「萬舞――」また廣き貌、詩經大雅大明に「牧野――」また水の盛なる貌、詩經衞風碩人に「河水――」また流動充滿の意、中庸に「――乎如在其上、如在其左右」また美善なり、書經伊訓に「聖謨――」また考ふる貌、爾雅釋訓に「――思也」

【陽陽】 詩經王風に「君子――」とあり、傳に「其ノ心ヲ用フルトコロナキナリ」と、また自若たる貌にも用ふ、また得志の貌とも說く、韓愈の張中丞傳後序にも「――如平生」

【揚揚】 驕慢の貌、史記晏子傳に「意氣――、甚自得也」

【漸ク佳境ニ入ル】 (漸入佳境)「ダンダン」に「ヨクナル」義、晉書に「顧愷之、每食甘蔗、常自尾至本、人或怪之、愷之曰、漸入佳境」とあり、轉じて、事に當りて次第に興味を感ずる義に用ふ、山水を探り、又文章談話などの漸く面白くなるにいふ「漸ク蔗境ニ入ル」「倒ニ蔗ヲ食フ」とも用ふ、

【養老】（老ヲ養フ）史記齊太公世家に「吾聞西伯賢、又善ーー、盍往焉」

【瓔珞】珠玉を絲につらぬきて佛像などの頭頸等に懸くる飾、頭に在るを瓔といひ、身に在るを珞といふ、法華經に「眞珠ーー價直千萬」

【楊柳】二字皆「ヤナギ」なり、楊は枝硬くして揚起す、故に之を楊といふ、柳は枝弱かにして垂流す、故に之を柳といふ、詩經に「昔我往矣、ーー依依、今我來思、雨雪霏霏」唐の楊巨源の詩に「水邊楊柳綠煙絲、立馬煩君折一枝、唯有春風最相惜、慇懃更向手中吹」と、一本に綠煙を麴塵に作る、舊唐書音樂志に「ーー可藏烏」晉書に「嵆康性鍛ヲ好ム、宅中ニ一柳樹アリ、甚ダ茂ル、乃チ水ヲ激シテ之ヲ圍ラシ、夏月毎ニソノ下ニ居リ以テ鍛ス、東平ノ呂安、康ノ高致ニ服シ、一タビ相思フ毎ニ、輙チ千里駕ヲ命ズ」

【楊劉】宋史文苑傳の序に「國初楊億・劉筠猶襲唐人聲律之體（中略）廬陵歐陽修出、以古文倡云云」東都事略に「劉筠字ハ子儀、仁宗召シテ翰林學士ト爲ス、筠、景德以來文翰ノ選ニ居リ、楊億ト名ヲ齊ウス、當時號シテーート爲ス」

【養廉】官吏の廉潔の心を養はんために、俸給の外に、手當として財を給するをいふ、宋史職官志に「諸路職官、各有職田、所以養廉也」

【陽和】春の「アタタカ」に氣の「ヤハラゲル」をいふ、王維の詩に「是時ーー節、淸晝猶未暄」柳宗元の詩に「詔書許逐ーー至、驛路開花處處新」また仁政の遍く行はるるに喩ふ、蔡琰胡笳十八拍に「東風應律兮、暖氣多、知是漢家天子兮布ーー」

【養和】「ヨリカカリ」正字通に「ーーハ今ノ靠背ナリ」と（竹夫人）を參看せよ、また身心の精氣を「ヤシナフ」義、事物のために精神を「ミダサザルヤウ」にする、後漢書の周磐傳に「嗇神養和」

【夜猿】「ヨルノサル」謝子良の賓僚七要に「哀過鴻於月曉、悲ーー於霜晏」王維の詩に「唯有白雲外、疎鐘聞ーー」

【野煙】野の「ケムリ」張旭桃花谿の詩に「隱隱飛橋隔ーー、石磯西畔問漁船」方干の送姚合員外赴金州詩に「ーー新驛曙、殘照古山秋」

【野翁】「ヰナカオヤヂ」白居易の詩に「昔是朝官今ーー」

【野歌】「ヰナカ」の人の歌、陸游の雨晴詩に「寒霧細分山逕近、ーー相應路高低」

【野航】「ヰナカ」の渡し舟、三才圖會に「ーー田家小渡舟也、或謂之舴艋、謂形如蚱蜢、因以名之、杜詩、ーー恰受兩三人、即此謂也」

【夜行】夜「アルキ」をする、禮記內則に「女子出門、必擁蔽其面、ーー以燭、無燭則止」宋書吳起傳に「年過七十而以居位、譬猶鐘鳴漏盡而ーー不休、是罪人也」

【夜客】「ヌスビト」をいふ、萬首唐絕に「唐ノ李涉ノ井欄砂宿遇ーー詩ニイフ、暮雨蕭蕭江上村、綠林豪客夜知聞、他時不用逃名姓、世上如今半是君」

【夜學】夜間に學ぶ、孟郊の夜感自遣詩に「ーー曉未休、苦吟神鬼愁」

【野鶴】自由に田野に遊ぶ鶴、閑人に喩へてもいふ、劉長卿の送方外上人詩に「孤雲將ーー、豈向人間住」韋應物の贈王侍御詩に「心同ーー與塵遠、詩似冰壺見底淸」蘇軾の中隱堂詩に「鑿石淸泉激、開門ーー飛」

【野客叢書】十二卷、附、野老記聞一卷、宋の王楙（字ハ勉夫、長洲ノ人、母ヲ養ヒテ仕ヘズ、唯門ヲ杜ヂテ著述ス、嘉定六年卒ス、年六十三）撰す、この書もと三十卷あり、四庫に著錄するもの是れなり、十二卷の書はその抄本に係る、我が承應二年の翻刻本あり、書中記すところ、經籍の異同を考證し、釐正するところ多し、南宋說部の書に在りて最も善本となす、野老記聞は、その父の作るところ、多く元祐中の逸事を記す、

【野鶴ノ雞群ニ在ルガ若シ】（若野鶴在雞群）獨り衆に「ヌキデタル」に喩ふ、晉書嵆紹傳に「或ヒト王戎ニ謂ヒテ曰ク、昨稠人ノ中ニ於テ始メテ嵆紹ヲ見ル、昂昂然、若野鶴在雞群」稠人は衆人なり、昂昂は高擧の貌、

【夜蛾ノ火ニ赴クガ若シ】（若夜蛾之赴火）（飛蛾ノ）を見よ、

【夜合】「ネブ」の木、合歡木、韋應物の句に「ーー花開香滿庭」唐彥謙の詩に「ーー庭前花正開、輕羅小扇爲誰裁」

【野合】正しき「ナカウド」なくして男女私通するをいふ、史記仲尼世家に「叔梁紇與顏氏女、ーー而生孔子」

【野干】狐の類、梵語の悉迦羅なり、祖庭事苑に「ーー形小尾大、能上樹、疑枯木不登、狐卽形大、疑水不渡、不能上樹」

【夜歸】夜、家に歸る、晉書夏統傳に「星行｜｜」劉長卿の逢雪宿芙蓉山主人詩に「柴門聞犬吠、風雪｜｜人」戴叔倫の南畝詩に「披雲朝出耕、戴月｜｜讀」

【藥園】藥草を植うる「ハタケ」舊唐書職官志に「太醫署｜｜師二人、｜｜生八人」また「｜｜師以時種蒔收采」

【藥艾】藥を飲み灸を「スエル」陸游の呂氏春秋跋に「元祐壬申余臥疾京師、喜得此書、｜｜之閒、手自校之、自秋涉冬朱黃始就」

【籲號】籲は一音ユ呼ぶなり、｜｜は呼びさけぶなり、書經の泰誓に「無辜籲天」とあり、柳文の駁復讎議に「｜｜不聞」

【藥劑】「クスリ」史記孝武帝紀に「於是天子始親祠竈、而遣方士入海求蓬萊安期生之屬、而事化丹砂諸｜｜爲黃金矣」

【藥草】「クスリニスルクサ」陸璣の詩疏に「芍藥今｜｜」彌勒成佛經に「時諸龍王八部山神樹神｜｜神水神風神火神地神城池神屋宅神等踊躍歡喜、高聲唱言」水經注に「金谷澗中有清泉茂樹衆果竹柏｜｜蔽翳」朱慶餘の詩に「貧身唯｜｜、教子但詩書」

【藥鐺】「クスリ」を煎る「ナベ」陸游の秋夜詩に「山童睡熟、青燈暗、自撥殘爐候｜｜」藥鼎に同じ、

【藥師】具には｜｜瑠璃光如來といふ（藥王）を見よ、また唐の李靖の字、

【藥肆】藥を賣る「ミセ」紺珠集に「徐俊樂道隱於｜｜中、家植海棠、結巢其上、引客登木而飲」藥店に同じ、

【藥餌】「クスリ」爾雅翼に「枯犀之角、能辟邪惡、寧心神、散風熱、良於｜｜」宋史蘇軾傳に「昌化故儋耳地、非人所居、｜｜皆無有」

【鑰匙】門の「シマリ」「カギ」匙一音ヒ朝野僉載に「牢掌｜｜、賊來索愼勿與」

【藥性】藥の性質、庾信の小園賦に「問葛洪之｜｜、訪京房之卜林」方回の治圃詩に「認苗諳｜｜、養果護花身」

【藥石ノ規】規は法度なり、また正すなり、身の爲めになる「ヨキイマシメ」白居易の詩に「分定金蘭契、言通｜｜｜」次條を見よ、

【藥石ノ言】身の「タメニナル」言なり、左傳の襄廿三年に「臧孫曰ク、季孫ノ我ヲ愛スルハ疾疢ナリ、孟孫ノ我ヲ惡ムハ藥石ナリ、美疢ハ惡石ニ如カズ、夫ノ石ナルハ猶我ヲ生カス、疢ノ美ナルハ、其ノ毒滋「多シ」とあり、即ち我を愛して、志常に相從順するは身の害なり、我を惡みて志、相逆戾するは猶ほ藥石の病を療するが如しとの意、唐書高馮傳に「數上書シテ、得失ヲ言フ、辭誠ニ切至ナリ、帝鍾乳一劑ヲ賜ヒテ曰ク、而藥石ノ言ヲ進ム、朕藥石ヲ以テ相報ユト」祖庭事苑に「攻病曰藥、劫病曰石、古以砭石爲針也」說文砭字の注に「以石刺病也」

【藥囊】「クスリブクロ」戰國策に「侍醫夏無且以其所奉｜｜提荊軻」元稹の詩に「｜｜堆小案、書卷塞空齋」

【藥方】「クスリ」の處方、後漢書百官志に「太醫藥丞主｜｜」蘇軾の病中遊祖塔院詩に「因病得閑殊不惡、安心是藥更無方」

【藥品】藥の品類、元結の菊圃の詩に「在｜｜是良藥、爲蔬菜是佳蔬」

【藥物】「クスリ」左傳に「盡心力以事君、舍｜｜可也」北史張景仁傳に「景仁多疾、帝每遣徐之範等療之、給｜｜珍羞、中使問疾、相望於道」杜甫の江村詩に「多病所須惟｜｜、微軀此外復何求」

【藥苗】藥草の苗、高適の宋中詩に「秋韭何青青、｜｜數百畦」姚合の題郭侍郎親仁里幽居詩に「入門塵外思、苔徑｜｜閒」

【藥圃】藥草を植うる「ハタケ」王維の詩に「荷鋤修｜｜、散帙曝農書」白居易の詩に「｜｜茶園爲產業、野麋林鶴是交遊」

【藥瞑眩セズンバ厥ノ疾瘳エズ】（瞑眩）を見よ、

【躍躍】「オドリハネル」戰國策の秦策に「｜｜毚兎」また「スミヤカ」なる貌、爾雅釋訓に「｜｜迅也」また「オドリタツバカリ」に勢ある狀をいふ、躍如に同じ、

【藥力】藥の病に「キク」「チカラ」雲笈七籤に「凡一切五辛、皆害於｜｜」

【藥爐】「クスリ」を煎る「キロリ」白居易の尋郭道士不遇詩に「｜｜有火丹應伏、雲碓無人水自舂」

【藥籠中物】疾を攻むる如く、人を諫めて過を改めしむるに喩ふ、又必用の人物に喩ふ、唐書元行沖傳に「元行沖諫狄仁傑曰、凡爲家者必有儲蓄、脯醢以適口、參苓以攻疾、行沖請備藥物之末、仁傑笑曰、吾｜｜｜｜、何可一日無也」

【藥爐經卷生涯ヲ送ル】清の王士禎の悼亡（妻ヲ亡ヒタルヲ悼ム）の詩に「藥爐經卷送生涯、禪榻春風兩鬢華、一語寄君君聽取、不教兒女衣蘆花」末二句は、閔子騫の母、死して父後妻を娶る、後妻、子騫を憎みて

蔗花の絮を衣せしめたる故事を引きて再娶せざる意を述ぶ、一讀惻然たり、藥爐は煎藥に用ふる「ヰロリ」經卷は醫書なり、

【夜火】 夜もやす火、越絶書に「子胥知時變、爲詐兵、爲雨翳、——相應」賀蘭進明の夜渡江詩に「——連淮市、春風滿客帆」張喬の送進士許棠詩に「——山頭寺、春江樹杪船」

【野火】 野に「モヤス」火なり、戰國策に「楚王游於雲夢、結駟千乘、旌旗蔽天、——之起也、若雲霓、兕虎之嗥、若雷霆」

【野花】 野に「サケル」花、沈佺期の三日梨園侍宴詩に「——飄御座、河柳拂天杯」陸游の小酌詩に「——經雨自開落、山鳥穿林時去來」

【夜光】 寶珠の名、述異記に「南海有珠、即鯨目、夜可以鑒、謂之——」東方朔の十洲記に「周ノ穆王ノ時、西胡——常滿盃ヲ獻ズ、盃ハ是レ白玉ノ精、光明夜照ス、冥夕ニ盃ヲ中庭ニ出シ、以テ天ニ向クレバ、明クル比、水汁巳ニ盃中ニ滿ツ」戰國策に「張儀爲秦破從連横、説楚王、楚王遣使者百乘、獻雞駭之犀、——之璧於秦王」庾闡の贈劉琨詩序に「所謂咸池醽於北里、——報魚目」（明珠暗ニ）を見よ、また月の異名、淮南子に見ゆ、

【藥王】 佛敎にて阿迦雲菩薩の稱、病を療し、及び藥劑を掌る、卽ち人閒天上、有漏の苦を醫すといふ、藥師また醫王ともいふ、

【扼腕】 次條を見よ、

【搤腕】 「ウデ」を急しく握る、奮激する「サマ」史記刺客傳に「樊於期偏袒——而進曰、此臣日夜切齒腐心也」搤一に扼また捥に作る、

【野火燒キ盡サズ、春風吹イテ又生ズ】 白居易の賦得古原草送別と題する詩中の句、曰く「離離原上草、一歲一枯榮、野火燒不盡、春風吹又生、遠芳侵古道、晴翠接荒城、又送王孫去、萋萋滿別情」

【夜景】 夜の「ケシキ」宋史樂志に「廟梱邃嚴、——藻清」韋應物の晩登郡閣詩に「春風偏送柳、——欲洗山」

【野雞】 雉の異名、埤雅に「——ハ陰ニ屬ス、先ヅ鳴キテ後ニ翼ヲ鼓ス、家雞ハ、陽ニ屬ス、先ヅ翼ヲ鼓シテ後ニ鳴ク」と、史記封禪書に「——夜雊」注に「——ハ雉ナリ、呂后名ハ雉、故ニ——トイフ」

【夜月】 夜の月、梁昭明太子の中呂四月啓に「——流輝」白居易の荷珠賦に「明璣而——爭光、丹粟而晨霞散入」

【燒野ノ雉夜ノ鶴】 親が子を愛する切なる情に譬ふ、雉は草深き野邊に巢を作りて子を育つるものなり、而るに其の野を燒かれては、その「スミカ」を失ふ故、子を愛する心の堪へがたきをいへり、また鶴も易に「鳴鶴陰ニ在リ、ソノ子和ス」などとありて、子を愛する情の深き鳥なるを、まして夜寒には子を「ハグクミ」憐む心に堪へざるをいへり、和漢三才圖會四十二の卷、雉の條に「春月伏卵於叢中（中略）山人燒野火既欲至伏卵處時、雌先張翅而仰臥于地、雄來啣數卵置雌之翅之內、而後雄啣雌之指、急引退以避火」と、また白氏文集に「第三第四絃冷冷、夜鶴憶子籠中鳴」とあり、

【邪許】 （邪許）を見よ、邪は「ヤ」と讀むを正しとす、

【夜哭】 「ヨルナク」禮記の坊記に「寡婦不——」夜泣に同じ、

【野狐禪】 禪學を修めて眞にその道を得ざる者を嘲りていふ、四家玄錄に見ゆ、蘇軾の常州太平寺薝蔔亭詩に「六花薝蔔林閒佛、九節菖蒲石上仙、何似東坡鐵拄杖、一時驚散——」

【夜作】 「ヨナベ」をいふ、漢書陳湯傳に「爇脂火——」爇は然の古文「モヤス」淸嘉錄に「居人、米粉五色餻ヲ食ヒ、重陽糕ト名ヅク、是ヨリ以後、百工夜ニ入リ操作ス、之ヲ夜作トイフ」

【夜坐】 夜、坐するなり、唐書劉武周傳に「嘗——廷中ニ」

【夜叉】 「ヤシャ」ともいふ「オニ」をいふ、譬喩品に「夜叉ハ惡鬼、人肉ヲ食噉シ、共ニ相殘害ス、血ヲ飮ミ肉ヲ噉フ」名義集に「——此ニハ勇健ト云ヒ、亦暴惡トイフ」とあり、夜一に野また藥に作る、

【野菜】 遼史太祖紀に「時ニ太軍久シク出デ、輜重不相屬、士卒煑馬駒、採——以爲食」長孫佐輔の尋山家詩に「主人聞語未開門、繞籬——飛黃蝶」白居易の池上閒吟詩に「莫愁客到無供給、家醞香濃——春」

【野草】 野に生ずる草、唐書張束之傳に「身膏——、骸骨不歸」古詩十九首に「白露霑——、時節忽復易」陸游の小圃詩に「魚行水際汀蘋動、麝過林中——香」

【夜叉頭】 惡鬼の頭髮の「ボウボウ」と亂れたるをいふ、秉燭譚に「芍藥花開菩薩面、椶櫚葉散——、人人李群玉ガ詩ト覺ユ、下學集ニヨリテナリ、增續韻府ニハ王璘ガ作トス、コノ事、堯山堂外紀三十五卷ニ詳ナリ、李群玉ガ王璘ヲ試ミテ作ラシメシ所ロナリ、李群玉ニアラズ、韻府ノ説ヲ是トス」

【夜市】 夜の「マチ」東京夢華錄に「中秋節、——駢闐、至ル

於通曉杜荀鶴の送友遊呉越詩に「ーー橋邊火、春風寺外船」

【野寺】「キナカ」の「テラ」韋應物の詩に「ーー望山雪、空齋對竹牀」李嘉祐の詩に「ーー山邊斜有徑、漁家竹裏半開門」

【野史】在野の人の書きたる私史をいふ、陸龜蒙の詩に「自愛垂名ーー中」

【野史亭】元好問（遺山）金亡びて元に仕へず、亭をその家に搆へて、金代の私史を編す、亭をーーーと名づく

【夜擊】夜、敵の不意を討つ義、宋書自序傳に「銜枚ーー」魏書任城王傳澄に「統軍李叔仁等ーー斫石之賊、又破之」

【夜叉】（ーー）を見よ、

【野人】「キナカモノ」すべて禮を知らざるもの、孟子の萬章篇に「齊東ーーー之語也」

【野心】豺狼の子は、心山野に在りて、馴服すべからず、之を養へば、必ず人を害するをいふ、左傳の宣四年に「是ノ子ヤ熊虎ノ狀ニシテ、豺狼ノ聲ナリ、殺サザレバ必ズ若敖氏ヲ滅サン、諺ニ曰ク、狼子ハ野心ナリト、是レ乃チ狼ナリ、其レ畜フ可ケンヤ」また昭二十八年にも「是狼之聲也、狼子ーー」とあり、

【耶孃】母をいふ、杜甫の兵車行に「ーー妻子走相送、塵埃不見咸陽橋」と、注に「母ナリ、唐ニ母后ヲ謂ヒテ孃孃トイフ、又娘娘ニ同ジ」と、後世は耶を爺に通はせて父母の義に用ふ、

【野處】家を建てずして、野に居るをいふ、易の繫辭傳に「上古穴居而ーー」

【野乘】孟子離婁下篇に「晉之乘、楚之檮杌、魯之春秋一也」とあり、乘は載なり、史は事を載するもの、故に乘といふ、野乘は野史に同じ、

【夜誦】夜、書を讀む、吳志步隲傳に「以種瓜自給、晝勤四體、夜誦經傳」夜讀に同じ、

【夜色】夜の「ケシキ」沈佺期の牛女詩に「誰能留ーー、來夕倍還梭」儲光羲の題陸山人樓詩に「暮聲雜初雁、ーー涵早秋」

【野蜀葵】「ミツバゼリ」芹の一種、水地に生ず、香氣あり、一に鴨兒芹ともいふ、

【椰酒】次條を見よ、

【椰樹】熱帶の地に產する木の名、形棕櫚の如くにして大なり、その實を椰子といふ、船來す、形桃の實の如く、長サ八九寸、徑四五寸、外皮は黑褐なり、內に核あり、大サ三寸許、甚だ堅し、椀とすべし、その中心は空にして淸水あり、常に飲用す、甘美にして酒氣あり、宋の李綱に椰子酒賦あり、椰は椰に同じ、齊東野語に「椰子花亦可釀酒」般莬封寄嶺南張明府詩に「椰花好爲酒、誰伴醉如泥」廣東新語に「瓊人每以檳榔代茶、椰代酒以款賓客」

【野水】「キナカ」の「ナガレ」溫公詩話に「寇萊公詩、才思融遠、年十九、進士及第、初知巴東縣、有詩云、ーー無人渡、孤舟盡日橫」張祜の訪許用晦詩に「小橋通ーー、高樹入江雲」

【野翠】野の色の「ミドリ」なるをいふ李白の詩に「白雲入窗牖、ーー生松竹」野綠に同じ、

【安キコト泰山ノ如シ】（安如泰山）安固にして、動かざるに喩ふ、漢書嚴助傳に「天下之安猶泰山而四維之」四維とは四方を繫ぎ持する義、

【安キコト磐石ノ如シ】（安如磐石）磐石は大石なり、其の安泰なること大石の移動すべからざるが如きをいふ、荀子富國篇に「國安于磐石、壽於旗翼」旗翼は星の名、磐は盤に通じ用ふ、淸の陸隴其の謙守齋記に「若泰山之固、磐石之安」

【安ケレドモ危ヲ忘レズ】（安不忘危）易の繫辭の下に「君子ーーーー、存不忘亡、是以身安而國家可保也」天下安けれども、危き時の事を忘れず、國家存在すれども、亡びんとする時事のを忘れず、常に戒愼するときは、其の身も安く、國家も永久に保つべしとなり、禮記に「君子居安如危、小人居危如安」と、意同じ、

【夜嘯】「ヨル、ウソブク」蘇軾の秋懷詩に「窗前有棲鵰、ーー如狐狸」

【夜績】夜「ツムグ」漢書食貨志に「婦人同巷相從ーー、女工一月得四十五日、必相從者、所以省費燎火、同巧拙而合習俗也」

【夜雪】夜の雪、韋應物の答東林道士詩に「紫閣西邊第幾峯、茅齋ーー虎行蹤」白居易の春夜喜雪懷王二十二詩に「ーー有佳趣、幽人出書帷」（雪）を參看せよ、

【野戰】「ノイクサ」北夢瑣言に「ーー數十合、王雲等六人被重創死」

【夜窗】「ヨル」の「マド」孟浩然の歲暮歸南山詩に「永懷愁不寐、松月ーー虛」韋莊の梁氏水齋詩に「ーー風雨急、松外一庵燈」

【野僧】「キナカ」の「バウズ」張籍の贈王祕書詩に「身屈祇聞詞客說、家貧多見ーー招」元稹の定僧詩に「ーー偶向花前定、滿樹狂風滿樹花」裴夷直の晩涼詩

「山客――歸去後、晩涼移案獨臨書」

【野蔌】野菜なり、爾雅に「菜謂之蔌」とあり、歐陽修の醉翁亭記に「山肴――、雜然而前陳者太守宴也」陸游の農家詩に「谿碓新春白、山廚――香」

【夜臺】墓穴をいふ、李白哭善釀者紀叟詩に「――無李白、沽酒與何人」

【八タビ叉手シテ成ル】（八叉手）を見よ、

【夜直】夜、禁中に宿直する義、「トノヰ」直は侍なり、唐書歐陽詢傳に「每入朝徒跣及門――藉藁以寢」玉海に「眞宗嘗令邢昺說經、――祕閣」

【野店】「ヰナカ」の「ミセ」張籍の宿江店詩に「――臨西浦、門前有橘花」陸游の詩に「――茶香迎倦客、市街犬熟傍行人」

【野渡】野中の「ワタシバ」韋應物の滁州西澗詩に「春潮帶雨晩來急、――無人舟自横」李嘉祐の送王牧詩に「――花爭發、春塘水亂流」

【夜讀】夜、讀書する、陸游の讀書詩に「自嫌尙有人閒意、射雉歸來――書」

【野渡無人舟自横】（韋蘇州ガ）を見よ、

【柳】祕傳家鏡に「柳、一名官柳、一名垂柳、本性柔脆、北土最多、枝條長軟、葉靑而狹長、初春生柔荑、粗如筋、長寸許、開黃花、鱗次荑上、其細碎、以漸生葉、至暮春葉長成、花中結細子、如粟米大、扁小而黑、上帶白絮如絨、俗名柳絮、隨風飛舞、此乃官柳也、若叢葉成陰、長條數尺、或至丈餘、裊裊下垂者、此爲垂柳、雖無香艷、而微風搖蕩、每爲黃鶯嬌語之鄉、吟蟬托息之所、人皆取以悅耳娛目、乃園林中必需之木也、種在臘月、種後若不動搖、雖縱横顚倒插之盡活、乃最易生之物也、昔人因其花似絮、故有飛綿飛絮寒無用、如雪如霜暖不消之咏」白氏文集二十八の府西池と題する詩に「柳無氣力條先動、池有浪文冰盡開」元稹の詩に「拂水柳花千萬點、隔樓鶯舌兩三聲」王維の詩に「桃紅復含宿雨、柳綠更帶朝煙」

【柳綠花紅】天地自然の面目をいふ、東坡の詩に「柳綠花紅眞面目」とあり、禪林類聚に「烏黑鷺白、松直棘曲」とあるも、同意、

【野ニ遺賢ナシ】（野無遺賢）賢人皆用ひられて、朝に立つをいふ、書經に「嘉言罔攸伏、――――」

【野馬】游氣なり、莊子逍遙遊に「――也、塵埃也、生物之以息相吹也」藻林に「――ハ塵埃ナリ、游絲ナリ」和名「イトユフ」晉公の晩春遊松山館詩に「低翅沙鷗潮落曉、亂絲――草深春」また馬の一種、爾雅の註に「――ハ馬ノ如クニシテ小、塞外ニ出ヅ」戰國策に「智伯欲伐衞、遺衞君――四百」

【夜泊】「ヨルフナドマリ」をする、杜牧の泊松江詩に「南湖風雨一相失、――橫塘心渺然」

【夜半】「ヨナカ」國語の晉語に「敎驪姬――而泣」淮南子に「雞知將旦、鶴知――而不免於鼎俎」

【夜寐】「ヨルオソクイヌル」義「ヨハニイヌ」とも讀む、書經旅獒の「夙夜罔或不勤」の傳に「當ニ早起――、常ニ德ニ勤ムベキヲ言フ」詩經大雅文王篇に「夙興――無忝爾所生」傳に「忝ハ辱ナリ」（夙ニ興キ）を參看せよ、

【夜風】魏志管寧傳の注に「――晦冥、船人盡惑、莫知所泊」李嘉祐の詠螢詩に「――吹不滅、秋露洗還明」

【野服】野人の服をいふ、唐書裴度傳に「治第東都集賢里（中略）――蕭散、與白居易・劉禹錫爲文章把酒窮晝夜和歡、不問人閒事」

【野物ハ犧牲トナラズ】（野物不爲犧牲）尉繚子に「野物不爲犧牲、雜學不爲通儒」とあり、野に在る獸は、奇なりと雖も、犧牲として宗廟に獻ずべからず、雜駁の學は、通儒として大政に任ずべからずとの義、色純なるを犧といひ、卜して吉を得て、未だ殺さざるを牲といふ、

【夜分】夜半なり、韓非子に「衞ノ靈公濮水ノ上ニ至リ舍ヲ設ケ以テ宿ス、――ニシテ鼓ノ新聲ヲ聞キテ之ヲ說ブ」また後漢光武帝紀に「數公卿郎將ヲ引キ、經理ヲ講論シ、――ニ至リ乃チ寐ヌ」の註に「分ハ猶ホ半ノゴトキナリ」唐書崔咸傳に「累遷陝虢觀察使、日與賓客僚屬痛飲未嘗醒、――輒決事、裁剖精明無一毫差、吏稱爲神」朱子の次韻擇之發紫溪有作詩に「明日振衣千仞岡、――起看月如霜」

【夜分經ヲ講ズ】下の故事によりて勸學して怠らざる者を稱す、後漢書に「光武シバシバ公卿郎將ヲ引キ、經理ヲ講論シ、夜分ニ至リテ乃チ寐ヌ、皇太子、帝ノ勤勞怠ラザルヲ見、閑ニ乘ジテ諫メテ曰ク、陛下禹湯ノ明アリテ、黃老養性ノ道ヲ失ス、願クハ精神ヲ頤養シテ、優游自ラ寧ンゼヨト、帝曰ク、我自ラ此レヲ樂シム、疲ルルトナサザルナリト」

【敝レタル縕袍ヲ衣テ狐貉ヲ衣ル者ト立チテ恥ヂザル者ハ、其レ由カ】（衣敝縕袍、與衣狐貉者立、而不恥者、其由也與）論語子罕篇に見ゆ、孔子の語、縕袍は綿

入の服にて衣の賤しきものなり、狐貉は狐や貉（ムヂナ）の皮にて裘となす、衣の貴きものなり、由は子路なり、凡そ衆人の情は、貧富を以て心を動し易きものなり、今若しやぶれたる「ヌノコ」を著て、狐貉の美服を著たる人と共に立ちて些の恥づる色なき者は、それ唯仲由なるかとて、子路が貧富を以てその心を動かさず、以て道に進むべきを稱せられたるなり、

【邪木】 邪は梛また椰に同じ、神異經に「東南荒中有——、高三十丈、云云」（椰樹）を見よ、

【山】 釋名に「山ハ產ナリ、萬物ヲ產スル者ナリ」易の說卦に「天地定位、山澤通氣」韓詩外傳に「夫レ山ハ萬人ノ觀仰スル所ロ、材用生ジ焉、寶藏植シ焉、飛禽萃リ焉、走獸伏ス焉、群物ヲ育シテ倦マズ、夫ノ仁人志士ニ似タル者アリ、是レ仁者ノ山ヲ樂ム所以ナリ」書敍指南に「山頭ヲ嶺トイヒ、山足ヲ麓トイヒ、奇山水ヲ交錯如繡トイヒ、澤曲ヲ皋トイヒ、水川ニ注グヲ溪トイヒ、水、溪ニ注グヲ谷トイヒ（中略）土隴ノ高ク起ルヲ龍斷トイヒ、天台山ヲ台嶽トイヒ（中略）山林ヲ崇山幽林トイヒ、崖壁ヲ丹崖青壁トイヒ（中略）山頂ヲ山椒トイヒ、澤ニ水無キヲ藪トイヒ、草木倶ニ生ズルヲ薄トイヒ、兩山ノ間ヲ岬トイヒ、山ニ穴アルヲ岫トイヒ、山ニ草木ナキヲ童トイフ」爾雅の釋山に「河南華、河西嶽、河東岱、河北恆、江南衡、周禮謂之鎭」註に「鎭名山、安地德者也」淮南子に「山致其高而雲起焉、水致其深而蛟龍生焉」魏武帝短歌行に「山不厭高、水不厭深」晉書杜有道の妻嚴氏の傳に「排山壓卵、以湯沃雪」素書に「山峭者崩、澤滿者溢」左傳に「山藪藏疾、川澤納汚、瑾瑜（美玉なり）匿瑕、國君含垢、天之道也」博物志に「泰山一曰天孫、言爲天帝孫也」尸子に「泰山上有三峰、東曰日觀、雞鳴時、見日出、西曰秦觀、可望長安、始皇登此西望、故名、又西曰越觀、可望會稽、一名月觀、以與日觀相對」劉禹錫の詩に「遙望洞庭山正翠、白銀盤裏一青螺」韋莊の詩に「遠山如畫翠眉橫」

春山夜月　唐　于良史

春山多勝事、賞翫夜忘歸、掬水月在手、弄花
香滿衣、興來無遠近、欲去惜芳菲、南望鳴
鐘處、樓臺深翠微

山行　宋　陸游

閒人日日得閒行、況值今朝小雨晴、水淺游魚
渾可數、山深藥草半無名、臨谿旋喚習船渡、
過寺初聞浴鼓聲、小醉未應風味減、滿盤青杏
作朱櫻

【山ヲ鑄、海ヲ煮ル】 （鑄山煮海）（山ニ鑄）を見よ、

【山ヲ撼カスハ易ク、岳家ノ軍ヲ撼カスハ難シ】 （撼山易、撼岳家軍難）宋史の岳飛傳に「善以少擊衆、欲有所舉、盡召諸統制與謀、謀定而後戰、故有勝無敗、猝遇敵不動、故敵爲之語曰、——、————」

【山ヲ買フ錢】 （買山錢）雲溪友議に「匡廬ノ載符山人三尺ノ童子ヲ遣シ、數幅ノ文書ヲ齎ラサシメ山ヲ買フ錢百萬ヲ求メシム、公之ヲ與フ」公とは襄陽の于頔なり、また圓機活法に「种放、章ヲ累ネ歸ヲ乞フ、帝賜フニ山ヲ買フ銀百兩ヲ以テス」

【山ヲ樂ム】 （仁者ハ山）を見よ、

【山ヲ爲ル九仞功一簣ニ虧ク】 （爲山九仞、功虧一簣）書經旅獒の語（九仞ノ功）を見よ、

【山ヲ懷ム】 （懷山）懷は包むなり、水、山を包み「メグル」をいふ、書經堯典に「湯湯洪水、方割、蕩蕩——襄陵」割は害なり、

【山ヲ學ビテ山ニ至ラズ】 （學山不至於山）揚子に「百川學海而至於海、邱陵學山而不至於山、是故惡夫畫也」注に「畫ハ止ナリ」すべて學問の道は自ら畫りて廢すべからざるに喩ふ、

【山輝キ川媚ブ】 （石玉ヲ韞ミ）を見よ、

【山靜カニシテ太古ノ如シ】 唐庚の醉眠詩に「山靜似太古、日長如小年、餘花猶可醉、好鳥不妨眠、世味門常掩、時光簟已便、夢中頻得句、拈筆又忘筌」とある是れなり、羅大經の鶴林玉露に、山靜日長と題して左の文あり、

唐子西云、山靜似太古、日長如小年、予家深山之中、毎春夏之交、蒼蘚盈階、落花滿徑、門無剝啄、松影參差、禽聲上下、午睡初足、旋汲山泉、拾松枝、煮苦茗啜之、隨意讀周易・國風・左氏傳・離騷・太史公書、及陶杜詩、韓蘇文數篇、從容步山徑、撫松竹、與麛犢共偃息于長林豐草閒、坐弄流泉、漱齒濯足、既歸竹窗下、則山妻稚子、作筍蕨、供麥飯、欣然一飽、弄筆窗閒、隨大小作數十字、展所藏法帖墨蹟畫卷縱觀之、興到則吟小詩、或草玉露一兩段、再烹苦茗一杯、出步溪邊、邂逅園翁溪友、問桑麻、說秔稻、量晴較雨、探節數時、相與劇談一餉、歸而倚杖柴門之下、則夕陽在山、紫綠萬狀、變幻頃刻、恍可人目、牛背笛聲、兩兩來歸、而月映前溪矣、味子西此句、可謂絕妙、然此句妙矣、識其妙者蓋少、彼牽黃臂蒼、馳獵聲利之場者、但見袞袞馬頭塵、匆

匆駒隙影耳、烏知此句之妙哉、人能眞知此妙、則東坡所謂、無事此靜坐、一日是兩日、若活七十年、便是百四十、所得不已多乎」

【山靜日長】 前條を見よ、

【山高月小】 高き山の上に出てたる月をその麓にて望みて小さく見ゆるをいふ、蘇軾の後赤壁賦に「江流有聲、斷岸千尺、――――、水落石出」

【山高水長】 君子の德の大なるに喩へていふ、范仲淹の嚴先生祠堂記に「歌曰、雲山蒼蒼、江水泱泱、先生之風、――――」嚴先生、名は光、字は子陵、少くして高名あり、光武と同じく游學す、

【山ニ鑄、海ニ煮ル】 產物の多きをいふ、史記吳王濞傳に「卽山鑄錢、煮海水爲鹽」また蘇軾の表忠觀碑に「吳越地方千里、帶甲十萬、鑄山煮海、象犀珠玉之富、甲於天下」

【山ニ木アレバ工則チ之ヲ度ル】 （山有木工則度之）左傳隱公十一年に「春、滕侯・薛侯來朝、爭長、薛侯曰、我先封（薛の祖奚仲は夏の封ずる所ろ、周の前に在り）滕侯曰、我周之卜正也、薛庶姓也（庶姓は周の同姓にあらず）公使羽父請於薛侯曰、君與滕君辱在寡人、周諺有之曰、――――――、賓有禮主則擇之」擇之とは宜しき所ろを擇びて之を行ふ義、

【山ニ蹪カズシテ垤ニ蹪ク】 （不蹪於山而蹪於垤）小事は兎角「ユルカセ」になして、失敗し易きに喩ふ、淮南子の人閒訓に「事ハ成リ難クシテ敗レ易ク、名ハ立チ難クシテ廢レ易シ、千里ノ隄モ、螻蟻ノ穴ヲ以テ漏リ、百尋ノ屋モ、突隙ノ煙ヲ以テ焚ク、堯戒ニ曰ク、戰戰慄慄トシテ日ニ一日ヨリモ愼ム、人莫蹪於山、而蹪於垤」とあり、蹪は音タイ顚（ツマヅク）なり、一本に躓に作る、孟子の註に「垤ハ蟻封（ありづか）ナリ」韓非子には「不躓於山、而躓於垤」に作る、呂氏春秋には蹪を蹶に作る、

【山ニ上リ魚ヲ求ム】 （上山求魚）決して得べからざるに喩ふ、孟子の「緣木求魚」と同じ、易林に「上山求魚、入水捕兎」

【山ニ猛獸アレバ藜藿之ガタメニ採ラレズ】 漢書に「山有猛獸藜藿爲之不採、國有忠臣、姦邪爲之不起」とあり、山に虎狼の如き猛き獸あるときは、民共が「アカザ」や豆の葉などを採りにはいることをせぬなり、それと同じく國に忠臣あるときは、姦臣共、起る能はずとの意、貞觀政要に「猛獸處山林、藜藿爲之不採、直臣在朝庭、姦邪爲之寢謀」とあり、文子に「山有猛

獸林木爲之不斬、園有螫蟲葵藿爲之不采」とあるも同じ、

【山ハ草木殖シ鳥獸蕃ス】 孔叢子に「夫山草木殖焉、鳥獸蕃焉、財用出焉」

【山ハ人面ヨリ起リ、雲ハ馬頭ニ傍ウテ生ズ】 山の極めて險峻なる「サマ」を形狀す、壁の如くそばだてる山は人の面に對してすれあふ如く屹然として起ち、白雲は我が來れる馬の頭にそひて縷縷として生ずとの義、李白の送友人入蜀の詩に「見說蠶叢路、崎嶇不易行、山從人面起、雲傍馬頭生、芳樹籠秦棧、春流遶蜀城、升沈應已定、不必問君平」と前四句は山の險にして行くべからざるを說く、五六の二句は、その中また悅ぶべき者あるを說き、七八の句、推開して人には定命あり、君平の卜を待たずして知るをいひ、以て之を慰めたるなり、

【山ハチヒサキ塊ヲユヅラズ、此ノ故ニ高キコトヲナス】 十訓抄第一に見ゆ、李斯の逐客上書に「地廣者粟多、國大者人衆、兵强者士勇、是以泰山不讓土壤、故能成其大、河海不擇細流、故能就其深」

【山ハ陵遲ヲ以テ故ニ能ク高シ】 陵遲は山の漸く「ユルヤカ」にして急ならざるをいふ、山は漸く「ユルヤカ」なるによりて遂に高大を致すなり、道德も漸次に修め得て高厚となるに喩ふ、劉向の說苑に「河以委蛇故能遠、山以陵遲故能高、道以優游故能化、德以純厚故能豪、言人之善澤於膏沐、言人之惡痛於矛戟」

【病アリテ治メズ恒ニ中醫ヲ得】 （有病不治、恒得中醫）「ヤブイシャ」の診治は却りて病に害あり、故に疾を治めざれば、却りて中等の醫者を得たるに同じとの義、漢書藝文志に引ける諺なり、

【病ヲ移ス】 （移病）書を移して病と稱する義、漢書楊敞傳に「乃――臥」一解に、病を以て居を移すなりと、

【疾ヲ護シテ醫ヲ忌ム】 （護疾而忌醫）周子通書に「今人有過不喜人規、如――――」

【病ヲ養フ】 （養病）病を治むる義、禮記に「酒者所以――也」周禮疾醫の「掌養萬民之疾病」の疏に「此主療治而云養者、但是療治、必須將養、故以養言之」（養病坊）を參看せよ、

【病膏肓ニ在リ】 （病在膏肓）心は上に在り、鬲は下に在り、鬲上に薄膜あるを肓とし、心下に微脂あるを膏とす、心下鬲上の處は、至虛の地にして、針藥及ばず、故に病のここに在るは不治の難症となす、左傳成

十年に見ゆ（二豎）を見よ、

【病ハ口ヨリ入リ、禍ハ口ヨリ出ヅ】（病從口入、禍從口出）病は飮食をつつしまざるより發し、禍は言語をつつしまざるより生ずるをいふ、雞肋集に、當時の諺語なりといへり、傅玄の口銘に「神以感通、心由口宣、禍生有兆、禍來有端、情莫多妄、口莫多言、蟻孔潰河、溜沈傾山、――、――、――、存亡之機、開闔之術、口與心謀、安危之源、樞機之發、榮辱存焉」

【病ハ小ク愈ユルニ加ハル】（病加於小愈）病は少しく快方に向へば、油斷するが故に、かへりて以前より重くなるとあるをいふ、說苑敬愼篇に「官怠於宦成、病加於小愈」とあり、愈は癒に同じ、この語は韓詩外傳にも見ゆ（禍ハ懈惰）を見よ、

【夜夢】「ヨルノユメ」蜀志蔣琬傳に「――有一牛頭在門前、血滂沱、意甚惡之」杜牧の別懷詩に「勞生慣離別、――苦東西」

【守宮】（蝘虎）を見よ、一解に――は蜥蜴の名、また槐の一名、

【揶揄】侮り「カラカフ」義、手をうちて相弄笑するなり、後漢書王霸傳に「光武令王霸至薊市中募人、將擊王郎、市人皆大笑、擧手――之」揶一に邪に作る、同じ、

【冶容】「ナマメキタル」容、班固の箴に「――求好、君子所鄙」易の繫辭に「慢藏誨盜、冶容誨淫」とあるに本づく、一に野容に作る、同じ、

【夜來】「ユフベカラ」孟浩然の春曉の詩に「――風雨聲、花落知多少」劉長卿の早春詩に「――微雨歇、江南春色遍」

【冶郎】「メカシヲトコ」なり、俗に男色を賣る者を稱す、李白の採蓮曲に、「岸上誰家遊冶郎、三三五五映垂楊」

【夜郎】西漢より晉に至るまで益州牂柯郡の縣名、また南宋・南齊の寧州――郡――縣は、今の貴州遵義府桐梓縣の東二十淸里に當る、唐の江南道溱州――縣も今の桐梓縣の東、

【夜郎大】夜郎は西南夷の國名、その夷のなかまにて「ハブリヨカリシ」によりて、おろかなる者が、そのなかまにて尊大にかまへたるに借りていふ、漢書西南夷傳に「西夷君長以十數、夜郎最大」

【夜闌】夜の「フケル」義、蔡琰胡笳十八拍に「山高地闊兮、見汝無期、更深――兮、夢汝來斯」王昌齡の少年行に「――須盡飮、莫負百年心」

【耶律楚材】字は晉卿、遼東丹王八世の孫、金の尙書右丞履の子、太祖に從ひ、四方を平定し、太宗の時、官中書令に至る、楚材生れて三歲にして孤なり、母楊氏之に學を敎ふ、長じて博く群書を極め、旁ら天文地理律曆術數釋老醫卜の說に通ず、文を爲る宿構に出づるが如し、相となるに及び、心を治理に竭し、儒術を重んじ、賢能を選び、施設する所ろ、皆當時の急務、その殺を禁じ、俘を釋し、生靈を全治する者、算なし、常に曰く「興一利不如除一害、生一事不如省一事」と、太祖崩ずるに及び、后閑制を稱す、楚材每に面折諫言す、后之を憾むと雖も、亦敬憚を加ふ、而して不逞の徒隙に投じて之を譖す、楚材卒に憂憤して沒す、年五十五、時に太宗の十六年なり、至順元年廣寧王に追封し、文正と諡せらる、著す所ろ湛然居士集十四卷あり、載する所ろ詩を多しとなす、蓋し國事鞅掌僅に吟咏を以て懷を寄せ、意を著作に留むるに遑あらざりしに由るなり、

【夜涼】夜の「スズシキ」氣、高適の詩に「獨步閑庭逐――」韋莊の夏夜詩に「傍水遷書榻、開襟納――」

【野綠】野の綠色なるをいふ、柳宗元の永州新堂記に「迴延――、遠混天碧」野翠に同じ、

【夜露】「ヨルノツユ」梁の昭明太子の擬古詩に「晨風被庭槐、――傷階草」杜甫の蒹葭の詩に「體弱春風早、叢長――多」

【夜漏】夜の漏刻、轉じて夜の時刻、夜刻に同じ、周禮雞人の「大祭祀、夜嘑旦、以嘂百官」の注に「――未盡、雞鳴時也、呼旦以警起百官、使夙興」韋應物の驪山行に「禁仗圍山曉霜切、離宮積翠――長」

【夜話】夜閑に話する、宋史藝文志に「僧惠洪冷齋――十三卷」蘇軾の答周循州詩に「未敢叩門求――、時叨送米續晨炊」

【野王】兩漢・晉・北魏の縣名（河內郡ニ屬ス）今の河南懷慶府河內縣治、

ユ

【庾】「クラ」史記文帝紀に「發倉庾」註に「在邑曰倉、在野曰庾」一解に「露積ヲ庾トイフ、倉ノ屋ナキナリ」また量名、斞と通ず、左傳昭二十六年に「粟五千庾」註に「庾ハ十六斗」

【由緒】筋道また來歴の義、北齊書唐邕傳に「自軍吏以上勞效、ーー不諳練」

また洛陽伽藍記に「遂問寺ーー」

【維摩會】釋門事物紀原に「齊明天皇三年内大臣鎌足公山階寺ヲ建テーーーヲ設ケ翌年沙門福亮ヲ請シテ維摩經ヲ講ゼシム、爾來每歲此ノ經ヲ講ズルコト十二年、ーーーコレヨリ始マルト、元亨釋書ニ見ユ」

【維摩居士ガ方丈ノ室】維摩は天竺の人、佛在世中、自身病室にて說法す、唐の顯慶中、李義表、王玄策、高宗帝の勅を奉じて西域に使し、毘耶黎城の東北四里許の地、維摩居士示疾の室の遺趾を問ひて、之を見るに、石を壘みて之を作る、玄策手板をもて之を量るに縱橫各十笏、方丈の名は此より起るといふ、

【勇】說文に「氣也、一曰、健也」玉篇に「果決也」廣韻に「猛也」增韻に「銳也、果敢也」老子に「慈故能勇、儉故能廣」淮南子に「好勇危術也」沈勇は「オチツキテ」「ツヨキ」をいふ、漢書に「爲人沈勇有大略」膽勇は膽力あり勇氣あること、南史に「景宗以膽勇聞、頗愛史書」大勇は大いなる勇氣、主に血氣の勇に對して義理に本づける勇氣をいふ、孟子に「子好勇乎、吾嘗聞大勇於夫子矣」論語陽貨篇に「子路曰、君子尙勇乎、子曰、君子義以爲上、君子有勇而無義爲亂、小人有勇而無義爲盜」下の(勇者ハ)を見よ、

【勇敢】強く勇む義、史記刺客傳に「齊人或言、聶政ーー士也」

【勇悍】心「イサマシク、ツヨシ」史記に「以ーー從軍」

【勇士ハ其ノ元ヲ喪フヲ忘レズ】孟子滕文公下に「孟子曰、昔齊景公田、招虞人以旌、不至、將殺之、志士不忘在溝壑、勇士不忘喪其元、孔子奚取焉、取非其招不往也」と、元は首なり、朱子の說に「志士云云ノ二句ハ、孔子ガ虞人ヲ嘆美スルノ言ナリ」と、虞人とは苑囿を守る吏なり、大夫を招くに旌を以てし、虞人を招くに皮冠を以てするは、禮なり、

【勇者ハ懼レズ】論語子罕篇に「子曰、知者不惑、仁者不憂、勇者不懼」とあり、知者は理に明かにして、是非曲直を辨ずる故に惑はず、仁者は至公にして私欲なく、理と一なる故に、往く所ろとして自得せざるところなし、故に憂へず、勇者は道義に合して守る所ろある故におそれざるなり、

【勇退】「イサギヨク」仕官を罷めて去るをいふ、蘇軾の詩に「高才晩歲終難遇、ーー當年正急流」

【勇ニシテ禮ナケレバ則チ亂ル】(勇而無禮則亂)勇氣ありて禮儀なきときは道理にそむき亂暴の行をなすに至るをいふ、論語泰伯篇、孔子の語、

【勇猛精進】佛經の語、敵に怯れず進む義、如何なる艱難に遭ふとも進修して怠らざる義、无量壽經に「ーーーー、志願无倦」法華經に「又見菩薩ーーーー入於深山」

【融融】「ヤハラギ、タノシム」貌、左傳の隱元年に「其樂也ーー」また李白の詩に「ーー白玉輝、映我青蛾眉」

また春の氣候の「アタタカク」「ノドカ」なる貌、杜牧の阿房宮賦に「歌臺煖響、春光ーー」

【輸贏】輸は「マケ」贏は「カチ」正韻に「俗謂勝負爲ーー唐の元稹の詩に「如湯探冷熱、似博賭ーー」

【愉悅】「ヨロコブ」謝靈運の詩に「披拂趨南徑、ーー偃東扉」儲光羲の詩に「ーー來唔語」

【湯ヲ探ル】(探湯)を見よ、

【湯ヲ以テ沸ニ沃グ】(以湯沃沸)益禍亂を增長せしむるをいふ、淮南子に「ーーーー、亂乃逾甚」また「以湯止沸、沸乃不止、誠知其本、則去火而已矣」漢書董仲舒傳に「以湯止沸、抱薪救火」

【諭告】文體明辨に「字書ヲ按ズルニ云フ、諭ハ曉スナリ、告ハ命ナリ、上ヲ以テ下ヲ敕ムルノ詞、商周ノ書、未ダ此ノ體アラズ、春秋内外傳ニ至リテ、始メテ周天子ノ諸侯ニ諭告シ、及ビ列國往來相告グルノ詞ヲ載ス、然レドモ皆使者言ヲ傳ヘテ、書翰ヲ假ラズ云云」

【額號】(ーー)を見よ、

【雪】大戴禮に「雪ハ天地ノ積陰ナリ、溫ナレバ雨トナリ、寒ナレバ雪トナル」春秋元命包に「陰凝リテ雪トナル、雪ハ五穀ノ精ナリ」韓詩外傳に「凡ソ草木ノ花多クハ五出、雪花ハ獨リ六出」李商隱の詩に「人疑迷麵市、馬似困鹽車」梁の裴子野の詩に「拂草如連蝶、落樹似飛花」滕六は雪の神なり、幽怪錄に「滕六ヲシテ雪ヲ降シ巽二ヲシテ風ヲ起サシム」とあり、晉書に

「孫康家貧シ、常ニ雪ニ映シ書ヲ讀ム」開元遺事に「唐ノ王元寶賓客ヲ好ム、大雪ノ際毎ニ僕夫ヲシテ門巷ヨリ雪ヲ掃ヒ、徑路ヲ爲ラシメ、以テ賓客ヲ迎ヘ飲宴ス、之ヲ煖寒會ト謂フ」

　江雪　唐　柳宗元
千山鳥飛絶、萬徑人蹤滅、孤舟蓑笠翁、獨釣寒江雪、

　夜雪　唐　白居易
已訝衾枕冷、復見窗戶明、夜深知雪重、時聞折竹聲、

　和司馬博士詠雪　梁　何遜
凝階夜似月、拂樹曉疑春、蕭散忽如盡、徘徊已復新、暫蔽窓紈質、復憐施粉人、若逐微風起、誰言非玉塵、

【雪ヲ噴ク】（噴雪）を見よ、

【雪ニ程門ニ立ツ】（立雪程門）宋史に「御史游酢、字定夫、與侍郎楊時字中立、初見程伊川先生、伊川暝目而坐、二子侍立而不去、既覺、謂二子曰、賢輩尚在此乎、今既晩、且休、及出門、門外雪深三尺」この事、侯仲良（字ハ師聖、程門ノ弟子）の語錄にも出づ、文やや異り、

【行到水窮處】（別業）を見よ、

【雪滿山中高士臥、月明林下美人來】明の高青邱の梅花の詩の前聯なり、梅花を以て高士と美人とに比す、品し得て妙なり、左に全文を示す、

瓊姿只合在瑤臺、誰向江南處處栽、――――、――――、寒依疎影蕭蕭竹、春掩殘香漠漠苔、從去何郞無好詠、東風愁寂幾回開、

【往ヲ告ゲテ來ヲ知ル】（往ヲ告ゲテ）を見よ、

【行クニ徑ニ由ラズ】（行不由徑）徑は、道の小にして「チカキ」者なり、道を行くに、正路に由りて、邪徑に由らざる義、論語雍也篇に「子游爲武城宰、子曰、女得人焉爾乎哉、曰、有澹臺滅明者、行不由徑、非公事、未嘗至於偃之室也」註に「徑ニ由ラザルトキハ、則チ動クニ必ズ正ヲ以テシテ、小ヲ見テ速カナラント欲スルニ意無キコト知ルベシ、公事ニアラザレバ、邑宰ニ見エザルトキハ、其ノ以テ自ラ守ルコト有リテ、而シテ己ヲ枉ゲテ、人ニ徇フノ私無キコトヲ見ルベシ」（澹臺滅明）を參看せよ、

【行クニ常ニ經ヲ帶ブ】（行常帶經）史記儒林傳に「兒寬愛業孔安國、貧無資用、常爲弟子都養、及時時閒行傭賃、以給衣食、――――、止息則誦習之」漢書には

「帶經而鉏」に作る、

【往ク者ハ諫ムベカラズ、來ル者ハ猶ホ追フベシ】（往者不可諫、來者猶可追）すでに過ぎ去りたることは諫め止むと雖も、及ばず、今より以後の事は、追ひ改むべきをいふ、論語微子篇に「楚ノ狂、接輿歌ヒテ孔子ニ過ギリテ曰ク、鳳ヤ鳳ヤ何ゾ德ノ衰ヘタル、往ク者ハ、諫ムベカラズ、來ル者ハ猶ホ追フベシ、已而已而、今ノ政ニ從フ者ハ殆シ」註に「接輿ハ、楚人、佯リ狂シテ世ヲ辟ク、夫子時ニ將ニ楚ニ適カントス、故ニ接輿歌ヒテ其ノ車ノ前ヲ過グルナリ、鳳道アルトキハ則チ見レ、道ナキトキハ則チ隱ル、接輿以テ孔子ニ比ス、而シテ其ノ隱ルル能ハズシテ、德ノ衰ヘタルコトヲ譏ルナリ、來ル者ハ、追フベシトハ、言フココロハ今ニ及ビテ尙ホ隱レ去ル可シトナリ」

【逝ク者ハ斯ノ如キカ、晝夜ヲ舍テズ】論語子罕篇に「子在川上曰、逝者如斯夫、不舍晝夜」水の逝くや晝夜の別なく、一息の間斷なく、始終先へ先へと流れ進む、學問の道も、亦猶ほ此の如くなるべきことを諭されたるなり、

【愉快】「ココロヨシ」史記酷吏傳に「非武健嚴酷、惡能勝其任而――乎」

【楡莢】「ニレ」の樹の「サヤ」春、花を開き實を結ぶ（秋、花ヲ開キ、莢ヲ結ブ一種モアリ）韓琦の詩に「――紛紛擲亂錢、柳花相撲滾新綿」（楡）を參看せよ、また錢の名、形の似たるによりて名づく、漢書食貨志に「爲錢、重難用、更鑄――錢」

【楡莢雨】太平御覽に「三月楡莢ノ時、雨アリ、高田ニ大豆ヲ種ウ可シ」歲華紀麗に「楊花風、――」余靖の暮春の詩に「農田――」

【諛言】「ヘツラヒ」の「コトバ」莊子漁父篇に「不擇是非而言、謂之諛」史記叔孫通傳に「先生何言之諛也」鬼谷子に「――者博于智」鹽鐵論に「富貴多――」諛辭に同じ、

【窳楛】窳は器の病なり、楛は濫惡にして堅からざるなり、楛窳に同じ、荀子に「械用兵革、――不便利者弱」

【庾公ガ樓】（庾亮）を見よ、

【庾積】穀物を「ムキダシ」に露して積む義、國語の周語に「野有――」（庾）を見よ、

【瘐死】賢者が志を得ずして憂ふるをいふ、爾雅の釋訓に「瘐ハ瘐病ナリ」註に「賢人志ヲ失ヒ、憂ヲ懷ク病ナリ」

また獄中にて死するをいふ、集韻に「囚セラレテ飢寒ヲ以テ死スルヲ瘐トイフ」漢書宣帝紀に「——獄中ニ」註に「病ナリ、囚徒ノ病、律ニ名ヅケテ瘐ト爲ス」

【諛辭】「コビヘツラフ」「コトバ」劉向の九歎に「聽夫讒人之——」諛言に同じ、

【楡樹】和名「ニレ」の木（楡）を見よ、

【由旬】瑜善那・踰繕那・由延などともいふ、限量と譯す、祖庭事苑に「五百里爲一倶盧舍、八倶盧舍爲一——、此當三十里也」——は六町一里にて、或は四十里或は三十里、或は十六里など、諸說あり、

【愉色】愉は悅なり、顏色樂むなり、禮記の祭義に「孝子之有親愛者、必有和氣、有和氣者、必有——、有——者必有婉容」と、論語にも「愉愉如也」とあり、

【櫻桃】庭に植ゑて花を賞す、蕾は淡紅にして「ヒガンザクラ」の蕾の如し、開けば白く、梅花に似て小さく蕚は櫻の如し、實は夏の半に紅熟す、正圓にして四分許、味は甘くして酸を帶ぶ、禮記に「仲夏之月、天子羞以含桃先薦寢廟」注に「鶯鳥ノ含ム所ロタルヲ以テ故ニ含桃トイフ、含桃ハ、今ノ——ナリ」と、本草に「一名ハ、崖蜜」の注に「鬼谷子ガ曰ク、崖蜜ハ今ノ——ナリ」埤雅に「——一名ハ荊桃、其ノ顆大ナル者ハ彈丸ノ如ク、小ナル者ハ珠璣ノ如シ、小ニシテ紅ナル者ヲ櫻珠ト爲ス」

【楡錢】「ニレ」の木に結ぶ莢（サヤ）をいふ、本草に「楡白キ者、枌ト名ヅク、其ノ木甚ダ高大、未ダ葉ヲ生ゼザル時、枝條ノ間ニ、先ヅ楡莢ヲ生ズ、形狀錢ニ似テ小、色白ク串ヲ成ス、俗ニ——ト呼ブ」（楡莢）を見よ、

【油斷】怠り「ナマケル」涅槃經に「善男子、譬如世間有諸大衆、滿二十五里、王勅一臣、持一油鉢、經山過、莫令傾覆、若棄一滴、當斷汝命、復遣一人、拔刀在後隨而怖之、臣受王敎、盡心堅持」と、油斷の字は蓋し此より出てしならん、一說「ユダン」は「ユタ」に「ン」の助辭を添へたるにて「ユタ」は透ある意「ユタニ タユタニ」「ユタカ」等の「ユタ」なるべし、油斷は字の音を借りたるまでにて、字義に關係なしと、

【融通】彼我の心の差別なく「ウチトケタル」義、佛經の語、法華經科註に「貫統法門、——色心」俗に金錢を通じ用ふるを——といふは、轉義に從へるなり、

【交讓木】また「ユヅルハ」樹高七八尺、枝葉茂生す、葉の形、長く厚く、蔕赤し、夏小白花を開く、柚の花に似たり、淺黃色の實を結ぶ、大サ豆の如し、舊葉は春まで

もあり、新葉生ひて後ちに落つ、新舊相讓るに似たり、新年の儀にこの葉を用ひて父子相讓る義に寄せて賀す、述異記に「黃金山ニ楠樹アリ、一年ハ東邊榮エ、西邊枯レ、後年ハ西邊榮エ、東邊枯ル、年年此ノ如シ、張華云フ交讓樹ナリ」彼の國の交讓木は、和名の「ユヅリハ」とは別なるに似たり、

【隃糜】「ニホヒ」入の墨をいふ、漢官儀に「尙書令僕丞郎日給——墨二枚」通典に「漢尙書郎月賜赤管大筆一雙、——墨一丸」

【指ヲ墮ス】（墮指）寒氣嚴しくして指を落すをいふ、漢書の高帝紀に「七年冬十月、上自將擊韓王信於銅鞮、斬其將、信亡走匈奴、與其將曼丘臣王黃、共立故趙後趙利爲王、收信散兵、與匈奴共距漢、上從晉陽連戰、乘勝逐北、至樓煩、會大寒、士卒——者什二三、遂至平城、爲匈奴所圍七日、用陳平祕計得出」

【指ヲ傴ム】（傴指）を見よ、

【指ヲ染ム】（染指）指にて「チョット」味を嘗むるをいふ、左傳宣四年に「楚人黿ヲ鄭ノ靈公ニ獻ズ、公子宋（子公なり）ト、子家ト將ニ公ニ見エントス、子公ノ食指動ク、以テ子家ニ示シテ曰ク、他日我レ此ノ如クナレバ、必ズ異味ヲ嘗ムト、入ルニ及ビテ宰夫將ニ黿ヲ解カントス、相見テ笑フ、公ソノ笑フ所以ヲ問フ、子家實ヲ以テ告グ、大夫ニ黿ヲ食ハシムルニ及ビテ、子公ヲ召シテ與ヘズ（指の動くを効なからしめんとてなり）子公怒リ、指ヲ鼎ニ染メ之ヲ嘗メテ出ヅ」と、黿は大鼈なり、方孝孺の鄭靈公論に「子公怏怏而染指」

【兪跗】黃帝の時の名醫、史記の扁鵲傳に「臣聞上古之時、醫有——、治病不以湯液醴灑鑱石撟引案杌毒熨、一撥見病之應、因五臟之輸、乃割皮解肌、訣脈結筋、搦髓腦、揲荒爪幕、湔浣腸胃」云云

【夕ノ日ニ子孫ヲ愛シ】徒然草に見ゆ、白氏文集に「朝露貪名利、夕陽愛子孫」とあるに本づく、

【兪扁之術】名醫の療法をいふ（兪跗）と（扁鵲）とを見よ、

【諛墓】唐書の韓愈の傳に「劉乂者、一節之士、聞愈接天下士、步歸之（中畧）後持愈金數斤去、曰此諛墓中人得耳、不若與劉君爲壽、愈不能止」と、陸游の題齋壁詩に「作碑——已絕筆、紬史藏山猶苦心」、

【逾邁】月日の過ぎ行く義、逾は越なり、進なり、邁は往なり、過なり、又老なり、書經秦誓に「日月——」

【弓】音キウ釋名に「弓ハ穹ナリ、之ヲ張ル、穹隆然タルナリ、弓ノ末ヲ簫トイフ、簫ハ梢ナリ又コレヲ弭ト

「イフ」荀子解蔽篇に「倕作弓、浮游作矢、而羿精於射」宋玉の大言賦に「彎弓掛扶桑、長劍倚天外」唐書に「太宗謂蕭瑀曰、朕少好弓矢、自謂能盡其妙、近得弓十數、以示弓工、乃曰、木心不正、脈理皆邪、弓雖勁而遣箭不直、非良弓也、朕以弧矢定四方、使弓多矣、弓猶失之、況於治乎、自是遂延京官五品以上更宿中書內省、詢訪政敎之得失焉」淮南子に「弓先調而後求勁、馬先馴而後求良、人先信而後求能」荀子議兵篇に「弓矢不調則羿不能以中微、六馬不和則造父不能以致遠」(狡兎死シテ烹逃ノ)を參看せよ、

また天弓は虹の異名、

【夢】音ボウ 正韻に「覺ノ對、寐中ニ見ル所ロノ事形ナリ」書經に「夢帝賚予良弼」論語述而篇に「子曰、甚矣也、吾衰也、久矣吾不復夢見周公」周禮春官占夢に「以日月星辰占六夢之吉凶、一正夢、二噩夢、三思夢、四寤夢、五喜夢、六懼夢」莊子齊物篇に「昔者莊周夢爲胡蝶、栩栩然胡蝶也、俄然覺、則遽遽然周也」北齊書張亮傳に「薛淑夢亮於山上挂絲、占之曰、山上絲幽字也、君其爲幽州乎」北魏爾朱榮傳に「城陽王徽解夢」解夢は「ユメハンダン」正字通に「占夢以決吉凶曰圓夢」(六夢)(南柯ノ)を見よ、

【渝盟】「チカヒ」に「ソムク」渝は變なり、左傳に「有渝盟、明神殛之」

【夢ニ歸リ寫詩ヲ見ル】(夢歸見寫詩)圓機活法に「書生アリ妻ヲ娶ル、後大學ニ遊ビ久シク歸ラズ、一夕夢ニ其ノ家ニ返ル、妻ノ筆ヲ秉リ詩ヲ寫スヲ見ル、詩ニ曰ク、數日相望極、須知意思迷、夢魂不怕險、飛過大江西ト、書生怪ミ之ヲ記ス、後家書果シテ至ル、妻ノ詩一首アリ、夢中見ル所ロノ如ク、殊ナルナシ、夢ミル夕ハ、乃チ書ヲ發スルノ日ナリ」

【夢ニ之ヲ見ル】(夢見之)古樂府に「遠道不可思、宿昔———」韓愈の詩に「夜夢多見之、晝思反微茫」白居易の詩に「平生所厚者、昨夜———」

【夢ニ筆頭ニ花ヲ生ズ】(筆頭花ヲ生ズト)を見よ、

【揄揚】譽め揚ぐる辭なり、文選の兩都賦序に「雍容——、著于後嗣」の註に「揄ハ引ナリ、揚ハ舉ナリ」

【愉愉】和ぎ悅ぶ義、論語鄕黨篇に「私覿——如也」私覿とは一私人の資格にて君に見ゆるをいふ、

【愈愈】「イタク」憂ふるなり、詩經小雅正月篇に「憂心——」

【由來】由りて來る所ろ、左傳に「吾知其所——矣」また楊炯の詩に「趙氏連城璧、——天下傳」

【愉樂】「ココロヨク、タノシム」楚辭九章に「蕩志而——」

【楡柳】「ニレ」と「ヤナギ」と、周禮司爟の「掌行火之政」の注に「春ハ——ノ火ヲ取ル」陶潛の詩に「——蔭後簷、桃李羅堂前」

【庾亮】字は元規、晉の鄢陵の人、明穆元皇后の兄なり、風格峻整、動くに禮節に由る、仕へて散騎常侍となる、外戚の故を以て退くことを求む、復起ちて中書監となり、中書令を加へらる、蘇峻反し、亮諸軍を督して之を平ぐ、亮武昌を鎭するとき、諸佐吏殷浩の徒、秋夜に乘じ南樓に登る、亮忽ち至る、諸人起ちて之を避けんとす、亮曰く、老子この夜に於て、興復淺からずと、便ち胡床に據り、浩等と談詠竟夕す、その坦率類ね此の如し、卒して太尉を贈られ、文康と謚す、詳しくは晉書の——傳を見よ(南樓嘯咏)を參看せよ、

夢李白二首　唐　杜甫

死別已吞聲　生別常惻惻　江南瘴癘地
逐客無消息　故人入我夢　明我長相憶
恐非平生魂　路遠不可測　魂來楓林青
魂返關塞黑　今君在羅網　何以有羽翼
落月滿屋梁　猶疑見顏色　水深波浪闊
無使蛟龍得
浮雲終日行　遊子久不至　三夜頻夢君
情親見君意　告歸常局促　苦道來不易
江湖多風波　舟楫恐失墜　出門搔白首
若負平生志　冠蓋滿京華　斯人獨顦顇
孰云網恢恢　將老身反累　千秋萬歲名
寂寞身後事

ヨ

【輿】 字彙に「｜ハ車底ナリ」正字通に「｜ハ車中、人ノ載ル所ロナリ」｜はもと車の分名、輪輿の如し、後ち車の別稱とす、乘輿の如し「コシ」論語衞靈公篇に「立則見其參於前、在輿則見其倚於衡也」其とは忠信篤敬をいふ、

【餘殃】 殃は天より「ワザハヒ」を降すをいふ、書經の伊訓に「作不善降之百殃」とあり、｜｜は後世子孫にまで及ぶ禍をいふ、易經坤の文言に「積善之家、必有餘慶、積不善之家、必有｜｜」

【予一人】 一とは對なきなり、天子の自稱、書經湯誥に「嗟爾萬方有衆、明聽｜｜｜誥」禮記に「凡自稱天子、曰｜｜｜」

【餘音】 音聲のすでに絕えて、尙ほ殘れる音なり、蘇軾の前赤壁賦に「｜｜嫋嫋、不絕如縷」次條を見よ、

【餘音梁ヲ繞ル】 （餘音繞梁）歌聲の「スグレテ」「タヘナル」をいふ、列子湯問篇に「韓娥東之齊、匱糧、過雍門、鬻歌假食、既去、而餘音繞梁欐、三日不絕」韓娥は韓國の善く歌ふ者なり、博物志にも「曹娥之齊、鬻歌假食、既去｜｜｜｜、三日不絕」

【雍閼】 雍は壅なり「フサグ」をいふ、閼は止なり、塞なり、漢書中山王傳に「今臣｜｜不得聞」また列子楊朱篇に「管夷吾曰、肆之而已、勿壅勿閼」

【容易】 甚だ易き義、漢書東方朔傳に「談何｜｜」孟郊の詩に「永謝平生言、知音豈｜｜」

【庸醫】 「ヤブイシャ」陸游の詩に「｜｜司性命、俗子議文章」

【容悅】 「オモネリ、ヘツラフ」義、孟子盡心の上篇に見ゆ、唐書にも「陛下不惑近習｜｜之辭」

【癰ヲ吮フ】 （吮癰）「ボンノクボ」或は背等に發する惡しき瘡なり、唐書の孝友傳に「張士巖母病癰、士巖爲吮血」（疽ヲ吮フ）を見よ、

【俑ヲ作ル】 （作俑）惡例をはじめ作るにいふ、俑は葬に從ふ木偶人なり、禮記の檀弓に「孔子謂爲芻靈者善、謂爲俑者不仁、不殆於用人乎哉」の註に「中古爲木偶人、謂之俑、則有面目機發而太似人矣、故孔子惡其不仁、知末流必有以人殉葬者」と、これより廣く不善の事を首唱する義に用ふ、孟子梁惠王上篇に「孔子曰、始作俑者、其無後乎、爲其象人而用之也」

【庸行】 平常の行をいふ、易經文言に「庸言之信、｜｜之謹」庸は平常なり、本義に「常言モ亦信ジ、常行モ亦謹ム、盛德ノ至ナリ」と、中庸に「庸德之行、庸言之謹」

【傭耕】 人に「ヤトハレ」て耕作する義、史記陳涉世家に「涉嘗與人｜｜、輟耕之隴上」

【用閒】 閒は閒諜「マハシモノ」を使用する義、孫子の｜｜篇に詳かなり、

【容儀】 容貌の禮儀にかなふをいふ、漢書馮奉世傳に「奉世子參爲人矜嚴、好修｜｜、進退恂恂甚可觀也」南史宣帝紀に「帝美｜｜、身長八尺三寸、垂手過膝」

【庸器】 功ある者のために器を鑄てその功をしるす、その器をいふ、周禮春官の「典｜｜」の注に「｜｜ハ功アル者、器ヲ鑄テ其ノ功ヲ銘スルナリ」また「ブンドリ」の器、周禮典｜｜の注に「｜｜ハ國ヲ伐チテ獲タル所ロノ器」

【雍熙】 和らぎ「タノシム」東京賦に「上下共其｜｜」雍通じて邕に作る、

【饔餼】 饔は牲（イケニヘ）の殺したるもの、餼は生けるもの、禮記に「致｜｜」

【鷹鳩變ゼズ三春ノ眼】 國史略に「鷹鳩不變三春眼、鹿馬迷二世情」とあり、鷹鳩暴戾の相あるをいひて相家の專橫を譏りたるなり、世說に「孔群曰、雖陽和布氣、鷹化爲鳩、至於識者、猶憎其眼」註にいふ「憎眼、以其鷹眼猶存也」と、禮記月令に「仲春之月鷹化爲鳩」とあるに本づく、

【庸詎】 庸は用、詎は何なり「何ヲ以テ」と訓む、莊子に「｜｜知吾所謂知之非不知邪」

【容華】 容色の華麗なるをいふ、曹植の詩に「南國有佳人、｜｜若桃李」

【容光】 空隙に容る所ろの光をいふ、孟子盡心上篇に「日月有明、｜｜必照焉」とあるは道の本ありて用をなすこと、日月に明の本ありて空隙に容る光も亦照さざることなきに同じきをいふ、また風采の義「ミメヨキ」義等にも用ふ、徐幹の詩に「端坐而無爲、髣髴君｜｜」

【庸言】 平常の言なり（庸行）を見よ、

【鷹犬】 「タカ」と「イヌ」と、共に獵に用ふるもの、宋史楊業傳に「業幼倜儻任俠、善騎射、好畋獵、所獲倍於人、嘗謂其徒曰、我他日爲將用兵、亦猶用｜｜逐雉兎」

【蠅虎】 「ハヘトリグモ」蜘蛛の一種、大サ三四分、白色或は灰色なり、灰色に黑條あるもの、褐色にして黑きも

のもあり、形大小數種あり、皆壁梁に棲む、草に棲むは綠色なり、共に能く跳りて蝿などの小蟲を捕へ食ふ、古今注に「――、蝿狐也、形似蜘蛛而色灰白、善捕蝿一名蝿蝗、一名蝿豹」戴表元の――賦に「跳踉振擲、是謂――」

【蝿狐】 前條に同じ、

【容齋隨筆】 十六卷、續筆十六卷、三筆十六卷、四筆十六卷、五筆十卷、宋の洪邁（字ハ景盧、容齋ト號ス、鄱陽ノ人、紹興十五年ノ進士、端明殿學士ニ至リ、嘉泰二年卒ス、年八十）撰す、簡明目錄に「其ノ書時ニ隨ヒテ箚記シ、次ヲ以テ編ヲ成ス、惟五筆ハ未ダ成ラズシテ邁沒ス、故ニ獨リ十卷ニ止マル、皆經史ヲ考辨シ、典故ヲ釐訂シ、旁ラ文章藝術ニ及ブマデ、論說スル所ロアラザル無シ、多キヲ貪リ、廣キヲ務メテ偶〻疏漏アルヲ免レズト雖モ、然レドモ淹通該博ナルコト、南渡以後ノ諸說部ニ於テハ惟野客叢書ノミ、與ニ對壘スベシ、他家ハ終ニ逮バザルナリ」

【鷹爪】 「タカ」の「ツメ」また茶の異名、負暄雜錄に「北苑茶、凡茶芽數品最上者、曰小芽如雀舌――、以其勁直纖銳、故號茶芽」惠洪の夏日烹茶詩に「山童解烹蟹眼湯、先生自試――芽」一に鷹觜ともいふ、劉禹錫の試茶歌に「宛然爲客振衣起、自傍芳叢摘鷹觜」

【傭作】 傭は傭なり、人に「ヤトハレ」賃錢を受くるをいふ、漢書匡衡傳に「家貧――、以供資用」

【容止】 「フルマヒ」孝經に「――可觀」動作をいふ、

【蝿市】 「ハヘ」の朝、群集するをいふ、埤雅に「蝿成市於朝、蚊成市於暮」

【容臭】 「香ブクロ」の類、禮記の內則に「男女ノ衿纓ニハ、ミナ――ヲ佩ブ」とありて註に「臭ハ香物ナリ、形容ヲ修飾スベシ」

【鷹鷲山ヲ以テ卑シト爲シ、巢ヲ其ノ上ニ增ス】 （鷹鷲以山爲卑而增巢其上）說苑に見ゆ、下に「黿鼉魚鼈以淵爲淺、而穿穴其中」とあり、

【雍齒ガ功ヲ先トス】 太平記卷十三に見ゆ、漢高祖すでに大功臣を封ず、餘は功を爭ひて決せず、帝復道の上より望見するに、諸將往往沙中に坐して偶語す、上張良に問ふ、良曰く、陛下この屬を率ゐて天下を取る、今封ずる所ろは皆故人親愛、誅する所ろは皆平生の仇怨なり、この屬、封を得ざるを怨み、又平生の過失を疑はれ誅せられんことを恐れ、相聚りて反を謀るのみと、上曰く、之を爲すこと奈何せんと、良曰く、陛下平生憎む所ろ、群臣の共に知る所ろ、誰か最も甚しき者ぞと、上曰く雍齒なりと、良曰く、急に先づ齒を封ぜよと、是に於て齒を封じて什方侯となし、急に丞相御史を趣し、功を定め封を行ふ、群臣皆喜びて曰く、雍齒すら且つ侯たり、吾が屬患なからんと、事は史記に見ゆ、

【容膝】 僅に膝を容るるに過ぎざる小室をいふ、韓詩外傳九に「北郭先生妻曰、今結駟列騎所安不過容膝」これは楚の莊王、使を使はし北郭先生を聘して相とせんとせし時の語なり、陶淵明の歸去來辭に「倚南窻以寄傲、審容膝之易安」

【庸人】 凡庸なる人、愚人をいふ（天下モト無事）を見よ、

【容車】 「カザレル」車、後漢書祭遵傳の注に「――容飾之車」

【媵嬙】 媵は「ソバメ」嫁に從ひ來りたる女、側室、また――は二字ともに宮中の女官の稱轉じてひろく宮女の義にも用ふ（嬪嬙）を見よ、

【用舍行藏】 用ひらるれば出でて道を行ひ捨てらるれば去りて身を隱すなり、一解に、藏は道を隱して行はざる義、論語述而篇に「子謂顏淵曰、用之則行、舍之則藏、惟我與爾有是夫」また蔡邕の陳太丘碑文に「用行舍藏、進退可度」

【榕樹】 榕城隨筆に「閩中――多シ、因リテ榕城ト號ス、枝葉柔脆、幹既ニ枝ヲ生ジ、枝又根ヲ生ズ、垂垂流蘇ノ如ク、少シク物ニ著ケバ卽チ榮繁ス、或ハ本幹自ラ相依附シ、七八樹叢生スル者ノ若キハ、多ク數十百條ニ至リ、合幷シテ一ト爲リ、蟠蛇樛結、柯葉蔭茂ス」南方草木狀に「――南海桂林多植之」柳宗元の詩に「榕葉滿庭鶯亂啼」

【傭書】 筆工に同じ「ヤトハレテ」字をうつす者、壼壙錄に「余在大學、有――陳達者」釋常談に「受傭寫文字謂之――」、吳志闞澤ハ會稽人、好學居貧、爲人――以自給」傭寫・賃書に同じ、

【癰疽】 惡しき「デキモノ」轉じてそれを治する醫をいふ、孟子萬章篇に「孔子於衛主――」注に「――ハ瘍醫ナリ」

【擁腫】 「フクレル」莊子逍遙遊篇に「大樹謂之樗、其大本――而不中繩墨」

【容飾】 「カザリスル」修飾に同じ（容車）を見よ、

【擁書萬卷】 北史の李謐傳に「諸經ヲ鳩集（あつめる）シテ、廣ク異同ヲ校ス、孔璠等ガ爲メニ隱伏ヲ判決ス、辭氣磊落觀ル者疲ルルヲ忘ル、每ニ曰ク、丈夫擁書萬

卷、何假南面百城」

【傭書自ラ資ス】 筆耕して自ら生活する義、北史劉芳傳に「初入魏、晝卽ーーーー、夜則誦經不寢、著窮苦論以自慰」

【擁篲】 （篲ヲ擁ス）を見よ、

【鷹鸇之志】 鷹鸇は鷙鳥なり、鸇は「スズメ タカ」以て刑罰等を嚴しくし猛威を振ふに喩ふ、資治通鑑漢桓帝の條に「考城令河內王奐、署香主簿、謂之曰、聞在蒲亭、陳元不罰而化之、得無少鷹鸇之志邪、香曰、以爲鷹鸇不若鸞鳳、故不爲也」この事もと後漢書循吏傳に見ゆ、

【鷹鸇ノ鳥雀ヲ逐フガ如シ】 （如鷹鸇之逐鳥雀）鷹は「タカ」鸇は「スズメタカ」奸邪を誅伐することの猛烈なるに喩ふ、左傳の文十八年に「其ノ君ニ禮アル者ヲ見レバ、之ニ事フルコト、孝子ノ父母ヲ養フガ如クスルナリ、其ノ君ニ禮ナキ者ヲ見レバ之ヲ誅スルコト鷹鸇ノ鳥雀ヲ逐フガ如クスルナリ」

【蠅鼠】 「ハヘ」と「ネズミ」と、共に人の心を擾すもの、謝發淵曰く「蠅最癡頑、無毒牙利嘴、而其擾人尤甚、至于無處可避、無物可辟、且變芳馨爲臭腐、泯潔素爲緇穢、驅而復來、死而復生、比之讒人、不亦宜乎物之最小而可憎者、蠅與鼠耳、蠅以癡、鼠以黠、其害物、則鼠過於蠅、其擾人則蠅過於鼠、世閒若無此二種、晝夜差得帖席矣」

【饔飧】 熟食なり、朝食を饔といひ、夕食を飧といふ、飧は俗字、飱を正とす、孟子滕文公上に「賢者與民並耕而食、ーー而治」

【甬道】 牆垣を築きて街道の如くせる道をいふ、史記項羽紀に「築ーー而輸之粟」註に「敵ノ輜重ヲ掠メンコトヲ恐ル、故ニ垣ヲ築キテ街ノ如クス」と、またーーは軍伍中のみならず、宮中にも亦設くることあり、所謂馳道なり、外に牆を築き、天子その中を行き、外人をして見ることを得ざらしむ、史記始皇紀に「作甘泉前殿、築ーー」

【雍陶】 唐の成都の人、詩人、字は國鈞、太和の進士、簡州刺史、

【庸中ノ佼佼】 常人中にて少しく「スグレタル」もの、佼は、好き貌（鐵中ノ）を見よ、

【傭築】 「ヤトハレテ」「ツチブシン」をする、墨子に「傅說ーー於傅巖」

【膺懲】 膺は擊なり、懲は艾（コラス）なり、無道の夷狄どもを攻伐して懲戒する義、詩經魯頌閟宮篇に「戎狄是膺、荊舒是懲」荊は楚の本名、舒は楚に近き國の名、

【雍徹】 雍は詩經周頌の篇名、徹は除き去るなり、周の世にて、天子が宗廟の祭に供へたる物をさげるには雍の詩を音樂にあはせて歌はしめつつ取り除くなり、而るに臣下にてかかる禮を行ふは僭越といふべし、論語八佾に「三家者以雍徹」

【用度】 國家の入用の財をいふ、後漢書光武帝紀に「頃者師旅未解、ーー不足、故行什一之稅」また宋史職官志に「戶部掌軍國ーー、以周知其出入盈虛之數」

【用等】 用は以、等は何なり「何ヲ以テ」と訓む「ーー稱才學」の如し、

【蠅頭】 細字をいふ、陸游の南堂雜興詩に「未忘塵尾清談興、常領ーー細字書」また微小の利に喩ふ（蠅利）を見よ、

【容貌】 「ミメカタチ」論語泰伯篇に「君子所貴乎道者三、動ーー斯遠暴慢矣、正顏色斯近信矣、出辭氣斯遠鄙倍矣」曾子の語、

【容貌愚ナルガ若シ】 （良賈ハ）を見よ、

【孕婦】 「ハラミヲンナ」呂氏春秋に「剖ーー而見其化」姙婦に同じ、

【用武之地】 兵を用ひて功名をあらはすに宜しき地、三國志に「今操破荊州、威震四海、英雄無ーー之地」（武ヲ用フル）を見よ、

【蠅糞】 「ハヘ」の「クソ」埤雅に「青蠅糞、尤能敗物、雖玉猶不免、所謂ーー點玉是也」僧法杲の十拍歌に「一著身心點ーー、豈期白璧含微瑕」

【用兵】 （兵ヲ用フル）を見よ、

【壅閉】 「フサガル」壅塞に同じ、左傳昭六年に「勿使有所ーー」

【擁蔽】 「オホヒ、カクス」禮記の內則に「女子出門必ーー其面」

【庸保】 庸は人の爲めに役せられて錢を受くる者保は庸の信任すべき者をいふ、一解に保は保證なり、證人を立てて傭はるるなりと、漢書司馬相如傳に「與ーー雜作」

【雍門子周】 劉向說苑の善說篇に「ーーーー琴ヲ以テ孟嘗君ニ見ユ、孟嘗君曰ク、先生ノ琴ヲ鼓スル、亦能ク文ヲシテ悲マシメンカト、周曰ク、臣何ゾ獨リ能ク足下ヲシテ悲マシメンヤ、臣ノ能ク悲マシムルトコロハ、先ニ貴クシテ後チニ賤シク、先ニ富ミテ後チニ貧シキ者、若クハ不幸人倫ノ變ニ遭ヒ、若クハ坎坷不

過ノ逆境ニ在ル者ニ對シテナリ、今足下ノ如キハ千乘ノ君ナリ、得意ノ人ナリ、善ク琴ヲ鼓スル者アリト雖モ、未ダ足下ヲ悲マシムルニ足ラザルナリ、然レドモ臣ガ足下ノ爲メニ悲ム所以ノモノハ、千秋萬歳ノ後、强隣ノ爲メニ伐タレテ、廟堂必ズ血食セズ、高臺既ニ以テ壞レ、曲池既ニ以テ漸シ、墳墓既ニ以テ下レバ採樵スル者、躑躅シテソノ上ニ歌ヒ、衆人之ヲ見テ愀焉トシテ足下ノ爲メニ之ヲ悲ミテ曰ハン、孟嘗君ノ貴ヲ以テシテ此ノ如クナラシムベケンヤトト、是ニ於テ孟嘗君泫然タリ、周琴ヲ引キテ之ヲ鼓シ、徐ニ宮徵ヲ動カシ、微ニ羽角ヲ揮フ、孟嘗君歔欷シテ曰ク、先生ノ琴ヲ鼓スル、文ヲシテ國ヲ破リ邑ヲ亡フノ人ノ如クナラシムト」詳しくは本文に就きて見よ、茅元儀の詩に「高館涼風日夕吹、幽襟横絶雍門絲」

【鷹揚】 鷹の飛揚して、將に擊たんとするが如く「ユツタリ」として猛きをいふ、詩經大雅大明篇に「維師尙父、時維ーー」と、毛傳に「鷹ノ飛揚スル如キナリ」と、また曹植の與吳質書に「足下ハーータル其ノ體、鳳觀虎視ス、謂フニ蕭曹モ儔トスルニ足ラズ衞霍モ侔シトスルニ足ラズ」

また魏志曹洪傳に「以前後功、拜ーー校尉」

【踴躍】 「オドル」坐作擊刺の狀をいふ、詩經邶風擊鼓篇に「擊鼓其鏜、ーー用兵」

【踴躍築埋】 列女傳の孟軻之母の條に出づ、支那の葬式に哭泣擗(ムネウツ)踊の禮あり、足を以て地をふみて哭するなり、築埋は築きて之を埋む、葬むる所以なり、

【容與】 「ユツタリ」としたる貌、徐綏の義なり 莊子の人閒世篇に「案人之所感、以求ーー其心」とあり、楚辭に「聊逍遙兮ーー」

【溶溶】 水の盛に且つ「ヤスラカ」に流るる貌、白居易の詩に「渭水綠ーー」杜牧の阿房宮賦に「二川ーー流入宮牆」二川とは渭川と樊川と、また楚辭に「心ーー其不可量兮、情澹澹其若淵」は弘大の義に轉用せしなり、

【雝雝】 鳥聲の和げる貌、詩經邶風匏有苦葉篇に「ーー鳴雁、旭日始旦」

【蠅利】 「ハヘ」の頭の如き小利をいふ、蘇軾の滿庭芳詞に「蝸角浮名、蠅頭微利」

【餘姚】 縣の名、漢の會稽郡に屬す、今の浙江省紹興府ーー縣治これなり、次條を見よ、

【餘姚之學】 王陽明の學をいふ、陽明は浙江省餘姚の人、故にいふ(王陽明)を見よ、

【世ヲ擧ゲテ推ス】 (擧世推)世人ことごとく推し尊ぶ義、岑參の詩に「令德當時重、高門ーーー」

【予ヲ起ス】 (起予)己の氣つかざることを、氣つけくる義にて、發明する所ろあるなり、論語八佾篇に「起予者商也、始可與言詩矣」商は卜商なり、陸游の詩に「稚子談經屢ーー」

【世ヲ金馬門ニ避ク】 (避世金馬門)史記滑稽傳に「時坐席中、酒酣據地歌曰、陸沈於俗、ーーーーー、宮殿中可以避世全身、何必深山之中、蒿廬之下」此は東方朔の語、

【世ヲ辟ク】 (辟世)世を逃れ隱るる義、天下に道なき時は、世を避けて出でぬなり、論語憲問篇に「賢者辟世、其次辟地、其次辟色、其次辟言」辟は避に同じ、

【餘杭】 兩漢以後今日に至るまでの縣名、今の浙江省杭州府ーー縣治これなり、また隋の揚州ーー郡は、今の杭州府錢塘縣の西なり、また元·明の州名、今の錢塘縣治これなり、

【余ガ髮種種】 書言故事に「老人自ラ稱シテ、余ガ髮種種トイフト」左傳昭三年に「盧蒲嫳、泣且請曰、余髮如此種種、余奚能爲」と、種種は老いて髮の短き貌、

【餘甘氏】 茶の異名、陶穀の淸異錄に「胡嶠飛龍磵飲茶詩云、沾牙舊姓ーーー、破睡須封不夜侯、新奇哉、後生所不可幾及也」不夜侯も亦茶の異名、

【淑ラズ】 (不淑)を見よ、

【弋】 糸を矢に結びて鳥を射ること「イグルミ」論語述而篇に「子釣而不綱、弋不射宿」宿は「ネトリ」

【薏苡】 草の名、春種を下し叢生す、高四五尺、葉は互生し、形「モロコシキビ」の葉に似て狹く短し、夏、葉閒に實を結ぶ、形、川穀(ズズダマ)より細小なり、實熟すれば淺褐微黑にして中に自ら穴ありて貫くべし、仁は麥に似て廣く白しーー仁といひ藥用とす、史記の夏本紀注に「禹ノ母、神珠ーーヲ呑ミ胸坼ケテ禹ヲ生ム」後漢書馬援傳に「援在交阯、嘗餌ーー實、用能輕身省慾、以勝瘴氣、南土ーー實大、援欲以爲種、軍還、載之一車、時人以爲南土珍怪、權貴皆望之、及卒後、有上書譖之者、以爲前所載還、皆明珠文犀、帝益怒」杜甫の寄李白詩に「稻粱求未足、ーー謗何頻」

【善醫者】 「イシヤ」の上手、文中子に「ーーー、先寢食而後醫藥」韓非子に「ーーー、不視人之肥瘠、而察其脈之病否而已矣」

【善歌者】 歌の上手、禮記の樂記に「ーーー使人繼其

聲、善教者、使人繼其志」

【慾ヲ寡クスルトキハ身ヲ保ツ】（寡慾則保身）明心寶鑑に「景行錄云、寡言則省謗、ーーーー」とあり、飮食男女の慾望をすくなくすれば身を保ち生を長くするを得るなり、老子に「慾多傷身、財多累身」とあるも同意、

【善ク游グ者ハ溺ル】（善游者溺）技能の長ずる者は、之に誇り、かへりて禍をまねく義、淮南子の原道訓に「夫善游者溺、善騎者墮、各以其所好、反自爲禍、是故好事者、未嘗不中、爭利者未嘗不窮也」俗諺に「河立は河ではつる」といふはこれに本づく 河立とは善く「オヨグモノ」舟子漁父の類

【欲界】 梵語、情欲と色欲と婬欲と食欲との强き有情の住する處の稱、これに色界、無色界を加へて三界といふ、

【欲界ノ三欲】 翻譯名義集に「一飮食欲、二睡眠欲、三婬欲」

【能ク衡山ノ雲ヲ開ク】（能開衡山之雲）蘇軾の潮州韓文公廟碑の句なり、文公衡山南海廟に謁する詩あり、中に曰く「噴雲泄霧藏半腹、雖有絕頂誰能窮、我來正逢秋雨節、陰氣晦昧無淸風、潛心默禱若有應、豈非正直能感通、須臾靜掃衆峰出、仰見突兀撐青空云云」これ公の精誠、神を感ぜしなり、詩は唐詩別裁集卷の七に出づ、

【浴沂】 論語先進篇に「曾點曰、莫春者春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸」と、浴は「テアラヒ」「アシアラフ」沂は水の名、魯城の南に在り、溫泉ありといふ、風は乘涼なり「スズミ」舞雩は、天を祭り雨を禱る處、壇墠樹木あり、

【浴器】 「タラヒ」遜志齋集に「ーー銘、洗滌邪慮以啓新知、勿安於汗濁、自棄弗治」浴盆に同じ、

【善ク窮ニ處ス】（善處窮）蘇軾の文に「顏蠋有處窮方、曰、晩食以當肉、安步以當車、無罪以當貴、可謂ーーー矣」、晩く食事するときは、空腹のために、粗食も肉食の如く美きものなるをいふ、語もと戰國策に見ゆ、

【能ク之ヲ行フ者、未ダ必ズシモ能ク言ハズ】（能行之者、未必能言）史記孫吳傳の贊に引ける古語、下に「能言之者、未必能行」とあり、

【沃日】 海をいふ、木華の海賦に「蕩雲沃日」とあるに本づく、

【翌日】 翌日なり、書經武成に「ーー癸巳」註に「ーーハ明日ナリ」

【翼軫】 南方に在る鶉尾の星宿の名、後漢書郅惲傳の注に見ゆ、

【沃若】 「サカンニ、ウルホヘル」貌、詩經衞風に「其葉ーー」

【翼如】 鳥の翼を舒べたる如くする貌、左右の手を張りて正しく進む義、論語鄕黨篇に「趨進ーー也」

【能ク生ヲ尊ブ者ハ富貴ト雖モ以テ身ヲ傷ラズ】（能尊生者、雖富貴不以傷身）尊生とは生命を大切にするをいふ、富貴の身分になりても私欲を縱まにして身命を傷害せずとの義、莊子に見ゆ、下に「雖貧賤不以累形」とあり、

【能ク其ノ身ヲ約スレバ、儋石ノ穡モ以テ豐カナリ】（能約其身則儋石之穡以豐）束晳の語、下に「苟肆其欲則水陸之積不足」とあり（儋石ノ）を參看せよ、

【抑損】 「ミヅカラオサヘテ」「タカブラヌヤウニスル」史記晏嬰傳に「其後、夫自ーー」

【翼戴】 輔翼（タスク）して尊び戴く義、左傳昭九年に「ーー天子而加之以共」と、共は恭なり、また袁宏の三國名臣贊に「有ーー之功」註に「張昭ヲイフ」

【善釣者】 「ツリ」の上手、呂氏春秋に「ーーー引魚乎千仞之下、餌香也」中論に「ーーー不易淵而殉魚、君子不降席而追道、治乎八尺之中、而德火光」

【沃土】 「コエタルトチ」國語の魯語に「ーー之民不材、淫也」

【善ク問ヲ待ツ者ハ鐘ヲ撞クガ如シ】（善待問者如撞鐘）禮記の學記の語、下に「叩之以小則小鳴、叩之以大則大鳴」質問の大小に應じて答を異にするに喩ふ、

【浴ハ江海ヲ必トセズ、之ヲ要スルニ垢ヲ去ル】（浴不必江海、要之去垢）史記外戚世家に見ゆ、下に「馬不必騏驥、要之善走」とあり、

【欲ハ縱ニス可カラズ】（傲ハ長ズ）を見よ、

【善ク人ト交ハル】（善與人交）善く人と交際するをいふ、論語公冶長篇に「子曰、晏平仲ーーーー、久而敬之」

【浴佛日】 陰曆の四月八日、佛運統志に「四月初八、是ーーー」この日は佛の生れたる日なればなり、高僧傳に「四月八日佛ヲ浴ス、五香水ヲ以テソノ頂ニ灌グ」とあり、要覽にいふ「摩訶刹頭經ニイフ、佛、大衆ニ告ゲタマハク、十方ノ諸佛皆四月八日夜半子ノ時ヲ用テ生ル、所以ハ何ゾ、春夏ノ際タル、殃罪悉ク畢リテ萬物普ク生ジ、毒氣未ダ行ハレズ、寒カラズ、熱カラズ、

時氣和適ス、今是ノ佛ノ生ズル日、人民佛ノ功德ヲ念ジ、佛ノ形像ヲ浴ス」

【薏米】薏苡の實白くして米に似たり、故にいふ、本草に「薏苡ハ其ノ米、白色ニシテ糯米ノ如シ、粥飯ト爲スベシ云云」陸游の詩に「飯香炊ーー」（薏苡）を參看せよ、

【抑揚】音調を抑へたり、揚げたりすること、蔡邕の琴賦に「繁絃既抑、雅韻乃揚」轉じて文勢の「アゲサゲ」あるをいふ、柳子厚の、答韋中立書に「抑之欲其奧、揚之欲其明」轉じて褒貶の意にも用ふ、北齊書甄琛傳に「外和ーー、內實附會」

また浮沈の義、漢書叔孫通傳に「與時ーー」

【沃野千里】沃野とは、肥えたる田野なり、漢書の張良の傳に「夫關中左殽函、右隴蜀、沃野千里」註に「沃ハ溉灌ナリ、言フココロハ、其土地皆溉灌ノ利アリ故ニ沃野トイフ」

【沃野千里天府之國】戰國策に「沃野千里、蓄積饒多、地勢形便、此所謂天府也」前條を見よ、

【翼翼】恭敬の貌、詩經大雅文王篇に「維此文王、小心ーー」

また閑暇の意、詩經小雅に「疆域ーー」また壯健の貌、詩經小雅采芑篇に「四騏ーー」

【弋獵】「イトユミ」にて禽獸をとるをいふ、漢書賈山傳に「馳騁ーー之娛」

【餘光ヲ分ツ】（分餘光）恩を人に推し及ぼすをいふ、史記甘茂傳に「貧人女、與富人女會績、貧人女曰、我無以買燭、而子之燭光幸有餘、子可分我餘光、無損子明、而得一斯便焉」この事列女傳にも見ゆ、曰く「齊女徐吾夜績、而燭不繼、謂鄰婦曰、一室之中、益一人、燭不爲闇、去一人、燭不爲益明、何愛東壁餘光、幸分之」

【餘慶】祖先が善行を積めば、子孫の世に幸福の來るをいふ（餘殃）を見よ、

【豫言】「アラカジメイフ」後漢書申屠剛傳に「夫未至ーー、固常爲虛、及其已至、又無所及」

【與國】同じ「ナカマ」の國をいふ、相與みする義、孟子告子下篇に「我能爲君約ーー、戰必克」また史記項羽紀に「田假爲ーー之王」の註に「相與ニ交リ善キヲーートイフ、黨與ナリ」

【餘子】長男以外の子をいふ、尙書大傳に「ーー皆入學」

【餘師】師と仰ぐべき者、餘りあるをいふ、孟子告子下篇に「夫道若大路然、豈難知哉、病不求耳、子歸而求之、有ーー」陸游の詩に「閉門有ーー」

【餘貲】「アマリ」の財、餘財に同じ、文同の詩に「ーー詎可數」

【輿尸】（尸ヲ輿フ）戰敗れて尸を荷ひて還るをいふ、易の師卦に「六三、師或ーー、凶」象傳に「師或輿尸、大无功也」

【輿師】輿は衆なり、多くの軍隊をいふ、國語の魯語に「敢犒ーー」

【好シ去レ長江千萬里】竇鞏の放魚の詩に「金錢贖得免刀痕、聞道禽魚亦感恩、ーーーーーーー、不須辛苦上龍門」魚を買ひ放ちて刀俎の禍を免れしむ、禽魚の如き微物も亦恩に感ずと聞く、さればよく我が言を記せよ、龍門に上りて龍に化する、榮は則ち榮なれども、その間の辛苦艱難幾何ぞや、若かず千萬里の長江に安息して、自然の樂を全うせんにはと、躁進功名に汲汲たる輩を諷じたるなり、

【譽兒癖】己の子を譽める「クセ」唐書王勃傳に「福時少子勸亦有文、福時嘗詫韓思彥、思彥戲曰、武子有馬癖、君有ーーー、王家癖何多耶、使助出其文、思彥曰、生子若是可夸也」福時は、勃の父、勸と助とは、皆勃の弟、

【輿薪】車に「イッパイ」積みたる「タキギ」孟子梁惠王上篇に「明足以察秋毫之末、而不見ーー」

【餘燼】燼は餘なり、火の「モエノコリ」殘兵に喩ふ、左傳に「請收合ーー、背城借一」借一は一戰を乞ふの義、

【輿櫬】櫬は身に親近する棺「ハダツキノヒツギ」ーーは「コシ」に乘せたる「ヒツギ」徐陵の句に「當輓ーー」（銜璧ーー）を見よ、

【輿臣】多くの「ケライ」左傳昭九年に「虐其ーー」

【輿人】衆人なり、左傳僖二十八年に「聽ーー之謀」

また「コシ」を作る工人なり、次條を見よ、

【輿人輿ヲ成ス、則チ人ノ富貴ナランヿヲ欲ス】（輿人成輿、則欲人之富貴）韓非子の語なり、下に「匠人成棺、則欲人之夭死、非輿人仁而匠人之賊也、不貴則輿不售、人不死則棺不買」とあり、輿人はクルマダイク

【豫章】西漢以後隋に至るまでの郡名、今の江西南昌府南昌縣治これなり、

また木の名、和名「クスノキ」漢書王符傳の註に「ーーハ樟木ナリ」本草に「李時珍曰ク、ーーハ乃チ二木ノ名一類ニシテ二種、顏師古曰ク、豫ハ卽チ枕木、章ハ卽チ

梓木、豫ハ乃チ所謂釣樟トイフ者ナリ、根ハ烏藥ニ似テ香シ、故ニ又烏樟ト名ツク」群芳譜に「樟樹高丈餘小葉似楠而尖長、背有黄赤茸毛、四時不凋、夏開細花、結小子、肌理膩有文、故名樟、可雕刻、氣甚芬烈、大者數抱、西南處處山谷有之、可爲居室器物、又可製船」

【豫讓】 晉の人なり、もと范中行氏に仕ふ、後、去りて、智伯に事へ、寵用せらる、智伯、趙襄子の爲に殺さるるに及び、遁れて、山中に入り、歎じて曰く、「士爲知己者死云云、今智伯知我、我必爲報讐而死」と、これより形を變じて、しばしば、襄子を窺ふ、しかも、常に遂げず、襄子も、又、その志を憐みて、これを釋せり、豫讓、身を漆して厲と爲り、炭を呑みて啞となり、以て之を窺ふ、襄子、人をして、謂はしめて曰く、子、智伯の爲めに苦むこと至れり、われの子を釋すと、また至れり、子なほ志を棄てずば、われまた子を釋さじと、遂に兵をやりてこれを圍む、讓曰く「臣聞、明主不掩人之美、而忠臣有死名之義、前君已寬赦臣、天下莫不稱君之賢、今日之事、臣固伏誅、然願請君之衣而擊之焉、以致報讐之意、則雖死不恨」と、襄子その志を義とし、使をして衣を持して、讓に與へしむ、豫讓劍を拔いて、三たび躍りてこれを擊ち、遂に伏して死す、世、皆これを稱す、事は戰國策、及、史記刺客傳に詳なり、

【餘胥】 「コモノ」說苑に「憎其人者、惡其ーー」類書纂要に「ーーハ童僕ナリ」餘須に同じ、古雋考略に「須ハ胥ニ同ジ、ーーハ婢僕ナリ」

【礜石】 砒石の一名、山中岩石の間より出づる礦物、極めて毒あり、俗に砒霜石といふ、

【餘喘】 喘は氣息の疾きこと「アヘグ」ーーは絕えなんとする「イキ」また死せんとする命をいふ、隋書に「殆及ーー、薄言胸臆」殘喘に同じ、

【輿臺】 猶ほ僕隸といふが如し、左傳昭七年に「無宇曰、人有十等、下所以事上、上所以共神也、故王臣公、公臣大夫、大夫臣士、士臣皁、皁臣輿、輿臣隸、隸臣僚、僚臣僕、僕臣臺、馬有圉、牛有牧、以待百事」

【輿儓】 「シモベ」また「コシカキ」儓は臺に同じ、前條を見よ、

【餘桃】 韓非子說難に「昔者彌子瑕、衞ノ君ニ寵アリ、君ト果園ニ遊ビ、桃ヲ食シテ甘カリケレバ、ソノ半ヲ以テ君ニ啖ハス、君曰ク、忠ナルカナ、ソノ口ヲ忘レテ寡人ニ啖ハシムト、後、彌子瑕色衰ヘ、愛弛ムニ及ビ、罪ヲ君ニ得タリ、君曰ク、コレカツテ我レニ食ハシムルニ餘桃ヲ以テセリト」

【涎ヲ垂ル】 （垂涎）食を欲する意なり、賈誼新書に「ーー相告」

【涎ヲ流ス】 （流涎）飲食の慾のきはめて切なる義、杜甫の飲中八仙歌に「汝陽三斗始朝天、道逢麴車口ーー、恨不移封向酒泉」

【輿地】 史記の三王世家に「臣請フ、史官ヲシテ吉日ヲ擇ビ、禮義ヲ具ヘテ上ツリ、御史ニーーノ圖ヲ奏セシメン」とありて、索隱に「地ヲ謂ヒテ輿トスルハ、天地ニ覆載ノ德アリ、故ニ天ヲ謂ヒテ蓋ト爲シ、地ヲ謂ヒテ輿ト爲ス、故ニ地圖ヲーーノ圖ト稱ス」この解は淮南子原道訓にも見ゆ、南史顧野王傳に「撰ーー志三十卷」

【淤泥】 「ドロ」「ヌカルミ」周茂叔の愛蓮說に「出ーー而不染、濯淸漣而不妖」

【豫定】 「アラカジメ」定むる、後漢書中屠剛傳に「廊廟之計、既不ーー、動軍發衆、又不深料」

【世ト推移ス】 （與世推移）時勢に伴ひて逆ふことなきをいふ、楚辭に「聖人者不凝滯於物、ーーーー」

【世ニ卽ク】 （卽世）人の死をいふ、國語に「闔閭ーー」

【世ニ就ク】 （就世）死するをいふ、國語に「先人ーー」卽世に同じ、古雋考略に「ーーハ猶ホ去世トイフ如シ」

【世ノ政ノ正シカラヌヲ厭ヒテ、ナガク首陽ノ雲ニ入ル】 十訓抄第二に見ゆ、史記の伯夷傳に「伯夷叔齊ハ孤竹君ノ二子ナリ（中略）武王ノ紂ヲ伐ツ、伯夷叔齊馬ヲ叩ヘテ諫メテ曰ク、父死シテ葬ラズ、爰ニ干戈ニ及ブ、孝ト謂フベケンヤ、臣ヲ以テ君ヲ弑ス、仁トイフベケンヤト、左右之ヲ兵セント欲ス、太公曰ク、コレ義人ナリト、扶ケテ之ヲ去ラシム、武王已ニ殷ノ亂ヲ平ゲ、天下之ヲ宗トス、伯夷叔齊之ヲ恥ヂ、義周ノ粟ヲ食ハズ、首陽山ニ隱レ（中略）遂ニ餓死ス」首陽山は馬融曰く「河東ノ蒲阪華山ノ北河曲ノ中ニ在リ」と、戴延之の西征記には「洛陽ノ東北首陽ニ夷齊ノ祠アリ今ハ偃師縣ノ西北ニ在リ」と、この他首陽山につきては諸說ありて一定せず、

【餘波】 「ナゴリ」餘れる水をいふ、書經禹貢に「導弱水、至于合黎、ーー入于流沙」

【齒ヲ沒ス】 （齒ヲ沒ス）を見よ、

【預備】 事の生ぜざる前に「アラカジメ」備をする義、漢書に「邊兵預爲備」預は豫に同じ、

【蓬麻中ニ生ズレバ扶ケズシテ直シ】 （蓬生麻中不扶而直）荀子勸學篇に見ゆ、善人に交れば、己も亦善

人となること、蓬（ヨモギ）の性は曲れる者なれども、麻の中に生ずれば、自然に麻に挟まれて、直くなるが如しとの義、說苑の說叢篇に「鏡以清明、美惡自服、衡平無私、輕重自得、蓬生枲中、不扶自直、白沙入泥、與之皆黑」とあるも同じ、大戴禮曾子制言篇に「ーーー、ーー、ーーーー、白沙在泥、與之皆黑」とあり（蓬麻中ニ）を參看せよ、

【夜以テ日ニ繼グ】（夜以繼日）夜を日につぎて行ふ義、莊子に「貴者ーーーー、思慮善否」また淮南子に「陳酒行觴、ーーーー」

【餘裕】「ユツタリ」として迫らざる義、詩經小雅角弓篇に「此令兄弟、綽綽有裕」の註に「裕ハ饒（ゆたか）ナリ」とあり（綽綽トシテ）を見よ、

【餘勇ヲ賈ヘ】（賈餘勇）勇氣餘りありて、賣らんことを欲するをいふ、左傳成二年に「欲勇者、賈余餘勇」

【與與】威儀中適の貌、論語鄕黨篇に「君在踧踖如也、ーー如也」

【世〻其ノ美ヲ濟ス】（世濟其美）後人が前人の美を成すをいふ、史記五帝紀に「此十六族者、ーーーー、不隕其名」とあるに本づく、左傳文十八年に「此三族也、世〻濟其凶、增其惡名」とあるは、義全く反せり、

【餘力】餘暇をいふ、論語學而篇に「行有ーー、則以學文」

【夜營ヲ祈ル】（夜祈營）「ヨウチ」通鑑の北魏紀に「傳永曰、南人好ーー」

【轝隷】「ノリモノカキ」徐禎卿異林に「亟呼家人設酒勞ーー」扛夫・轎兒皆同じ、

【餘瀝】「アマリ」の「シヅク」杯の酒を飲み盡したる餘滴などをいふ、史記滑稽傳に「時賜ーー」

【餘烈】餘威に同じ、賈誼の過秦論に「奮六世之ーー」また餘毒の義とす、漢書公孫弘傳に「若湯之旱、則桀之ーー也」

【輿論】類書纂要に「ーートハ、輿ハ衆ナリ衆人ノ議論ヲイフナリ」左傳僖二十八年に「晉文公聽輿人之謀」

ラ

【羅衣】「ウスギヌ」の美しき「キモノ」後漢書邊讓傳章華賦に「ーー飄颻、組綺繽紛」

【羅帷】羅にて製せし、美しき「タレギヌ」帷は横に引き張りて圍となす「ヒキマク」說苑に「居則廣廈邃房、下ーー、來淸風、倡優侏儒、處前迭進、而諂諛」王維の班婕妤詩に「秋夜守ーー、孤燈耿不滅」次條に同じ、

【羅幃】美しき「ウスギヌ」の「トバリ」羅にて製せし「タレギヌ」なり、盧照隣の長安古意に「雙燕雙飛繞畫梁、ーー翠被鬱金香」

【來迎】迎は漢音ケイ佛書にてはカウと讀む、佛の靈の現はれて來り迎ふるをいふ、五會法事讚に「但有稱名皆得往、觀音勢至自ーー」

【來儀】鳥の來り舞ひて、儀容あるをいふ、書經益稷篇に「簫韶九成、鳳凰ーー」

【雷義】後漢の人、字は仲公、豫章鄱陽の人なり、陳重と友たり、順帝の朝、茂才に擧げられ、重に讓る、刺史聽かず、義遂に命に應ぜず、後ち同じく孝廉に擧げられ、同じく尙書郞に拜す、時に語して曰く「膠漆雖堅、不如雷與陳」と、初め郡の功曹と爲り、善人を擢擧し、その功に伐らず、義嘗て人の死罪を濟ふ、罪者後ち金二斤を以て謝す、受けず、金主義の在らざるを伺ひ、默して金を承塵上に投ず、後ち屋宇を葺理し、乃ち之を得たり、金主已に死し復還す所ろなし、乃ち以て縣曹に付す、

【禮記】周代の禮書に、周禮・儀禮及び禮記の三あり、周禮儀禮の二書の原本は、共に周公の作なりと傳ふ、蓋し周禮は禮の綱領たるべきものにして、その儀法度數は、則ち儀禮を本經となすべく、禮記は、その義疏の如きものなり、さて禮記は、孔子の門人及び後儒の記する所ろ、その文純駁一ならず、一一必ずしも信を措き難し、十三經に列するは、鄭玄の注、孔穎達の正義なり、また元の陳澔の集說あり、五經に列す、書中の器服の制を知らんには、宋の聶崇義の三禮圖を見るべし、三禮義疏にも亦各〻圖あり、物徂徠曰く、「禮ハ、天下萬事ノ儀式也、コレヲ學ブハ、今ノ人ノ吉良小笠原ナドノ諸禮故實ヲ習フガ如シ、書籍ヲ讀ムニモ及バズ、只其ノ所作ヲ習フヲ以テ主トス、禮記ハ其諸禮ノ次第書ナリ、秦漢以後ハ、古ノ禮經亡ビテ、

儀ニノコルトコロ儀禮・周禮・禮記・大戴禮ナリ、儀禮ハ古ノ禮經ノ殘篇ニテ、經禮三百ノ數ノ中ナリ、周禮ハ周代ノ官職ヲ記ス、禮記ト大戴禮トハ、孔子ノ時、門人ト禮ヲ講ジ給ヘルヲ記錄シテ傳ヘタルナリ、漢ノ世ニ及ビテ、戴氏ノ家ヨリ傳ヘシ故ニ、戴記ト稱ス、コレ等ノ禮書ヲ熟讀シテ、古禮ハ此ノヤウナ者ト知リテ、今ノ世ノ俗禮ノ是非ヲ考ヘ、人ニ高ブラズ、謙退シ、身ヲヒカヘ目ニ行ヒ、容儀ノシダラクナラザルヤウニ行フベシ、經解篇ニ、恭儉莊敬禮之敎也トアルハ是ナリ、孝經ニ安上治民莫善於禮トイヒ、左傳ニ禮者經國家定社稷序民人利後嗣者也ト云ヘリ、禮ニ五禮アリ、一曰、吉禮、二曰凶禮、三曰賓禮、四曰軍禮、五曰嘉禮ナリ、吉禮ハ祭祀ノ禮也、凶禮ハ喪紀ノ禮也、賓禮ハ賓客ノ禮也、軍禮ハ軍旅ノ禮也、嘉禮ハ冠禮トテ、元服ノ禮、婚禮トテ婦ヲ娶ル禮ナドヲ嘉禮ト云フ、コノ外ニ、古ハ鄕飮酒禮トテ鄕黨ノ人ニ酒ヲ飮マシムル禮、士相見禮トテ士ト大夫ト相見スル禮アリ、冠婚喪祭ノ四ツハ、天子ヨリ庶人マデアル禮ナリ、コレニ鄕飮酒士相見ノ二禮ヲ加ヘテ六禮ト稱ス、コレヲバ經禮ト云ヒテ、三百餘條ノ定マレル儀式アリ、又各小節目ガアリテ、三千餘條ノ定マレル條目アリテ、此ヲ曲禮ト云フ、悉ク師ニ就テ習ハザレバ行フヿ能ハズ、孔子ノ聖智スラ、老子ニ問ヒ學ビ給ヘリ、今ノ世ノ俗禮サヘモ、次第書バカリヲ見テ、傳授ヲ受ケネバ其ノ事行ハレズ、況ヤ先王ノ禮ハ、學バズシテ知ル可カラズ、サレ𪜈古禮ヲ傳ヘ記スト雖モ、指訣ガ絕エタレバ、悉ク知ルベカラズ、只儀禮周禮禮記ナドヲヨクヨク熟讀シ、文ノ簡ニシテ辨ジ難キハ、シバラク鄭玄ガ注ニ從ヒ、或ハ孔穎達ガ疏ニ考ヘ、左傳管子孟子荀子論語家語ナドノ書ニ、古禮ノ文雜見セリ、古書ニ考ヘテ領解ス可シ、禮義ト連用シ、禮義アルハ人ニ魂ノアルガ如シ、禮運ニ、禮也者、義之實也ト云ヘリ、先王ノ道ハ人ノ必ズ爲ベキヿト、又爲マジキヿトヲ定メ置ル、コレヲ義ト云フ、其ノ辯ハ、クハシク予、辨名ニ論ジタレハ、今ハ略ス、唯禮ハ、人ノ行ヲ主トシテ敎フル者ナリ、莊子ニ禮以道行トアリ、宋儒ガ禮ヲ說クハ、老女ノ小娘ヲシツケル如キヿニテ、瑣瑣碎碎タルヿナリ、禮ハ國之幹也ト左傳ニ出タリ、國家ニ於テ肝要ナルヿハ禮也ト云フヿナリ、禮記ノ新注、二禮ノ集注ハ、寺子屋ノ師匠ガ鼻タレ子ニ指授スル如キヿノミヲ云ヒテ、古禮ノ旨ヲ得ズ、文ノ義解モ皆畔岸セリ、先ヅ鄭氏ニ從ヒテ姸精ス可シ、禮樂トテ歌舞管弦ノ藝ヲ樂ト云フ、樂師ニ就キテ之ヲ學ブ、コレモ書籍ヲ讀ムニ及バズ、譜ト云フモノヲ書キツケテ傳授スル、其ノ書ヲ樂經トモ樂業トモ云フ、其ノ書今ハ亡ビテ傳ハラズ、唯禮記ノ中ニ樂記一篇殘レリ、惜ム可シ、樂律ノ委シキヿハ、予別ニ樂制樂律ノ二書ヲ著編シ、又樂語瑣言ニ論ジタレバ、今ハ略ス、樸要ト考互スヘシ、

【來享】 享は獻なり、來朝して物を獻ずる義、詩經に「莫敢不一一」

【磊嵬】 大いにして高し、韓愈の句に「隆樓傑閣一一高」

【雷煥】 李發玉の寶劍詩に「一一豐域掘劍池、年深事遂跡依稀」（張華）を見よ、

【雷擊牆壓】 刑罰の威勢は、雷の擊つ如く、牆垣の壓する如きをいふ、韓詩外傳に「鬪如雷擊之如牆壓之」

【雷鼓】 八面の「タイコ」周禮鼓人の注に見ゆ、一說に六面の「タイコ」周禮大司樂、司農の注に「一一雷鼓ハ皆六面ニ革アリ、擊ツベキ者ヲ謂フナリ」
また雷聲をいふ、朱慶餘の觀濤詩に「鮮飈出海魚龍氣、晴雪噴山一一聲」

【雷公】 雷神をいふ、皮日休の吳中苦雨詩に「一一恣其志、磯礡裂電目」
また黃巾の賊の大聲なる者の稱、後漢書朱儁傳に見ゆ、

【雷吼】 雷が「ホエル」瀑布などの響に喩ふ、劉峻東陽金華山棲志に「躍流澋濆、奔湧決咽、電擊一一、駭目驚魂」張九齡の望廬山瀑布詩に「一一何噴薄、箭馳入窈窕」

【耒耜】 耜は「スキ」の「サキ」の「カネ」の所をいひ、耒は柄をいふ、禮記の月令に「天子親載一一」說文に「耒ハ耕ス曲木ナリ」孟子の滕文公上の集註に「耜ハ土ヲ起ス所以、耒ハソノ柄ナリ」

【來茲】 來年なり、呂氏春秋に「今茲美禾、一一美麥」古詩に「爲樂當及時、何能待一一」

【雷神】 雷の神なり、宋史の禮志及び山海經大荒東經の注に見ゆ、雷獸に同じ、

【雷車】 「カミナリ」車の轟くに喩へていふ、陸游の喜雨詩に「一一隆隆南山陽、電光煜煜北斗傍」

【來者拒マズ】 （來ル者ハ、拒マズ）公羊傳隱二年の注に「王者不治夷狄、錄戎者、來者勿拒、去者勿追」來るも、去るも、その自由に任かすをいふ、蘇軾の王者不治

爽狄論にはこの注文を引きて兩の勿を不に作る、

【來者猶ホ追フ可シ】 過去の事は致し方なけれど、今眼前に來りたる事は尙ほ追ひて返すことを得べしとの義、論語微子篇に「楚狂接輿、歌而過孔子曰、鳳兮鳳兮、何德之衰、往者不可諫、來者猶可追云云」陶淵明の歸去來辭に「悟已往之不諫、知來者可追」とあるは、此に本づく、

【來蘇】 仁君が、この地に來りて、人民蘇生する義、書經に「徯我后、后來其蘇」

【來孫】 玄孫（ヒマゴノ子）の子をいふ、四代の孫なり、爾雅に「――此在無服之外」また同書の「玄孫之子爲來孫」この註に「言有往來之親」釋名釋親屬に「玄孫之子曰――、此在無服之外、其意疎遠、呼之乃來也」

【雷尊】 雲雷の「モヤツ」をゑりたる「サカダル」論衡語增篇に「――刻畫雲雷之形」

【罍尊】 罍は雲雷の形を「エガケル」「サカダル」禮記の禮器に「廟堂之上、――在阼、犧尊在西」

【雷澤】 史記三王本紀に「太皞庖犧氏、風姓代燧人氏繼天而王、母曰華胥、履大人跡而生庖犧於成紀」注に「――ハ澤名、卽舜所漁之地」また五帝紀に「舜耕歷山、歷山之人、皆讓畔、漁雷澤、雷澤之人、皆讓居」明一統志に「――城在東昌府濮州東南一百里、舊曰城陽、云云」

【雷陳膠漆】 友誼の極めて厚きをいふ、後漢獨行傳に「雷義茂才ニ擧ゲラル、陳重ニ讓ル、刺史聽カズ、義遂ニ佯狂被髮シ、走リテ命ニ應ゼズ、鄕里之ガ語ヲ爲シテ曰ク「膠漆自爲堅、不如雷與陳」」

【來庭】 來朝に同じ、諸侯の來朝するをいふ、詩經に「徐方――」

【雷霆】 「カミナリ」易の繫辭傳に「鼓之以――」說文に「霆ハ雷ノ餘聲ナリ」轉じて威光の猛烈なるに喩へていふ、至言に「――之所擊、無不摧折者、萬鈞之所壓、無不糜滅者」韋莊の秋日感事詩に「氣激――怒、神驅嶽瀆忙」

【雷電】 易の頤卦象傳に「――合而章」莊子に「陰氣重泉ニ伏シ、陽ハ上天ニ通ズ、陰陽分レ爭フ、故ニ電トナル、聲アルヲ雷トイヒ、聲ナキヲ電トイフ」淮南子に「陰陽相薄リ、感ジテ雷トナリ、激シテ電トナル」河圖帝紀通に「雷ハ天地ノ鼓ナリ」揚雄の賦に「霹靂列缺吐火施鞭」の注に「列缺ハ電ナリ」徐堅の詩に「聲鼓喧――、戈劒凜風霜」

【來同】 來り集る義、詩經閟宮に「淮夷――」張九齡の詩に「四時禋祀、萬國――」

【雷同】 雷の聲を發して、物の同じく應ずるが如く、人の言を聞きて、善惡の差別なく之に附和するをいふ、禮記の曲禮に「毋剿說、毋――」楚辭に「世――而炫燿兮」杜甫の前出塞詩に「衆人貴苟得、欲語羞雷同」後漢書桓譚傳の注に「雷ノ聲ヲ發スル、衆物同ジク應ズ、俗人是非ノ心ナク、言ヲ出シテ同スル者、之ヲ――ト謂フ」

【騋馬】 七尺以上の馬、周禮庾人の傳に「馬八尺以上爲龍、七尺以上爲騋、六尺以上爲馬」詩經釋文には「――六尺以上也」

【萊菔】 「ダイコン」蘿蔔をいふ、埤雅に「――能制麪毒」本草に「――一名紫花菘、――乃根名、上古謂之蘆萉、中古轉爲――、後世訛爲蘿蔔、生沙壤者脆而甘、生瘠地者堅而辣」

【雷鞭】 故事成語考に「閃電號シテ――トイフ」註に「電ハ電光ナリ雷將ニ震セントスレバ則チ光ヲ掣スル蛇ノ如シ故ニ――ト號ス」

【雷奔】 「ハゲシク、ハシル」班固の西都賦に「――電激」李群玉の競渡詩に「――電逝三千兒、彩舟畫檝射初暉」水流の急なるにもいふ、

【雷萬春】 唐の人、張巡に事へて偏將となる、令狐潮の雍丘を圍むや、萬春城上に立ち、潮と語り、伏弩發して六矢面に著くも、萬春動かず、潮、刻木の人ならんと疑ふ、諜してその實を得、乃ち驚きて遙に巡に謂ひて曰く、向に雷將軍を見て、君の令の嚴なるを知ると、

【羅隱】 字は昭諫、唐の錢塘の人、詩に工に、尤も詠史に長ず、湘南雜藁あり、錢鏐辟して從事節度判官副使となす、嘗て鏐に朱溫を討たんことをすすめて曰く、縱ひ功を成す無きも、猶ほ退いて杭越を保つべし、奈何ぞ臂を交へ賊に事へて終古の羞を爲さんやと、著す所ろ、江南甲乙集等あり、弟の鄴、亦詩を以て名あり、

【雷鳴】 雷が鳴る、屈原卜居に「黃鐘毀棄、瓦釜――」また「イビキ」などの「ハゲシキ」にも喩ふ、陸游の美睡詩に「漫道布衾如鐵冷、未妨鼻息似――」

【耒陽】 地名、漢書地理志に「桂陽郡縣――」注に「耒水ノ陽ニ在リ」唐書杜甫傳に「大曆中、出瞿塘、下江陵、泝沅湘、以登衡山、因客――、游嶽祠、大水遽至、涉旬不得食、縣令具舟迎之、乃得還、令嘗饋牛炙白酒、大醉一昔卒」

【磊砢】小石の衆くある貌、司馬相如の上林賦に「水玉ーー」磊は磥に同じ、
また物の卓然として特出する貌、文選王延壽の魯靈光殿賦に「萬楹叢倚、ーー相扶」正字通に「人性體卓特者、亦曰ーー」次條に同じ、

【磥砢】磥は磊に作る同じ、小石の衆き貌、晉書和嶠傳に「嶠森森如千丈之松、雖ーー多節目、施之大廈、有棟梁之用」一解に物の卓然として特出するをいふ、

【磊磊】礧礧に同じ、石のゴロゴロと聚まる貌、楚辭に「石ーー兮葛蔓蔓」
また人物などの細事に「カカハラザル」氣風あるにもいふ、磊一に礧に作る、同じ、晉書石勒載記に「大丈夫行事、當ーー落落、如日月皎然」

【礧礧】前條を見よ、

【磊落】胸の大いに「ウチヒラケタル」貌、前條を見よ、
また北史の李謐傳に「醉氣磊落、觀者忘疲」
また果實の多く實れる貌、潘岳の閑居賦に「石榴蒲桃之珍、ーー蔓衍乎其側」

【來歷】由りて來る所ろなり、黃山谷集に「杜詩韓文無一字沒ーー」

【來王】四夷の君長嗣ぎて立ちて王となれば、來りて天子に見ゆるをいふ、詩經商頌に「莫敢不ーー」註に「世見曰王」とあり、一世に一度天子に見ゆる義、また書經に「無怠無荒、四夷ーー」

【老】左傳隱四年に「石碏曰、老夫耄矣、無能爲也」また「余髮如此種種、余奚能爲」同昭元年に「諺所謂老將至而耄及之」孟子に「班白者不負戴於道路」詩經の閟宮に「黃髮兒齒」同行葦に「黃耇台背」列子に「槁項黃馘」柳文に「龐眉鶴髮」韓文に「頭童齒豁」庾信の竹林賦に「鶴髮雞皮」潘岳の賦に「始見二毛」文選に「桑榆之景、理無遠照」李密の表に「日薄西山、氣息奄奄」歐文に「晻曖暮景」文選に「少壯不努力、老大徒傷悲」鄭谷の詩に「衰鬢霜供白、愁顏酒借紅」杜甫の詩に「白髮千莖雪、丹心一寸灰」また「白首壯心違」嚴武の詩に「龍鍾二千石」

【老友】老年の友、宋史蔡元定傳に「此吾ーー也」

【浪遊】「ブラブラ」と遊ぶ、杜牧の詩に「堪恨王孫ーー去、落英狼籍始歸來」

【朗詠】「ホガラカ」に「ウタフ」をいふ、文選の孫綽の遊天台山賦に「ーー長川」

【狼煙】烽火（ノロシ）なり、埤雅に「古ノ烽火ハ狼糞ヲ用フ、ソノ直クシテ聚リ、風之ヲ吹クト雖モ、斜ナラザルニ取ル」また、酉陽雜俎に「虜至レバ必ズ狼煙ヲ舉グ」我國にては艾蒿生柴を用ふる由、軍防令に見ゆ、

【老革】老兵に同じ、隋煬帝、蘇威を罵りて曰く「ーー多奸」

【老學菴筆記】十卷、續筆記二卷、宋の陸游（放翁）撰す、己が見聞五百八十條を錄す、文藝を考訂するもの多し、子類の雜家に入る、

【琅玕】美石の珠に似たる者、書經の禹貢に「雍州厥貢惟球琳ーー」傳に「球琳皆玉名、ーー石而似珠」一名は青珠、爾雅に「西北之美者、有崑崙虛之璆琳ーー」焉

【老牛舐犢ノ愛】己が子を愛するを謙していふ、事類全書に「後漢ノ楊彪、位大尉ニ至レリ、彪漢祚ノ將ニ終ラントスルヲ見テ、脚攣ト稱シテ復タ行カズ、十年ヲ積メリ、後ニ子ノ脩、曹操ノ爲メニ殺サル、操、彪ヲ見テ問ヒテ曰ク、公何ゾ痩セタルノ甚シキヤト、答ヘテ曰ク、悔ユラクハ日磾カ先見ノ明ナキコトヲ、猶ホ老牛舐犢ノ愛ヲ懷クト、操爲メニ容ヲ改ム」犢は「コウシ」世說の註に「前漢ノ金日磾ガ子二人、武帝ノ愛スル所ロ、以テ弄兒ト爲ス、其ノ後弄兒壯大謹マズ、宮人ト戯ル、日磾適之ヲ見、其ノ淫亂ヲ惡ンデ、遂ニ弄兒ヲ殺ス」

【老驥伏櫪】有爲の人の、晩年に至りても尚ほ不遇なるに喩ふ、櫪は廐の「ネダ」魏武帝樂歌に「神龜雖壽、猶有竟時、騰蛇成霧、終爲土灰、ーーーー、志在千里、烈士暮年、壯心未已、盈縮之期、不獨在天、養怡之福、可以永年、幸甚至哉、歌以詠志」世說に「王敦每醉後以鐵如意敲唾壺、歌此歌」とあり、

【郎君】「ワカダンナ」貴公子をいふ、通鑑晉紀の註に「今世俗多呼其主爲郎主、又呼其主之子爲ーー」また唐の世、新に進士となりし者をいふ、摭言に「薛逢策羸馬赴朝、値新進士、前導曰、廻避新ーー」

【郎君子】貝の名「スガヒ」相思子、また相思螺ともいふ、

【浪花】「ナミ」の「ハナ」梁簡文帝吳都石像碑に「雲舒蓋而未移、浪開花而不噴」杜甫の望兜率寺詩に「霏霏雲氣重、閃閃ーー翻」徐鉉の登甘露寺北望詩に「京口潮來曲岸平、海門風起ーー生」

【狼虎】「オホカミ」と「トラ」と、以て無道にして他を害する者に喩ふ、漢書趙皇后傳に「失婦道無供養之禮而有ーー之毒」

【狼顧】狼の性は、怯にして去るとき常に反顧するを

いふ、戰國策に「秦雖欲深入、則――恐韓魏之議其後也」また漢書食貨志に「失時不雨、民且――」とあるは、民、天の雨ふらざるを見て、狼の願み望むが如く、恐るるをいふ、

また身は正しく前に向ひ、頭、後に向ふをいふ、人相の上に用ふ、晉書宣帝紀に「聞有――之相、欲驗之、乃召使前行、令反顧、面正向後而身不動」

【老子】周の楚の苦縣の人、姓は李、名は耳、字は伯陽、また曰く――の字は聃、道德經五千餘言を著す、今傳ふる老子二卷是なり、此の書の註解は、韓非子の解老以下極めて多し、焦竑が老子翼註に、收むる所ろ、六十四家の多きに至れり、此の書本旨專ら虛無に歸著す、故に淸淨自然を尙びて無爲默化せんことを欲す、

【浪子】「ミダラ」なる男、宋史李邦彥傳に「邦彥俊爽、美風姿、爲文敏而工、然生長閭閻、習猥鄙事、應對便捷、善謳謔、能蹴踘、每綴街市俚語、爲辭曲、人爭傳之、自號李――」

【浪死】「イヌジニ」通鑑隋紀に「王薄作無向遼東――歌」註に「――ハ猶ホ徒死ノ如キナリ」

【郞士元】字は君胄、唐の中山の人、天寶の進士、累官して右拾遺に至り卒す、錢起と詩名を齊うす、集一卷あり、

【勞シテ怨ミズ】（勞而不怨）論語堯曰篇に「子張問於孔子曰、何如斯可以從政矣、子曰、尊五美、屛四惡、斯可以從政矣、子張曰、何謂五美、子曰、君子惠而不費、――、欲而不貪、泰而不驕、威而不猛」民を勞使すれども、怨まざるは、勞すべき事を擇びて之を勞使すればなり、

【勞シテ功ナシ】（勞而無功）骨折りのみして、その益なきをいふ、管子形勢篇に「彊不能、告不知、謂之――」また荀子正名篇にも「甚――」とあり、

【老子ノ圖】書言故事に「賀壽曰、敢以老子出關圖爲獻、錢穆父、天府（穆父は開封府尹たり、宋開封に都す、故に天府と稱す）ニ尹タリシ時、生日ニ楊次公、老子出關圖ヲ畫キ、詩ヲ作リ以テ獻ジテ曰ク、祕藏函谷關中子（老子函谷關を度る、故にいふ）來獻蓬萊閣上仙（老子は乃ち蓬萊山上の仙人なりとの意）願得鬢眉如此老、却敎龜鶴羨長年」

【狼子野心】狼の子は、心、山野に在り、之を養ふときは、人を害するを云ふ（野心）を見よ、

【老手】詩文を作るに老練なる手筆をいふ、蘇軾の詩に「――王摩詰、窮交孟浩然」

【浪職】職務を「ミダリ」にする、孫樵の與高錫望書に「尸位――、雖貴必黜」

【老成】老練巧妙の義、杜甫の詩に「毫髮無遺憾、波瀾獨――」

【老成人】老功をいふ、左思の吳都賦に「岐嶷繼體、老成奕世」とあり、また舊臣をいふ、詩經大雅蕩篇に「雖無――、尙有典刑」この註に「――ハ、舊臣ナリ、典刑ハ舊法ナリ」蘇洵の管仲論に「其君雖不肖、而尙有――」

【老小】老人と小兒と、孟子梁惠王下の「反其旄倪」の趙岐注に「王先ヅ其ノ――ヲ還スナリ」とあり、後漢書周舉傳に「冬中一月、莫敢烟爨、――不堪」

【老少年】群芳譜に「――一名ハ雁來紅トイフ、マタ紅紫黃綠相雜ヌル者ヲ十樣錦ト名ヅク」

【狼藉】紛亂の意なり、狼、草を藉きて臥す、去ればその跡穢れ亂る「サマ」をいふ、史記滑稽傳に「履舃交錯、杯盤――」集韻には「藉ハモト躪フム」ノ義ナリ」と、籍、耤通ず、

【浪仙】唐の賈島の字（賈島）を見よ、

【浪戰】「ミダリ」に戰ふ「メッタ、イクサ」通鑑唐紀に「――爲下策」

【老大悲ム】古詩に「少壯不努力、老大徒傷悲」

【郞當】「クタビレル」疲勞の俗語、俗呼小錄に「人ノ痾敗シ、及ビ身ノ病ミテ摧靡スル者ヲ――トイフ」

【琅當】長き鎖なり、人を禁じ繫ぐもの、一に銀鐺に作る、漢書西域傳に「陰末赴、鎖――德」陰末赴は、罽賓國の王の名、德は趙德、また王莽傳に「以鐵鎖――其頸」

【勞動】體を動して疲るる義、三國志華陀傳に「人體欲得――」

【潦倒】蘊藉の貌、北魏書崔瞻傳に「魏天保以後、重吏事、謂容止蘊藉者、爲――、瞻終不改」また老龐の義、嵇康の絕交書に「足下舊知、吾――麤疏不切事情」（龍鍾――）を見よ、

【老衲】衲は僧衣なり、智度論に「應著衲衣」轉じて僧侶の稱とす、――は老僧に同じ、戴叔倫の句に「――供茶盌」

【浪人】一定せる職業もなく流浪せる人をいふ、柳宗元の李赤傳に「李赤江湖――也」蘇軾の詩に「我本放浪人、家寄西南坤」

【老農】年老いたる「ヒャクシャウ」論語子路篇に「樊遲請學稼、子曰、吾不如――、請學爲圃、曰、吾

不如老圃」五穀を種うるを稼といい、蔬菜を種うるを圃といふ、

【狼狽】狽は狼の屬なり、子を生む、一足を缺きて三足の者あり、相附きて行く、離るるときは、則ち顚（コロゲル）ず、故に「アハテル」義に用ふ、荀悦の漢紀論に「周勃狼狽失據」とあり、通文釋義には「狼前二足長、後二足短、狽前二足短、後二足長、狼無狽不立、狽無狼不存、若相離、則進退不得矣」

【老耄】禮記の曲禮に「七十ヲ老トイヒ、八十九十ヲ耄トイフ」とあり、註に「耄ハ惛忘ナリ」國語に「爾ーー矣何知」

【老蚌珠ヲ生ズ】（老蚌生珠）書言故事に「人ノ父子俱ニ美ナルヲ言ヒテ、老蚌生珠トイフ、後漢ノ韋元將、弟ヲ仲將トイフ、孔融其ノ父端ニ書ヲ與ヘテ曰ク、前日元將來ル、淵才亮茂、雅度弘毅、濟世ノ器ナリ、昨日仲將來ル、文敏篤誠、保家ノ主ナリ、意ハザリキ雙珠、近ク老蚌ニ出デントハト」元將は康の字、仲將は、誕の字、この事、三輔決錄に出づ、この故事によりて、晩年に「ヨキ」子を生む義にも用ふ、蚌は蜃の屬にて溝渠などに生ず「ドブガヒ」また北齊書の陸卬傳に「邢劭謂其父曰、吾以卿老蚌遂出明珠」

【老博士】北齊書高昂傳に「其父爲求嚴師、令加捶撻、昂不遵師訓、專事馳騁、每言男兒橫行天下、當自取富貴、誰能端坐讀書、作ーーー」

【老婆心】人の爲めに意を用ふる事の甚しく切なるをいふ、傳燈錄に「汝廻太速生、師云祇爲老婆心切」畧しては婆心といふ、

【老馬之智】韓非子說林に「管仲隰朋從於桓公而伐孤竹、春往冬反、迷惑失道、管仲曰、ーーーー可用也、乃放老馬而隨之、遂得道」

【浪費】「ムダ」に金錢を使ふ、楊萬里の詩に「賜金莫ーー」

【廊廡】廊は「ワタドノ」殿の母屋につづきたる「ヒサシ」の下、廡は「ヒサシ」漢書に「陳賜金ーー下」錢假の宮中作に「ーー周遭翠幕遮、禁林深處絕喧譁」

【閬風瑤池】仙人の居る境、書言故事に、仙傳を引きて「崑崙圃、閬風苑（皆仙境なり）有玉樓十二、玄室九層、左瑤池、右翠水、環以弱水九重、非飇車羽輪不可到」飇車は風車なり、羽輪は輪に羽翼あるなり、

【狼糞】「オホカミ」の「フン」酉陽雜俎に「ーー烟直上、故烽火用之」

【廊廟之器】廟堂の上に立ちて國政を執るの器をいふ、宰相の器量ある者を稱す、三國志の蜀志許靖傳に「靖夙有名譽、（中略）蔣濟以爲大較有ーーー也」廊廟とは「オモテゴテン」をいふ、史記に「賢人深謀於廊廟」愼子に「廊廟之材、非一木之枝、狐白之裘、非一狐之腋」西京雜記に「廊廟之下、朝廷之中、高文典冊用相如」

【老圃】圃は菜を「ツウル」ところ「ハタケ」を作るになれたる人、論語に「吾不如ーー」前の（老農）を見よ、

【老圃秋容】晩節の高き人を形容するに用ふ（韓琦邪曲ナシ）を見よ、

【老爺】老夫に同じ、また男子に對する敬稱として用ふ「ダンナ」

【琅邪】琅一に瑯に作り、邪一に琊また耶に作る、兩漢の郡縣名、また隋の縣名、今の山東靑州府諸城縣の東一百五十淸里、また東漢及び晉の國名（徐州ニ屬ス）なるは今の山東沂州府臨沂縣の北十五淸里、歐陽修の醉翁亭記に「環滁皆山也、其西南諸峯林壑尤美、望之蔚然而深秀者琅琊也」

【瑯琊】前條を見よ、

【牢破ル可カラズ】（牢不可破）「カタクシテ」「ヤブレズ」韓愈の平淮西碑の字面、

【勞來】來る者を慰むるをいふ、孟子滕文公上に「放勳曰、勞之來之」の註に「來者撫至者也」また來は徠に作る、同じ、漢書遊俠傳に「從賓客往至喪家、爲棺斂勞徠畢葬」とあり、註に「勞徠、謂慰勉賓客」

【老萊子】晉の皇甫謐の高士傳に「ーーーハ、楚ノ人孝ニシテ親ヲ養フ、行年七十ニシテ父母猶ホ存ス、萊子身ニ五色ノ斑爛ノ衣ヲ服シ、嬰兒ノ戲ヲ親ノ前ニ爲シ、言老ヲ稱セズ、親ノ爲メニ食ヲ取リ堂ニ上リ、詐リ跌キテ地ニ臥シ、因リテ兒啼ヲ爲シ、親ノ喜バンヿヲ欲ス」一本に「斑爛ノ衣」を斒衣に作る、斒は襤褸、小兒の衣なり、

【琅琅】玉石の聲、司馬相如の子虛賦に「礧石相擊、ーー磕磕」またすべて琴瑟吟誦等の淸き聲を形容す、蘇舜欽の句に「密樹重蘿覆水光、珍禽無數語ーー」

【牢落】「マバラ」なる義、また「サビシキ」貌、司馬相如の上林賦に「ーー陸離、爛熳遠遷」陸機の賦に「心ーー而無偶」

【老辣】年老いて志の愈〻堅きにいふ、宋史の晏敦復傳に「薑桂之性、到老愈辣」

【老羸】老いて「ヤセツカルル」說文に「羸ハ瘦ナリ」漢書に「山東吏布詔令、民雖ーー癃疾、扶杖而往聽之」

【狠戾】狠の性は、貪戾なり、故に人の貪戾なるに喩へていふ、戰國策に「趙王之ーー無親、大王之所明見知也」漢書嚴助傳に「閩越王ーー不仁」また狠籍として多きをいふ、孟子の滕文公上篇に「樂歲粒米ーー」とあるが如し、

【羅漢】(阿ーー)を見よ、

【邏騎】「モノミ」の騎兵、通鑑の五代紀に「ーー多醉」とあり、候騎に同じ、邏一に羅に作る、漢書賈山傳に見ゆ、

【羅綺】「ウスギヌ」と「アヤギヌ」魏志夏侯尙傳に「皆得服綾錦ーー紈素金銀飾鏤之物」淮南子に「有榮華者、必有憔悴、有ーー者、必有麻蒯」綺一に紈に作る(羅紈)を見よ、

【裸躬】「ハダカミ」野客叢書に「漢王嘉爲宰相、ーー受笞」

【樂】「タノシミ」快樂なり、論語述而篇に「發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至云爾」明心寶鑑に「逸出於勞而常休、樂生於憂而無厭」列子に「無樂無知、是眞樂眞知」說苑晏子の語に「樂者上下同之、上樂其樂、下傚其敎、是獨樂也、不可」(偕樂)を參看せよ、

【絡緯】「クツワムシ」の異名、沈周の詩に「豆葉風凉ーー鳴」(絡絲娘)を見よ、

【樂易】心平かに「タノシム」唐書李紓傳に「紓性ーー、喜接後進元史賈默傳に「默爲人ーー、平居未嘗許品人物」

【落英】落花に同じ、楚辭に「飡秋菊之ーー」陶潛の桃花源記に「ーー繽紛」

【絡繹】往來絶えざる貌、衞恒の四體書勢に「蔡邕作家勢、曰、遠而望之鴻鵠群游、ーー遷延」駱驛に同じ、次條を見よ、

【駱驛】往來相連りて、絶えざる貌、文選の魯靈光殿賦に「縱橫ーー、各有所趣」

【洛學】宋の程明道、程伊川兄弟の學說にて、性命理氣を主として說く、雲麓漫抄に「紹熙尙程氏、曰ーー」

【落霞孤鶩ト齊シク飛ブ】落霞は日暮に低く「タナビケル」「カスミ」をいふ、一解に飛蛾をいふと、鶩は「アヒル」水邊の晩景見る所ろをいふ、王勃の滕王閣序に「落霞與孤鶩齊飛、秋水共長天一色」

【落雁峯】馮贄の雲仙雜記に「李白登華山ーーー曰、此山最高、呼吸之氣、想通帝座矣、恨不攜謝脁驚人詩來、搔首問靑天耳」この事、詩話總龜にも見ゆ、

【落花枝ニ上リ難シ】一度落ちたる花は再びもとの枝に上る能はず、以て事の一度破れたることは再びもとの儘に復し難きに喩ふ、五燈會元に「落花難上枝、破鏡不重照」(破鏡)を參看せよ、

【落花風】花を吹き落す風、丁六娘の詩に「寄語ーーー、莫吹花落盡」杜牧の詩に「今日鬢絲禪榻畔、茶烟輕颺ーーー」

【落花ノ時節又君ニ逢フ】杜甫の江南逢李龜年の詩に「岐王宅裏尋常見、崔九堂前幾度聞、正是江南好風景、落花時節又逢君」李龜年は、善く歌ふもの、昔、京師に在りし時は、岐王の館にていつも相見たり、又崔九が堂の前にては幾度か聞きしやらん、その善歌者が、零落して江南に來り、我も亦流浪してこの地に在り、正に是れ江南の好風景、落花の時節に逢ひたるは善けれども、我も汝も身分の昔と異なれるを奈何せんとの意、言外に在りて妙なり、

【落款】書畫の出來上りて作者の名を署するをいふ、落は落成の義(款識)を參看せよ、

【落月屋梁ノ想】親しき友を慕ふ心の切なるを「落月屋梁之想」といふ、杜甫の夢李白詩に「落月滿屋梁、猶疑照顏色」とあり、落月屋梁の際、なほ李白の顏色を照すかと疑ふとなり、

【落後】他より「オクルル」義、陸游の詩に「覺時不落晨雞後、靜待天窗一點明」

【樂古】(古ヲ樂ム)古の道を樂む義、後漢書安帝紀に「皇太后詔曰、長安侯祜質性忠孝、小心翼翼、能通詩論、篤學ーー、仁惠愛下」高允徵士頌に「思賢ーー、如渴如饑」

【樂歲】豐年なり、孟子滕文公上に「ーー終身苦、凶年不免於死亡」

【樂山】(仁者ハ山)を見よ、

【洛師】洛陽をいふ、師は京師の義、書經洛誥に「予惟乙卯、朝至于ーー」蘇轍の代三省祭司馬丞相文に「公畏莫當、溘返ーー」

【樂只】「タノシキ」貌、只は助語、詩經に「ーー君子、福履綏之」また「ーー君子民之父母」

【樂志】志を樂します、禮記に「獨樂其志」後漢書仲長統傳に「統常以爲凡游帝王者、欲以立身揚名耳、而名不常存、人生易滅、優游偃仰可以自娛、欲卜居淸曠以樂其志」仲長統のーー論は古文眞寶に載す、

【樂事】「タノシキ、コト」春渚紀聞に「東坡先生曰、某

平生無快意事、唯作文章、意之所到、則筆力曲折、無不盡意、自謂世閒——、無踰此者」謝靈運の擬魏太子鄴中集詩序に「天下良辰美景賞心——四者難并」李白の春夜宴桃李園序に「會桃李之芳園、序天倫之——」

【絡絲娘】「クツワムシ」の異名、爾雅翼に「莎雞ハ六月ヲ以テ羽ヲ振ヒ聲ヲナス、連夜札札トシテ止マズ、ソノ聲、絲ヲ紡グノ聲ノ如シ、故ニ一名ハ梭雞、一名ハ絡絲、今俗人之ヲ——トイフ」また聒聒兒ともいふ、一説に——は「コホロギ」の異名なりと、

【洛神】洛水の神、宓妃をいふ、水經に「洛水又東過洛陽縣南、伊水從西來注之」の注に「—— 宓妃之所在也」曹植の——賦、文選卷五に載す、李綱蓮花賦に「亭亭煙外、凝立委佗、又如——羅襪凌波」洛妃に同じ、(洛浦ノ)を見よ、

【落手】(吾ガ手ニ)を見よ、

【洛書】河圖と共に周易と、書經洪範九疇との根元となる圖書にして數理の祖なり、易の繫辭に「河出圖、洛出書、聖人則之、天一、地二、天三、地四、天五、地六、天七、地八、天九、地十、天數五、地數五、伍位相得、而各有合、天數二十有五、地數三十、凡天地之數、五十有五、此所以成變化而行鬼神也」この天一地二の說明は河圖の數につきていふ、洛書の數は、詳かならず、孔安國の註に「河圖ハ伏羲氏ノ天下ニ王タル、龍馬(馬八尺以上を龍といふ)河ヨリ出ヅ、則チ其ノ文ニ則リ以テ八卦ヲ畫ス、洛書ハ、禹、水ヲ治ムル時、神龜文ヲ負ヒテ背ニ列ス、數アリ九ニ至ル、禹遂ニ因リテ之ヲ第シ、以テ九類ヲ成ス」劉歆いふ「河圖——相爲經緯、八卦九章、相爲表裏」

【駱丞集】四卷、唐の駱賓王撰す、中宗の朝、詔してその文を求め、郗雲卿をして編次せしむ、然れども雲卿編するところ百餘篇今已に久しく佚せり、今存する本は後人の重輯するところに係る(駱賓王)を參看せよ、

【洛蜀二黨】洛は程伊川、蜀は蘇東坡なり、伊川經筵に在り、禮法を以て自ら持す、進講する毎に、色甚莊なり、繼ぐに諷諫を以てす、東坡その人情に近からざるを以て深く之を嫉み、毎に玩侮を加ふ、是に於て二人の門人等互に黨を分ち詆排するに至る、

【洛水】河南省に在り、黃河の支流、詩經小雅に「瞻彼洛矣、維水泱泱」明一統志に「——源出陝西洛南縣冢嶺山、東流經盧氏・永寧・宜陽・洛陽・偃師・鞏縣入於河、禹治水時、神龜負書出於此」

【樂水】(水ヲ樂ム)(仁者ハ山)を見よ、

【落星】古の名高き高樓の名、金陵地記に「吳ノ嘉禾元年桂林苑——山ニ於テ三重樓ヲ起シ名ツケテ——樓トイフ」吳都賦に「數軍實乎桂林之苑、饗戎旅乎——之上」韋莊の詩に「——樓上吹殘角、偃月營中掛夕暉」

【落成】宮室始めて成りて、之を祭るを落といふ、左傳昭七年に「楚子成章華之臺、願與諸侯落之」

【樂生】世に生存するを樂む、漢書刑法志に「人有——之慮」

【樂善】(善ヲ樂ム)五代史和凝傳に「性——好稱道後進之士」

【樂戰】「タノシク、タタカフ」史記楚世家に「願王之飭士卒得——」

【駱駝】張華の博物志に「齊ノ桓公敦煌ヨリ西、流沙ヲ涉リ、外國ニ往ク、沙石千餘里中水ナシ、時ニ即チ沃流ノ處アリ、人能ク知ル莫シ、皆——ニ乘ズ、——水脈ヲ知リ、ソノ處ニ遇ヘバ輙チ停リテ肯テ行カズ、足ヲ以テ地ヲ蹋ム、人ソノ蹋ム處ニ於テ之ヲ掘レバ輙チ水ヲ得」(橐駝)を見よ、

【洛黨】小學紺珠に「元祐三黨、——程頤・賈易等、蜀黨蘇軾・呂陶等、朔黨劉摯等」

【樂道】(道ヲ樂ム)孟子に「古之賢王、好善而忘勢、古之賢士、何獨不然、樂其道而忘人之勢」漢書揚雄傳に「實好古而——、其意欲求文章成名於後世」(樂德)を參看せよ、

【落魄】業を失ひて「ヨルトコロ」なきなり、志行の衰惡なる義「オチブル」俗に魄音ハクに誤り讀む(落魄)を見よ、

【落地】(地ニ落ツ)はじめて世に生れ出でたるをいふ、陶潛の詩に「——爲兄弟、何必骨肉親」

【樂地】「タノシキ」場所、晉書樂廣傳に「是時王澄胡母輔之等皆亦任放爲達、或至裸體者、廣聞而笑曰、名敎內、自有樂地、何必乃爾」

【樂天】天理を樂むをいふ、易經に「——知命、故不憂」宋史魏野傳に「野陝州陝人也、居州之東郊、手植竹樹、淸泉環遶、旁對雲山、景趣幽絕、鑿土袤丈、曰——洞、前爲草堂、彈琴其中」陶潛の歸去來辭に「樂夫天命復奚疑」

また唐の白居易の字、

【酪奴】茶の異名、洛陽伽藍記に「齊王肅魏ニ歸ス、初